

馬鹿と気が合うお調子
者

未吉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

厄介な事情を抱え込みながら生きていた豊橋流。

そんな彼が転校した先は文月学園。

魔窟と称してもよいその学園で、彼の新たな生活が始まる。

目次

Aクラスへ挑む話	
プロローグという名の紹介	1
大丈夫だろうか……	8
開……戦?	16
開戦!	23
弁当惨事・前篇	36
後編	45
Bクラス戦	57
戦前交渉	69
Aクラス戦後	79
見知ったやつが転校する話	
元妹(ただし同い年)	86

手伝い	92
ラブレター騒動お構いなし	102
清涼祭の話	
出し物	111
さらば日常	118
準備にて	125
改装という名の変化	137
報告	143
やり過ぎて、予想外	152
ちよつとトラブル	159
知り合いか店	165
誘拐	172
学園長説明す	182

二日目	192
再会	202
演説	212
清涼祭終了	218
休日の話その1	
呼び出し	229
決裂	236
プール掃除の原因	244
プール掃除当日	251
遊ぶ	260
改めて自己紹介	267
発見される	280
手伝わせる	287

合宿の話	
合宿数日前の日	299
出発（別行動）	307
証言（見てないけど）	315
二日目（勉強する気ゼロ）	323
犯人予想（目星はついてる）	331
考える（知らないふりしながら）	340
罰ゲーム（眺めるだけ）	349
寝る（関わる気なし）	361
始める（呑気だけど）	368
時間経過して（ただ傍観するだけ）	374

合宿を終えて（苦労が増えた）

382

振替休日の話

考えてみる

つけの清算

交換留学生の話

招集

敵

雑談

初日朝

初日昼

踏んだり蹴ったり

留学組登場

流星に格が違った

明久狙いの二人

悩む

青空見上げて

回復

謝罪と予想

勝利確定……？

終・了！

休日の話その3

会談

匿う

期末テストの話

急に真面目になると不審がられる

452

460

469

477

484

489

494

503

509

519

390

399

407

413

421

426

432

437

443

メンテの裏事情

逃げるが勝ち

次の現場（勉強）

雄二の家庭事情

移動して

531

536

542

548

553

Aクラスへ挑む話

プロローグという名の紹介

「相変わらず長い坂だぜ……何か面白いことねえかなあ」

そう呟きながら坂道を登っていく俺。

今の季節は春。坂の両脇の桜が満開になり、風で何枚か飛び散っているのを見ると癒されるが、向かっている先は宴会場ではなく、通っている学園。

ああ、面白いことねえかなあ。

まあ例えただけ誰かが遅刻して絶望してる姿とか、ラブレターもらったと思われたら追っかけられてたりとか。

……さすがにそれはなさそうだなあ。来るのは二度目だけど。

「こうなったら帰り道スケボーで下ろうかな？ ……やばい。想像しただけで面白そう
だ」

だったら帰ってスケボーもってこねえとなあ、と思いながら歩き続ける。

……さつきから誰だお前と思ってる誰か。しゃあないから今ここで自己紹介して

やる。

我こそは文月学園二年にして転校生の豊橋流であゝる!!

……このネタ知ってる奴いるのだろうか。

まあそれは置いて。

改めて言うけど俺の名前は豊橋流。今年度から文月学園っていう、ちよいと変わった学校へ転校してきた、経歴こそおかしかったって普通の高校二年生だ。

転校してきた理由ってのは……流そうぜ！ 流だけにな!!

………コホン。ともかく、ちよつとした事情でこちらに来た転校生ってこと。

で俺が通うことになった文月学園。ちよいと変わったといったが、ここで説明してお
く)……

「あ、着いちまった」

「学校に着くのが嫌だったのか、豊橋?」

「そうじゃないっすよ、先生。ただ説明し足りなかっただけっす」

「誰にだ?」

「秘密つすよー」

「……」

何故か頭に手を当てている筋肉隆々で下手すると体育教師と間違われそうな生活指導の先生——西村宗一先生。

一体どうしたんだらうな？

「まあいい。行け」

「俺、クラス割もらってませんよ」

そんな風に思っていると、ため息をついてから追い払うかのように西村先生が言ってきたので反論した結果。

「テストサボタージュした人間が良くいえるな」

苛立たしそうにそう返ってきた。

俺はあくまで笑顔で言った。

「だからあの時は謝ったじゃないですかー。まだ根に持つてるんですか？」

「持つてないと言ったらウソになるが……言っておく。いかなる理由があろうともテストを受けなかったものは零点……つまり、最底辺のFクラス行きだ」

「へ？」

最底辺？ Fクラス？ ていうかチャンスって一度きり？

俺は少し冷や汗をかきながら言った。

「い、いやだなー、先生。俺に『れっきとした理由』があつて学校に来れなかっただけですよ？ 再テストあるんだろ？ うなあと思いながら待つていた人間ですよ？」

「諦めろ。これも規則だ」

そう言つて封筒を渡してきた先生。

先生の言葉が嘘だと信じて恐る恐る開けてみるとそこには。

『豊橋流 Fクラス』

紛う事無き俺の名前と、厭味つたらしくきれいな字で書かれてるクラス名があつた。

「最悪だ……まさか本番一回だけだったのか……」

肩を落としながら、生徒手帳に書かれている場所へ向かう俺。

旧校舎の一番奥だとよ……どう見ても木造だぜ？ 下手したら壊れるじゃ済まないんじゃないか？

そんな未来について考えながらも気落ちしつつ歩いている俺。

と、そこで甘いにおいがしたのでそのにおいのもとへ行ってみると、

「おいおい。なんつう豪華な設備だよ。豪華すぎて逆に落ち着かなくなっちゃうわ」

床は赤いカーペット、机はパソコンつき。さらにドリンクサーバーやお菓子屋らが置いてあるのを見て思わず声に出してしまった。

つてか、このクラス一体なんだ……ってAクラス!?

おいおいおいおい馬鹿じゃねえかここの学園長！ いくら成績優遇だからってここまでするか!?

……はあ。あん時もそうだったから、そうだと割り切るしかないか……。

そう思つて教室を眺めるのを切り上げ、自分の教室へ向かおうと足の向きを変え歩き

出そうとしたら……

「うわあ……Aクラスってこんなに豪華なんだあ」

後ろでそんな声が聞こえたので反射的に振り返ると。

窓越しで眺めて羨ましそうにそんな感想を漏らす、印象的には悪くないのにどこことなく残念な感じがする奴がいた。

不思議な奴だなあと思いながら、俺はカバンを肩の方にかけて教室へ向かった。

「なぜだろう。悪意の塊、魔窟、昔の牢獄って言葉しつくりときそうな感じがする……」

Fクラスに着いた俺は、その凄惨たる現状を見て、泣けてきた。

はあ。ぶつちやけやる気が失せるんだが……そうも言ってられないか。

もとより自分のミス。そう考えていくしかない。
そんなことを思いながら、俺は今にも壊れそうな引き戸を開けた。

大丈夫だろうか……

「よう。遅かったなうじ虫やろ………」

入ったらいきなり罵倒されかけたんだが。

まあそんなことは置いといて。

とりあえず教室内を見てみよう！

ふむふむ……亀裂の入った壁……埃の出る畳……かび臭い空気……そして一人だけしか存在しない女子……

「つて、女子一人だけかよ!? どんだけこの学園の女子は才女だらけなんだ!」

「うちは帰国子女だから字が読めないだけなのよ!!」

「うおっ!」

いきなり飛んでくるシャーペンを何とか払い落とす。……怖っ

「今度言ったらその腕折るわよ」

「悪かった悪かった。転校したばっかだから分かんなかったんだ」

「……そうなの? ならそう言いなさいよ」

そう言っただけで席に座る女子。ポニーテールの。胸が残念……

シュツ、パシツ

「折ってほしいのかしら？」

「反応速度に感心すればいいのか驚けばいいのか分からんな」

もう一度飛んできたのでまた払い落とす。

冷静なようにいきなり二度も攻撃された上に心を読まれたのでぱにくっついてる俺だが、一回咳払いしたうえで先程罵倒してきた教壇を陣取っている赤髪の男に向き直る。

「さつきはよくも罵倒したな、初対面の俺に向かつて」

「悪かった。こんな時間に来るなんて明久ぐらいだったから」

つまり、俺はその明久ってやつへの代わりに罵声を受けたのか。

「はあ。ついてねえ」

「ていうか、見たことない顔だと思ったら転校生なのか」

「おう。豊橋流だ」

「豊橋……？ まさか」

俺の名前を聞いた瞬間に思案顔になる赤髪の男。ひよつとするとこいつ……知ってるのか？

だとしたら厄介だと考え、俺はすぐさま笑顔で否定する。

「お前が想像してるのと違うと思うぞ」

そう言うのと何やら納得した顔でうなずきやがった。

「……だよな。お前みたいなにやけ顔、あそこの家系なわけないよな」

「だろ〜？」

そう言うっておおらかに頷く。が、内心は冷や汗だらだらだった。

この学校なら大丈夫だと思ったが……くそつ。知ってる奴は知ってたか。

どこまでついて回るんだと思いつながら、俺は赤髪に質問する。

「つて、名前は？」

「俺か？ 俺は坂本雄二。このクラスの代表様だ」

代表……ということとは、一番頭がいいってことか（このクラス内で）。

……ん？ まてよ、坂本雄二だと？

俺は先ほど紹介された名前を思い出して過去の記憶と照合し始める。

脳内でヒットしたその名前は、前に『神童』とか大仰な二つ名が存在し、あの霧島と幼少時代を過ごしたというものだった。

前にあつたときはかなり細かった気がしたんだが……いったい過去に何があつたのだろうか。

少し気になったが掘り返すこともないだろうと思い「よろしく、代表」と言つて握手

した。

「すいません遅刻しました……って、雄二!？」

「やつと来たかバカ久」

「貴様、言うに事欠いてバカさとはなんだ!」

「お前は自分の名前も満足に聞こえないのか!？」

自由席だというので適当な場所（窓側の奥のひとつ前）へ座ると同時、先ほどAクラ

スを羨ましそうな眼で眺めていた奴が来て、さっそく坂本と漫才を繰り広げていた。

あいつが明久なのか……印象だけはよさそうな感じするんだが、今の発言を聞くと残念さがぬぐえないな……。

これからこのクラスでやっていけるかなあと疑問に思いながら窓を見てみると、先生が来た。

「どうも。Fクラス担任の福原慎です」

その声で教壇に視線を向けると、チョークを使おうとして諦めた福原先生の姿が。

このクラス、本当に大丈夫なんだろうか？

「では、自己紹介と行きましょう」

数々の愚痴をスルーした後と言った一言。ていうか、自分から振っておいて『我慢してください』か『自分で何とかしてください』っておかしくないか？

なんて思っていると自己紹介が始まったのか一人ひとり立ち上がって話し始めた。

……………。

うくん。話聞いている限りじゃこの学園、はつきり言っただけで無法地帯じゃね？

まあ演劇にのめりこんでいる木下秀吉って女みたいな男はいいとして、だ。

趣味や特技で「盗聴」や「盗撮」を言いかけた土屋康太、先ほどシャーペンを投げたきたポニーテールの島田美波。お前らは平然となんてこと言いやる！

あれか？ 俺がこの学園じゃ浮くのか!? それともこの学園はそういう空気なのか!?

一瞬でも気を抜いたら終わりそうだと思った瞬間、『ダアリーーン!!』という大合唱。「失礼。忘れてください」

明久だった。

本当残念な奴だなあと思っていると、俺の前のやつの自己紹介が終わった。

別にいつもどおりでいいかと思ひ、俺は立ち上がっていった。

「オッス、俺、流ー！ 基本的にテンション高い転校生だぜ!!」

びしっと親指を突き立てて止まったが、誰も反応してくれなかった。

……心に刺さる。

「……よろしく」

最後にそう言つて、俺は席に座った。

「彼は家庭の事情で転校してきたので試験を受けていないそうです。みなさん仲良くしましょう」

そのあとの先生のフォローがあつたが、今の俺はそれに喜ぶことが出来ず、ただたださっさと終われとしか思えなかつた。

「では最後に坂本君。お願いします」

「ういっす」

そういつて立ち上がった坂本が口を開こうとした瞬間、ドアが壊れそうな勢いで開き、一人の生徒が入ってきた。

急いできたのか肩で息をしているその女生徒を見た福原先生は、「では瑞希さん、お願いします」と言つて紹介を先に促した。

うっわ。恐ろしいな、色々な意味で。

彼女の姿を見た俺はそんな感想を抱き、周りを見渡した。

あー、島田の方はシヨックで放心してらあ。

土屋は写真撮つてやがるが……鼻血が出てるのは気のせいか？

明久は……驚いてるな。普通に。

ほんで坂本は……何考えてるんだ？

などと観察していると、一人の生徒が手を挙げてどうしてここにいいのか尋ねた。

頭いいのかこの女生徒と推測していると、「熱を出して途中退席しまして……」と言うと、明らかにこの話題とは違う話で盛り上がるクラスメイト。

あー、うん。お前らがここにいる理由、なんとなくわかったわ。

頭痛がしそうな会話を聞いていると、福原先生が叩いたせいで教壇が壊れた。

「……替えを持つてきますので、それまで自習してください」

脆いなっ！ とツツコミをしたかったが、そこはスルーして窓の外を見る。

周囲が何やら騒いでるけど気にせず、さりげなく窓の外を観察。

まあここまで見晴らしがいいと問題ないと思うが……なんだかなあ。

と、今後起こりうるケースについて頭を働かせていると。

「「大有りじゃあー！」」

突如として聞こえた野郎の合唱。

一体なんだと思ひ教壇の方へ視線を向けると、不敵な笑みを浮かべる坂本がいた。

あいつ……一体全体何をしでかす気なんだ？

そんな不安をよそに、坂本は決定的な言葉を放った。

「そこでだ、俺達FクラスはAクラスへ試召戦争を仕掛けようと思う」

……何とかなるのかね？

開……戦？

坂本の「Aクラス打倒宣言」を受け、先ほどまでの罵声はどこへやら。何やら一気に落ちていた。

この学校、点数によってクラス分けがされ、その点数によって強くなったり弱くなったりするシステム「試験召喚獣システム」、それらを用いて下剋上を行う「試召戦争」なんていうものが採用されている。というより、発明したのがこの学校の学園長なわけなんだが。

で、そのシステムに関して言うなら、完全なブラックボックス。ある程度研究を進めているという話らしいが、全く分かっていないと思われる。

で、なんだつけ？ あ、試召戦争？

あー、それね。簡単に説明するならクラス代表倒せば勝ちだよーっていう戦い。無論、試験召喚獣を用いて。

まあ戦争なんで何したっていいんじゃないかなあと思えるんだが、思いのほか戦争を仕掛けようとするクラスがいらないらしい。

負けるリスク考えてるからだろうなあと思うが、そこはどうでもよく。

今の坂本の発言について誰か詳細な説明をくれ。

……などと都合よく心の声に分かつてもらえるはずもなく。

「よし、お前らには今から勝算について教えてやろうと思う」

坂本がそのまま進めてしまった。

「おい康太。姫路のスカートのぞいてないでこっち来い」

「(ブンブンブンブン)」

おそらく最初の一人であろう勝算の根拠は、坂本の一言で畳から起き上がって必死に否定していた。

その必死さに思わず「完全にはれてるって」て言おうと思ったが黙っておき、坂本がどんな紹介するのか耳を立てて聞いた。

「こいつがああムツツリーニだ」

あのとてなんだああ!! 根拠にいいのかよおお!!

そういつて荒れ狂いそうになったが他の奴ら(男子が)がうなずきながら何やら言っていたので、黙っていることに。

「それに姫路だっている」

再びざわめくクラスメイト達。呼ばれた当人は驚いていたが、先ほどの質問の意味から察するに、学力は高い方なのだろう。

「木下秀吉だっている」

さらに盛り上がるクラス。秀吉っていうのは、おそらく女みたいな男の奴を言うのだろう。言われた当人は気にしていないようだが。

「当然、俺も全力を尽くす」

まあ以前は神童と呼ばれていたからなあ。そこでその宣言は当然だろうが……お前から、こいつがこのクラスにいる意味わかってるのか？

過去に何があったのか知らんが、今じゃお前らと学力が同等なわけだぞ？ 根拠としては薄いだろ。

一人でそんなことを思っていると、

「吉井明久や豊橋流だっている」

俺と明久の名前が呼ばれ、一気に士気が落ちた。

当然、俺と吉井は立ち上がって抗議する。

「ちよつと！ どうして僕の名前を言うのさ！ みんなのテンションダダ下がりじゃないか!!」

「そうだぞ坂本！ 転校生でお調子者の俺を勝算の一つに入れるなんて、やっぱり頭の

回転落ちたか!？」

「ちよつとまで豊橋。お前今なんて言った?」

「あん?」

坂本に言われふと自分の言葉を反芻する。

.....

うん。下手したらばれたかもしれないな!

やっちまった——などと思いながら、咳払いをして訂正した。

「『やっぱりバカなんだな!』って言った」

「よし。目エつむって歯を食いしばれ」

「わざわざ近づくかバカ!」

「安心しろ流。お前のことはあいつには言わないでおくから。だから一発殴らせろ……」

「!」

「うおつ!」

いきなり来たのは黒板消し。それを反射的に避けたら坂本が歩いてきて右手で殴り掛かってきたので、俺も反射的に顔面直前まで来た坂本の右手をつかんで窓の外へ投げ飛ばした。

「あ」

「おおおー……!?!」

やっちまった、と思ったがすでに遅く。

坂本は窓から落下した。

「何してくれやがるテメエ」

「悪かった悪かった。だからほら……な?」

あれから。坂本が戻ってくるまで俺は周囲から『あの悪鬼羅刹を投げ飛ばしただと……どこかの不良か?』と噂されながら立ち尽くし、今は坂本がその強面な顔で俺のこ
とを睨みながら怒っていた。

「な? じゃねえよ! お前のせいで危うく死にかけたんだぞ」

「前より体が頑丈になったんだからそうでもないだろ？」

「……チツ」

坂本は舌打ちすると、首をコキリと鳴らして教壇に戻り、再び説明に入った。

「さっきの続きだ。豊橋流は転校生だが、前に何度か会っている。その実力は知っている。おそらく姫路より上だろう」

「「なにいいいい!!」」

……やっぱり気づいていたのか、坂本。俺の事。

だがなあ。お前にも何かがあったように、俺にもあったんだよ。

だからお前も、昔と同じだと思ふなよ。

そう言いたかったがざわめく教室では何を言っても無駄だろうから、そのまま黙って席に座った。

「そして明久だが、こいつは観察処分者だ」

再びシンと静まる教室。

俺はこの学校のパンフレットの内容の記憶と照らし合わせながら、坂本に聞いた。

「なあ雄二。観察処分者って、バカだろ？」

「ああバカだ」

「そこはオブラートに言つてよ二人とも!!」

「だが「無視しないで！」バカはバカなりに使えるってか？」

「……まあな」

後ろの方で明久が泣いてる気がしたが俺は気にせず、また雄二がやりと笑っているのはあえて無視し、俺は頭を働かせてみる。

観察処分者。さまざまな面でバカと認められた人間がもらう超不名誉な称号。召喚獣にフィードバックが付き、なおかつ教師の雑用を手伝わされるといふ、かなり理不尽な称号。

これではおいそれと試召戦争では使えないと思うが、あいつのことだ。観察処分者としての偶発的なメリットを考慮して名前を挙げたかもしれない。

……単に憂さ晴らしだというのも否めないが。

「よしー、それじゃサクツとDクラス獲りに行くかー！」

「「「「おおー！ー！ー！ー！！」」」」」

そうこうしている内に雄二の口上が終わった。

しかしDクラスか……まあ、無難だろうな。

そんなことを思いながら、Dクラスへ行くことが決定した哀れな生贄あはれなを視界の端へとらえつつ、俺は教壇の前にいる坂本の、その闘志に感心した。

開戦！

「じゃ、ミーティングしに屋上行くぞ。流もついてこい」

「へいへい」

ボロボロになった明久の喚き声を一切無視した雄二は、俺を指名して手招きしてきたので生返事についていくことにした。

後ろで土屋が一所懸命首を振っていたが、あれは何かの宗教行動なのだろうか？

少し気になったがそれ以上聞こうとせずに雄二の後ろを歩いていると、あつちから声をかけてきた。

「元氣だったか？」

「生憎と。色々あつて今じゃ勘当された……このことは秘密だからな」

「マジかよ……あんな優等生の塊だったお前が勘当とか、どんだけのことをやったんだ？」

「別に。単純に俺がお払い箱だったただけだよ」

不貞腐れる様にそういうところら辺の事情を察したのか、雄二が急に「悪い」と謝ってきた。

「なんだよ気持ち悪い」

「うっせ。本当はあの時思いつきりばらそうかと思っただが……やらなくて正解だったか」

「性根腐ったなあ、お前」

「うっせ!」

そんな話をしながら階段を上り屋上へ着いた。

遅れてきた土屋や木下、島田や姫路を待っている間、気になったことがあったので雄二に質問してみる。

「なあなあ。霧島はどうだったの？ まさかの別学校？」

「……いや。あいつはAクラスの代表だ」

それを聞いた俺は納得しながら空を見上げていると、残りの奴らが来た。

「どうしてDクラスなの？」

明久が待つていられないのか、そんな質問を開口一番してきた。

「その前にお前、ちゃんと、正確に、開始時刻を言ってきたんだろうな？」

「失礼な。そこまで僕はバカじゃないからね」

「ならいいんだが」

そう言った雄二はどこか安心していった。ひよつとすると、あれだけのことを言うのにへまをやらかす可能性まで考慮していたのだろう。用意周到なのか単純に使者役が頼りないだけなのか、まるつきりわからんな。

「で？ どういう意図があったの？」

「そうじゃ。なぜEクラスではないんじや？」

明久と木下の言葉に頷く他三人。俺はというと、お昼どうすつかなあと考えていたところだった。

二人の質問に雄二は鷹揚に頷き、こういった。

「そこら辺のことは流に説明してもらおう。こいつはもう、俺の意図に気付いてるみたいだからな」

「『『『えっ?!』』』」

その発言でこの場にいた雄二以外の視線がこちらを向いたので、仕方ないと思いがら説明した。

「雄二はEクラスに歯牙にもかけてねえんだよ。こつちには姫路……さんっていう強力なクラスメイトがいるんだから。時間稼ぎ次第ですぐに勝負がついちまうからな。だがDクラス。これは成績自体の差があるから、いくら姫路さんがいても勝てるかどうかわからない」

「だったらどうしてDクラスなのよ?」

「いきなりAクラスなんてやってみろ。俺達瞬殺だぞ? そうさせないために、まずは腕慣らし感覚で勝てるかどうか怪しいクラスを倒すんだよ」

それで姫路さんは何かに気付いたのか「あ、だからですか……」と呟いたので、俺はまとめることにした。

「つまりだ。召喚獣というやつに慣れる為にDクラスを踏み台にするってわけだ」

「『『なるほど』』」

ようやく納得したのか頷きながらそういう明久ほか三人。はく疲れた。

「いまだ健在だな、天才」

「うっせえ捻くれ神童」

息を吐いた俺に向かつて厭味つたらしく言ってきた雄二に対し、俺も皮肉を込めて返した。

そんな会話は聞こえていかなかったらしく、「じゃ、お昼食ベよう？ 作戦とかはそのあとで」と明久が提案してみんな頷いていたので、俺はそこに便乗した。

「なあ、昼つてみんなどうするんだ？」

「私は……お弁当を作ってもらってますので」

「濃もじゃな」

「ウチは自分で作ってるわ」

「……学食」

「えつと、僕は……」

何やら答えにくそうにしている明久。ただの昼食の話なのに、どうして躊躇いがあるんだろうか？

そんなことを思っていると、雄二が答えてくれた。

「仕送りを全額使つて水と塩と砂糖しかないんだろうが」

「うっ。仕送りの額が少ないんだよ！」

……つまり、水と塩と砂糖で生活してるってこと……か？

いやいやいや。さすがにそんな風に生活してるわけないだろう。

そう思い雄二に確認すると、首を横に振るだけだった。

俺は明久の肩をポンと叩き、憐みの視線を送りながら言った。

「本当に馬鹿だな、お前……」

「ちよつと!? 僕そこまで落ちぶれてないからね!?」

「いや、大分落ちぶれてるだろ、お前」

「そうじゃな。飯抜きでは生きられぬぞ、普通」

「(コクン)」

「ひどいやみんなまで!」

あわや泣く寸前まで行ってしまった明久だったが、そこで救いの手が差し伸べられた。

「あの……よろしければ明日お弁当を作ってあげましょうか?」

「あつー」

「日本語日本語」

「はっ。本当、姫路さん!?」

「は、はい!」

「やったあー!!」

よかつたな明久。弁当を作ってもらえて。

しかしそこに横槍を入れる人物が。

「へえ〜。姫路つてば、吉井にだけお弁当を作つてあげるんだ〜」

島田だ。どうにも姫路の行動が気に食わないらしい。

う〜む。ひよつとすると、この二人……なんて考えていたら姫路があわててこう言つた。

「あ、いえ！ 皆さんにも……」

「いいのか？」

「はい」

「ふむ。ならば相伴にあずかろうかの」

「(コクン)」

ここにいる全員の弁当を作ろうつてのか。すごい根性してるな、おい。

そんなことを思っていると、「豊橋君はどうですか？」と聞いてきたので少し悩んでから、「お願いするわ」と言った。

「じゃ、作戦を説明するぞ」

明日の昼食のめどが立ったのか気を取り直して、雄二は本戦争の作戦を説明しだした。

……まあ、内容自体は単純明快だったが。

さあ始まった模様のDクラス戦。まあ俺と姫路にそんなことなど関係なく。

「どのくらい獲ればいいんだ？」

「お前……ふつうは自分の限界までとるんじゃないのか？」

「なんか、面倒だ」

「とかいいつつスラスラと書いてるな、本当」

たった二人で回復試験を受けております。

一時間で問題無制限という試験方法故に四百を超える人間がいるとのこと。

逆に言えば、この程度の問題で四百しかとれない人間しかいないと言い換えられる。

このぐらいなら六百ぐらいはいくんじゃないか？　なんて思いながら解いていると、

雄二が呆れた声を出した。

「お前……なんでそんなに出来てこんなところにいるんだよ？」

「あ？　そりやお前、ここが試験校だからだろうが」

「……もういいから問題解いてろ」

へいへい。なんてことは言わず、俺はただただ問題を解いてくことに集中していった。

結論から言うと、うちのクラスは姫路の活躍のもと、Dクラスに勝利した。

途中、明久がどうしようもない作戦使って逃げたり、雄二がその報復だといわんばかりにえげつない放送を須川に流させて。

俺？　ずっと問題解いて……るわけないだろう。適当に切り上げて、適当に観戦してたわ。雄二たちには呆れられてたけど。

で、現在俺は雄二と明久（なんか名前のままでいいらしい）と一緒に学園から帰っている。

「そういうや、流。お前はクラス交換について意見あるか？」

「あ？　……いや別に」

「そうなんだ。流は頭がよくていいなあ」

「そうだな。せめて流の二兆分の一ぐらい明久が賢ければなあ……」

「貴様雄二！　僕は頭の悪いバカだといいたいのか!？」

「実際そうだろうが。明日のために勉強道具持ってきたのか？」

「……あ」

雄二の言葉に思い出したらしい明久。おそらく、教室に勉強道具を置いてきたのだろう。

「取ってくるね！」

「俺たち先に帰ってるから」

「じゃあな」

「ひどいや二人とも！」

そう言いつつも学園へ戻る足を止めない明久。

そんな後姿を見送ってから、俺と雄二は歩き始めた。

「次はBクラスだろ？」

「ああ。言っていないのによくわかったな」

「Dクラスを倒したってまだ怖気づくだろうからな。ならそれに近いクラスを次に狙う」

「それだけじゃないんだがな」

「そうなのか？」

「さすがに転校したばかりだから分からんか。Bクラスの代表、ムカつくからその報復」

「霧島でもとられたのか？」

「バツ！　ち、ちげえって!!　……根本ってやつでな、カンニングの常習犯なんだよ」

「ふ〜ん」

そんな風に会話しながら歩いていると坂を降り切ったので、俺は雄二と別れて一人帰路に着いた。

「ただいま」

誰もいないアパートの玄関でそう言い、俺は自分の部屋へ戻った。

「激動の一日だったなあ……」

鞆をテーブルへ置き、山積みになっている書類を無視してソファに寝転がった俺は、天井を見つめながらそう呟いた。

まったく。転校初日でまさかのFクラス行になったし、しかもそのクラスメイトの大体が頭のねじ数本外れてるし、とんでもないバカはいるし、昔馴染みのやつが見違えるほどおかしくなっていたし、試召戦争起こしてDクラスに勝っちゃおうし……本当

「楽しかったなあ、おい」

思わず顔がほころんでしまう。

色々なものを置いてきたうえに捨ててきたが、あの学校での生活は、この先とても楽しそうだ。

「これからも続けていくためには……」

ソファから起き上がりながら、俺はテーブルの上を見る。

そこには、山積みにされた書類。そして、放置した鞆。

「——よし。先に飯食べるか！」

こうして、学園生活初日が終了した。

書類は全部片づけたので問題ない！　ただ深夜までかかったがな！

弁当惨事・前篇

次の日。というか寝たのが深夜二時なので実質今日。

俺は、まぶたをこすりながら着替えていた。

「眠い……」

そう言いつつ顔を洗い、朝食を作る。

ついでに、テレビをつけてニュースを見る。

「うわあ、結構あるなあこの手のニュース」

映っているのは有名人のインタビュ画面。なんかの映画の宣伝なのか、さりげなくそれについて触れつつ会話をしていた。

会話を聞きながら朝食を作り終えテーブルに運ぶと、こんなニュースが流れた。

『鈴鹿財閥が世界の飢えた人たちへ向けて五億円の基金をしたという』

ブツッ

反射的に電源を切った。

まったく。朝から胸糞悪いの聞いちまった。そう思ったが、それは未だに自分の中で収まりがつかないことを指すことに気付いたので舌打ちをして急いで食べ、電話を掛け

ることにした。

『おはようございます、社長』

「俺は社長じゃねえだろうが、李里香さん」

『いえ。私はあくまで社員です。真の社長はあなたです』

「……ハア。まあいいや。書類終わったから取りに来てくれ」

『これから学校ですか？』

「当たり前だ。いつも通り置いとくから、よろしく」

『分かりました。……ですが、玄関先に放置するのはやめていただきたいのですが』

「それは無理。鍵渡す気ないから」

『……それでは午前中には取りに行きます』

「よろしく」

あー、これで仕事の方は一段落した。それじゃあ今日も頑張つて

「学校で明るく楽しく過ごしますか」

そう呟いた俺は、書類をいつも通りの場所においてから鞆を持って部屋に鍵をかけ、陽気にアパートを出た。

「おいーつす」

「よお流。お前は勉強……してるわけないか」

「なんだよいきなり？　してるわけないだろ？」

教室に入った俺に返事を返してきたのは勉強中であろう雄二だけ。他はすごく真面目に勉強らしきことをしていた。

……俺も何を言ったのかわからなくなっただが、ともかくそんな光景だった。

「まあいい。お前は次の戦いの要だからな。補充試験受ける必要がないなら「いや、受けるが？」は？」

俺の言ったことが不思議だったのだろう。雄二は教科書から顔を上げて間拔けな声を上げた。

「受ける必要あるのか、お前？」

「いや、受けなかつたら零点って可能性が出ると慎重になるからな」

そういうと納得したのか、「だったら頑張れ」と言っただけ教科書に視線を戻した。いつちよやりますかあなんて思いながら、俺は絶望に染まった明久に気付かずテストの準備をした。

「昨日に続き楽だったなあ」

「そりやお前だけだろうが」

「……テストが楽とは、何とも言ってみないセリフじゃのお」

四時間目まで終わったので背を伸ばしながらそう言ったら、近づいてきた雄二とそれについてきたらしい木下がそんな風に返してきた。

なんだ雄二。以前だったら『楽勝楽勝』と言っただけの内容だったのに。そこまで学力落ちたのかよ。

そんなことを思いながら、俺は後ろを振り向いて突っ伏している明久に聞いてみた。

「生きてるか〜?」

「なんとか……」

どう見ても弱っているとしか思えない明久が、それに似て弱弱しく返事をした。

……………大丈夫だろうか？

ふとそんなことを思えるぐらい弱ってる感じがするのは、決して気のせいではないだろう。

「じゃ、昼食食いに行こうぜー」

明久を無視して雄二はそんなことを言う。……………なあ。

「姫路さんが弁当作ってくれるんだろう？」

「そういえばそうだったの」

「……………女子の手料理」

俺の言葉に木下と土屋が頷き、件の姫路さんが来た。

「あ、あの……………」

「どうしたの、姫路さん？」

「弁当じゃろ、明久」

「え？ そうなの？」

「は、はい……………」

明久の質問に頷く姫路さん。ふむ。何とも健気な子だな。

「なら屋上行こうぜ」

とりあえず俺はそう提案する。でないとなんか起きそうな気がしてならないからだ。

「なら俺は飲み物買ってくるわ。流以外の奴の」

「OK。テメエの分は残さないでやるよ」

「んだと」

「落ち着くのじゃ二人とも」

にらみ合いをしようとしたところで木下に止められ、渋々引き下がった俺は財布から一万円札を取り出し雄二に渡した。

「ほれ。これでクラスの奴らの分も買ってやれ。たぶん足りるだろ」

「お前……」

驚く雄二を見ずに、俺は教室を出て屋上へ向かった。

「相変わらず変わってねえな、お前のそういうところ」

「どうしたの雄二、そのお金。……まさか、カツアゲとか」

「バカか明久！ ……流がお前たちの飲み物代として置いてったんだよ」

「随分と太っ腹なことするわね」

「そうじゃの」

「というわけだ。俺は先に飲み物を買ってくるからお前達も先に屋上へ向かってくれ」

「じゃあウチも手伝うわ」

「それではわしらも行こうかの」

「そうだね」

「(コクン)」

という会話が あつたのだが、恥ずかしい退場をした俺にとってはそんなこと関係なく。

「消えろ記憶！」

そう言つて屋上の床に頭を打ち付けていた。

「お待たせ流……って、どうしたのそれ!? 額から血が出てるよ!」

「どういう事じゃ……って、何やったんじゃお主!」

「だ、大丈夫ですか!」

頭を打ちすぎて血が出たのにもかかわらず記憶がなくならなかったので証拠隠滅を図っていたら、明久たちに見つかつた。

俺は陥没した屋上の床にシートを敷いてから、額の傷を器用に消毒して絆創膏を貼り、適当に理由をでっち上げた。

「大丈夫大丈夫。単純に飛んできたボールにあたったただけだから」

「え？ 野球やってる人なんていないよ？」

当然だ。俺が今でつち上げたもんだからな。

そう思いつつ、俺は腹をさすりながら話を進めた。

「そんなことより姫路さんが作った弁当食べようぜ？ そっちがメインなんだから」

「まあそれはそうじゃが」

「……確かに」

ふう。これで何とか話を逸らせた。このまま昼食の洒落込もうとしますか。

……なんて思っていた時期が俺にもありました。

まさかあんな惨劇が起こるとはな……………。

後編

「ついでに流の分も買ってきてしまった」

「別にいいでしょ。元々あいつのお金だし、それに、あいつもクラスメイトだし」

「昨日は何もやってなかったが……」

雄二と島田は会話をしながら屋上まで階段を上り、ドアノブに手をかける。

その時。

『グフア！ な、なんだこのマ』

『くらえっ！』

『くらうかつ！』

『ぐふっ！』

『吉井君?!』

そんな会話と同時にけたたましい音が聞こえたので、二人は何事かと思いい屋上へ出るとそこに広がっていたのは。

「ゲホッ、ゲホッ、ゲホッ……オウエ」

フェンスにしなだれかかきながら吐いている流と、

「(ピクピクピク)」

エビフライを口にしたまま倒れている康太と、

「明久よ、しつかりするのじゃ！」

「大丈夫ですか吉井君!!」

「……まっつてよおじいちゃん……」

三途の川を渡りかけている明久と、それに必死に呼びかけている秀吉と瑞樹の姿があつた。

「……何があつたんだ？」

「当然、突然のことに理解できない雄二は、そんな言葉を呟いたという。」

雄二と島田が戻ってくる数分前。

俺は敷いたシートに全員座るよう促し、座ったのを見て姫路さんに言った。

「催促するようで悪いが、弁当はどこだ？」

「あ、それなら……」

「僕が代わりに持つことにしたんだよ。はい」

明久。お前本当にやさしい奴だなあと思いながら、置かれたバツクを注視する……つて。

「バツクだと！」

「どうしたの!？」

「いや……随分作つたなと思つて」

「ああ、それもそうだね」

「はい。張り切つて作つてきました」

そう言つて姫路さんがバツクから取り出したのは……重箱？

「……張り切つてこのレベルって……すごいな」

「そうじゃの。よほどうれしかったんじやろ」

「……………期待大」

俺達のそんな感想をよそに、姫路さんは重箱を開け、その中身が明らかになった。

『『おお!』』

その種類は豊富で、なんか全部まとめてみました感が否めないが、男子高校生にとつては嬉しいものだった。

当然、俺は何から食べようかなあと思いつながら視線をさまよわせていたが、その時になつて弁当からおかしなおいをかき取った。

……………なんで薬品みたいな匂いがするんだ？

その答えはすぐに証明された。

「ムツツリイーンニーンニーン!」

「つ、土屋君!」

「ど、どうしたんじや一体!」

土屋がエビフライを口にした瞬間ぶつ倒れ、小刻みに震えだしたのだ。

……………まさか、本当に……………?

嫌な予感が頭をよぎる。

確証を得るために恐る恐る近くにあつた卵焼きを食べてみると。

「ゲフオ！」

「流!?! (豊橋!?!)」

……どうやら当たりだったらしく、俺の意識は一気にレッドゾーンへ逝った。

それでも一応だが、本当に一応だが、呼吸器に異常はなかったので激しく咳き込みながら、感想を言

「ゲホッ! ゲホッ! な、なんだこのマ」

「くらえっ!」

「くらうかっ!」

「ぐふっ!」

——おうとしたところで明久がとどめを刺しに来たのか殴ろうとしたので、思わず弁当箱に入っていたおかずの一つを奴の口に入れてしまった。

やつちまった……そう思ったが、急に動いたせいか吐き気に襲われ、俺はフェンスの外へ吐いた。

そんな時に

「……なにがあつたんだ?」

雄二の奴が飲み物を持ってきた。

「皆さんすみませんでした！」

「……にしても、姫路さんにもこんな弱点あったんだな」

「……………九死に一生を得る」

「それにしても恐ろしすぎじゃろ」

「まあみんな。そこら辺にしようよ」

「うう……………すみません……………」

あの後。弁当は全員で分け合い意識がとびとびになりながら完食した俺達は、雄二が買ってきた飲み物（お釣りは返してもらった）で一息ついていた。

その時は全員が悲鳴やら何やら上げていて決して和やかなお食事シーンではないので、割愛しておく。

あー、死にかけた。昔薬品研究所で無理矢理薬品の匂いを覚えさせられたからな。そのおかげかもしれない。どこで何が役に立つか分かったもんじゃねえな。

……特に嬉しいわけでもないが。

ちよつとブルーになっていると、島田が雄二に今後のことについて訊いていた。

「次はBクラス？」

「ああ」

その答えに、ここにいるメンバーのほとんどが首を傾げる。俺はというと、少し話を聞いていなかったのと、少しばかりブルーになっていたので反応できなかった。

「どうして？ Aクラスが目標なんですよ？」

「そこら辺は流に説明させたいんだが……お前、大丈夫か？」

「……ん？ まあ、なんとか」

「無理そうだな……仕方ない。ざっくりと説明すると、一騎打ちに持ち込みたいからBクラスを脅しに使うために戦う」

「なんで？ Bクラスの人たちが了承するとは思えないんだけど」

「明久。試召戦争で負けたら設備はどうなるか知ってるか？」

「え、えーつと」

「よし。ムツツリーニ、ペンチ」

「なんで!？」

明久のバカな回答に雄二が即応対。本当、漫才に見えなくない光景だが、これ以上ブルーになってもいられないので口をはきむことにした。

「要はあれだろ? 設備交換したくなかつたらAクラスと戦えってBクラスを脅して、それを盾にAクラスも脅すんだろ?」

「そういうことだ」

「脅しの二重構造じやの」

「Aクラスを倒すんだ。これくらいじゃないとな」

いや。これでも少ない方だと思っただが。

雄二と秀吉の会話を聞き俺はそう思ったが、別にいう事もないだろうと思いい何も言わなかった。

「というわけだ。テスト終わったら逝って来い、明久」

「いやだ。今度こそ雄二が行けばいい」

使者の件でまたもめたが、結局明久が行く運命だったらしく、盛大な失敗セリフを吐いて逃げて行った。

テストが終わり放課後。

「言い訳を聞こうか」

「予想通りだ」

「昨日の二の舞だな」

ちようど帰ろうとしたところにボロボロの明久が戻ってきて口論になりかけたが、雄二のパンチによって沈み、俺は何事もなく教室を出た。

「明日の作戦って何ぞや？」

「ああ。ちょっとお前を軸に据えている」

「ついに俺も戦えるのか」

「ビビったか？」

「まさか」

帰り道。昔仲が良かったからか一緒に帰っている雄二と明日についての話をしていた。

「だろうな。お前の事だ。一回戦えば扱えるんじゃないか？」

「そこは知らん。継続は力なりっていうからな。一回だけじゃどうしようもないかも」

「まあそれはBクラス戦でやってもらうさ」

「気楽なもんだな」

「ここで俺は昼休みに訊けなかったことを聞いてみた。

「勝算はどのくらいだ？」

どこのとは聞いていないのに、雄二は俺が聞きたいことが分かったのか自信がなさそうに答えた。

「……正直、六割あればいい方だ」

「見栄でもそれはすごいと思うぜ？」

「お前はどのくらいだと思う？」

「うぐぐん。二割」

「低いな！」

「他の奴らの頑張り次第だし、お前の今の学力を鑑みた結果」

「……………聞いたのか、お前」

「まさか。昔を知っている人間がお前の変わり様で考えた結果だよ」

「へっ。勘当されてもその頭脳は衰えていないようだな」

「まあな」

そんな軽口を叩きながら、昨日と同じように坂を降りたところで俺達は別れ、それぞれ帰路についた。

夜。

『社長。お疲れ様でした』

「あれぐらい自分でやれ」

『ですが社員の皆様も言っておりますよ。本当の社長はあなたしかいない、と』

「……まったく」

『ところで次の会議なのですが……』

「それはだな……」

「こんな感じで、気付けば深夜を回っていた。」

Bクラス戦

次の日。

「さあやるぞ野郎どもおよび女性諸君！ 準備はいいか!!」

「「おおー！ー！ー!!」」

「作戦は先ほど説明した通り！ 気張っていくぞ!!」

「「イエッサーー!!」」

テスト終わり直後とは思えないほどのテンションの高さに少し辟易するが、雄二の言う「作戦」の要である俺が低いままではどうしようもないので、クラスメイトに交じって返事をする。

「勝負は廊下での戦闘が始まってから！ お前達、目指すべき場所は分かるな!」

「「イエス、システムデスク!!」」

それが合図になったかのようにチャイムが鳴り、男子どもの叫び声を聞きながら、俺は一人で気付かれることなく教室を出て行った。

雄二の言う「作戦」のために。

ていうか、こんなの「作戦」じゃねえよ……

『いたぞ、Fクラスだ!』

『たった一人だ! そのまま突っ切れ!!』

「それだけは困るんだよなあ……」

俺が今いる場所。それは、BクラスとFクラスをつなぐ廊下。そこにただ一人。

なんだってこんなの任すんだよあいつ。なんて心で愚痴りながら、学年主任の高橋先生に言った。

「んじや、やりますので用意してください」

「分かりましたが……いささか不利では？」

「そこは知りません」

そう言つて俺は向き直り、腕を組んで足を大に広げて言つた。

「Fクラス豊橋流！ この場にいるBクラスの生徒全員に数学勝負を申し込む！」

「承認します」

『なんだとっ！』

そう言つて広がるフィールド。さすがに後ろまで届かなかつたらしいが、最初にかけてきた十人は対象となった。

「んじや、行くぜ。サモン！」

『『『『サモン!!』』』』』

まず現れたのは幾何学模様の魔方陣。

次に現れたのは……何故かローブ姿のちっこいやつ。

「『『『………』』』』』」

とりあえず俺の召喚獣だというのは分かるんだが、やはりというか全員が頭に疑問符を浮かべていた。

俺も初めて召喚したので我が目を疑つたが、とりあえず「歩け」と命令してみると、

くてくと前方へ歩き出した。

……って、やばっ！ どう考えても集中攻撃されるだろ、このままじゃ!!

そう判断して「バックステップしながら戻れ！」というのと、これまたその通りに動いた。

動かし方がわからんから言っているが、なんとかなるもんだな。

そう思った俺は、なんかあつけにとられているBクラスの奴らに攻撃することにした。

とりあえずは……

「ダッシュしてから一番左端を殴り飛ばせー!」

たったそれだけの指示で、一番左端は消し飛んだ。

「次! そのまま順に殴り飛ばせ!!」

すると、何をしたわけでもないのに気付いたら十人全員が全滅していた。

「……………あれ?」

「戦死者は補習うー……!!」

あまりにもあつけない終わり方に拍子抜けした俺は、突然の西村先生の登場にも驚かず首を傾げた。

どうしてすぐに終わったのだろうか?

そんな俺の心境を知ってか知らずか、いざ戦おうと思っていたBクラスの連中は『勝てるかー!』などと絶望していた。

仕方なく高橋先生に尋ねてみる。

「どうしてみんな来ないんすか?」

「たぶん、あなたの点数とその召喚獣の動きだと思えますけど……」

「へ?」

そう言って俺の召喚獣の頭上の点数を見ると、『Fクラス 豊橋流 数学 943点』と書かれていただけで、別段おかしいところはなかった。

「そうですか?」

「……………」

もはや何も言えない、そう言った感じに高橋先生がなってしまったので、俺は頭を掻いてから言った。

「…………じゃ、続きやろうか」

『『『断るっ!』』』』

……こうして、雄二の作戦通りかなんか知らんが、Bクラス戦は残り一人となった代表を俺がそのまま倒すことによって終結した。

無論、クラスメイトに呆れの視線をもらいながら。

「……まあ、なんだ。随分あつけない終わりだったが、とりあえず……戦後対談と行こうか、負け犬？」

当初の予定が狂ったのか何やら知らんが微妙な顔をしながら、それでいて悪役みたいな雰囲気を出した雄二がBクラス代表（確か……根本だった気がする）に言った。

「まあ本来なら卓袱台を送りたいわけだが、条件を飲んでくれるなら取りやめようと思う」

まあそうだろう。Aクラス目標なのにここで立ち止まる必要はないからな。

俺が頷いていると、根本が聞いた。

「……………条件はなんだ？」

「何、簡単なことだ。とある服を着てAクラスへ試召戦争の準備はできているとだけ

言ってくればいい。宣戦布告じゃなく、意思と準備ができていただけ言えばいい服？　なんでそんなものを変える必要があるんだ？　よくわからないんだが。

そこら辺は根本も同じなのか、「……服？」と呟いた。

「一体どんな服を着せるつもりだ」

「ムツツリーニ」

「……あまり気が進まない」

根本の質問に雄二が土屋を呼び、土屋はとある服をいつの間にかやら用意していた。

まるで事前に打ち合わせをしていたかのような流れに驚いたが、土屋の持っていた服に驚いた。

「なんで女子制服なんだよ!？」

「……秀吉コスプレよなんでもない」

プイッと顔を背ける土屋。

そう。土屋が持っている服がこの学園の女子制服だったのだ。

……本当、無法地帯だなあ。

土屋が言ったことをさらっと流して根本を見ると、いつの間にか気絶していた。

「さあやろうぜー!」

「ええそうね!!」

「「……………」」

「俺達そっちのけで盛り上がるBクラス。雄二もここまで盛り上がるのが想定外だったのか呆気にとられていたが、すぐさま表情を戻し「じゃ、始めるか」と宣言した。

途中、根本の制服から封筒を発見した吉井が中身を見ようとしたら姫路が奪い取り、それで浮き上がったスカートの中身を見逃さなかった土屋が血の海に沈み、代わりに俺が写真を撮ったりする羽目になったが、あんなに大量に写真を撮る必要があったのかは甚だ疑問である。

「いやー豊橋のおかげで楽に終わったな！」

「そうそう！ あいつが学年主席を超える存在だったとはなー」

「まあなにはともあれ」

「「次はAクラスだな!!」」

Bクラス戦終了のお知らせ。そしてクラスに戻ったクラスメイトがそんなことで騒いでいる中、俺は一人悩んでいた。

「……おかしい。絶対おかしい……」

「おい流。今回の功労者はお前なんだから……って、何をそんなにぶつぶつ言っている？」

「雄二。聞いてくれ。俺は今とても不可思議なことに頭を悩ませているんだ」

「……まあ聞くだけ聞こうか」

雄二が聞いてくれるそうなので、俺は言った。

「なんで俺の召喚獣の顔が見えなかったんだ!?!」

そう。何故かは知らないが俺の召喚獣はフードを深くかぶっているせいで顔が一切見えないのだ。

あの後、高橋先生に無理を言って全教科で召喚してみたが、一切見えなかった。何度やっても何度見ても、一切顔を見せない俺の召喚獣。

他の奴らはデフォルメっぽくなっているのだから俺の召喚獣の顔がどうなっているのか気になるのに、一切見せない俺の召喚獣。

その事に頭を悩ませていた。

なのに雄二はと言うと、なんか引いていた。

「お前……ナルシストになったのか？」

「違う！俺はただ自分の顔がデフォルメされたらどうなるか知りたいだけだ!!」

「……やっぱりお前、変わってないな」

あー畜生。すげえ気になるってのに、何この生殺し感。酷過ぎるんだけど。

こうなりや学園長室に乗り込んで詰問でもしてやろうか……なんて思っていると、声をかけられた。

「大活躍だったね、流」

「……あれが活躍の範囲内であればそうだな、明久」

「あー」

明久は俺の話を思い出したのか、気の抜けた返事をした。

そこに木下や土屋まで加わった。

「そう謙遜するでない。たった一時間で943点とるなど、もはや教師以上じゃ」

「……学園最強」

「ていうか、どうしてそこまでとれるの？」

明久に聞かれ俺は少し考えてから答えた。

「……習ったから、だな」

「「それはおかしい(ぞ)」」」

「そうか？」

習ったものを覚えてるだけで別段おかしいわけじゃないんだが。

三人の反応を不思議に思った俺は、おかしいか？ と腕を組んで考え始めたが、そこに雄二が加わった。

「まったくお前は……昔と変わらず自分を基準に考えるのはやめろ」

「俺は基準にしてないぜ、最近は。俺の周りにいた奴らを基準にしてる」

「お前の周りは優秀な奴ららしいのか!？」

「まあそんなことより。「話を逸らすな」次、Aクラスだな」

俺が次のことを言うと、雄二たちの表情が一気に硬くなった。

まあ分からんでもないが。最終決戦、ゲームで言うところラスボスにあたるクラスだからな。緊張するのもわからんでもない。

そう思いながら、俺は笑って励ますことにした。

「なくにここまでやって来れたんだ。うちのペースに巻き込んで勝ちに行こうぜ？」

ややあつて、雄二も同じく笑いながら言った。

「……そうだな。学力だけがすべてじゃないって証明してやるんだもんな」

「そうじゃの。夢物語のようじゃったが、手が届くところまで来たんじゃない」

「……………目指すべき頂は目前」

「よし！ 頑張ろう、みんな!!」

そう言つて明久は見渡したが、すでに帰つた後らしく、俺たち以外の人間はいなかった。

「「「「.....」」」」

黙る俺達。そこに、

「なんだお前からまだ残つてたのか。さつさと帰れよ、まったく」

西村先生が見回りに来たらしくそんなことを言い、去つていった。

「.....じゃ、帰るか」

「そうだな」

「うむ」「(コクン)」

「待つてよみんな！ そんな冷静な態度が逆に悲しい配慮だよ！」

こうして、俺達は帰ることになった。

戦前交渉

はい翌日。

とりあえず学校に行って普通に回復試験受けて（なんか昨日より難しかった）、まあいつも通り宣戦布告しに行くわけなのだが。

「なあ雄二。俺とお前だけで良かったと思うのはなぜだろうか？」

「……そうだな。今更だが、ムツツリー二とあーバカや姫路達は置いてきても良かったかもしれないな」

「雄二！ 今僕の名前を呼び掛けてバカと訂正しなかった!？」

「聞き間違いだと思うぞ、バカ」

「もはや名前すら呼ばないのかこの悪魔!」

「あー……失礼しまーす」

なんかAクラス前で漫才やるのもバカらしく思えたので、さっさと入る。

転校初日に覗いたときから思うのだが、なにこの無駄な設備。たかがAクラスでこれなんて、本当にひどい格差だな。

普通にシステムデスクだけあればいいんじゃないかねと予算削減および新クラス設立しよ

うと思った時の構想を瞬時に考えながらAクラスに入ると、生真面目そうなやつが近づいてきた。顔がなんか木下に似てる。

双子なのかねえと思いつながら、「ちよいつと霧島さん探してるんだが、どこいるか知ってる？」といつも通り人の良さそうな笑顔を浮かべながら訊くと、「代表に何か用？」と返ってきた。

さつさと終わらせたいので俺は用件だけを述べた。

「うちの代表が宣戦布告しに」

「!?!」

クラスの空気が一変し、警戒態勢をとるのが分かる。

目の前の女子も警戒しているので面倒になった俺は教室から少し出て雄二を連行し、その少女の前に突き出してから「こいつ。こいつが宣戦布告しに来たの。だから話位聞いてやってくれね？」とお願いした。

「え、ええ…分かったわ」

「…ナイスだ流」

襟首を掴まれながらもそう言ったので、パツと手を放す。

放された雄二は少女の前で襟首を正してから、「じゃ話し合いすつか」と後ろにいる明久たちを部屋から追い出して言った。

代理として話し合いの場にいるらしい彼女——木下優子は名前の通り木下の姉らしい。パツと見好戦的な態度が隠せていないので、おそらく木下は苦勞しているだろう。

で、雄二と木下姉はテーブルを挟んでソファに座って交渉を始めた。：場違いな感想だと思いが、雄二は悪役が似合うな。昔は本当に優等生みたいだったのに。

となるとあつちはどうなってるのかなあと思いながら雄二の後ろでボディガードのように立っていると、俺の後ろから件の人物の声が聞こえた。

「……流？」

俺は振り返らずに片手をあげて返事をする。

「おう霧島。約六年ぶりか？」

「…別に翔子で構わない」

「目の前にいる悪友に殴られたくないから、パス」

「…ということは、来てるの？」

「ああ……って、霧島は反対側だろう。俺たち敵なんだから」

「………そう」

「ん？ 来たかA組代表。霧島翔子」

「代表！」

木下姉と雄二も気づいたらしく声を上げる。その声に反応して霧島は木下姉のほうへ移動し、今までの流れを聞いてきた。

「どこまでいった？」

「五対五の一騎打ちをやることぐらいかしら」

「そつちに二回の科目選択権をくれてやるって話も忘れてんじやねえぞ」

本当は一科目の選択権だけ与えるほうがいいんだがな。それでもこちらの勝つ見込みが少ない。

そのことを言いたかったのだが、雄二がとても自信満々だったので、俺は特に何も言わなかった。

俺だったら、挑発を混ぜてFクラスの現状を伝えてそれでこつちの要求全部飲まないなんてせこいな！ ぐらい徹底的に負ける要素省くんだがな。

会社の乗っ取りとかって大体そんなものだろ。弱みを徹底的につついて、自分の会社に乗っ取られたらこういうメリットがありますよと吊り上げて、食いついたら契約完了してるって感じ。

あー学校なのにあつちのこと思い出しちまったぜ、まったく。なんて思っていると、「なら、そこにルールを追加してほしい」と霧島が俺を見ていった。

雄二は少し考えて答えた。

「こいつは一騎打ちに出ない。学力だけがすべてじゃないって証明するために」
「そうじゃない。この一騎打ちが終わったら、私と流を勝負させてほしい」

その言葉の中の隠れた意図に気付いた俺は、すぐさま断った。

「いやだね。どうせあいつの話聞いてほしいとかそんなところだろ?」

「留美は今も泣いてる。誰もいない場所で、ひっそりとあなたのために泣いている。それが分からないの?」

「泣く理由は人それぞれだろうが。俺のためっていうなら、泣かずに普通に生きやがれって伝えとけ。赤の他人に、これ以上心を使うな。だから俺は断る」

「…。なら、留美は——あなたの妹は、何を支えに生きればいいのか?」

「知らん。支えなんて周りにたくさんいるだろうって伝えとけ」

「真面目に答えて」

「俺は至ってまじめだが?」

「……………」

ついに睨み合いに発展した。どちらか引けばいいのだが、どちらも引く気がない。

そりやそうだ。俺はもうあそこから縁を切られた。完全に見放されたんだ。なのになぜ一人で社会の波にもまれながらも生きてきて、静かになつたと思つた途端に会わなくてはいけない。

対してあちらは、こちらの事情をある程度知っているからかお節介をやきたがる。だから会わせようとする。

学園長よりは深く知らないだろうと思いつながら、俺はため息をついて言った。

「言っておくが、俺の人生は俺のものだ。今更泣いてこつちに来たところで、すでに縁が途切れている。よりを戻すとかは絶対にありえない。言葉を交わすこともな」

「……………それは流が決めているだけ。留美はあなたを未だに家族の一員だと思つてい
る」

「なら言っておけ。お前の父親の言うとおり、正式な血縁者はお前一人しかいないとな」
「流！」

久し振りに聞いた霧島の怒鳴り声。誰かのために本気で怒れたり泣いたりできる
すごい人間。

心なしかゆらゆらとオーラが見える気がするが俺は取り合わず、「あと頼んだぜ、雄
二」と言つてAクラスを後にした。

「どうしたの流？　なんか怒った声が聞こえたけど」

「別に。ただ久し振りに会ったから喧嘩しただけだよ」

「仲直りした？」

「そういう問題じゃないんだよ、その喧嘩は」

「待ってよ！」

明久がしつこいのでそのまま教室へ戻ろうとすると、こいつもくつついてきた。どうやら、先程の霧島との会話の一部が聞こえていたらしい。それを聞きたいがためについてきてるようだ。

こいつ本当にお人よしだなあと思いながら、こうなるまでにクラスで起こったことを思い返した。

「さて、いよいよAクラスだ。ここまで俺を信じてついてきてくれたこと、感謝する」

「というか、お前前線で戦ってないが大丈夫か？」

「大丈夫だ問題ない」

あーこりや負けるな。こいつ昔から詰めが甘いからなあ。

そんなことを思った俺は、周りが盛り上がっている中卓袱台に顔を伏せて寝た。

という訳で目が覚めたというか起こされた時にはなぜか雄二が俺を盾にして（見た通り力あるな）おり、俺達はクラスメイト（ただし女子と木下と明久は除く）に靴下を構

えられており、明久は島田さんと姫路さんに追い詰められていた。

「一体どうした？」

「幼馴染だと言ったら狙われた」

「で？」

「だからこいつは翔子と昔近所だったと言っておいた」

「そうか」

それだけで大体理解した俺は、後ろに隠れている雄二を右のひじで打ち付け（おそらく顔面）て排除し、息をすってから大声で怒鳴った。

「大概にしろお前ら!! 次はAクラスだろうが! …勝てるものも勝てなくなるぞ」

『『『それとこれとは話が別だ!!』』』

「元凶伸びてるんだからいいだろうが!」

『『『お前がやったからだろ!?!』』』

「伸びてるうちに恨み晴らせや!」

『『『……その手があったか!』』』

ついつい言ってしまった言葉に罪悪感を感じたが、事を起こしたのがこいつだから別にいいよなと思いつつながらサソリ固めを食らっている明久を見てため息をついた。

——それがこの教室に来る少し前の話である。

「はあ……」

「さつきからどうしたの流？　なんかすごい疲れた顔してるけど」

「今日が結構疲れたからじゃね？」

「あー確かに」

教室に戻る道中。仕方なく俺は明久と会話しながら歩いてきた。なぜかついてきたから。

「今からやるのかな？」

「どうだろうな。準備関係でひよつとしたら明日になるかもしれないし」

「そっか……いよいよだね」

「ああ」

そう言えば何の疑問も抱かなかったが、どうして俺達はAクラスを倒すことになったんだっただか。気付いたらそんなことになっていたから良く分からな……そういえば、福原先生が出て行った後に明久と雄二が出て行ったな。ひよつとしてその時か？

「どうしたのさ」

「いや、お前らが発端でここまで来たんだろうなって」

「な、何言ってるのさ流。それじゃまるで僕と雄二が企てたみたいになってるじゃないか」

「とか言いつつ思いつきりキョドッてるぞお前。黒だろ」

「そ、そんなことない！ 僕は決して姫路さんのためなんかじゃ……」

「なるほどなあ。好きな人のためか。良く乗ったな雄二も」

「だ、だから違うって！」

「いやでも雄二の奴が今霧島のことを好きだったなら……あり得るかもしれない」

「違うって……って、え？ 今なんて？」

「バカなのに勘が鋭いのか目ざといのか。まあいいやなんでもねえよ」

「さらつと流まで僕の事を馬鹿と言った!? ヒドイや！」

そんな会話をしていると、いつの間にか暗い気持ちが消えていた。不思議なものだ。

Aクラス戦後

さて、Aクラスとの試召戦争だが。

さらっと行くと俺達が当たり前のように負けた。二対二のいい勝負で、雄二のバカがバカやった結果負けた。まあ如何に霧島が間違える場所を知っていたところで勉強しなければ意味はない。

そんなでもって霧島が勝った時の条件（俺は知らないからおそらく出て行った後だろう）を使つて雄二に結婚を強制して雄二の方が袋叩きに合う直前になったり、西村先生が担任になり補習という絶望に送りこまれたFクラスが次こそAクラス獲つてやる！と叫び、明久は姫路さんと島田さんの二人にデートの誘いという名の強制連行で消え、雄二も似たような感じで消えた。

ちなみに。霧島があまりにもしつこいので勝負を受け、とりあえず瞬殺して黙らせた。その時の教科は数学で、点数が7000ってたかな確か。で、普通に「やれ」といつたら霧島の召喚獣は一瞬で消えた。霧散したって言葉が当てはまるぐらい早く。

……で、帰ってきたんだが……

「社長。ずいぶん遅かったですね？」

「李里香さん。何人の家の玄関でたむろってるんですか。不法侵入で訴えますよ」
「すみませんでした」

なぜか玄関で現社長の李里香さんがたむろっていた。

ちよくちよく出てるけど説明しなかったから今説明するけど（というかそんな機会なかったけど）、俺ね、ここ来る前は会社経営してたんだよ。名義はちよつと副社長の名義だけど、実質的なトップやってやつ？ ま、自慢にもならない話だが。

で、その副社長が現社長の金成李里香さん。俺当分会社行かないから社長やってねと言ったら書類だけ回してくる酷いけど結構有能な人。出来るキャリアウーマンの鏡じゃないかな。

ちなみに会社はゲームソフト製作会社。規模としては成長中だが社員数三百人を超え利益は六億ぐらいたったか？ あまり興味が無いというか金稼ぐのに手つ取り早かったのがこの業界だったからな。

ま、未成年なのでちよつとした事情で知り合った李里香さんに起業申請してもらったり色々矢面に立ってもらったんだけど。

そんな感じで割と重要な役割を任せてるので住所を教えているんだが……割と来るのが初めてだったりする。

「どうしたんですか？」

「社長の存在がばれてあそこがすぐに面会を要求してきました」

なんら気負いもせずに淡淡と用件を述べてくれる。それはありがたいのだが、正直彼女との意見が食い違っていないかどうか確認するために「あそこって財閥？」と質問すると、黙ってうなずかれた。

あーやつぱり思つたより早かつたな。色々と煙に撒いてセキユリテイ掛けたのに。

そんなことを思い浮かべながらため息をついた俺は、「ちよつと待つて」と言つてアパートの玄関へ入る。このアパートの土地含めて買ったからね俺が。知り合いの不動産に掛け合つて。

全部屋（といつても二階建てで部屋数は十）の三部屋ぐらいしか使つてないんだけど。その内の一部屋——いつもの生活スペースに入った俺は、制服を脱ぎ捨てて靴をソファに放り投げ、スーツに着替えてネクタイを締め、取りあえずビジネスバックを片手に革靴を履いて部屋を出る。もちろん眼鏡をかけて印象を変えることも忘れない。伊達だけど。

腕時計とか忘れたとか思いながらそのまま玄関を出た俺は、待つていた李里香さんに「じゃ、行きますか」と軽い口調で歩き出す。

そのすぐ後に、彼女は黙つてついてきた。

しばらく歩いたら駐車場に車を止めたと言われたのでそちらへ向かい、車で（もちろん李里香さんの運転で）会社へ向かう。

「学校の方はどうですか？」

「学園長に掛け合ったがクラスは変わらないって言われた。まあ今いるクラスの奴らが面白いから別にいいけど」

「それは良かったですね。こちらは社長がいなくなつてから色々大変です。合併話を全部突っぱねたり新作ソフトを作ったり。売れ行き的には好調ですが」

「そんなに嫌なのかよ」

「いやという訳ではありません。ただ、社長がどうして今更学校に通うのかわからないだけです」

「だって俺、高校に通つてないから」

「え？」

俺の言葉が衝撃的だったのか少しカーブに対する反応が遅れる李里香さん。

知ってるはずなんだがなと思いつつながら、「俺はちゃんと自己紹介しましたよ。海外の大学を飛び級で卒業した、つて」と後部座席で言っておく。

「そうだったんですか。そこまで想像が及ばなくてすいません」

「別に些細なことだからいいけど。それに、今回の入学はババ……学園長の『依頼』だし」
「それも初耳です」

「ま、くれぐれも内密につて言われてたし」

「そう言つて俺は背伸びをする。」

「ていうか、これからクラスの設備落ちるんだよな……」

「ああ。試召戦争ですか」

「そうそう。Aクラスとやつて負けたからさ。卓袱台から段ボールだつてよ」

「……それ勉強できないじゃないですか」

「意外とできるかもよ？ 貧乏学生のテール代わりになつてるし」

「かなり特殊ケースですね……あ。着きました」

「さて。面倒だ」

車内でそんなことを呟きながらも表情を真剣にし、目の前のリムジンが駐車されてい
る建物へ、反対車線から歩道において横断歩道で向かった。

「ウィーツス」

「社長。お客様なら会議室でお待ちです」

「正直面倒なだけだよ」

「行つてあげてください。社員一同萎縮しています」

「了解了解」

もぬけの殻の高級車を見ながら三階建ての建物に入った俺は、受付嬢と少し応酬してから言われた場所へ向かうために階段の方へ歩き出す。

エレベーターやエスカレーターはあるけど、重要な部屋の近くへ行くには階段が一番手っ取り早い。

それは、非常時を考慮した配置になっているから。というか、俺が考えたんだけど。

なんか自分で自分の首を絞めた気がするな…と思いつながら階段を上る。一步一步踏み出すごとに、段々息苦しくなっていく気がする。

あー本当になんでこんなことになっているのかね。すべて捨て去ったというのによ…。

明らかに気が沈んでいるけどどうすることも出来ないからどうしようと思いつつ三階まで上ってしまった俺は、盛大にため息をついてから意を決して会議室のドアをノック

クもせずに開ける。マナー違反？ どうでもいい。

開けた俺は視線を下へ向けたまま会議室の中に入り、閉じてから来客者の顔を確認するため顔を上げる。

そこにいたのは

「お久しぶりでございます、豊橋流様。いえ——お兄様☆」

——霧島との話で出てきた、勘当させられた家の中で唯一気味悪がらなかった人だった。

見知ったやつが転校する話

元妹（ただし同い年）

「おう、初めましてだな。財閥の一人娘さん？」

相手のペースに、言葉に乗らず、軽く挨拶を交わす。ここで言葉を肯定するような言動は後々命取りとなるから。

が、向こうはそんな俺の対応も織り込み済みなようで、「やつとお会いできましたわ」とこちらの話をスルーして続ける。

相変わらずの頑固さだと思いつつも会議室にあつた椅子に座つて鞆を机に置きながら「それで、本日は如何様で？」と確認する。

俺はピリピリとした雰囲気を出しながら。相手は自分の気持ちを抑えないまま。

その結果彼女は俯いたと思つたら、目の前で座つていた俺の首に両手を回して背後に回り、耳元で小さく、それでいて清楚そうな見た目とはギャップのある妖しい声で「ああ……やつとお会いできましたわお兄様♡」とささやいてくる。

ハアツとため息をついた俺は、後ろで恍惚としてそうな奴に「いい加減現実を受け止めるよ」と苛立ちを隠さずに怒る。

だが彼女は「分かってますわ……」と名残惜しそうに離れてから目の前に移動し、堂々と叫んだ。

「私がお兄様と法的に結婚できます！」

「まず血がつながっている事実を見直して来い」

淡々と反論するが、まだおかしいままなのかそれともこれが素なのか分からないが「そんな些末なことより戸籍登録が抹消された時点で血がつながっていようが結婚できるじゃないですか！」と向かってくる。

俺はそんな理由で勘当されたわけじゃないしそもそもあそこにはもう戻りたくないんだが……そんなことを思いながら「跡取り娘が勘当息子になんか用か？ てつきり自分達の会社が吸収されるのを恐れて全力で調べてここまで来たと思っていたんだが」と訊ねる。

それに対し彼女は不機嫌そうな顔をする。

「どうした？」

「この会社を全力で潰すと言われたら、どうしますか？」

「ふむ。道連れに失墜させるか、お前達を遠慮なしに破滅させる」

「相変わらず迷いがないようなので留美は安心しています。ですが、そんなことで来たわけじゃありません」

「ああそう。直接こなくても良かっただろうに」

「いえ、直接こなければお兄様成分が補充できないじゃありませんか」

ドヤ顔だったので無言でそっぽを向く。そんな態度を取ったところドサツと力なく倒れる音がした。

「演技はやめろ」

「…ばれていましたか。さすがです、お兄様」

というか、このままやっていたら罅が明かないのが明白なので、ため息をついて右拳に顎をのせて「なんだ、文月学園にでも転校するのか？」と鎌をかけてみたところ。

「はい」と、迷いのない返事をいただいた。

「普通はサプライズというか、黙ったまま水面下で行われるんじゃないのか？」

「もう準備は完了し、明日から遅い転校生として通いますわ。クラスが違うのでこうして報告だけでも」と

出ないと私達とすれ違うどころかまったく会わない様に移動するじゃありませんか。そう付け足したのが聞こえご苦労なことだと思ひ……違和感に気付いた。

「何人来る？ お前含めて」

「三人、といったところででしょうか。ああもちろんお兄様に接触させるつもりはありませぬわ」

「お前のその思考に恐怖するって」

勘当された結果がこれだといささか将来が不安なんだが：彼女の声を聴きながらそんなくだらないことを心配した俺は「ならもう用件は済んだな。さつさと帰れ鈴鹿財閥御息女」と素つ気なく返す。

「お兄様は、まだ怒られているのですか？」

「何の話だ？ 俺はあんたみたいな一財閥に怒る理由でもあるのか？」
「っ」

彼女は言葉を詰まらせる。それはきつと、俺の意志が固い事と、改めて突きつけられた隔絶されているという事実に対して。

というか三人——うち一人は目の前にいる奴だから実質二人——か……。記憶の片隅過ぎて誰が来るのか予想できないな。ま、誰が来ようが関係ないか。

それよりさつさと帰ってくれないかなと思いつながらぼんやりと天井を見ていると、「お兄様は架空の後見人で戸籍を作られていますよね？」と確認してきた。

「架空じゃないぞ。ただ数か月前に亡くなった人の名字で登録してるだけだ。付き合いがあつたのは事実だし、ちゃんと本人の捺印なども国に提出されている。戸籍上は何ら問題ない」

「そうですか。ところで、後見人がなくなった場合の引き取り先はいるんですか？」

「ババアの名前を借りた。手伝わせると言っていたからな」

そんなことも分かってなかったのかという顔を思いつきりしてやる。別に意趣返しとかそういう訳じゃなく、ただ本気でそう思っただけ。

それに対し彼女は悔しそうに歯軋りしたかと思うとすぐさま表情を戻し、「お兄様のその用意周到さに感服します」と褒めてきた。

だが、俺は「お前の兄じゃないって言ってるだろ。鈴鹿流なんて人間はいないんだよ。いい加減覚えろ」と強く言ってやった。

それでも彼女は「いいえ。誰が何と言おうとお兄様はお兄様です。留美の中では」と周りに誰もいないことを良いことに本音を漏らした。

やっぱり平行線をたどるのか？と思つた俺はため息をつき、立ち上がつて髪の毛を掻きながら背を向けて「用件が済んだのならもう帰つてくれ。あなた達がいるだけで会社の業務が滞つてしまう。正直営業妨害だが、それをするほど財閥の財政は逼迫していたのか？」と突き放す。

彼女は——一人の女性は——その声に含まれている何かに気付いたのか素直に「すいませんでした。貴重なお時間を取らせてしまい」と言つてから俺の横を通り過ぎてそのまま部屋を出て行つた。

一人になつた会議室。カーペットから香る匂いを感じ取りながら、俺は大きく深呼吸

をしてから壁を力の限り殴った。

壁の材質はそれなりに固いものなので俺の拳が痛くなっただけだが、とりあえず気持ち
ちが落ち着いたのでよしとするか。

罅の入った壁をぼんやりと眺めながらそんなことを思っていた俺は、慌てて入ってき
た李里香さんにこの場で何も言わせないように「それじゃ、俺は帰るよ。送ってくれる
？」と頼んだ。

「……………」

「……………」

帰りの車。いつも通りの表情を浮かべながら包帯を拳に巻いている俺と、どこか心配
そうな李里香さん。会話など、無くなっていた。

手伝い

次の日。

あの妹が来て「学校に行きますよ」と言われたので早めに学校に来た俺は、そのまま学園長室へ向かった。

「邪魔することには何の気負いもない」

「だったらいうんじゃないよクソガキ」

そう言つてタブレットを眺めてふんぞり返つているのはこの学校の長でありシステムを偶然開発した

「偶然は余計だよまったく」

「逆算でシステム解明して行くせに何言つてやがる。しかも俺にまで目をつけてよ」

「ふん。あんたの化け物ぶりはよく耳にするからね。しかも丁度独り身になったのなら使うしかないじゃないか」

そう言つとババアはタブレットを机に置いて「で、始業時間一時間前に来た理由つてのはなんだい？」と興味がなさそうに質問してきた。

「俺を勘当した家の妹他二名がここに転校して来るそうだが」

「そうなのかい」

それだけでどういう意味なのかを知った俺は、思いつきり、盛大にため息をついてから言った。

「経営を教頭に任すなよ。バカじゃねえの？」

「うるさいさね。あたしは根っからの科学者なんだよ」

「やーいやーい人の見る目がない憐れな科学者」

「……あんた無害そうな顔して実は毒舌だね。そりゃ親にも勘当されるさね」

「はん。毒舌だけだったら勘当されるわけないだろ」

そう言いながら俺はポケットからあるスイッチを取り出し、押す。

「何さねそれは」

「あ？ 俺特製妨害電波。範囲はこの建物全部だな」

「……いつの間になつたんだい？」

「この学校に盗聴器とかいろいろあり過ぎるからな。普通に生活するのに必要だと思つて作つたんだよ」

「で、それだけかい？」

何かを確信した様子で訊ねてくるババア。

なんでそう言うのだけ鋭いんだよと思ひながら、俺はそのスイッチをあちこちに向け

ながら歩き回る。

すると、植木鉢の方でスイッチから音が鳴った。

「見つけ」

「なるほど。盗聴器を見つけれられるのかい」

「そうそう。これをとりあえず売り物にしようかと思案中」

「……金がただけ欲しいんだい」

ため息をつきながらそんなことを言ってきたので、俺は盗聴器を取り出して潰し「別に。金なんていくらでも増やせるからそこまで欲しいなんて思っていない。ただ、対抗できまるまでの力を得るのに手っ取り早い金が必要なだけだ」と答えた。

「鈴鹿財閥にかい？」

「いや、ケンカ売ってくる奴全部」

「そらまたなんとも規模のデカイ話さね」

絶対話を信じてないのが分かる口調だったので俺はそれ以上語らず、「なあ。俺はいつから手伝うことになるんだ？」と質問する。

「今から頼めるかい？ ちつと腕輪がギリギリになりそうだからね……」

「あ、そう。了解。良かったらプログラム見せて」

「いいさね別に。あんたは盗まないだろ？」

「盗む？　なんでだよ。俺はゲーム作るだけだぜ？」

「そうかい。ならさっさと開発室へ行つてきな！　鍵は持つてるだろ？」

「オッケー」

やったこれで今日はずっと籠つていられる。

そう思っていたら、

「授業が始まったらちやんと行きなよ」

……ま、当たり前だな。

そんなこんなで俺が普通に授業が出たのは、三校時目からだった（ババアが来た時だった）。

「ういっす」

「なんだ流。明久以上に遅刻とは」

「珍しいか？」

「そうだな。以前だったら考えられないな」

教室に入ったら雄二が段ボールの机に教科書を並べて声をかけてきた。

俺は自分の席に座って教科書を広げず、腕を伸ばしてから見慣れた光景に呟く。

「……また血が流れてるな」

「ああ……また血が流れてる」

「ギブギブギブ!! や、ややややめてよ美波!!」

「(ブシヤアアアア!)」

「だ、大丈夫ですか土屋君!」

「なんとというか、お主は本当に馬鹿じゃのお」

Fクラスはバカの集まりと言われている。

それは本当だ。ここまで馬鹿な奴らはいない。

本当に……本当に……。

「よくこんな学校に転校して来ようと思ったな」

「まったく。この学校に転校しようと思ったやつのが知れない。しかも、鈴鹿財閥の娘とか」

どうやら本当に転校してきたらしい。

昨日久し振りに会ってバカになってるなと感じた俺はまあ順応するんじゃないかと思いつながら「他にお前が知ってる奴らいた?」と訊くと、「いや。後の二人は名前を聞いてもピンとこなかったな。翔子は知ってるようだったが……」と答えてくれた。

となると該当する奴は一気に絞られたなと思いつながら開始のベルが鳴ったので、俺は

片肘をつけて授業を受けることにした。

三校時目が終わり。

「そういうや転校生のクラスどうなってるか分かってるのか？」

あまり動こうとしない雄二に転校生の分布を聞いてみると、答えたのは土屋だった。

「……二人はAクラス。一人はBクラス」

「ふーん。調べるの早くね？」

「……戦力調査は兵法の基礎」

「その割にお前鼻血出してる気がするんだが……」

「これは風邪」

「なんとなくムツツリーニの意味が分かったからさっさと鼻血を止めろ」

よくこんなので生きていられるなど逆に感心していると、急にクラスが静まった。

それを感じて俺も自分の席から視線を送ると、案の定見知った奴がそこに立っていた。

白髪のロングで艶やかな色合い。

胸は人並みであり、体型もそれほど細いわけではないがどこか蠱惑的。

顔立ちはどこか人形を思い起こさせるが笑顔が絶えず、また顔立ちが整っているので笑顔にやられる大人の男も少なくない。

そんな彼女が教室の入り口に立ってこの部屋を見渡していた。

ああ残り二人のうちの一人はこいつか。確信した俺はもう一人についてのあたりをつけていると、もう一つの扉から「ここにとんでもなく頭のいい人がいるって噂なんだけど……」と聞き慣れた声が聞こえたので、もう一人が確定。

それらを総合して何とも厄介な奴らだなあと思った俺は、見つかるより早く移動しようとして窓ガラスに手を掛けたところ——見つかった。

「流さん……」

普段騒がしいのだが女が来ると（特に美形）途端に静まる我がFクラス。そのせいで俺の名前が教室中に聞こえる。

それが分かった瞬間、俺はすぐさま飛び降りた。

『待ちやがれ!!』

瞬時に反応するのがFクラス。他人の幸運（女生徒に声をかけられるなど）を許せない彼らにとつて、もはや名前が挙がったのは有罪同然^{ギルテイ}。

ここからの対応が素早いのになんでテストだといいい点取れないんだろうかと着地した俺は思いながら、先回りされる前になんとか研究室へ向かうことにした。

「あつぶね〜」

「授業はどうしたんさね」

「追われてたからフケた」

「……流石バカ達だねえ」

感心しているのかわからない口調でそんな感想を漏らしながら、ババアはパソコンの画面から目を離さない。

俺は息を整えながら質問した。

「どうよその腕輪。かなり不具合を無くした筈なんだが」

「そうさね。あたしが悩んでいた不具合が一気に消し飛んだ。そのおかげでこうして次の段階へ行けているんだけど……あんたは余程好かれているみたいだねえ」

「好かれてる？ この俺が？ 『監視するため』の間違いだろ」

「まああんたの化け物ぶりじゃそう判断するのも仕方ないと言えるけど……人間それだけじゃないよ」

何かを知ったように作業をしながら俺に説教を垂れるババア。

それに対し、俺は「たいして進まない作業をやって締め切りが刻一刻と迫ってる人間に説得力はあるのか？」と質問する。

「うっ、うるさいさね。これから本気で取り組もうと思つてたところさ」

「発表当日までやるつてか？ ババアも案外バカだな」

「年寄りにバカとはなんだい、バカとは。それと、あたしは学園長だよ」

「俺には関係ないね。年寄りだろうがなんだろうが、研究や製作をしている時点で『当事者』なんだよ。当事者がバカなスケジュールでやってるんだから言つてもいいだろ」

「……ふん」

返す言葉がないのか鼻で笑うババア。それを聞いた俺は開いてるもう一つの腕輪の方へ行き、パソコンを起動させる。

「やるのかい？」

「あたぼうよ。なんで元婚約者に自称舎弟と元妹がいる場所に戻らないといけないんだ」

「……つてことは、三人とも恐ろしい程に有名人じゃないか。あんた、どうやって躲すんだい」

「何とか躲すしかねえだろ。俺はもう、完全に袂を分かつたんだから」

「ま、無理だろうがね」

「哀しいこと言うなババア！」

そんなこんなで、この日一日中俺は研究室に籠っていた。

帰宅したのは午後八時。そこから会社から送られてきた書類を読んで意見を書き、深夜一時になって俺は終わったので、寝た。

明日からどうやってやり過ごそうか……。

ラブレター騒動お構いなし

そこから何とか会わずに切り抜けたある日。

いつも通り一時間早く学校に正門からではなく森の方から入った俺は、普通に開けていた自分の教室の窓枠に鉤爪をひっかけてロープを登る。

「……なんか忍者みたいだ」

靴を脱いで教室に入った俺はそんな感想を呟きながら、誰もいない教室で伸びをしてロープを回収する。

上履きを取りに行かないと思った俺は、軽やかな足取りで昇降口へ向かった。

学園祭のトーナメント商品になるらしい腕輪達。盗聴器は一度取っ払っても何度も出てきたので、何個か指紋を採取したら教頭だった。

そこから教頭の悪事が割と簡単に調べられたので、その書類を持ってきている。

これババアに見せたらどんな反応するんだろうなと思いつつながら上履きを履いた俺は、下駄箱に入っている封筒を取り出して閉める。

「えーっと、何々……」

手紙を読んでもみると、明久へのラブレターだった。

「間違つて入れてるんじゃないよ」

誰もいないことを良いことに、俺は明久の下駄箱へ手紙を入れてそのまま研究室へ向かった。

「うーっす」

「ざっざと仕事しな」

「了かーい」

研究室に入った俺は腕輪の調整をしているババアを尻目に奥へ行き、一際大きな機械の近くにあるケーブルにパソコンをつなげて同期させる。

腕輪に関して言うなら下地が完成したので、俺は別に手伝うことはない。

なので、俺はシステムの解析をしている。

「なあババア」

「その減らず口叩けなくしてやろうかい」

「やってもいいが、出来るか？ 俺を殺したら大変だろ」

「鈴鹿留美」

キーボードをたたく手が止まる。

その名前が出てきたのが意外だったというのもあるだろうが、名字を聞いて反射的に。

その反応を見たらしいババアは「あとは…妃ききぎ由美じゆうかいんに上下院薫じゆうかいんだったかねえ。うちの学園に転校してきたのは。三人とも馴染んでるみたいさね」と付け足す。

俺は平静を取り戻して再開させてから会話を続ける。

「まあな。Fクラスで暴動起きるし、FFF団が粛清に日夜走ってるから」

「…西村先生も大変なクラスの担任になったもんだ」

「したのババアだろ。後俺は、クラスでは素行不良ではないが優等生ではない立ち位置にいるから」

「あんたの場合、ねじれまくったその性格で優等生とは思えないさね」

「うっせ」

送られてくるデータの詳細が表示されてるのを見ながら、そのデータをサーバに転送して保存する。

あと残り六か月って長いよな…と残り時間を見ながらぼんやり思っていると、「そういや会社の成績はどうだい？」と訊いてきたので、俺は「まあまあじゃね？ 株価少しずつ上がってるらしいから。それに伴ってかソフト販売本数も増えてるらしいし」と答える。

「新進気鋭のゲーム会社。ジャンルを合体させたゲームで一躍有名になり、それ以降も様々なジャンルを合体させて販売している……と。社員全員プログラマー兼テスターだったかねえ」

「ああ。まだ売り上げ的には大手に勝てないけどな。ま、勝たなくてもいいけど。会社の目標は『仕事は一生懸命に。売り上げは全員が潤うぐらいで』だし」

「確か、株主総会の際は全部副社長に任せてたんだろ？」

「そりゃね。俺子供だぜ？ 株価暴落するじゃん」

「……正直言つて、お前さんの名前知ってたら何をする気も起きないと思うけどねえ」
「教頭はやってるぞ、うちの」

なんか話題がそちらに向かいやすかったので、俺はそこにブツこんだ。

「あ、なんだつて？」

「だから、教頭が色々と他の学校と共謀してるって話。うちの学校の評判落とすとか」
「……証拠は？」

言われるのは分かっていたので、俺は手元にあったバックから証拠書類を取り出してババアのところへ持っていく。

「ほれ」

「そこ置いときな」

言われたのでそのままおいておく。

作業場所へ戻りながら、「ま、鈴鹿財閥の一人娘とか転校した時点でそんなことやっただけだな」と言っておく。

「確かにやばいさね」

「危機感なさそうだな」

「ま、そんな時はそんな時さね。最悪あんたの力で何とかしてもらおうかね」

「面倒だから自力で何とかしてくれ」

「すぐさま断り、パソコンと睨めっこす——」

『待て吉井テメエ!!』

「捕まっただまるかああ!!」

ドダダダダ……

「……」

「……」

ババアと一緒に黙る。

「確か授業中じゃなかったかね？」

「ああ確かそうだったんだが……」

「一体何があったんだろうかと該当することを思い返し……気付いた。」

「多分、ラブレターで追われてるんだと思う」

「ラブレター？　なんだってそんなもので起こるんだい」

「僻みじゃね？　雄二の奴は昔と変わってるし、僻む理由ないからむしろ明久を追いつめて遊んでると思う」

「……来年度からある程度合格ラインを決めようかね」

「いや、あのクラスが特別だと思う」

「そう言いながらもたがいに作業をやめない。でも俺は特にやる事はない。ただパソコンのデータが異常なく流れていくのを見ているだけ。」

「つうかこの学校設立してからそれなりに経ってるだろ？　なんだって解析が進んでないんだよ」

「解析より先に新技術を見せなきゃスポンサーが納得しないさね」

「……で、財閥さんから支援受けそうか？」

「そんな話一切上がってないと思うけどね。もうあんたがこの学園にいるってこと知られてると思うってほうがいいね」

「まあそんなことをあいつが転校してきた時点で分かりきっていたので何も反論せず、教頭どうする？　始末する？」と画面を眺めるのに飽きた俺はバックから書類の束を取り出してばらばらとめくる。

その作業は絶対に見えない筈なのに、ババアは「こんなところで会社の仕事するんじゃないよクソガキ」と注意してきた。

このババア悪魔に魂でも売ってこれ作ったんじゃないだろうな……そんなありもしない疑いをしたくなるほどピンポイントだったのでおとなしくしまった俺は、「ババアって勉強教えられるの?」と雑談にはしった。

「勉強教える暇なんてないさね。第一、うちの学園に相応の教師がいるんだからあたしが教える必要ないじゃないか」

「まあ教頭に経営を一任してる時点で経営者の資質ないしな」

「それとこれとは話が別じゃないかクソガキ」

苛立った声が聞こえたので俺はその場で肩を竦め、「そつちはどうよ?」と質問する。

「暇な誰かさんとは違って調整で忙しいさね」

「ふくん……なあ、新しい教頭雇うとしてもさ」

「いきなりな話だね。そりやあの資料見たらすぐにでも首にして警察に届けるけど」

「だったらそれは少し待ってくれないか?」

今しがた思いついた作戦及び人事を話そうとあの教頭のクビについて待ったをかけると、当然のようにババアが「ハア?」と怪訝そうな表情をしてるだろうなと思える声で言った。

「一刻も早くやらないとスポンサーが離れていくだろうに」

「いや。Fクラスがバカすぎるといっただけでどこかで耳にされてるはずだから、若干スポンサーが離れかけていると見て良い。だからこの状況を逆手にとって、一気にこの学校のイメージアップをFクラスにやってもらおう」

「……勝算は？」

「信用して八割。人事は俺に任せてくれ。当てはある」

そう言うとはババアは作業する手をやめてしばらく黙った。

こちらのパソコンの音だけが部屋中に響き渡っている中、黙っていたババアは口を開いた。

「ならその作戦、乗ってやろうじゃない。学園祭が当日だろう？」

「ああ。Fクラスの底力、全員に見せつけてやるぜ」

ちなみに。

昼休みに教室に戻って雄二（霧島が隣で昼食を食べていた）にラブレターの話聞く

と、案の定俺の想像通りだった。

明久は、思いつきりやられたのか燃え尽きていた。

学園祭まで残り……忘れたある日のことだった。

清涼祭の話

出し物

どうにかこうにかしてすれ違う日々を続けていることに安堵感を覚えながら、気を抜いたら絶対遭遇しそうな気がするので未だ気の抜けていないある日。

学園祭が近く、またクラスで何をやるか決まっていなにもかかわらず、俺達のクラスは——

『吉井！ さっさと教室に戻らんか!!』

『なんで僕だけなんですか!?!』

——校庭で野球をやっていた。

「お、ようやく戻ってくるのか。あいつらどれだけ学園祭やる気ないんだよ」

「というより、雄二の奴が興味がないからではないか？　うちのクラスは雄二の指示でまとまってると言っても、過言ではないからのお」

「まあそりゃな。……ところで秀吉よ」

「どうした流よ」

横に来ていた秀吉の姿を見て頭を抱えそうになった俺は、意を決して言った。

「お前……なんで女性服着てるんだ？」

「ふむ。わしが演劇部だというのは知ってるじゃろ？」

「そうだな。女性役を嬉々としてやってるといふ噂なら聞いたことがあるぞ」

「そんな噂どこから流れてるんじゃ!?! わしは男役をやりたいのに監督が女性役ばかり選ぶから渋々やつとるだけじゃぞ！」

「だろうな。もし本当だったなら、俺は秀吉から距離を置くことを検討する」

「後生じゃ！ 雄二以外にわしが男じゃとはつきり認識できる友達が減ったら生活し辛くて構わんのじゃ!!」

「で、また女性役で？」

「う、うむ……たまには男役をやりたいのじゃがの……」

「頑張つて鍛えろ。そうすればきつと——」

「ダメだよ秀吉はそのままじゃなきゃ! 秀吉はその姿だから秀吉なんだ!!」

「お主はわしをどうという目で見ておるんじゃ明久!」

秀吉を男らしくする方法を提案したところ、明久が勢いよく扉を開けてそんなことを大声で叫んだので、俺はため息をついて席に戻る。

「お前も参加すればよかったのに野球」

「いまいちテンション上がらないから」

「ふうん」

席に戻ってきた雄二がそんなことを言ってきたので適当に理由を言って西村先生の方へ向く。

「お前ら。野球やるより先に清涼祭の出し物決めろ」

ため息交じりのその言葉に、クラスメイトの半数以上はそっぽを向く。

俺は欠伸をしてから、西村先生に質問した。

「西村先生」

「なんだ豊橋」

「売り上げで教室の修繕って、可能ですか？」

『その手があったか!!』

途端に反応を示す。これが俺の計画の始まりだというのも知らず。

西村先生は少し考えてから「まあ、努力と結果次第ではできるだろう」とあいまいな表現で返してくれた。

出来るだろう、であって、出来るとは断言していない。故にできないかもしれないという可能性もあるが、耐えられない環境（俺としては意に介さないし、机があるのだから問題ないと思っっている）で不満たらたらなクラスメイトはその事実には気付いていない。

……いや、雄二は気付いてるかもしれないな。

だからといって最後まで勘付いているか分からないが、まあどうでもいい。

こつから先はやる気を見せたクラスメイトの勢いに任せるとするか。

名前の通り、流れに任せて。

「……で、喫茶店に決まったのかい」

「ヨーロッパとかいう名前で飲茶とか出すつてよ」

「名前があつてないというのもの、ある意味じゃ奇跡かねえ」

放課後。研究室で進行状況を確認しながら学園長室にいるババアと電話で出し物の報告をしている。

「にしても、本当にあのバカどもが来るのかい？ 来なかったら計画がご破算だよ」

「大丈夫大丈夫。教室のランクが落ちたことにより姫路さんの咳は悪化している。その上Aクラスの実力でありながら最下位のクラスにあり、周りに有意義な競争相手がいな
い。親だったら絶対転校を押し付けるね」

「あんただったら競争相手になるんじゃないのかね」

「ははっ。俺は競争する気なんて毛頭ないよ。高校なんて出戻りもいいところ。今更復

習やつてるようなものだし、もう社会人だから経験も何もかも違う。伊達に一年で会社を一部上場まで押し上げてないっての」

「……本当、あんたは化け物だね。鈴鹿財閥ですら恐れ、野放しにせざるを得ないほど」
ババアの言葉に俺を押し黙り、過去の事を一瞬思いだす。

そしてすぐさまそれを忘れ、根拠の続きを言おうとしたところ、「教頭が来たから切るよ」と言われたのでおとなしく携帯電話を閉じて床に寝転がり、天井を眺めながら呟く。
「……こうなったら、化け物らしく派手に、計算高く、それでいて他を圧倒する喫茶店でもつくってやろうかな」

ちなみに島田さんと明久が実行委員である。俺が指名されたが、「俺がやりたいことしかやらないが、それでいいか?」と言ったところ、雄二がすぐに島田さんに変えた。賢明な判断だな。

その日の帰り。

普通に夜八時まで作業をしていた俺は、ババアの気力がなくなったのと同時に校舎を出たところ。

純白のドレスを着て校門で待っている女性を遠目で確認できたので進路方向を変え、いつも学校へ来る道から帰ろうとしたところ、あちらも見つけたのかこちらに駆け寄ってきた。

正直遭遇したくない人物だったので逃げてもいいとは思うのだが、このまま逃げ出すのもどうかと思いたたらを踏む。

その間も彼女は近づいてくる……と、ここで救いの手が差し伸べられた。

「こんな時間に校舎に何の用だ、妃。忘れ物でもとりに来たのか？」

「あ、西村先生……いえ、人を待っていたんです」

どうやら校庭の周りを見回してたところらしい。丁度その女性の方に近づいて足止めしてくれたので、俺はその隙に全力で壁の方へ走り、闇夜に紛れて壁を蹴って飛び越えた。

つぶねー。内心で冷や汗をかいた俺はそのまま懐中電灯を取り出して山を下りた。

だがしかし。そうは問屋が卸さないという言葉が現実起こった。

山を下りて坂道の入り口付近まで来た俺は、誰もいないことを確認するために顔を出して左右を確認したところ、彼女の拒絶する声が聞こえたので反射的に飛び出しそつち

を見る。

彼女はガラの悪い奴らに迫られていた。

正直、俺は関わりたくないのですがどうなるうが知ったことではないのだが、この事実が公になった場合の彼女の家の対応とその後を考えるとやっつけられなくなつたので。

俺は、

バックから鉤爪付ロープを取り出して、

一番俺から近い奴の足元へ投げた。

計算通りに投げられたロープはそいつのズボンのすそに音もなく引つかかる。

俺はそのまま引つ張ると、そいつはこつちにも聞こえる声で叫びながらぶつ倒れた。

うっし。一人気絶。残りは二人といったところか。

ロープを放してそつちへ駆け出しながら残りの人数を数えた俺は倒れた男から鉤爪を外すと同時にその近くにいたやつに体当たりする。

二人まとめて吹っ飛んだので、俺はそいつ——妃の手を引きながらロープを回収してその場から逃げた。

はあ。こりや今日は家に帰れんな。

さらば日常

どのくらい手を引いて走っただろうか。

とりあえずからんできた奴らが視界から消えたのを知りつつ走って数分……だと思
う。

撒けた上に俺の自宅から離れられたがこれからどうするかと路地裏から通りを見なが
ら考えていると、不意にシャツの制服の袖の裾をつかまれたので、振り返る。

当たり前のように、彼女がうつむいていた。

困った俺は誰かに擦り付けられいいやと思いつたが、クラスメイトで頼りになる奴
が思いのほかいいことに気付いた。

そもそもクラスメイトにばれた瞬間俺も標的にされるのだ。その上、長年のフラスト
レーションのせいか、霧島もいい具合に壊れて雄二が所有物化されつつあるし、明久は
姫路さんと島田さんに血祭りにあげられるだろうし、康太はまず鼻血出して終わり。

となると秀吉が一番安全なんだろうが……と考えていると、「変わってなくて良かった
です、流様」と言っただけで抱きついてきた。

俺はため息をついて言った。

「そういえば別な婚約者出来たって？ 良かったな」

「……」

答えない。それどころか、腰に回してきた腕が若干震えている。

「……本当に」

震えていた。彼女の声も、彼女の身体も。

「本当に、そう思われているんですか？」

心外だと云う様に。自分は嫌だと云う様に。

それらをすべて理解しているつもりのは、それでも「良かったな」と吐く。

「俺みたいな化け物と結婚なんて誰も嫌だつてことくらい俺自身がよく知っている。

気味悪がらない奴なんて、ほとんどいなかったしな。良かったじゃないか」

が、そう言ったところで彼女がここにいる意味を理解していない俺じゃない。どうい

う意図で彼女がこうしてあの学校にいるのかは、八割推測が成り立つ。

でも、だからこそ、俺は関わる気をなくすように徹底的に折ると決めた。

……そうでもないかと留美みたいに壊れた奴が出てきかねないしな……。

手の施しようのない元妹の存在を思い出して頭を抱えなくなっていると、「化け物なんかじゃありません」と強い意志の籠った声が。

やっぱりか……八割の推測が確信に変わった俺は、彼女が続ける前に電話を掛けるこ

とにした。

『もしもし木下じゃ』

「秀吉ばんわー」

『珍しいのおお主から電話を掛けてくるとは』

「ちつと厄介事を匿ってほしくて」

『秀吉ー？ 牛乳まだなのー？』

『…またかけてほしいのじゃ』

まるで何かを諦めた感じで秀吉は電話を切った。というか木下姉って家じゃぐうたらなんだな。良い事知った。

携帯電話をポケットに入れた俺は手に入れた情報をどう使おうか吟味していると、
「今、木下さんに電話したんですか？」と質問が。

「まあな。転校してすぐ知ったと思うが、うちの学校結構無法者の巣窟だな。誰が一応まともなのかを判断できる目がないとあそこで生き抜くのはつらいぞ」

「でしたら平気です。私は流様を信じておりますから」

「……やっぱり変わってないな。親同士が一度無理に決めた婚約だというのに」

俺の言葉に彼女は「初めてお会いした時に言った通り、嫌でした。でも、今じゃ流様以外の方との結婚は考えられません。たとえ家を出ても、この気持ちは変わりません」

とこれまた強い意志で宣言する。

……どうしてこうも堂々と自分の気持ちを言えるのかね。一周回って冷静になった俺の頭はそんな疑問を浮かべていた。

しかしその気持ちを飲み込み、仕方なく俺は彼女の手を握って「とりあえず、ここから木下の家へ行くか」とため息交じりに、力なく言った。

そんな俺とは対照的に嬉しそうな声で「はい！」と彼女——由美は言った。

さらば……平穏じゃなかったけど関わり合いの少なかつた日常よ……。

木下の家へ向かいながら、俺は内心で涙を流しながら今までの日常へ別れを告げるこ
とになった。

「誰よこんな夜遅くに……って、あんた！」

「ウィツス木下姉。試召戦争のときはかなりえげつなかつたな」

「……で、何か用？」

特に怒りもせずに用件を訊ねてくる。さすがに猫被つていてもAクラスにいる人間。切り替えは早いな。

由美を背中に隠しながらもそう思った俺は、「悪いけど、泊めてくれる？」と訊ねる。

「ハア？　なんでよ」

「俺じゃないんだよ。当たり前的事だけだよ」

そう言つて俺は背中にいる由美を木下姉に見える様に移動する。

「妃さん……？　Fクラスのあんたが一体どういう関係なのよ？」

「詮索するなら秀吉經由で頼む。それか、今日泊めて直接聞いてくれ」

答えるとは限らないがな。心の中でそう呟きながら返事を待っている、木下姉が観念した様に「…分かったわ。ちよつと家族に相談して来るから待つてなさい」とため息をつきながら言つて玄関から消える。

入れ違うように、秀吉が玄関に来た。

「どうしたんじや流よ。電話したと思つたら直接来て」

「時間が時間だからこの子を任せようと思つて」

「初めまして。わたくし、木下優子さんと同じクラスの妃由美と申します。秀吉さんは似ていらつしやいますね」

「よく言われるぞい。じゃがわしは男じや。ゆめゆめ忘れんでくれ」

「大丈夫です。ちゃんと見分けはつきますから」

「許可取つてきてわよ妃さん……秀吉、あんた妃さんの事案内しなさい」

「姉上がやればいいではないか。クラスメイトなのじやろ？」

「良かったな。家に帰ることが無くて」

長くなりそうだったので、俺はすぐさま退散出来る様に口を挟み、「じゃ、また明日」と言つて逃げることに。

ちよつと待つのはじゃ！ などと聞こえたが、そんな些細な声に耳を傾けずそのまま駆け出した。

ところ。

走つてしばらくの街灯があまり機能していない道で囲まれた。数は四人。夜目になつているので服装でどういった関係なのかは想像できた。

動かない四人に対し、俺は一言提言することにした。

「問題なんてないよ」

そう言つて先へ進む。前方の二人が警戒しているのが分かっていながら、俺はその二人の間を通り抜けて同時に抜き取つた拳銃二丁を両手で回しながら「危ないから没収するぜ」と四人を置き去りにして俺は家へ帰つた。

やれやれ。この拳銃どうやって処分しようかね。

今頃俺とあいつの関係話しているんだろうなあと考え、明日は気が滅入りそうだと思

いながら、拳銃を押し入れに投げ入れて、寝た。
書類はちやんと終わらせた。

準備にて

「キビキビ動けお前らー！ 設備変えたくないのかあ!？」

『イエッサー!!』

無駄な統率力でテキパキと内装を固めていく雄二。こいつが指揮をとったらあつという間に決まっっていくのは、さすがに神童の名残なのだろうか。

なんて思う由美を秀吉の家へ泊めた次の日。

今日は手伝いに来なくていいとババアに言われたので、こつちで雄二の補佐みたいなことをやることに。

「しっかし、外貨ありなら遠慮なく改装するんだけどな」

「お前のその商売に対する情熱はなんだ？」

「色々あるんだよ。喫茶店をやるのなら、内装は基本清潔さを醸し出す。その上ウエイターたちの着こなしがあまりにもなつてないのはダメ。客はそういうのでも見てるからな」

「……なんでいきなり商売談義に入ったんだよ」

「はい須川達その配置違う！ オープンキッチンじゃなくて、遮って調理するんだか

ら、移動する際に邪魔にならない配置だつて言つただろうが!!」

「お前が一番本気じゃないのか!」

「は? いくら文化祭でも客に金払ってもらうんだろ? だつたら本気でやらないとダメだよなあ……?」

「目が据わつてるよ流! 怖い、怖いから!!」

「おらあ衣装班! 採算以内できちつと服作つてんだらうなあ!」

「!……: 勿論!」

「時間がねえんだ調理班後回しでとりあえず全員で内装やるぞ!!」

『イ、イエッサー!!』

「……なんか見事に仕事奪われた気がするんだが」

「テメエは勉強だろうが馬鹿野郎」

「!!」

「? どういうことじゃ?」

もう面倒になつた俺が話を進めていくと雄二が力なく言つたので、俺はトーナメントの勉強しろというのと、驚いてこちらを見ていた。

秀吉も近くにいたからか聞こえたらしく首をかしげたが、俺は答えずに「ほら秀吉も重いの運べ!」と指示を出す。

「まあ後で聞くとするかの……つと。存外重いの」

『テメエ流何秀吉に重いもの運ばせてやがる!!』

「文句があるならさっさと自分たちの仕事終わらせる馬鹿ども!!」

作業を少しでも止めたやつらに対しそう叫んだ俺は、ため息について康太のほうへ向かう。

「どうだ?」

「……女性用制服は完成」

そういつて見せてきたのは、チャイナ服。しかも三着。

三人目が誰なのか理解した俺は、利益の計算上必要の犠牲だと解釈して「あとは当日まで保管しておけ。さっさと内装終わらせるぞ」と指示を出す。

「ミカン箱が壊れた!」

「教科書詰め込みすぎだ馬鹿! そんなの捨てて新しいダンボールもらって来い!!」

「ちよつと、暗幕の長さ足りないわよ!!」

「寸法測ったやつに直接文句言え! つうか暗幕どこで使うんだよ!」

「シーツが足りない!」

「今から買いに行け!!」

……

……

……

…

「これで、終わりだな」

『おつしやあああ!!』

内装が二時間で終わり、俺たちは歓喜に震える。

本番初日が明日とかいう状態だったので、今まで気を抜きすぎ（というか、俺が加わるまでほとんど進んでいなかった）だったというのが解るだろう。

少しばかりの解放感に浸りたいが教頭の野郎が何かしらやってきそうな予感があるので、部屋全体を見渡して考えうる限りの可能性をつぶす方法を考え、すぐさま結論を出す。

やつぱり、外貨（自分の金）を使おう。ババアにそれを承認させる。

そうでもしなきゃ、いろいろ言われそうだからな……。

そんなことを考えていると、肉体労働だけに従事することになった雄二が「まさか、お前が俺たちのことを誘導したのか？」と聞いてきた。

「ほかのことに気を取られるんじゃないっての。今は自分がやるべきことを考えてやりな」

「……その口調だと、正しいみたいだな」

「だったらどうする？ 怒るか？」

他の奴らに聞こえないように二人で話す。笑顔のまま。

「まさか。ちようどいい機会だった。翔子の手に渡ったら俺は、俺は……！」

「……自業自得のような気がするんだがな」

何やら触れてはいけないものに触れて雄二が壊れ始めたので、俺はその場から離れる。

床には死屍累々のクラスメイト達。そこには明久がなぜか青い顔をして――

「つて、なんでこいつひとり顔が蒼いんだよ！ やばいだろ絶対!!」

そういつて原因を探すために周囲を見渡したところ、姫路が畳にめり込むぐらいに土下座していたので確定。

とりあえず姫路さんの近くまで行って顔を上げてもらったところ、なんか絶望していた。

「……私、料理のセンスないんですかね……ハハハ」

「壊れるな姫路さん！ 料理は努力だ！ 味見をしたり、どう考えても混ぜる必要がな

いものは入れなければいいんだ!! 基本に忠実に! 下手な応用は時として凶器になると心に刻んでくれ!!」

「う、うう……うわああ!!」

……手遅れだった、か……!

「いや、どう考えてもあんたがとどめ刺したんじゃないの?」

「おう島田さん。明久がまた姫路さんの改善されていない料理を食べたらしくてな」

「ちよつとアキ大丈夫!? ちゃんと生きてる!?!」

「う、うう……美波……僕は、僕ハード!!」

「アキイイ!!」

なんか安っぽいドラマみたいになつたな。

冷静になった俺はとりあえずカオスな現状を放置して教室を出ようとしたところ。

こちらに向かってくる秀吉と、幼さが残る知つてる奴の声が聞こえた。

『薫はどうしてこの学校に来たのじゃ?』

『僕が勝手に呼んでる「お兄ちゃん」に会えるって聞いたからだよ。……それにしても、

秀吉さんって女っぽいね。Aクラスにいる優子さんの弟?』

『いやいや薫の方が女っぽいぞい』

『いやいや秀吉さんの方こそ』

『……』

どちらがより女っぽいかでどうやら喧嘩腰になったらしい二人。

俺としてはどっちもどっちのような気がするほど差がないと思うが、まあそこはあの二人にとつては些細なことではないのだろうと納得しておく。

とりあえずどうやって逃げたものかと思いつながら窓の方へ移動しようとしたところ、教室のドアが開いた。

「見事に屍の山となっておるの」

「うわ……あ」

「どうしたんじや薫」

あー見つかった。動こうとした足を戻しながら結論付けた俺は、とりあえずなにかされる前に近づくことにした。

「よお薫」

片手をあげて渋々さを面に出さないように注意を払い声をかける。クラスメイトを一切ふまずに。

その声で確信したのか秀吉の隣にいる身長百五十近くのあどけなさが残る、薫という外見がとてども女に見える少年は、満面の笑みを浮かべた状態で「お兄ちゃん!!」と俺の事を呼ぶ。

その瞬間、クラスメイトが一斉に、勢いよく起き上がった！

「な、なんじやいきなり！」

秀吉が驚くのも無理はないだろう。何せ息も絶え絶えだった奴らが薫の声で一斉に起き上がったのだ。しかも、ほぼ全員同じタイミングで。

さらに、セリフまで一致していた。

『お兄ちゃん、だと!?!』

ここまで欲望に忠実だと逆に尊敬したくなるのはどうしてだろうか。動くのをやめて騒ぎだしたクラスメイトの中で立ちながら考えていると、一人が秀吉たちの方へ向かった。

それはきつと声をかけたかっただけに違いない。断じてやましい気持ちなどなかった筈だ。

だが、それでも、このクラスは阻む。

『おんどれなに抜け駆けしようとしてるんだ須川ゴラアアア!!』

「いつの間にあんなの作ってたんだよ……」

クラスの大多数が声をかけようとした須川にそう叫ぶや否や、いつの間にか黒い布で全身を覆ったクラスメイト（男子）が追いかけていた。

残ったのは壊れた雄二に死にかけの明久、絶望している姫路さんに、介抱している島

田さん、そして秀吉と薫だけ。

一応セッティングしたものが壊れてないのでよかったが、あいつらの怨念はどこまで強化されるのだろうかと観察してみたくなった思いが浮かんだ。

……まあ、俺が標的になる可能性が高いけどな。

今後を予想した場合の可能性を今考えてため息をつくとき、目をぱちくりとさせてから薫は言った。

「……すごいね、このクラス」

「そうだろ。ここなら俺でも目立つことはない」

「うちのクラスじゃお兄ちゃん、とつても恐れられてるけどね。数学九百点越えでしょ？ やっぱりお兄ちゃんは頭いいなあ」

それに対し俺は「十三歳で高校二年に来たやつが何言ってるやがる」と以前と同じように凸ピンをする。

その言葉を聞いた秀吉は、案の定驚いていた。

「十三歳じゃと!?!」

「はい！ 改めて自己紹介しますと、僕の名前は上下院薫。十三歳です。クラスはBクラスで、なんとか馴染んでます」

「愛でられる対象だろうな、お前の立ち位置」

「良く分かったね、お兄ちゃん」

「……流よ、昨日と言い、今日といい、お主は一体何ものじゃ？」

「あれ、由美から聞いてないのか？」

「姉上がわしの部屋をあてがったおかげでソファで寝る羽目になったのじゃ」

よつぽど部屋の中身を見られたくないのかね…なんて思っていると、「お兄ちゃん、由美さんと会ったの？」と不満げな表情を浮かべる薫が。

俺は「成り行き」と短く答えてから、「一体何しに来たんだよ」と訊ねることにした。

「お兄ちゃんちで暮らしていい？」

「却下。素直に自分の家へ帰れ」

「まあ予想はできてたけど……」

「なにも俺にこだわる必要はないだろ」

「だって、『一人暮らしさせる位ならあの化け物と一緒に居た方がいい』ってお父さんたち言うし、化け物なんて怖がってるお父さんたち嫌いだし」

「……」

なんというか、上流社会ではやっぱり爪弾きにされているんだなと再認識できた。

それを否定している薫は感心するが、実際俺は化け物モなので何も苛立つこともなく。

薫の頭に手を乗せてなでながら、諭すように言った。

「社会で生きる時はな、好き嫌いを公言できないんだよ。好きでも出来ないことはあるし、嫌いでもやらないといけない時があるんだ」

「そうだけど……」

「だから却下な」

「え!？」

論すような発言から一転して明るく答えたところ、思つた通りに薫が驚く。

それを見て笑いが込み上げてきた俺は、「なんでも思い通りに行くと思うなよ?」と笑顔で言っておく。

その発言に呆けた薫は、しかしすぐさま笑顔になり、「やつぱりお兄ちゃんはお兄ちゃんだ! 変わつてなくて安心したよ!」と嬉しそうに言つたところ。

逆側の扉が勢いよく開いて「お兄様! 一緒に坂道を降りましょう!!」と言う声が聞こえたので、反射的に荷物のところまでダッシュして片手で取り、そのまま窓から飛び降りた。

「ああ! お兄様のいけず!!」

そんな声が聞こえた時には、俺はすでにFクラスの連中に追いかけられていた。

何とか逃げ切ったその日の夜。

何もしたくない衝動に負けず、俺はあるところに電話した。

「あ、もしもし？ おひさー。いやー急な依頼で悪いんだけどさ、頼める？ 期日は明日の学校が始まる前——七時ぐらいまでで。依頼内容は、Fクラスの教室の内装をリフォームしてほしいんだよ。あ、やっぱり無理？ 金？ 350万までなら。こんな急な依頼だからそれこみ。え、いいの？ マジで助かるわ。そうそう。とりあえずクラスの写真を転送しておいたから。そこで要望は、畳や教室の内装は全て新品同様に。テーブルは現物と似た大ききで、なおかつ清潔感があるもの。それと、見回りの先生にはちゃんと断りを入れておいたから、そこには必ず顔を出して証明してくれ。いい？ じゃ、お願いするわ」

相手が承諾してくれたので、俺は自分の通帳から消える貯金額の四割を必要上の物だと思いつながら寝た。

改装という名の変化

清涼祭初日の朝。

いつも通り一時間早く登校した俺は、雰囲気自体ががらりと変わっている学園を前にして感慨深くなりつつ教室へ向かう。

今日は財布と携帯電話ぐらいいしか持ってきていない。鞆なんて邪魔になるし、そもそも持つてくるものが俺にはない。

さあつてどうなってるかなとワクワクしながら教室前に立った俺は、すぐさま気付いた。

「…………この建物一度立て直したのかよ」

そう言わざるを得ないほど、うちのクラス、ひいてはEクラスの木造が様変わりしていた。

Eクラスは比較的まだ綺麗な方でFクラスは完全にオンボロだったが、今ではどちらも新築同様の匂いをさせている。

三百五十万出したらここまでやるのかよあいつら…と、リフォーム会社に呆れながら立て付けの良いドアを開けた先に見たものは。

自分のクラスだと見間違ふほどの清潔さを感じる、畳の上に白いテーブルとイス、その上喫茶店のようなメニューが書かれたメニュー表が、昨日配置した通りの場所に配置されているという事実。

妥協せずにやったかひよつとしてと思いながら隅っこに置いた教壇の上に置いてあつたペットボトルで抑えていた紙を読む。

『ついでだから西村先生っていう、話の分かる人に手伝つてもらつて全面改修した。金は引き落としておくから学園祭頑張れよ。 P. S. 始まつたら行くからよろしく』

「マジか……まあ、別にいいか」

俺はその紙を折りたたんでポケットに突っ込み、中身が入つたペットボトルを振り回しながら深呼吸して教室から出た。

とりあえず西村先生のところ行くか。

「失礼しまーす」

「豊橋か」

生徒指導室へ入つた俺は、扉を閉めずに挨拶をする。少し寝ていたらしい先生は目を擦りながらも「お前のせいでひどい目に遭つた」と文句を言う。

俺は教室に置いてあつたペットボトルを先生に渡して「いやー手伝つていただけであ

りがとうございます」と笑顔で礼を述べた。

それを見た先生は受け取ったペットボトルを飲みながら「あそこまでやる必要はあったのか？ あのクラスの環境は確かに最悪だと思うが」と質問してきた。

それに対し、手伝ってくれた礼として、俺は答えることにした。

「教頭が盗聴器仕掛けてたの、聞いてますか？」

「……なんだと？」

「俺が早々に見つけたんでそこから調べたんですが、どうも教頭は他校と共謀してまして」

「だったらすぐに捕まえればいいだろ」

「ところがそうはいかないんですよ。盗聴器の指紋がべったりついて教頭室を調べて中身が出たしたらイメージダウンにつながるんですよ。つまり、逮捕報道になったらこつちがピンチなんです」

「……確かに」

どういう事か理解してくれたらしい。

なら詳しくは説明しなくていいかと思った俺は、「だからこつちは逮捕報道にしない範囲で教頭を追い出すのが勝利条件になるんです。そこにイメージアップがいたらなお良いって感じで」と続けると「だから清涼祭で、と」と先生。

俺は頷いてから補足した。

「姫路さん、身体弱いのが知ってますよね？」

「ああ」

「その上彼女は風邪を引いたせいでFクラス。教育熱心な親としては転校させたいと思うでしょう」

「……まあな」

Fクラスの惨状を思い浮かべたらしく、少し間を置いて肯定する。

即答すれば楽なのに生徒思いだなと思った俺は、「でも彼女はそれは嫌だと考えられます。勉強しながらも笑顔でいるので分かりますが」とよく見ているだろう前提で話をする。

「彼女は親の意見に反対です。だから見返したかった。そんな時に清涼祭でトーナメント戦がイベントとして存在するのを知った。だから彼女は同じクラスの島田さんとエントリリーした。Fクラスでも、充分勉強ができると証明するために」

「……なるほど」

「それでも設備自体の問題は解決しない。けれど、それに関しては売り上げで買えば何とかなるといふ考えに居たり、先生も一応肯定した。これで頑張れば、設備も何とかなると考えたに違いありません」

「…それが？」

「その気持ちを利用して、俺はババアに欠陥のない腕輪に『欠陥が生じている』と言う演技を教頭の前でさせ、その演技のまま直談判に来た明久たちにトーナメント優勝を目指させることにした。設備に関しては、机とか椅子の備品類だけと限定した。高く見積もつてもそれぐらいしか二日だと出ないと俺が試算したから」

「……豊橋」

「なんですか？」

「俺はお前がただのお調子者だという認識だったが……学園長が『化け物』と言う理由が分かった」

「そりゃよかった。じゃあそのまま話を聞いといて。……で、その売り上げを出すには盗聴器をそのままにしているから雄二たちの対談が横流しになっている状態を想定しなければいけないんです。つまり、妨害工作の可能性です」

「つまり坂本たちの行動は教頭先生を釣り上げるエサだと」

「そうじゃありません。彼らの行動で学園長の弱みを握ろうとする教頭を追いつめる作戦です。雄二たちの方は副次的でしかありません」

「意外と友達思いなんだな」

「なんですかいきなり」

唐突に変なことを言われた俺は突っかかる。

それをスルーしながら、西村先生は根拠を提示した。

「豊橋。お前は彼らに何が降りかかろうとも策はあるんだろ？ あの教室にしたってそう。改装前、聞けばトーナメントに参加する坂本たちにあまり無理をさせないよう指示を出したそうだな。改装も、文句を言われたくないため、だろ。友達の否定をされたくないから」

言葉に詰まる。そんなこと言われたのが久々過ぎて。

思わず涙腺が決壊しそうだったので、俺は目を瞑って「ですかね…」と自嘲気味に言う。

「ああ。きつとそうだ」

「……そう言われるとそうかもしれないと思えてくるのが不思議ですよね」

そう言って俺は生徒指導室を出ることにした。

屋上で空を眺める為に。

報告

屋上でのんびり空を眺めていると、チラホラと登校してくる生徒の気配を感じたので伸びをしてババアのところへ行くか教室へ行くか考える。

俺のシフトは丸一日なので、今顔を出さないとババアと最終確認ができない。

かといって教室へ行かないと事情を説明しづらい。

ま、どっちが優先かってことだよなと思った俺は、迷わずに学園長室へ向かうことにした。

「はよーつす」

「また随分な挨拶じゃないか、クソガキ」

「木造の方リフォームしたからその報告。西村先生が手伝ってくれたらしいんだよね」

「……道理で真新しくなった気がしたわけだ。余計なことするんじゃないよ」

「大丈夫大丈夫。備品の方は何もやってないから」

「そう言いながら俺はソファに座って足を組む。」

盗聴器に関しては何れな話がされている感じで流れるように細工したので、校舎が変わった理由に気付かないだろう。

ババアはため息をついて、「んで？ 一体あんたは何しに来たのさね」と質問してきた。

「いやーそれがどうも面倒な組織が絡んでるらしくてね」

「面倒な組織？ 教頭と他の学校だけじゃないのかい？」

「良く考えてみればそのつながりって割と変じゃね？ なんだって自分の学校貶めようとするんだよ」

「金に目がくらんだんじゃないのかい？」

「だろうな。だけど、その金を他の学校が本当に前払いで払ったのかってなると、どうよ？」

沈黙するババア。それを見た俺は「いやーすっかり見落としていたね。化け物と言われてもミス位はするってことかね？」と言ってから、種明かしをした。

「それに気付いたのは教頭とつながっている奴の詳細な金の出入りを調べてもらった時でさ。そいつはどう足掻いても手に入れなさそうな金を持っていて、その何割かを小分けで教頭に振り込んでいる。そこで違和感に気付いた俺は、そのお金の出入りを調べさせたところ……何もなかった」

「ハア？」

「つまり、そいつが元々そのぐらゐの金を持つていたことになってるんだよ。けど何度調べてもそんな金を持つことになつた経緯がない。隠し財産だろうがなんだろうが、国税局が怪しいと思つたら調べてなければいけないのに」

「……あんた、それつて機密漏洩なんじゃないかい？」

「俺つてほら、信用されてるから」

「……」

なにやら信じられなさそうな目を向けてくるババア。

それに気付いてる俺は、肩を竦めてから続けた。

「まあぶつちやけるとネット使えば大抵の事は調べられるのよ。国税局に知り合ひいるつても確かだけど」

「……あんた一年で何してたんだい？」

「色々。で、まあその知り合ひに話を聞いたら上から圧力かかつて調べられなかつたとか言われたそうだね。そこでそんなことができるとを脳内でピックアップしてみたところ、『どう考えても俺恨まれてるなあ』と思える組織がヒット。七割でそこつて結論付けたわけ」

「なんであんたを恨むつて条件が付くんんだい？」

「本格的に始まったのは俺が転校してきた今年。だったら、俺に恨みを晴らすために学園を潰そうと考えられるからな」

「……あんたもバカさね」

「恨みなんて俺のせいじゃねえって。あいつらが勝手に恨んでるだけだよ」

そう。俺は単純にその組織に関してスルーする気でいた。にも拘らず、こちらの重要案件にかんりの確率で被せてくるからこちらも全力で応戦することになるのだ。おとなしく手を引けばいいものの、懲りずにまた別会社に手を貸してくるから悪いのだ。

社会の勝負に負けたのは会社とその組織の計画の詰めが甘いのが問題だということにそれを俺のせいみたいに見えるんだろ。うなあと考えていると、ババアがその組織について思い至ったのか、盛大にため息をついた。

「まさか、『参謀貴族』じゃないだろうね？」

「正解。あいつらマジ面倒だわ」

「つたく。あんた本当に恨まれ過ぎじゃないかい？ 少しはおとなしくしたらどうだい？」

「それは無理かな。俺社長兼学生だし。ほら、ライオンは何やるにしても全力ついでうだろ？」

「……これじゃ、財閥でも手綱は握れないだろうね。あんた、人の目気にせずにとことん

やってメンツ潰しまくったんじゃないか？」

「若気の至りだと思つて見逃してくればいいのにな。心が狭い大人はこれだから」

「ひねくれモノにとつては誰でも心が狭く見えると思うけどね」

その言葉を無視した俺は、「ともかくそこら辺の組織が計画を修正してくる可能性が無きにしても非ずだと心に留め」として。俺は今日一日喫茶店で仕事して来るから」と言つて立ち上がる。

「ふうん。そうかい。なら売り上げで元の卓袱台になるぐらい頑張りな」

「どうだろ？ それぐらいなら何とかなると思うぜ。二日共にすべて売り切るといふ条件で机といすが可能つてところだな」

「ま、どうなるか楽しみだね」

「トーナメントもな」

そう言つて俺は背を向けて学園長室から出た。

そして教室に戻つたところ、なぜかほとんどのクラスメイトが涙を流していた。

とりあえず呆気にとられている雄二の肩を叩いて訊いてみる。

「よっ。どうした雄二？」

「……あ、ああ流か。教室が一晩で大分様変わりしてたから驚いたただけだ。ある程度ク

レームが出ることを予想していたのが、見事に裏切られたって感じた」

「で、なんで横溝とか泣いてるの?」

「あいつらは『まじめに働いた俺達に神様が奇跡を起こしてくれに違いない!!』とむせび泣いてる」

……このまま黙ってようかな。俺が頼んだこと。

そうすれば深く追及されずに済むだろうと思つた俺はそのまま「ま、これで問題の一つは解決したも同然だし、雄二と明久は頑張つてトーナメント優勝してくれよ?」と言う。

それに対し雄二は胡散臭そうな目で俺を見ながら「……白々しい」と吐き捨てる。

どこまで分かつたのかなあと思いつながらその言葉に反応しないしていると、姫路さんが俺の言葉を聞きつけたらしく、「吉井君たちも参加するんですか?」と質問した。

明久はすぐさま「うん」と頷くと、今度は島田が「……誰と幸せになりに行きたいの?」と怒気を孕んだ声で質問する。

副賞かなんかか? と思いつながら、俺は雄二に訊いた。

「幸せになりに行くつてどういう事よ?」

するとあいつは苦々しく答えた。

「……今度オープンする如月ハイランドのプレオープンチケットが景品として送られる

んだよ。しかもウエディング体験とか言うおまけつきでな！」

「へえ。だから幸せに、ね」

「だから俺はどうしても優勝しなければならぬ。そしてそのチケットを処分して自由を手にするんだ!!」

そこで俺は気付いた。確か財閥のつながりって思いのほか強いよなど。

となると元妹——留美經由でプレチケットが渡される可能性もあるんじゃないかと。

ま、別にいいか。他人の心配できるほど俺も安全ってわけじゃないし。

そんなこと思いながら辺りを見渡し、ふと康太がいないことに気付いた。

「あれ。康太どこよ?」

「……ああ、ムツツリーニか」

「悪友の名前忘れるなよ」

「あやつなら今胡麻団子と飲茶の試作をしてるところじゃ。なんだかんだで須川たちと早目に来たらしいしの」

「ふ〜ん」

「……出来た」

なんというか、とても素晴らしいタイミングで現れたのだが、明久は答えに窮している。

とりあえず一旦落ち着かせたいので、俺は女性陣に「康太が試作品持ってきたから食べて落ち着け」と言っておく。

康太が持ってきたものを見た二人は渋々と言った感じで従って飲茶を飲んだ瞬間、とても穏やかな顔をした。

「ふむ。自負するだけあつて良さそうだな」

「だな。これなら心配なさそうだ」

「じゃな」

「そうだね」

そんな感じで確信しているとこれから始めますというアナウンスがあつたので、俺は手を打ち鳴らして全員の視線を集め、「これから二日間、俺達は備品奪還のために社畜のように働く！ 弱音、反論は一切聞かないからそのつもりでシフト通りに動けテメェら!!」と言うと、全員の目が真剣になって『オオー!!』と声を張り上げた。

さあ妨害すならしてみろ。その瞬間俺が全力で破滅させてやる!!

「お兄様！ 今日のお昼一緒に回りませんか！」

「は？ 無理無理。俺今日ずっとここだから」

「そ、そんな……!!」

た。メイド服を着た留美がここまで来てそんなことを言ってきたのでさっさと追いつき返した。

やり過ぎて、予想外

清涼祭初日が始まって少し経過した。

人の流れというのとはそれほど多いものではない。にも拘らずうちのクラスは――

「四番テーブルに胡麻団子と飲茶二つずつ!!」

「六番に肉まん四つ!!」

「おい誰だオーダーミスった奴! 流につるし上げられるぞ!!」

「三番上がりだ! 早く持っていけ!!」

――思いの外忙しなく動き回っていた。

事の起こりは数分前。明久と雄二が言葉を濁してトーナメントへ行つてすぐ。

康太が俺を呼んだので行つてみると、なぜか喫茶店のウェイターの制服が。

「これを着ろと?」

「…話が早くて助かる」

まあ売り上げ伸ばすのに必死なのだろうとピッタリなサイズであることに驚きを隠せない制服を着た俺は、そのままホールへ。

それに対応していたらFクラスの教室の綺麗さも相まってからもの見事に拡散されたようで……いまじや満席になっている。さすがに行列はないが。

「これはさすがに予想外だ！」

「そうじゃの!! 島田たちも行つてしまつたし！」

今はシフト勢が一丸となつて客の注文をさばききつている。ホールが俺と秀吉と他数名。厨房班が須川を中心に数名。

一般はもとより、教室に驚いた生徒がそのまま入ってくるケースが多く、売り上げはこのままいったら本当に机と椅子へ到達するんじゃないかと思えてくる。

だが気が抜けない。どこで妨害が入ってくるのかわからない。受け身で行かなければいけない以上、警戒が緩むと大変だ。

そんなことを考えながらもきちつと対応して客を回転させていると、「なんだここ!? 本当にFクラスか!?!」と叫ぶ声が。

客かと思ひながら視線を向けると、同学年で見たことない二人組。となると上か下だな。

なんか坊主とモヒカンがいるなど思ひながらも満席なので「すいません。どのくらいかかるか知りませんが、お待ちいただくか、またお時間を見て来店してくれませんか?」と懇切丁寧をお願いする。

それに対しその二人は「んなことよりこの教室は一体なんだよ!」「そうだ滅茶苦茶汚かつたじゃねえか!!」と喚きだす。

時間をもつたに上にかいつら妨害しに来ただけかと思つた俺は、二人に耳打ちした。

「……どうせ教頭の独りよがりの暴走だろ? そんなのに付き合うなんて、お前ら馬鹿だな」

「!!?」

驚きと血の気の引いた顔を同時に二人がする。それを少し距離を置いた俺は笑顔で「では、またの来店をお待ちしております」と言い渡す。

それを聞いたその二人は怖いものを見るような顔で慌てて逃げて行つた。

……ふむ。教頭は切り捨てられたかな?

そんな予想をしながらも、俺は警戒を緩めずなおかつ普通に接客に努めた。

「ただいま……つて、なにこれ!?!」

「どうした……つて、おいおい」

「固まつてるなお前ら勝つても負けてもさっさと手伝え!!」

「う、うん! (お、おう!)」

先程よりさらに忙しに拍車がかかった状態で戻って来た明久と雄二。これ幸いと
思った俺は怒鳴って手伝わせることにした。

急いで手伝い始めた二人。だが雄二は俺に近づいて「…妨害は？」と訊いてきた。

「ねえよ。する前に帰りやがった」

「そうか。なら良かった」

「ほら働け働け！ 負けた以外の報告はいらねえから働け!!」

「そこは普通勝った報告以外だろ!?!」

うるせえいいからオーダー聞いて来いと一蹴しながらも俺は別なテーブルへ向かう。

「ご注文は？」

「……それじゃ、飲茶と胡麻団子一つずつ」

「かしこまりました」

そう言つて素早くメモに注文された品を書いた俺はそのまま厨房に持つていき叫んだ。

「六番テーブル飲茶と胡麻団子一つずつ!!」

「…了解した!!」

そしてホールへ戻ると、秀吉が六番テーブルをちらつと見てから俺に小声で訊いてきた。

「……あそこのテーブルにいる女子、ずいぶん粘るの」

「ああ。始まってからずっとだ。一人で三千円近く使ってるんじゃないか？」

「それはまたすごいのお」

そう言つて秀吉はそのまま厨房へ消える。

俺はというと、六番テーブルにいる女性に視線を向けていた。

金髪のショートだが、髪の毛が跳ねているのを機にしないたちなのかそのまま所々跳ねているが手入れはしているのか艶がありそう。

身長は高くなく、一瞬中学生と見間違ひになりそうなほど幼い印象を受ける。

表情を面に出さないうちながらも美人度のレベルで行ったら高い…そんな女性が一人で

甘味と中国茶を食つていた。

……まあ色々と思うところはあるぜ？ さつさとほかのところ行けよとか回転率悪

い一端はお前なんだけどとか。

けれどまあ、この女性の食べる姿がどうにも他のお客さんを駆り立てるようで——あとうちのクラスの男子連中も必要以上に頑張る——いいこともあるといえはある。

出来れば行列は避けたいんだよなあと思ひながらどうにかこうにか回つてみると、明久が「姫路さん達も手伝つて!!」と普段とは考えられなさそうなほど必死な声を出す。

それを聞いた二人はすぐさま手伝いだしたので、とりあえず一人あたりの負担は軽く

なったなと息を吐いて気合を入れなおした。

「俺達二回戦行ってくるわ！」

「行つて来い！ 負けんなよ!!」

「分かつてるよ!!」

気合十分な声を聴きながらも、俺自身働くのを忘れない。

秀吉たちは適度に休みを入れているが、フルタイムスケジュールの俺にそんなことは関係ない。

久し振りに駆け回った時と似たような状況を体感してるなど実感しながらも問題なく対応していると、六番テーブルの人が席を立った。

基本的に会計するのは俺なので（金銭面で一番信用できると言われ）立つのが分かった瞬間にはそちらへ向かう。

「お会計ですか？」

「……うん」

頷いた。

ようやくかと思つた俺はすぐさま厨房に戻つて六番テーブルの注文書の束を持ってその子の近くへ行き、「合計で三千七百円になります」と告げると「……これで」と万札

を渡してきた。

偽札ではなさそうだなと思った俺は受け取ってお釣りを渡す。

そのまま「ありがとうございます」というと、その子が漏らした。

「……豊橋流。今回の件に我々は見切りをつけている。また別の機会で」

「!!」

驚いて動けない俺。対し彼女はそのまま綺麗な足取りで教室を出て行く。

おいおいおい……あんな子が『参謀貴族』の一員つか。

実態自体がつかめないとされている組織に属している人と遭遇した事に対しての驚きが覚めたのは、秀吉に声をかけられた時だった。

つうか、わざわざ声をかけてくるなんて……敵に塩を送る形でいいのだろうかあの組織は？

我に戻った俺がそんなことをふと思ったのは——明久が戻って来てすぐだった。

どうやら根本と小山（Ｃクラス代表）ペアに交渉で勝ちを譲ってもらったらしい。

何かが終わったなど俺は悟った。

ちよつとトラブル

明久曰く雄二はトイレへ行ってから戻ってくるという事だが、今はそんなことを気にする余裕なんてない。

全員が一心不乱に来店してくるお客さんを捌かないと、とても間に合わない。シフトは何とか回っているが、あと数倍のスピードで客が流れてきたら組んだシフトが意味をなさなくなりそうだ。

「……そういえば、流って休んでるの？ 戻ってくるたびに接客してるんだけど……」

「ああ心配するならさっさと体を動かさせ頭を使え手を動かして少しでも回転率を上げろ」

「わ、分かった！」

話し掛けて来た明久を地を這うような声で追い返した俺はそのまま会計をしてお客さんを見送って座って待っているお客さんのところへ向かう。

そして注文を取り、厨房に回し、会計を済ませ……の繰り返しを百ぐらいやったんじゃないかなと思う時、廊下から雄二の声が聞こえた。

かなり呑気に歩きながら子供と喋っているようなので、たまらず俺は廊下に顔を出し

て叫んだ。

「オラあ雄二い！ 次も勝てやあ!!」

「普通そこは遅れてきたことに對する注意だろ!？」

「理由があるからよし！」

「……お前も変わったな」

と、雄二の隣にいた小さい女の子——クラス内の誰かに似てる気がする——が雄二に「あの人すごい汗かいてますけど、坂本さんは大丈夫ですか？」と訊いていた。

時間が惜しい俺はすぐさま引つ込み、慌てている明久の下へ行つて「……注文ミスつたら屋上から好きな人の名前を叫ばせる」と小声で脅す。

それを聞いてすぐさま落ち着きを取り戻したようで、先程とは比べ物にならないほどの俊敏さを見せる。

俺も頑張ろうかねと思ひながら、在庫があるか頭の中で確認した。

「バカなお兄ちゃん！ 葉月、会いに来ました!!」

「ぐふっ……あ、ありがと。でもごめんね。少し忙しくて」

雄二が戻ってきたと同時に葉月と名乗った少女が明久めがけて突進する。本人は抱きつきのつもりだろうが、頭が見事に明久の鳩尾にヒットしている。

明久が痛がりながらもその表情をささずきやんわりと断っているのを聞いた俺は、「ほら休憩しろ明久」と言ってる。

「え？　でも大丈夫なの？」

「雄二をギリギリまで使い潰す」「おい」

「そっかー。それなら大丈夫だね」

「へろへろの状態で俺に戦えと!？」

「ほら行って来い」

「分かった」

そう言う明久は葉月という少女を連れて教室を出たところ、「ウチの妹に何手を出してるのよおお!!」と島田さんの叫び声とともに明久のうめき声が。

そっかー誰かに似てると思ったら島田さんの妹かーと思いつつ騒然となった教室内に「勘違いによる一種の修羅場になっております。皆さんもこのようなことにならないよう、お気を付け下さい」と言っで一礼。

我に返ったお客さんたちが思うところがあるのか気まずそうな顔をしながらも食べているので、あ、これヤバイと思つた俺は雄二に「廊下行って止めて来い」と指示を出してからこの場でできることを考える。

この場にいるのはお客さんと厨房にいる奴らとホールの奴ら。廊下は論外として、何

か盛り上げることができるのは……。

そこまで考えて何個か思い浮かんだ俺は、その一つとして厨房に入って中国茶の入ったポット（須川提供）を「悪いけど持つてくぞ」と断りを入れて持ち出してホールへ行き、近くのお客さんにそのポットを膝だけで支えて注いでおく。

「うおっ！」

驚くお客さんに、俺は最大限の笑顔で「サービスでございます」と言つてポットを押し上げ手でキャッチし、その足で別なテーブルへ。

次のお客さんに対しては手の甲に乗せて綺麗に注いでいき、他のテーブルにも順次アクロバットな演技を見せる。

とはいったものの単純にバランス感覚がモノを言う淹れ方なのだが、お客さんはとても驚いていた。後、うちのクラスの奴らも。

ポット片手に腰を曲げて頭を下げた俺は、「ではごゆっくり」と言つて厨房に戻り、ポットを戻す。

「ちよつとサービスで振る舞ってきた」

「……仕方ない」

康太はそう言うのとポットを須川に渡し、須川はそれに予備のお茶を入れる。

それを見た俺は、大丈夫そうだなと思いいホールへ戻ることにした。

「ん？ 雄二は？」

「明久と姫路と島田と一緒に行きおったぞ？」

「ふ〜ん」

先程の行動が功を奏したのか相変わらず客足が変わらない教室内を回りながらいい人間についてつぶやくと、近くにいた秀吉が答えてくれた。

俺はそれについて簡単に相槌を打ちながら接客をすると、「お兄様！」と叫び声が聞こえたので視線をちらつと向け、秀吉の肩を叩く。

「秀吉よろしく」

「いや流が行けばよかろう。わしは注文を厨房へ届けねばならんからの」

「……チツ」

「どんだけ嫌なんじゃお主は!？」

やっぱり無理かと思つた俺は空いてるテーブルを探したところ、一テーブルだけあつたのでため息をついて入口を陣取っている元妹——留美の前へ移動する。

「何名様ですか？」

「留美以外に誰か見えるんですかお兄様!」

「……あ、流様。三名様です」

「来ちやつたよお兄さん」

案の定予想できる組み合わせが来た。というか、そのうち来るんじゃないかと思っていた。

それを面に出さず、俺は「三名様ですね。ではこちらにどうぞ」と席に案内する。

「前来た時よりすごい綺麗になってるね、ここ」

「……うちのクラスに来た三年生が言ってくれたこととは大違いです」

「お兄様に抜かりなんてありませんわ!」

……。どうやら、うちのクラスの妨害工作をしようとして逆に宣伝になっているようだ。後でその先輩方には何か送っておかないとな。何がいいかな。六法全書? 逮捕状? それとも偽の大学推薦書? 偽証罪で捕まるのは嫌だから……無難にその二人の親に手紙を送ればいいのか。やろうとしていたことに対するお礼を含めて。

「こちらです」

そう言って俺はその場を立ち去る。今更だが、留美と由美はメイド服を着ており、薫に関してはドレスだった。

あとは他の奴らにやってもらおう。そう思った俺は近くの席の人が呼んだのでそっちへ向かった。

知り合い来店

「お兄様！ 決まりましたわ!!」

「——と言っておるのに行かぬのか？」

「面倒」

「……そこまで言い切ると清々しく感じるのはなぜじゃろうな？」

今は留美たちの席に近寄らない範囲で活動している俺。正直鬱陶しいことこの上ないが、近くにいるというのに何をそんなに叫んで指名するのだろうと考えるが投げ捨てる。

留美たちを除けば客の回転率は変わらず。正直あの三人のところへ自動的にいく男子がいるというのに無視するという暴挙のせいであちが止まっているだけ。

その矛先が俺に向かってくるんだからやめてほしいよな……!!

「流よ！ お主何を折ろうとおるんじゃ!？」

「なにつて……ただのペンだろ」

「それは万年筆じゃ！ ミシミシいっとるぞ!!」

「おっと」

秀吉に言われ我に返った俺は見るも無残な形になりかけている万年筆をポケットに入れて新しいペン——今度はボールペンをどこからともなく取り出す。

「結構気に入ってたんだけどなーあれ」

「……どうでもいいが、早く行ってくれぬか？」

「まあ逝ってくるか。しゃあない。さっさと帰ってもらおう」

これ以上あいつらに居座られるのも俺の精神状態に悪いので、ここは秀吉の意見に従おう。

そう思った俺は、周りが近づいてない席に向かい「ご注文は？」と営業スマイルで訊ねる。

「お兄様で！」

「そんなものは扱っておりません」

「私達飲茶でいいですよ、流様」

「飲茶三つでお願いね、お兄ちゃん」

「かしこまりました」

「ああ待ってくださいいお兄様！　せめて、そのお姿を撮らせ……」

最後まで聞く前に、俺は厨房へ逃げた。

「とりあえず飲茶三つ」

「あいよー!」

威勢のいい声で反応してくる須川に俺は注文書を渡し、ホールに戻るかどうか悩む。戻ったら留美たちの相手をしなければいけないのが面倒。だが戻らなかつたら会計ができる奴がない。

俺ってこういう星の下に生まれたのかね…とげんりしながら大人しくホールへ戻ると、明久がメイド服を着て戻ってきていた。客は気付いておらず、むしろまだ女子がいたのかという認識のようだ。

ただ、秀吉と留美たちは首を傾げていた。

とりあえず雄二も働いていたので、俺は素早く移動して質問した。

「雄二」

「うおっ!　なんだ流か…:…どうした?」

「早くね?　一体どうして明久があんな恰好を?」

そう矢継ぎ早に質問すると、雄二は頬を掻きながら答えた。

「あのまま昼食食べるかって話になってAクラスに行く羽目になってな。したらあの常夏コンビあることない事言いふらして自滅してたから復讐した時の服装。三回戦は相手が食中毒で棄権」

「……ああそう」

何言われるかたまったもんじゃないなと思いつつながら俺は雄二から離れ、接客することにした。

「お会計お願いします、流様」

「少々お待ちください」

四回戦で雄二達が消えたのと同時に席を立つ由美がそんなことを言ってきたので、俺はレジと化している入口へ行き、伝票の値段を電卓で合計する。暗算でも出来るが、客に文句を言われたくないので使っている。

「つか由美と留美も参加してるんだっけ確か」と対戦表を思い浮かべながら「千五百円になります」と目を合わせずに告げる。

「カード」

「あの学校の文化祭じゃねえんだから使えるわけねえだろ」

「あ、じゃあ僕が出しておくよ」

薫がそう言って財布を取り出して千五百円を出す。

お釣りを出さないというのはこう繁盛している時ありがたいなと思いつつ「ありがとうございました」と頭を下げて見送ったつもりだったが、すぐさま頭を上げてみるとま

だそこにいた。

しかも、一人興奮している妹が。

「お、お兄様が私に頭を下げて!! ああ、なんて嬉しい事なのでしょう!」
営業スマイルはすぐさま脱ぎ捨てた。

「お前ら不戦敗になつていいのか?」

「……あ。留美、行きましよう?」

「えへへへへ……お兄様の給仕服姿……へへへへ」

「あ、由美さん。僕が押していきます」

「すみません、薫君」

流れるような連携でトリップ状態の留美を教室の外へ運び出す二人。

それを俺は見送ることもせず、次の客の対応をしていた。

それから少しして。

「いらつしやいま——」

「十四名だけだよ、大丈夫か?」

「少々お待ちください」

聞き覚えのある声に遂に来たかと思つていると、秀吉がこちらに来て耳打ちしてき

た。

「十四名だそうじゃが……この状況では無理じやろ。待つてもらおうかの?」

未だ満席で次々と注文が来るお蔭で明日の在庫までなくなっているという状況。このままいくと今日一日の売り上げで机といすが買える計算になる。

さすがに予想外だ……と思いいながら、「その連中なら俺の知り合いだから事情を説明すれば大丈夫だ。適当に時間を潰して頃合いを見てくるだろ」と言っておく。

「そうなのか?」

「ああ。俺の名前を出してもらって構わないぜ」

「ふむ分かった。その通りにするかの」

そう言つて秀吉が戻つたのでそちらの方を見ると、案の定どちらかというと屈強という言葉が似合う男達が入り口をふさいでいた。

この人達は昨日俺が電話で頼み込んだ人たち——つまり、建築関係。

とはいつてもこの人達、正規の工期でできない建築物関係しかやらないし値段が若干高いので知られていない集団。

なんで俺が知っているのかというと、まあ何度も仕事を頼んだり手伝つたりしたからだな。もちろん会社を経営する前だ。

「そうか。なら仕方ねえ。お前ら、ちよつと時間つぶしに行くぞ」

『ハイ！』

そう言つてぞろぞろと消えていったようだ。どんな説明をしたか知らないが、悪いなと罪悪感を覚えてしまう。

その数分後、今度は李里香さんを中心に会社の重役の人たちが来たのを俺は目撃した。

俺が行こうと思つたら、横溝がダツシユで彼女達の目の前に行つて「な、何名様ですか!？」と緊張した声で張り上げる。

仕方がないので他のテーブルの注文を取りながらまあ無理もねえかと思つていると、「気にしないでいいわよ。満席のようだから」と言つて戻つてしまった。

名残惜しそうな横溝の姿が見なくても目に浮かぶが、それとこれとは別なので、俺は入り口に突つ立っているそいつを厨房に引つ張つて放り投げた。

その後F F F団の格好をした奴ら（シフト空いてる奴だと思われる）が横溝を回収し、どこかへ行つてしまった。

あー戦力が一人減つたなーと思ひながらため息をついた俺は、なぜかボロボロの明久が手伝つていることを気にせずホールで働き続けることにした。

誘拐

「そういや流」

「あ、どつたの雄二」

忙しいという言葉が似合うようなこの状況の中、雄二は俺に近づいて耳打ちしてきた。

「明久が襲われそうになった。在庫の補充へ向かった時に」

「ふくん。そういや教頭が明久に話しかけてたな」

「そうか……やっぱり」

何やら考え込みそうだったので、俺は雄二を小突く。

「んなことよりさっさと仕事仕事。準決勝前まできちつと馬車馬の如く働かしてやる」

「本当に容赦ないな!？」

そう言いながらもこなししていくのを見た俺はそういや飯食べてないなと思いつつも明日の分の在庫残量が六分の一しかないなと思いつつ時間が午後三時に差し掛かるうとしている現状にため息をついた。

「おい雄二。準決勝だぞ」

「ん？ もうそんな時間か。明久、そろそろ行くぞ」

「うん」

そう言つて客の間を縫う様に移動する二人。その間クラスメイトが声を――
『さつさと負けてテメエらこつち手伝え!!』

――うん。ある意味このクラスらしい。

「が、頑張つてください！」

「頑張んなさいよ！」

「頑張ってくださいですバカなお兄ちゃん！」

うん。まあこつちは当然か。

特に俺は言うことないので、普通に接客していた。

……しつかしまあ、下手な手段しか使えないようだな、支援がないと。

誰とは言わないが。

「次の相手は誰じゃったかの？」

「留美と由美」

「なぜ即答できるんじやお主は……」

だんだん慣れてきたのかこの忙しい中でも雑談が出来る様になつた秀吉が話しかけ

てきたので即答すると、驚かれた。

これぐらい対戦表見れば察することが出来るだろうと思っただが、秀吉は見てなかったなと思ひ、説明した。

「あの二人はトーナメントの同じグループだから勝ち上がると準決勝で当たる。途中霧島と木下姉が障害になるだろうが、ぶっちゃけあの二人が点数で負けることはない。腕輪の能力も分かってないだろうが、それでもあの二人が負けることはないだろ」

「どうしてそう言い切れるんじや?」

「いらつしやいませ。何名様で? あちらの席へどうぞ……あの二人は元居た学園でも成績トップクラスだからな。あの、金持ちの道楽で作られた天才たちの学園でな」

「……そんな学校があるのか?」

「まあ根拠としてはそれ位だ。あいつらが勝てる確率は、いくら保健体育だとしても二割だな……正攻法ならば」

「む。正攻法なら? だったらどうすれば勝てるんじや?」

秀吉が俺の言い方に訝しんだようだが俺には雄二達が負ける姿が浮かばないので、勝てる方法を言った。

「生贄を出せば勝てる。ぶっちゃけ八百長だな」

「……なんというか、いささか卑怯なやり方じやの」

「試召戦争だど何でもやってたんだ。卑怯汚いなんて言ってられんさ。どうせ生贄は俺だし」

「……ああ、なるほどのお」

合点がいつてくれたようで何より。そう思った俺は、「ほら働け働け」と秀吉を急かした。

雄二達が準決勝に向かってから、人がまばらになった。

それはそうだ。もうすぐ一日目が終わってしまふから。

二日目の在庫まで無くなりそうになるのはさすがに予想外だったと思いつながらお客さんが出て行ったのを見送った俺は、今現在こちらで働いているメンバーを思い浮かべながらそろそろ始まったかなと雄二達の心配もする。

段々暇になるだろうなと思いつながら息を吐くと、「お、空いてる空いてる」と声が。

お、やっぱり来たかと思つた俺は入り口に立つて「いらっしやいませ」という。

「おう流。十四大丈夫だろ？」

「ええ。かなり空いてるので四人一グループで適当にばらけてください」

「そうか。……お前ら、適当に座れ」

『うっす』

そのまま一斉に教室に入り、言われた通りばらける。

その接客をしていると、続いて「ようやく空いてきたようですね…」と李里香さんの声が。

注文を聞き終えた俺はその足でそのまま向かう。

「いらつしやいませ。何名様ですか？」

「六名ですしや……豊橋さん」

空気を察したのかそれとも現状を思い出したのか俺の事を苗字で呼んだ。

まあそれでもアウトなんだがという視線を向けながら俺は席に案内し、そのまま厨房へ向かう。

「これ注文」

「おう……なんかすごい一気に気が抜けるな」

「頑張つて最後まで持たせろ。明日もあるぞ」

「だよなあ」

そう言いながら須川は注文票を受け取る。それをちらつと見てから厨房班に指示を出す。

割と須川つて雄二に似てるよな……と思いつながらホールに戻ると、李里香さんグループにホール班の集団が。

もうどうなつても知らない俺は（この時の俺は学生であり社長ではないので）構わず他のテーブルへ向かう。

「おう流。いや、若と言つた方がいいか？」

「冗談じゃありませんよ垣谷さん」

「昔みたいに呼び捨てで構わねえよ」

そう言つて俺の背中を叩く十四人の集団のリーダーで社長の垣谷さん。

豪快に笑う彼につられて他の人たちも笑う。それを見た俺は苦笑せざるを得ない。

その際囲まれている場所から視線を感じたが、俺は無視した。

と、そんな時だ。

「大変だ流！ 姫路や翔子、島田にちみっこ、それに鈴鹿や妃や秀吉が誘拐された!!」

そんなことを叫びながら雄二が扉を開けてきたのは。

現在いるお客は俺の知り合いたち。そのタイミミングというのは何とも幸運なことだろうが、状況としては最悪だろう。

が、静まった教室内で、俺はただ一人普通に言った。

「ああそう」

「だから………つて、お前軽いな!?!」

「いや姫路さん達だけなら不味いかなつて思ったけど、他に財閥の娘二人誘拐されたと

聞いたらくとくに不安もないと判断した」

「それはどういう意味だよ!」

「言葉通りの意味だよ。あの二人が誘拐された回数は数知れないから、ぶっちゃけ自力で脱出させるように鍛えた。だから、どこだろうがケロッとした表情で戻ってくる」

「分かったか? というと、雄二はどこか理解し辛そうな顔をしてたので、ため息を吐いて雄二の肩に手を置いて耳打ちした。

「仕方ねえ。霧島の事が心配なお前のために一肌脱ぐか」

「ば、バカ野郎! お、俺がいつ翔子の心配してるんだ!」

「動揺が隠せてないぞ……つうわけだ。ちよつくら行つてくるからお前達で後回してくれ。多分客は来ないだろうから、会計の時は少し待つてもらおうようにしてくれ」

『御託はいいから我らが女神たちを連れ戻して来い!!』

……。このクラスなんか末期症状出てる気がするな。

送り出された時のセリフにそんな感想を抱いた俺は、「さつきと行くぞ。どうせ康太辺りが先に向かつて明久は教室前で待っているんだろ?」と雄二に言いながら歩き出すと、「……一瞬で判断するってことはお前……」と呟きながらついてきたので、ここまでヒント与えりや最後まで気付くかこいつならと考えつつ案の定教室前で慌てていた明久を小突いて「そんじゃ行くか」と言った。

「ここまで強硬手段に出るってのは、よっぽど焦ってるのかね……。」

そこからやつてきましたカラオケ店。どうやら康太が潜入し、部屋に盗聴器を置いてきたらしい。で、俺達は部屋から少し離れた場所にいる。

「しかし康太の情報収集能力や潜入能力はすごいな……正直言つて裏社会じゃ引く手数多だろうな」

「すぐそこに直結できるお前の人生に何があつた」

「山あり谷あり。ま、一年の間だけど」

そんな会話をしながら盗聴器から聞こえる音声を聞いていると、なんとまあテンプレな会話が。

雄二が明久を制止させているが、まあ長くは持たないだろう。

とか思っていたら明久が飛び出してその部屋に特攻を仕掛けた。

『美波に手を出すな!』

「やれやれ行つちまいやがつて」

「ま、そこがあいつのいいところじゃね? お前も霧島助けに行けよ」

「うつせ！　そう言うお前こそ助けてやれよ!!」

「へいへい」

明久が殴られている音が聞こえたので面倒だなど思いながら向かったところ、狭い部屋で雄二が暴れまわっていた。

手助けいらないなど思いながら逃げようとしてきた奴らにアッパーをノーモーショで打ち込んでノックダウンさせてすぐ終了。

入ってわずか十秒ぐらいで制圧完了した現状対し未だ暴れている雄二を見た俺は、霧島の言動を少し矯正した方がいい気がしたなど思いつつ知り合いの警察官の番号に電話を掛けた。

ちなみに。

「なんでお前ら二人で制圧しなかったの？」

「まあお兄様！　留美がか弱い女性だというのをお忘れですか!？」

「流様。デリカシーがいつも足りませんね」

……なんで俺が怒られたんだ？

その二。

「秀吉。お前男服なのに誘拐されるなんて……薫と似てるな」
「……もはや何も言えぬのじゃ」

学園長説明す

誘拐事件はすぐさま解決し、公にならないよう色々と手を回した結果一息ついたところには全員が息を飲んでいたという珍事を目の当たりにした。

まあ明久や姫路さんや島田さん、秀吉に康太は分かるとして、どうして雄二や霧島、留美に由美は驚いているのだろうか。

そんな疑問が顔に出ていたのか、雄二がため息をついて答えた。

「そりやお前、警察官に電話したと思ったら今度はマスコミの連中に電話してさらに警視總監だろ？ お前本当に何やってたんだよ？」

「別に？ このぐらい普通だろ。なあ？」

「留美でも警視總監ぐらいですね」

「私も、ですね」

「……流の交友関係は異常」

「バカなっ!？」

「お前が驚くのか!？」

そんなことをやりながら歩いてきたが、ふとおいてきた人たちを思い出したので、「悪

い。俺さっさと教室戻るから!!」と言って返事を待たずに走った。
あの二人から逃げたかったというのもある。

で、李里香さん達の会計も終わり。

誘拐された人達（Aクラスの奴らは制服に着替え）と俺、明久、雄二、康太、ついでに来た薫はFクラスである人物を待っていた。

「ねえ雄二。一体誰を待ってるのさ？」

「ババア」

「いや、仮にも学園の長なんだからそれはどうなの？」

「その前にババア＝学園長と言う式に首を傾げぬか」

「(コクコク)」

一番年老いてるの学園の中じゃ学園長だけだから分かりやすいんだけどな。四人の会話を聞いてそう思ったが言わず、俺はさりげなく横に来ていた留美に視線を向けず呟いた。

「失せろ」

「まあお兄様！ 照れ隠しなさらなくてください！ 留美の事を助けに来て下さったのに!!」

「アレは今後の学園の存続のために仕方なくだ。あれ位なら二人で簡単に終わらせて戻って来れただろうに」

「まだそんなことをおっしやられているんですか？ 留美はあの時の現状を正しく把握して大人しくしていたのです」

「何がだ。どうせ俺が助けに来てくれるシチュエーションを逃したくなかっただけだろ」

「それはもちろんありましたわ。ですが、留美はこれを引き起こした犯人の証拠を持っているんですよ？」

そう言つて俺の前に来てウィンクする留美。が、そんな情報はもはや不要。分かったことの上、考えうる限りの可能性を悉く外してくれないでいたので証拠は出揃っている。

それを言うのは酷だろうと考えた俺は、「それはすごいな」と本気で驚いた演技をする。

それを信じた留美は機嫌をよくして「ですから、お兄様が助けしてくれるまでおとなしくしていたのです。そうすれば財閥の名を出さずにすんなりと行き、そのまま学園生活へ戻れますから」と締めたのを聞いて、俺は今度こそ本気で驚いた。

「お前、少しは変わったな」

「留美はいつまでもあの頃のままでありませんよ。お兄様の気持ち以外は」

そう言つて優しく微笑む留美。俺だけに見せたその表情はどこか昔と重なり、笑顔だけは変わらないつてかと思つた。

そのまま見詰め合つていると急に留美の顔が真っ赤になり、「で、では留美は先に失礼させていただきます！ 普段通りに帰らないといらぬ詮索を受けそうなので」と早口で言つてからダツシユで教室を出た。

その行動を見た由美も思い出したように「翔子さん。明日お話良いですか？」と断つてから教室を出る。

財閥も大変だと留美の行動の意味を知らながらも黙つてしていると、不意にカッターナイフが飛んできたので指二本で止める。

「ぶっそうだな康太」

「……リア充滅殺」

「その通りだ流！ 君みたいなハーレム野郎、僕は絶対に許さない!!」

「だったら明久もそうだろ？」

「そんな訳あるか！」

「……自分で言つて悲しくないのか？」

「か、悲しくなんてない!!」

「やれやれ。相変わらず騒々しいクソガキどもだね」

「やつと来やがったかババア」

「ババア言うんじゃないよ坂本。あんたが呼び出したんだろうに」

「そう言いながら教室に入ってきたのはババア。真新しくなった教室を見渡しながら「スゴイさね、まったくと」を呟く。

それは俺以外聞いてなかったようで、他の奴らは雄二の方を向いてどういう事か聞いていた。

「んで？ あたしになんか用かい？」

「ああ。あんたがちゃんとしなかったせいで誘拐まで起きやがった。その文句を言いな」

『!?!』

驚く面々の中で驚いていないババアは「……なんだって？」と耳を疑っていた。

「だから、あんたがしっかりとやらなかったおかげで妨害工作が誘拐にまで発展したんだよ」

「ねえ雄二。どういう事？」

「そうじゃ。ちゃんと説明せい」

「一体どういう事ですか坂本君？」

「そうよ。アキの頭に分かるように説明しなさいよ」

「さらつとけなさないでよ！」

明久の抗議を無視し、雄二は説明した。

「姫路たちには何も言わなかったが、俺と明久はこのトーナメントに教室の改修を条件に参加した。優勝賞品のペアチケットを回収するという目標でな」

「……それであそこまで必死だったの？」

「ああ。だから色々と手を回したが、その最初の参加する時に俺は提案したよな？ 教

科はこちらが指定すると」

「…そんなこともあったねえ」

「でも、それがどうしたのさ雄二？」

「バカ久少しは考えろ」

「なんだと！」

そう言つて雄二に明久がつかみかかろうとしたところ、霧島と姫路さん、それに薫が同時に声を上げた。

「「あ」」

「分かったの、瑞樹？」

「分かったのか、薫？」

「はい」

「つまり雄二さんの提案を学園長が応じた場合、他の協力者——つまり、雄二さんと明久さん以外のペアに同じことを頼んでいる可能性が消えるんです」

「……その可能性が消えると、雄二達にどうしても勝ってもらわなければならないということになる」

「そう考えるとペアチケットなんてものの回収に俺達を使う必要性がない。となると考えられる可能性は一つ」

そう言つて人差し指を突き立て数字の1を作つてから答えを言つた。

「俺達に回収してほしかったのは副賞の腕輪、と言うことになる」

「……なるほど」

「で、どうなんだババア?」

明久が神妙に頷いているのを尻目に雄二が訊ねると、ババアは観念したようにつぶやいた。

「……流石は腐つても神童。衰えちやいないようだね」

「つてことは当たつてるんだな?」

確認すると、ババアは頭を下げて「すまなかつたね」と言つてきた。

驚く俺以外の奴ら。それに対し、ババアは淡々と進めていった。

「重大な欠陥を抱えたまま発表しなければいけないことをネタにこの学園を潰そうとしている奴がいてね、そいつに渡さないためにあんた達に託してみたんだ。…だけど、まさかそこまであからさまにやるとはねえ」

「予想位でしなかつたのかよ」

「窮鼠猫を噛むとはこの事かねえ。まさかここまで馬鹿だったとはあたしも思わなかつたんだよ」

ちなみに。ババアのいう事は半分ウソである。

誘拐騒ぎまで起こる可能性をババアは考慮していないだけで、そもそも欠陥のない腕輪だから弱みの部分なんてない。

誘拐と言うシナリオは予想できた中だが、ババアには言っていないので本人にとっては驚くことだというのは分かっている。

演技上手いな婆さんなんて思いながら傍観していると、「意地でも常夏コンビは勝とうとする。が、俺達は絶対に負けないさ」と雄二が締めた。

で、全員が帰った中。

俺は雄二に呼び止められていた。

「そーいや流。今日の売り上げは？」

「机といたすが買えるぞ。明日の分も底を尽きてるけど」

「そうか。須川たちには言ったのか？」

「メールで教えた……って、こんなこと聞きたいわけじゃないだろ？」

そう言うのと、「分かつてるじゃねえか」とあいつが言ってから、鋭い視線を向けて声を低くして聞いてきた。

「どこまでお前のシナリオだ？」

「シナリオって……人聞きが悪いな」

「別に悪くねえだろうが。お前なら俺達を焚き付けてからここまで計算通りに動かせることぐらい簡単だろ？」

「いやいやいや。俺は人を思い通りに動かせるなんてできないよ。人の感情ほど難しいものはないって」

「どうだか。お前は俺達が勝つまでのビジョン位浮かんでるんだろ？」

「さあね」

そこまで考えてはいないし、そもそも勝てるかどうかなんてあまりにも未知数。

だから俺は、「一つだけ言うならば、俺はお前達を信じているってことだ」とだけ言った。

「……その言葉は嘘じゃなさそうだろうな」

「ひどくね!? お前俺の言葉勘繰り過ぎ!」

「お前の度の超えた才能と、それを扱う能力を知っていると、どんな言葉でもあまり信用できないからな」

「尚更ひどい!」

そんなことを言い合いながら、俺達は教室を出た。

二日目

次の日。

昨日の忙しさから今日は暇になるかなと思いつながら登校時間ギリギリに教室へ着くと、明久と雄二が欠伸をしながら出てきた。

眠そうだなこいつらなんて考えながら「おはよう」と言うと、「俺達屋上で寝てくる」と雄二が言っつてすれ違った。

「頑張れよ」

「ああ」

すれ違いざまにエールを送つたらそう返事がきた。

ここで負けたら台無しになるから頑張つてほしいところだと思いつながらドアを開けると、島田さんと姫路さんが深刻そうにしていた。

「どうしたんだ二人とも」

「あ豊橋。別に何でもないわよ」

「ふくん。……明久は普通に女子が好きだぞ」

「そ、それぐらい知ってるわよ！」

「そ、そうです!!」

この慌てよう。さてはホモの可能性を思い浮かべていたんだろう。

姫路さんも徐々に侵されてるなあと思いつながら「はいはい」と言つてから須川を見つけて「おーい須川」と呼ぶ。

「どうしたんだ流?」

「いや、在庫の買い出ししてきたのかなと思つてよ」

「ああしたぞ。今日はどうするか悩んだが、三百人ぐらいだな」

「まあ妥当だな。島田さんに報告は?」

「やべつ、まだしてねえ」

「さっさとやれよ」

「分かったよ」

そう言つて須川は島田さんに駆け寄つた。他の男子は今回邪魔をせず、それぞれ自分の役割について考えているのかもしれない。

まあ一日目で完全に売り切つてしまったので目標を達してしまつたのだが、そのせいでモチベーションが下がっているのかと思えば、そうじゃない。

欲の塊の男子がもつと利益をと言う雰囲気を出しているのだ。康太と秀吉と須川と俺を除いて。

一日目は教室と味のダブルインパクトで客足が途絶えることはなかったが、今回は三百も売り切れない可能性がある。

出来る事なら使いたくないが、三百売り切るにはアレを使うしかないかな……そんなことを考えていると、島田さんが俺の事を呼んだ。

俺は島田さんに近寄ってから聞いた。

「何？」

「豊橋さ。昨日ずっと店番してたって本当？」

「ああ。おかげで昨日はぐっすり眠れた」

そのせいで李里香さんが置いて行った書類を見てなかったのは、どうでもいい話になるだろう（ちゃんと起きてから終わらせた）。

それを聞いた島田さんは目を丸くしてからため息をついて「じゃあ今日は休みなさいよ」と言った。

宣告された俺は数回瞬きして「マジで？」と確認する。

「当たり前よ。いくら店と言っても清涼祭なのよ。少しは学園内回ってくればいよいよ」

「いやでもよ、会計とかは島田さんや姫路さんが行えばいいとして、接客のシフトが一人減るんだぞ？ そこは大丈夫なのか？」

「大丈夫よ。だからあんたは今日休み。いいわね」

「お、おう」

その優しさを明久に向ければいいものなんて思いながらも領いた俺は、ふつて湧いた暇な時間をどうするか考える羽目になった。

明久たちを起こした俺は、屋上で見送つてから何もすることがないためぼけつとすることにした。

放送器具が置きっ放しだというのは些かバカなんじゃないだろうかと思いたくなるものだが、まあここに来る人間自体が珍しい上に盗もうと考える勇氣ある奴はいないだろうと思ひ直し校庭を見る。

ひよつとしたら昨日より多いんじゃないかと思いたくなる人ばかりに見知つた奴らがないことを切に願ひながら見てみたが、恐らく無理だろうと考えてしまう。

人ごみだからよく見えなかったというのもあるが。

まあもうすぐ二日目も始まる。そして少ししたら決勝戦。

それまでどうしたものかなと思ひながらも、屋上から出て行くことにした。

特に何事もなく二年のクラスがある階へ戻ってきたが、見たいものがないのでどうしようかと立ち止まっていると、「あれ、豊橋君じゃない」と声をかけられたので振り向く。

そこにいたのはボーイツシユな女の子。確か試召戦争で康太と闘った――

「工藤愛子、だったか」

「そうだよ。覚えてるなんてさすがだねー」

メイド服の格好で仕草だけ男っぽい工藤。明久たちはとても手玉に取られているのを笑ってみていた俺としては、正直な話特に考えることはない。

と、工藤はそんな俺を見て「そう言えばクラスの出し物は？」と訊いてきたので「今日一日暇になった」と答えた。

「でもどうして？」

「昨日一日ずつと働いていたからだな。休めと言われた」

「あはは……それはそうだよ」

そう言うとなんか思ったのか持っていたピラを一枚渡してきた。

「暇だったら来ない？」

受け取った俺は一瞬考えて「まあ行ってみるか」と結論を出すことに。

どうせ暇だし。そんな思いの中、俺は工藤の後ろをついて行くように人ごみの中を縫って移動した。

「まあメイド喫茶だよな」

Aクラスの看板を見て真つ先に思い付いた感想を呟いた俺は、空いているのか普通に

入る。

「お帰りなさいませご主人様」

すると、真っ先に霧島が出迎えてくれた。

「が、俺は特に驚くことなく、「一人で大丈夫か？ 埋まつてるみたいだが」とクラスを見渡しながら質問する。

それにつられてクラスを見渡した霧島は、「……あちらになります」と指をさす。

丁度そこだけ誰も座っていなかった。

まあ良いか別に。本来なら喜んだりするべきなのだろうがそれほど興味があつて入ったわけではないので、満席でもよかったというのが本音。

案内を受けず普通にその席へ進んだ俺は、座ってからもう一度見渡す。

……大体親や同年代が多いな。同年代の男はおそらく女性陣目当てで入って来てるんだろう。

俺もその一人にカウントされるといふのはさすがに嫌だなと思いつつ片肘をつきながら待っていると、携帯電話がポケットの中で振動したので取り出す。

どうやらメールのようで、相手は李里香さん。

用件は、『ゲームの試作品が完成しました』というもの。

実質的権限は李里香さんに譲渡しているからわざわざ報告しなくていいんだけどな

…と思いながら携帯電話を閉じると同時に水とメニユーが置かれた。

礼を言おうとしたら駆け足で立ち去られたので、切り替えてメニユーを水を飲みながら見る。

…意外とまともなものだな。もつと変なものかと思った。

そんな感想を抱きながら何にするか決めてっていると、外の方からアナウンスが聞こえ始めた。どうやら、決勝戦が始まるらしい。

そういや俺の召喚獣って腕輪の能力知らないんだよな…と思考がそれたままメニユーを見ていると、「お、流じゃねえか」と聞き覚えはあるけれど、記憶にない声だ。

どうせ大した奴じゃない気がすると思いつつ注文するものを決めたら、「相席いいか?」と聞かれたので「どちらでも」と簡潔に返す。

すると向こうが座ったようなので、「俺はショートケーキに紅茶で」と言いつつ注文を終える。

そのメニユー表をテーブルに置くと、そいつは勝手に開きながら話し掛けてきた。

「つうか偶然だな、まったく。何年ぶりだ? 学校やめたの中等部の頃だから…三年前か? そこから何していたんだ?」

顔を見ていない俺はどうでもいいので返答しないでいると、注文していたのを運んだ

帰りだったのか、留美が通り過ぎる時に俺達を見て声を上げた。

「あら……豊橋さんに空天さん。どうぞごゆっくり」

「す、鈴鹿さん。や、やっぱりこのクラスだったんですね……つて、豊橋？」

俺の名字が変わっていることに気付いたのだろう。そいつ——空天^{くうてん}高人は俺の方を向いて訊いてきた。

「お前……鈴鹿じゃないのか？」

「つい最近追い出された」

「ハア!？」

高人の声が一瞬で教室に響き渡る。それを聞いて全員がこちらに視線を向けてきたが、俺は気にせずに携帯電話を弄る。

「そんな話聞いてないぞ!？」

「身内の汚点を消すのが財閥だろうが。それとも、そうじゃないと言い切れるのか財閥の人間の癖に」

「!？」

知らず知らずの内に嫌悪感からか威圧感のある口調で言ってしまった。黙ってくれたのは良かったことだが。

しかし撤回する気も何もなかったのでそのまま黙っていると、そいつはため息をつい

て席に着き「…すまん」とだけ言ってきた。

ちようどよくそんな険悪になりかけている雰囲気料理が運ばれてきたので黙って食べていると、注文したらしい高人が俺を見てこう言った。

「…すごいなお前って」

「あ？」

「追い出されたのに普通にこうして居られるってことだよ。俺だったらまず恨むね」

「俺は元々あんなクソみたいなところに居たくなかったからな。最初から馬が合わなかったんだよ」

「……確かにな。今となってはこうして普通の学校の奴らの方が羨ましくて仕方ない」

そう言いながら笑うそいつの顔を見てどういいう人間だったか思い出した俺は、「そーいやお前、あの学校にいた時よく一緒に行動してたな」と紅茶を飲んでから言った。

「いや、ようやくかよー！」

「主にツツコミを入れてくる奴だと認識してる」

「主にお前にな」

「……」

「……」

「ふっ」

「はっ」

「はっはっはっはっ!!」

高人が注文した料理がテーブルに置かれてるのにあいつは気付かず、俺達は少しの間
笑いあった。

再会

「つうか今お前何してるの?」

「学生」

「ふくん。転校でもしてたのか」

実際はそうではなく出戻りみたいなものだが、そのことを言う必要はないので黙っておく。

すると高人は注文した料理を食べながら「しかしこの学校も美人多いよな」と感慨深そうにつぶやく。

「つうかお前一人か?」

「ん? ああ。もう一人連れはいるんだが、どうもこの人ごみの中ではぐれたらしくてな……」

「連絡は?」

「出来たらこうしてのんびりしてねえよ」

「ふつう逆だろ」

昔の様なテンポで会話をしていく俺達。連れが一人いるというのが気になるが、それ

は気にしてられない。

ぶつちやけもう食べ終わったから会計するだけなんだよなと思いつつ席を立とうかと考えていたところ、外から歓声が聞こえた。

「終わったか」

「え、まだ時間あるだろ？」

「そつちじゃなくて、トーナメントの方だよ」

「あれ結構すごいよな。うちの学園でも導入しようとか言ってたけど」

「はっ。無理なこと言ってるんじゃないよ」

「即否定!?　なんでそんなこと言えるんだよ」

「だってあんなクズみたいな奴らに再現なんてできないから」

「うわあ……昔もそうだったけど、今も遠慮ないなお前」

「遠慮して利益が生じるなら遠慮する」

なんかお前メリットばかり追いかけすぎじゃないのか……? と呟きながら俯いた高人を見た俺は、チャンスだと思いい席を立てて会計をして教室を出た。

さて。特に何事もなく教室を出たが、暇だった。

何もすることがない。強いて挙げるなら解析の続きをやるぐらいだが、あそこ電波入

りにくいから何かあつた時面倒なんだよなあ。

さてどうすつかなあ…と頭の後ろで手を合わせて歩きながら考えつつ歩いていると、ざわついた空気が一瞬で張りつめたものに変わり、先程まで混んでいた道が一直線で人が通るスペースになるという光景を目の当たりにし、その道を歩く人間に気付いた俺は、表情を消して逃げる様に階段を登ろうとしたが、「Aクラスはどちらへ行けばいい？」と低い声で訊かれたので、その足を止めて表情を消したまま無言で俺が来た方向を指さした。

「……」

その人間は黙って階段を登り切り、俺が指差した方へと向かった。

背を向けたその人間から発せられる雰囲気を感じながら、ざわめく周囲の奴らを見無視して「……くだらねえ」と小さく呟いて自分のクラスへ向かうことにした。

「……ん？」

Fクラスへ向かう途中。やたらと列ができてるのを見てしまった俺は、ひよつとしてこれアウトじゃね？ と思いつつと離れようと行動を起こそうとした時、チャイナ服を着た秀吉が「おお流か！ せつかくの休みで悪いが手伝ってくれぬか!! お主がおらんとどうにもうまく回らんのじゃ!!」と慌てながらこちらに来た。

それを見た俺は先程までの気持ちは消え、思わず笑いながら「だと思つたよ」と口にした。

「流！ 悪い!!」

「いいよどうせ暇だったし」

ささつと着替えてホールに來た俺は、雄二の謝罪を軽くいなして働く。

……とうか人來過ぎじゃね？ 一体どうし……なるほど。

秀吉のチャイナ服を思い出して現在島田さんと姫路さんも着ているのを見て納得。

恐ろしい経済効果だと思ひながら、右往左往している明久を小突いてホールの仕事を始めることにした。

のだが。

なーんか見知つた奴らが座つてるなーと素通りしながら考えつつ料理を運んでいると、「こんなところにいたのか、流」と声をかけられた。

俺は素通りして料理を運んでからその席へ戻り、顔を見る。

そいつはサングラスをかけてスーツを着ていた。声からして男。

一瞬間内で検索し、該当した奴がいたが、どう考えてもここにいるのがおかしい奴

だったので、小声で訊いた。

「なんでお前が？」

「いちや悪いか？」

「いや……どこで知ったんだよ」

「隠してないんだから分かるだろ」

「おーい流！ 戻って来い!!」

「というわけだ。話したいことがあるなら電話かなんかで頼む」

「ああ」

そんな訳で会話も早々に切り上げることになったり。

「Hey！」

「悪いが後でな」

陽気な外人と最初から言葉を交わさなかったり。

「あの、主任」

「元な、元。俺もうあそこ抜けてるから手伝う気ないぞ」

「そ、そんなあ……」

なんか少ししいた場所の関係者を断ったり。

なんか半数以上が俺の知り合いで、しかもそいつらきちつと料理頼んで金払って帰る

のでわざわざ何しに来たんだと言いたくなる感じだったが、まあ三百人売り切った要因の一つだろう。

……そういや今更だけど三百人て多いな。昨日来てもせいぜい二百いったかどうかだったはず……。

感覚麻痺したみたいだコレは。そんなことを思いながら、学園祭が終了する二時間前にすべて売り切ってしまったクラスメイト達は、

「もう……無理」

『同感……』

客がいないことを良いことに畳の上に寝転がっていた。

俺はというと、寝転がるまでにはいかなくても疲れていたので欠伸をしつつ伸びをする。

そして入口近くでまとめていたオーダー表を手に取り、島田さんに渡す。

「これが今日の売り上げ」

「……ウチが計算するの?」

「昨日は計算したから、最終的な合計は実行委員にやってもらおうと思って。島田さん、数学得意でしょ?」

「まあそうだけど」

「じゃ、ちよつとふらふらと疲れを取りに行つてくるわ」

そう言つて島田さんに押し付けて、俺はそのまま教室を出た。

どうせ全員倒れたままだろうから。

と思つていた時期が俺にもありました。

「待てよ流」

「……雄二。お前のどこにそんな体力があるんだ？」

「……とりあえずお前が俺の事を見下してるのは分かった。が、今はどうだつていい」

そう言いながら隣に並ぶ雄二。

横一列に並びながら歩く俺達は傍から見たら親友に見えるんだろうなと思いつつながら歩いてみると、「お前、中学一年から何があつた？ 普通に客としていたからみんな気分がなかつたみたいだが、あのメンツは異常だぞ」と訊いてきた。

よく見てると感心しつつ、「チャイナ服させたのは雄二の指示？」と聞き返す。

「ああ。三百なんて普通にやってたら売れないからな。それに、明久も『愛してる』なんて言つてたから」

「だったら着るよなあ、あの二人」

「秀吉は渋々だったけどな」

そう言つて沈黙しながらも歩き続けていると、「つて、話を逸らすな」と言われた。

「あれ？」

「あれ？　じゃねえ。俺の質問に答えろよ」

「んー、無事進級して、退学して、大学行つて、卒業して、さすらう様に転職して、勘当されて、ここに納まった」

「あー、気のせいかな？　退学してから大学行つたと聞こえた気がしたんだが……」

「ま、色々あつたんだよ」

「色々がおかしい！　前からそうだが、お前本当に壮絶だな!!」

「よくそんなテンションで突っ込めるな。俺は感心する」

「……誰の、せいだと……!!」

今にも殴りかかろうとしてくる雄二を見て笑っていた俺だったが、目の前にできている人だかりに気付き足を止める。

雄二もそれに気付いたようで、すぐさま冷静になつて「なんだ一体？」と首を傾げる。嫌な予感がした俺は目を閉じて耳を澄ませると、ざわめく声の中でこんな言葉聞こえた。

「——謝れよ」

「——ふざけないでください」

「俺達か——で、逃げたんだろ？　落ちこぼれ共」

「それが、——達から——？」

反論しているのは女。人数は二人。そして声から察するに留美と由美。

言いがかりかなんかをつけている声の方は男で、『落ちこぼれ』という単語を使って蔑む奴らは——あの学園しかない。

高人がいたんだから当然だよなと思った俺は、ゆっくりと目を開けて視線を鋭くし、雄二に言った。

「悪い。俺ちよつと先の方へ行ってくる」

「……俺も行かせろよ」

一瞬間断るかと思つたが、場合によつてはこいつもいた方がいいかと思ひ、頷く。

そして人ごみをかき分けて中心へ出た俺達は、目撃してしまった。

霧島が倒れ、それをかばうように留美と由美が立っており、彼女達の視線の先に下卑た笑いを浮かべる白い制服を着た奴らを。

瞬時に状況を理解した雄二が駆け寄ろうとしたが俺は止める。

「やめとけ雄二」

「なんでだよ」

「お前一人じゃどうにもならない」

「だからって……」

やっぱり助けに入りたいか。そりやそうだよな。

雄二の気持ちを考えた俺は、肩を叩いて「心配するな。俺も今無性に腹が立っている」と笑って言う。

それを聞いた雄二は驚いた顔をして……すぐさまいつもの笑い顔で言った。

「お前でも腹立つんだな」

「当たり前だつての」

そう言つて俺達は笑い、一番留美達に近い男に近づき、笑顔で、思いつきり、

「っ、ねえ！」

「りゃ!!」

「ブツ!!」

怒りを込めて殴った。

演説

さて。腹が立ったので思いつきぶん殴ったのだが、殴ってから我に返った。

「いっけね」

「どうしたんだよ流」

「手袋するの忘れた」

「別にいいんじゃないやね？ 中学の頃、俺喧嘩素手だったし」

「なんだお前達は！ 人の顔を殴っておいて!!」

そう言つてヨロヨロと立ち上がった男。どこかで見た記憶はあるが、はつきり言つてどうでもいいのだから覚えていない。

なので、俺は無視して雄二に反論した。

「いやいや大事だぜ？ 警察沙汰にならないとか」

「この状況じゃ意味ないだろ」

「闇討ち」

「物騒だな!?!」

「闇夜は背後に気をつけな」

「カッコつけたいだけか!」

雄二のツツコミに周りにいた奴らはざわめき始める。大方、俺達が殴ったことについてだろう。

頬を抑えながら叫ぶ男を無視し、俺は声を張り上げた。

「黙ってみていたのなら同罪だろ! お前らだつて見てるだけで何もしてなかった。見殺しにしてたんだからな!!」

「流?」

周囲のざわめきが一瞬しにして止む。雄二は首を傾げ、留美たちは黙って俺を見ている。

我に返つたと言つたが、あれは嘘だ。俺は今、この場で黙って見ていた奴らの人生を破壊させようと考えているぐらい怒っている。

「どうせお前ら学校でのいじめですら見て見ぬふりして生きてたんだろ? そうやって野次馬根性でここまで来たんだろ? 罪悪感はどうだ? まったくないか? こんな少女達をに対して何もしないで見ているだけの自分達に」

俺の言葉が突き刺さっているのか重くなる空気。それに反比例して白い制服を着た男たちは喚いているのが、よく響く。

正直お前達なんてどうでもいいし、このままいつたらお前らがどういふ状況になるの

か決まったので無視し、俺は語る。

「まああんた達の事情は知ったことじゃない。正直言つてさわらぬ神にたたりなしだという言葉もあるから逃げるのもアリだろう。だけど、現状はどうだ？ 高校生という大人に近い年頃でありながらよつてたかつてこんな状況。あんた達はそれから逃げるのか？ 間違つた大人にさせないために注意したりしないのか？ 自分達の子供はどうするんだ？ もしいじめられてたと分かつたらどう対応するんだ？ それすらもしいのか？ だつたらいいさ。それはそれでありだ。ただし、あんた達の心に一生！ 拭えない罪悪感や聞こえるはずのない怨念が聞こえるかもしれないがな」

そう言つてニヤリと笑う。その言葉を聞き、俺の笑顔を見た奴らは完全に動揺して伏し目になり、見てない奴らですらこの雰囲気を重くする。

その雰囲気を感じ取つた俺は、一変して明るく言い放つた。

「だけど今日変わることができれば、あんた達が現状をきちんと理解することができて注意することになれば、そんな罪悪感に押しつぶされることはない。いかに今まで見過ごしていようが、これから見過ごさなければいいだけの事なのだから」

たつたそれだけ。たつた励ましにすらなつてない励ましの事だけなのに、この場の雰囲気は一変した。

即ち、野次馬ではなく通告者に。

まず変わったのは誰もが携帯電話を取り出して現状を撮影する。俺は黙って留美たちの方へ近づき、倒れている霧島の首筋に手を当て脈を確認。

……正常。どうやら気絶しただけらしい。

念のために病院連れて行かないといけないなと思いつながら携帯電話で救急車を呼び出そうと操作していると、「翔子は大丈夫なのか？」と雄二が。

「心配いらねえよ。ただ気絶したただけだ。外傷はみたところない」

「……そうか」

ホツと胸をなでおろす雄二。それを見た俺は携帯電話で救急車を連絡しようとし、辞める。

「とりあえず保健室行くぞ。霧島を運んでやってくれ」

「ああ、分かった」

「鈴鹿さん達も保健室へ行ってくれ」

「……はい」

「……ありがとうございます」

ここから先は邪魔なので、被害者側を強制的に移動させる。残ったのは俺と加害者連中と野次馬。

と、ここで「一体何があつた豊橋」と野太い声が。

全員の視線が西村先生に向く中、俺は肩を竦めて言った。

「成り行きでAクラス代表と鈴鹿さんに妃さんを助けました。今雄二と一緒に保健室に向かいました」

「そうか……で、この生徒達は？」

男連中が驚いているのも意に介さず質問してくるので、俺は「さあ？　学校名までは知りません。殴りましたけど」と申告する。

それに眉をピクツと反応させた西村先生は、「お前が殴るといふことは、余程のことがあつたんだな？」と確認してきた。

それに対しあちらは咄嗟に何か言おうとしているのが丸わかりだったので、俺は静かに「全容は見ていた人たちが分かっていますよ。俺はただ、Aクラス代表の霧島さんが気を失っていたのを見て殴りかかったのですから」と出くわした場面を説明する。

それを目を閉じて吟味したらしい西村先生は周囲を見回して「誰か説明できる人はいますか」と質問。

それだけで目の前にいる奴らはどういう状況に立たされたのか理解したのだろう。慌てて逃げようとしても自分達が作った人の壁。左右はどちらも塞がっている。

右往左往しようとして視線が泳いでいる姿が滑稽すぎて思わず笑いそうになるが耐えつつ黙っていると、急に人の壁が割れた。

現れたのは俺に道を聞いてきた人間——現鈴鹿家当主、鈴鹿東角。莊嚴という言葉がぴつたりで、風格で周囲の人間を退けることを素でやってのける。

並の神経じゃこの人間を睨めないよな……と思いつながら視線をちらつと見てから真下へ移すと、その人間は口を開いた。

「先生は？」

「私ですが」

即答する西村先生。この人もまた並の人間じゃないんだよな……と考えていると、「娘は？」と質問してきた。

「保健室へ向かったそうです」

「そうか……」

そう言ってからちらつと視線を俺に向け、すぐさま縮み上がっている逃げる動きを見せた男連中を見てから翻り、そのまま行くのかと思つたが「その三人」と声をかける。

返事はない。が、その人間は続けた。

「あとで親と共に私の家へ来るように。異論は認めん」

その声に含まれた怒りを感じ取つたらしい三人は完全に被食側に回つたらしい。

ざまあみろと思いつながら、俺は自然解散されていく流れに身を任せてその場を後にした。

清涼祭終了

ある程度まで流れに身を任せてから自分の教室へ戻るために抜け出して教室の前へ。あいつら元気になったかと思いつながら扉を開けて中に入ると、そこには誰もいなかった。

「……………」

首を傾げて周囲を見渡す。

片付け自体は終わっている。教室の配置も元通りだ。

こりやさつさと帰ったのか？　なんて思いながら徐に携帯電話を取り出して確認すると、明久から『公園で打ち上げやるから来てね』というメールが来ていた。

なるほどねー。そりやだれもないわけだ。

こうなったら俺もさつさと帰ろうかねと思いつながら教室を出ようと扉を開けたら、携帯電話が鳴った。

「もしもしっ！」

『あ、流!?　ちよつと喧嘩沙汰になったって話置いてき、ちよつと大変なことになったんだ!!』

「ん？」

もう終わりだというのに大変なことなんてあったのか？

『どうやら学園長室に盗聴器が仕掛けられていたらしく、僕達の交渉の事がばれちゃったみたいなんだ!!』

「……マジ？」

『そう！ だから雄二にもそのことを知らせたいんだけど、どこにいるか知ってる!？』

「保健室のはず。そこにいなかったら今頃——」

『明久。お前なんでこんなところにいる?』

『あ、雄二！ 大変なことになったんだ!!』

どうやら雄二と合流出来たようなので俺は黙って通話を切る。

そして現状を整理しながら俺も探すの手伝おうかな…と柄にもなく考えた。

そんな訳でたどり着いたのは屋上。そこには案の定先輩たちがいた。

俺は音もなく扉を閉めてから静かに座り、準備をしている先輩たちを観察する。

……やっぱり自衛隊にでも入隊してもらおうかな。その方が性根を叩きなおすのに一番楽そうだ。

いやいつそのこと紛争地域にでも置いて行ったらどうだろうか。勝手に死んでくれ

る上に身元の確認すらされずにそのままだろうから、誰もが忘れるだろう。

そんな自分の手を汚さないでこの二人の処分をどうするかメールを打ちながら考えていると、坊主の方が俺に気付いた。

「テメエ！　なんでここに!!」

「暇潰し」

「だったらさっさと帰れよ!!」

「別に個人の自由なんだからどこで暇をつぶそうが関係ないだろう？　……それに」

「あ？」

携帯電話を閉じてポケットに入れた俺は、立ち上がって移動してから続けた。

「悪事千里を走る。その言葉を知らないほど馬鹿じゃないよな、先輩方」

「見つけたぞ常夏コンビ!!」

ドバァン！　と勢いよく開け放たれた扉（憐れにも壊れた）から、そんな叫び声とともに雄二と明久と明久の召喚獣が登場した。

……壊れた扉代、売り上げから引くしかないな……。

机といす以上も夢じゃないと思った矢先にこれなので、次何か壊れたら弁償代の額によつて何も買えなくなるという悲惨な結果になりそうだ。

さて、どうなるかなと思っていると、雄二がいきなり「残念だったな常夏コンビ」と

言い出した。

「あ？ どういう意味だ坂本？」

「言葉通りの意味だよ。俺達も教頭も……すべて踊らされていたんだよ。そこにいる流の手のひらの上でな」

「え？」

「あ？」

一斉に俺の方へ向く視線。

隠しても無駄だなと思った俺は、頭を掻きながらネタ晴らしをすることにした。

「そう。雄二の言う通り。あんた達が盗聴器の内容を放送器具で流すことは分かっていた。それだけじゃない。教頭がやっていた悪事を知り、それを逆手にとつて学園のイメージ回復を図ろうと計画した際の邪魔が入る可能性すら予測していた。だから俺は昨日一日中働いて妨害工作をしようとするクラスに入ってくる奴を見極めて追い出した。つまり、俺が学園のイメージ回復と同時に教頭を捕まえる手順を踏む際の障害——先輩達みたいな奴——の存在がどう動くかなんて予想できていたんだよ」

ぶつちやけ読みやすいし予測した行動とほぼ寸分たがわず行動したようだからありがたいね。

そう付け足して俺は締めると、常夏コンピは事の意味を理解したのか勝手に後ずさ

り、放送器具とぶつかってこけた。

明久は理解していないようで首を傾げていたが、説明する気はないので雄二を見て嫌味を言ってみる。

「まさか気づかれると思わなかったよ」

「あれだけ意味深なら大抵の奴は気付くだろ。あの時何の反応を示さなかったお前なら」

「えーつと、つまりどういう事？」

「説明は後だ。今はこの二人を拘束するぞ」

「え、うん」

常夏コンビを視線を俺に合わせたまま動こうとしない。それに気付いた俺は視線をその二人へ向けて口を動かす。

ざ・ま・あ・み・ろ

口を動かしただけで声を出していないが正しく伝わったようで、二人はがっくりと肩を落とした。

「あーようやくすつきりした」

「えーつと。僕まだ理解できてないんだけど、どういう事？」

「この学園祭で俺達のクラスを対象とした嫌がらせや、俺達がトーナメントに出場して優勝することすら、流が計算に入れていたってことだ」

「ふ〜ん」

「よし。目を瞑って歯を食いしばれ」

「なんで!?!」

西村先生を呼んで常夏コンピを連行してもらった俺達は扉を弁償するための請求書をババアに書いてもらい、校庭を歩いている。

俺は請求書の額を見ながら「取り付け代を考えると更に上乗せされるんだろうな」とため息をついてつぶやく。

それを聞いた明久は争うのをやめ、「備品を買うのに足りるかな?」と心配そうにつぶやく。

「せいぜい十万ちよいだろ。そのぐらいなら昨日の売上使ってもまだある」

「え、そうなの?」

「卓袱台や座布団の新品は余裕で買えるな」

「! やったあ!!」

嬉しそうにはしゃぐ明人を見た雄二は、俺に耳打ちして聞いてきた。

「(なんで机やいすが買えるって言わないんだ)」

「モチベーションの問題。さすがにそこまでやったら試召戦争どうだっていいってなるだろ？」

「(いやまあ確かにそうなんだが……)」

Aクラスを倒すモチベーションとなるのは不満。その不満をある程度残したままじゃないと、三か月後に復活する試召戦争をやる権利では勝てない。

どうせなら校舎も戻そうかなと思ったが、流星にそれは可哀想なのでやめようと考えた。

と、ここで俺は思い出した。

「すごいや明久」

「何？ 流」

「打ち上げやる公園ってどこだ？」

「……あ」

「あ。って。お前やっぱり忘れてたのか？」

「やっぱりってどういう事だ雄二！」

「まあしやあねえ。秀吉に電話して場所訊くか」

明久って普段と真剣になった時のギャップがすごいよなと思いつながら、ふと大学在学中に仲の良かった超絶ブラコンの女性を思い出した。

秀吉が言った公園に到着した俺達。

すると、すでにFクラスの奴らは始めていた。

「もう始まつてるぜ」

「まあ俺達色々あつたからな」

「うん。そうだね」

「……待つてた、雄二」

「おーそうか……」

ギギギ……とブリキの切れたような感じで雄二は首を動かして背後を見る。

すると、コップを二つ持った霧島が立っていた。

ダツ！（雄二が脇目もふらずに走り出す音）

ガツ！！（霧島がその瞬間に雄二のかかとを踏み、雄二が顔面から勢いよく倒れ込む

音）

「おお見事」

「見事、じゃないだろ！　なんでお前がここにいる翔子!!」

俺が感心していると雄二は勢いよく顔を上げて霧島に訊ねる。

霧島は、若干人に分かる程度に表情を曇らせて「……心配、だった」と口にした。

「明久を襲うんじゃないかと」

「俺が襲うと思つてたのか!？」

「ちよつと待つて霧島さん! 僕は普通に女子が好きだからね!？」

「この学校別な意味で大丈夫だろうか……そんなことを今更ながらに思いながら、とりあえず島田さんを探す。」

と、島田さんがこつちに来てくれた。

「お疲れ豊橋。……アキと坂本は?」

「霧島の誤解を必死に解こうとしてる」

「? まあ来たのならいいわ」

「あ、それでさ」

「何?」

「ちよつと急ぎがあつて扉壊しちまつてさ。その修理代を売り上げから引くことになつた」

「ハア!? 何よそれ!」

まあ当然だよなと思ひながら、俺は請求書を見せて島田さんに聞く。

「このぐらい引かれたらどこまで買えたっけか」

コップを二つ持ちながら請求書を見た島田さんは少し目を閉じてから「そうね……」

精々机といすが限界じゃないかしら？」と答えてくれた。

良かった。そのぐらいなら。そう思った俺は「なら大丈夫だな？　元の卓袱台と座布団より上なんだから」と確認する。

言われて気付いたらしい島田さんは「そうね」と言ってから「まあ仕方ないわね」とため息をついた。

まあ壊した理由と人間は言わないでおくか。そう思った俺は、島田さんに「ほら明久の方へ行けよ」と言って離れることにした。

「これで解決したのかの」
「秀吉」

持ってきたらしいジュースを飲みながら公園でバカ騒ぎをしている奴らを静かに見ていると、秀吉が来てそんなことを訊いてきた。

「一応な」と俺が答えると、「なら、また明日もこんな風に過ごせるんじゃない」と隣に座った秀吉は言う。

こんな風、ね……。教頭の人事は確定したから平和になるとは思うが、今度は俺の厄介事が回ってきそうだからこんな風に過ごせるかどうかは不透明になりそうだ。

最悪この学校を去らないといけないかも……。と遠い目をしながら明久たちのバカ騒ぎを見つめていた。

その日の夜。

俺は今日来たやつらの電話の対応に追われ、ふざけた用件で電話してきた奴らを怒鳴ってすぐ切った。

あー疲れた。マジやってらんねえ。

休日の話その1

呼び出し

学園祭が終わってしばらくの事。

机といすが買えると意気込んでいたら卓袱台と座布団だけしか買えなくてどういう事だこらあと雄二とともに乗り込んだのに結果は変わらず。

なんでもやり過ぎは良くないという事で、これ以上FクラスがFクラスじゃなくなつたら他のクラスからクレームが来るとのこと。

そう言われたら意地でもAクラスに勝って設備奪わないとなという意見が一致した俺達は、その事をクラスメイトに言つて来たるべき解禁時まで不満を抑えるよう言つた。

臥薪嘗胆。とはいってもこのクラスの半分以上が分かるわけがないので単なる四字熟語でしかないのだが、この状況を表すにはこれ以上ピッタリな言葉はないだろうな。

で、土曜日も学校に来なくてはいけないという（補習で）罰にも似た状態で別なことをしながら授業を受け、休み時間になった時。

不意に思い出した俺は雄二がいない隙に明久に聞いた。

「そーいや明久」

「? 何、流」

「プレオープンチケットお前が受け取ったわけだけど、誰に渡した?」

「はははっ。霧島さんに決まってるじゃないか」

「あ、やっぱりか」

薄々勘付いていたことだが、こいつらは本当に嫌がらせを互いにやってるわりに肝心なところじゃ息がぴったり合うよな。

そこら辺は明久の魅力なのかねなんて考えながら、「あんま嫌がらせ考えるなよ」と言っておく。

「そ、そんなことするわけないじゃないか!!」

「目がこつち向いてないぞ? おい本当にする気だったのか?」

「か、考えてなんかない! 僕はただ二人の幸せを願って……」

「誰の幸せを願って、だ? 明久」

「!」

何ともいいタイミングで雄二が登場。

驚いて視線を彷徨わせながら必死で言い訳を考えているその様を見ながら、となると多少強引ながらも対策考えないとなとぼんやり考えた。

その、次の日。

特に外に出る用事がなかったので家の大掃除をやりつつ使っていない部屋どうすつかなど考えたけど結局思いつかずに掃除が終わってしまった、暇になった時。

ポケットに入れていた携帯電話から着信が来たことを知らせるメロディーが鳴った。相手を確認して俺は電話に出る。

「もしもし。どつたの?」

『いえ…社長に会いたいと仰る女性がいたので私がうかがったのですが、本当の社長を連れてきてと言われました』

その言葉を言えるだけで相当な奴だな…そんな感想を抱いた俺は、「で、そっちへ行くの?」と訊ねる。

『今そちらに迎えに行きますので。三十分ほど』

「了解。待つてるよ、李里香さん」

そう言つて電話を切つた俺は、また面倒なことになるんじゃないだろうなと思いがながらもスーツを着るために自分の生活スペースへ戻つた。

三十分後。

書類を入れたカバンを持って正装して玄関先で待っていると、李里香さんの車が目の前で止まった。

自分で乗り込んでから車が発車したので、そこから俺は状況を聞いてみた。

「一体どんな奴よ、会社に乗りに俺に会うと言った人って」

「そうですね……よく『フランス人形みたいだ』という表現がありますが、その表現が合っている人です。流暢な日本語でしたけど」

「ふ〜ん」

知り合いにそんな奴いなかったの、商売敵かなんかかなと考えながら「にしても、なんで今日？ 会社休みだよな？ 納期にゲーム間に合ったし」と訊いてみた。

「それは……その」

「？」

「今日は女性社員だけ会社へ来ていたもので……」

何とも歯切れの悪い答えだな。何か隠してるのか？

一瞬そう考え、たぶん当たりなのだろうと思っただが、別に詮索する必要ないかと思

「ま、別にいいよ。社員同士でのコミュニケーションは大事だし」と言っておく。

「ですよね」

「そうそう。男子会のゲームに関する盛り上がりは楽しかったけどなー。今ほとんどの奴結婚しちゃったし」

「それでも偶に『どうやってあの社長をゲームで負けさせるか』を相談してますけどね」「やっぱり嫌われてるなー。大人げなく圧勝続けてたからだろうけど」

「それもあるでしょうけど、社長は嫌われていませんよ。むしろ慕われています」

李里香さんにそう言われ、言われてみればそうかもなと思ひ直した俺は、「そういうえば連休とった奴いなかった？」と訊ねる。

「いましたね。確か…桜井と新妻部長だった気がします」

「ああ。結婚したけど名字そのままなのにラブラブペアか」

「旅行へ行くと言って今日から確か休みだったはずですよ」

「旅行か……そういうや社員旅行は？」

「行きますよちゃんと」

「いつてらー」

「……たまには社長も来ればいいじゃないですか」

「学生だからいいよ俺は。景品だけは用意しておくから」

と、そんな会話をしていたらどうやら着いたようだ。

意外と早かったなあと前回との違いを思い返しながら車を降りた俺は、誰が待ってい

るのか知らないけどいつも通りに会社の中へ入った。

「ちーつす。元気？」

「元気ですよ。お客様はそちらのソファで待っていただいています」

そう言つて入口にあるテレビの近くに置いたソファに座っている後姿を指さす。

確かにいるなと思つた俺は、「ま、今日はこれでお客さん終わりだから続きしていいよ」と受付の人に言つてソファに向かった。

「俺に用があるのつてお宅？　ちゃんとアポとつてくれ」

近づきながらそう言うと、向こうが俺の言葉に反応して立ち上がつて振り返つてきた。

段々近づいて顔がはつきりとする。

確かにフランス人形っぽい。ふんわりとした金髪。サファイアみたく青い瞳。とても白い肌。

その上ゴシッククロリータファッションなものだから、人形が等身大になつたのかと錯覚してしまう。

ある程度ソファに近づくと、その女性は頭を下げてから自己紹介した。

「申し訳ございません。ですが、こちらにとっては至急でしたので。ああ、自己紹介をさせていただきます。私の名前はアデル。アデルⅡアミエです」

「ご丁寧にどうも。俺の名前は知ってるからいいよな」

「ええ構いません。豊橋流様」

俺の名前を彼女——アデルが呼んだ時、ほんの一瞬観察するような視線を受けた気がした。

その意図に関してすぐさまある程度の考察が出来た俺だったが、証拠がないために直球で訊ねようか悩みながら反対側のソファに座る。

アデルが座ったのを見た俺は、話を切り出した。

「至急、ね……。生憎だけど、金は貸さない主義なんだよ。その上俺はあんたの事を何一つ知らない」

「そうですね。では私の時間もないので単刀直入に言いましょう」

そう言つて彼女は溜めてから、『要件』を口にした。

「今すぐ学校を退学なされて私達と一緒に活動しませんか？」

それを聞いた俺は目を瞑つて考える——ふりをして、決まっていた言葉を言った。

「却下」

決裂

「……理由をお聞かせ願えても？」

あくまで丁寧な口調を崩さないアデル。それを聞きながらその声に含まれている苛立ちを読み取った俺は、それを煽る様に言った。

「逆に聞くけど、それだけではいそうですかなんて言えますかお宅？ そんな怪しさ満点の勧誘言葉に」

「……それは」

「あなたひよつとして自分の組織に誰もが入りたいか思っている性質ですか？ はっはっは……馬鹿ですね。その上あなたにスカウトの才能は無い様で残念です」

心底残念そうな表情と行動をとった俺は、足を組んで俯くアデルに追い打ちをかける。

徹底的に。もうそんな行動をとらせない様に。そんなものは自分の身の安全のためには必要なものである。

「あなたが所属している組織なんてどうせロクでもないものでしょ？ なぜならこうして休日にアポなしで突然会社に押しかけてきているのだから。たまたまここに社員が

いたからよかったものの、いなかったら赤つ恥ですよ？ 時間がないとか言ってますが、それだつたらちゃんど時間を調整してくれば良かったじゃないですか何をやってるんですかそれでも社会人ですか？」

「……」

お、ようやく人形然の顔立ちに悔しさの表情が浮かんだ。どうやら相当堪えたらしい。

どこまでやれば完全に折れるかねと思いつつ、そう言えばこいつどこかで見たことあるなと思いつつ……そして思い出した。

「そう言えばアデルさん」

「……なんですか？」

「あなたに妹とかいませんか？ 声に抑揚がなくて身長が低い」

「……」

「あなたに顔立ちが似ているんですよね。表情はともかく」

「……どこでそれを？」

かかった。そう思った俺は、「やっぱりいたんですね」と呟いてから彼女達の正体を突き付けた。

「そろそろ飛行機の時間になると思いますが、妹さんを先に戻らせて日本に残って大丈夫

夫ですか、参謀貴族のアデルさん？」

言われた瞬間。彼女は顔を上げて驚きの表情を浮かべていた。

凶星ここに極まりつて感じだなと思いつながら立ち上がった俺は、茫然として座ったままの彼女に対し「お疲れさん。もう国へ帰りな」と言つて受付の方へ歩き、電話を掛けた。

「どんな用件だったんですか？」

「副業やらない？　つて誘い。確定申告とかちゃんとしなさいといけないから面倒くさくてやってないって断った」

「学生兼社長をやつてるのに今更ですな」

「ちゃんと李里香さんが回してきた書類は終わらせてこうして持ってきたじゃないか」

今は李里香さんが運転する車の中。

送つてもらうのは楽だけど暇だなど思いつながら欠伸をすると、彼女は戻つてきた時の光景について質問してきた。

「お客さん固まったままでしたが……良かったので？」

「ああ大丈夫。ヤバいところは迎撃プログラムとかいろいろあるし、当分立ち直れない

んじゃないかな。背中が憐れとしか言いようがなかったけど」

「社長を出し抜くのは実質不可能ですからね」

「俺だってミス位あるっての」

そう言つて自分の中のミスだと思えるものを探していると、すぐに何個か見つかった。

それでもまあ挽回できる範囲だったなど思い出していると、「あの人、社長と同一年じゃありません？」と訊いてきた。

「そうなの？」

「ええ。大人っぽく見せてるようでしたが、年若いのは見ればわかりました」

「そんなこと言われてもな……ぶっちゃけ、あいつが交渉ごとに慣れてないということぐらいしか分からなかったし、その上妹がいて帰国直前にここにたどり着いたって感じだということぐらいしかわからん」

話せばわかった程度の話の口にするのと、李里香さんは「社長の頭の回転は一体どうなっているんですか……」と呆れたように言ってきた。

「ま、そんなことより。新作ゲーム発売したわけだけど、どうよ？ 売上」

「わが社——ブリッジゲームズの新作な上予約限定版も豪華になりましたからね。そつちはもう完全に受注分全部売れました。通常版も日に日に本数を伸ばしてるとのこと

です」

「今回は野球にRPG合わせてみたからなー。反応としては微妙だと思っただけ……掲示板見る限りそこそこは満足頂いてるのかな？」

「おそらくは。今までの七作品全部の追加コンテンツも随時配信しておりますし、このままいけば株価もさらに上昇するかと」

「給料どうすつかねー。上げてもいいけど、不満はないだろう？」

「ですね。残業代も正当に払っていますし、手当も問題在りません。別に上げなくてもいいでしょう」

「そーいやあそこから少し離れたところの支店最近行ってないけど、どう？ みんな元氣？」

「ええ。私が見に行つたところ皆さん元氣でした。支店主任の春日部さんは若干やつれながらもその怒声は健在でした」

「……差し入れなんか持つて行って？ お金は俺に請求していいから」
「かしこまりました。そーいえば……」

そんな風に会話を続けて李里香さんの悩みを若干解決させたところで家に着いたので、俺は「ありがとう」と言ってから車を降りて笑顔で見送った。

その後息を吐いた俺はやれやれと思いつつ、鞆会社に置いてきたなと思いつつも、

アパートの中に消えた。

その翌日の事。

「昨日はよくもやつてくれたな明久」

「はははっ。な、なんのことかな…。僕ゲームやつてたのに」

「しらばつくれるのか。まあいい。お前に渡したいものが在るんだ」

「へえ……って、映画のチケツト？ しかも二枚？」

「それで誰か気になる奴と一緒に行って来い！」

「え、普通に売……って美波に姫路さん!? どうして僕の腕をつかむの!？」

そんな会話が聞こえながらも俺もそろそろ弁当作ろうかな…と考えていたところ、雄二が「つたく。酷い目に遭った」と言いながら自分の席に座ったのでたまらず俺は訊いた。

「なにしたん？」

「昨日明久のせいで滅茶苦茶な体験をさせられた」

「素直になりやいいのに」

「そう言うお前は素直なのかよ？」

「そりやね。嫌いなら嫌いってのはつきり言うし」

「……そういうやそうだったな」

はあつとため息をつく雄二。その横で正座している霧島をちらつと見た俺は、嫌な予感がしてすぐさま窓から飛び降りた。

「……ん？ どうして流飛び降りたんだ？」

「……知らない。ところで、滅茶苦茶な体験って、どういう意味？」

「まあ待て翔子落ち着け。お前何時からそこにいたのかは聞かないから一つだけ言わせてもらおう……その手に持っている手錠は一体なんだ!？」

「……これは雄二調きよ……ただの手錠」

『調教用と言いかけて手錠といってもアウトだ！ それは拘束するために使われるものだからな!!』

『……雄二を、拘束（ポツ）』

『やられて堪るかああああ!!』

俺が木の上で観察していると雄二がそう言つて飛び降りたと同時。

なんと霧島が投げた手錠が雄二の両足に嵌った！

両足が使えない雄二は見事に顔面からダイブした。

それを木の上で見ていた俺は、飛び降りて雄二の足についている手錠を外して揺さぶ

る。

「大丈夫か？」

「ツテテテテテ……あの野郎」

やろうつて確か男を指す言葉であつて女子を指す言葉ではないんだけどな。そんなことを思っているときチャイムが鳴つたので、「とりあえず教室戻ろうぜ」と鼻から血が出ている雄二に言った。

そしたら廊下に立たされた（明久も問答無用の上、バケツを持たされていた）。畜生西村先生のバカ！

プール掃除の原因

始まりは突然だった。

『豊橋。暇か?』

「西村先生。どうしたんすか?」

『いや……悪いが至急学校に来てくれないか?』

今の時間は夜。テレビを見て爆笑しながら明日の弁当何作ろうかなと考えていたら
備え付けの電話が鳴ったので出たところ、そんなことを言われた。

一体何かあったのかなーと思いつつ「分かりました」と言つて、学校へ向かうこと
にした。

「すまないな、豊橋」

「いや、別にいいですけど……この二人なんでこんな時間にこうなっているんですか?」

「こいつが悪い」

「どっちもどっちだろうが……」

頭が痛いのか目頭を押さえる西村先生。まあ確かにそうなるだろうなと思いつつ、正

座している明久と雄二をもう一度見て考える。

.....

「ひよつとしてプールかなんかに無断で入ったのか？」

「なんでわかったの!？」

「いや……お前達が夜学校に侵入するのって教科書取りにつてわけじゃないからよ。それなら他に何があるかなと考えたらプールしかなかった」

「その通りだ……この馬鹿ども勝手にプールに入っていたんだまったく」

「明久がガス代を払ってないのが悪いんだ」

「雄二がコーラをゼロカロリーにしたのが悪かったんだ」

「[……]」

どっちもどっちだがガス代払ってない明久の方が悪い気がするんだが……。

生活費をどれだけ使っているんだよお前……と頭を抱えたくなる。

西村先生も同じように感じたようで、「まったくお前は本当に……」と呟いている。

こいつら本当にどうしようもねえなと考えてから仕切りなおすようにため息をついた俺は、西村先生に質問した。

「どうすればいいんですか？」

「こいつらには今週末プール掃除をやらせる。無論、今この場で反省文を書かせてな」

「この鬼教師！」

「そうだと鉄人！」

「まずお前らがプールに入らなければこうならなかったことに気付こうぜ」

「……」

何も言えなくなったらしい二人を見た俺は、西村先生と一緒に反省文の採点をするこ
とになった。

「あーねむ……」

「珍しいの、流が欠伸をするなど」

「意外としてるんだけどな……康太が何故か俺の写真撮った中に入ってるぐらいには」

「……なぜ分かった」

翌日。

主に明久のせいで若干寝不足になった俺が欠伸をしていると秀吉が話しかけてきた
ので、ついでに康太にも話題を振る。

そしたらカメラを片手に現れたので、案の定撮ってやがったなとため息をつきつつ種
明かしをした。

「俺はカメラや盗聴器に敏感なの。仕掛ける理由が大概欲まみれの奴だからさ、それを

阻止するためにね」

「まあ確かにそうじゃが……どうしてお主はムツツリーニが撮った中に入ってると思うんじゃ？」

「朝早く来て暇だったからそこら中にある盗聴器集めて型番調べて購入者調べた。で、面倒だけど全部元に戻して知らないふりしてた。カメラの方はムツツリーニ商会なんでものが在るっていう噂で試に薫に行かせたら俺の写真があったとか言ってたから」

「……あの時か」

学祭が終わって学校に来たある日。そんなものがあるという実証のために薫に協力を頼んで行ってもらったところ、盗撮レベルで需要のある写真が大量に売られているらしい。

さすがに留美や由美はとってなかったらしいが（撮っていたら間違はなく人生が破滅する）、俺や薫のはあったらしい。

ところで。なぜこうも転校組と交流があるのかというと、完全に振りきれなかったから。

……もうね。いくら俺が化け物とか言われても振り切るのは無理だって。振り切ったら最後この魔境に染められて人格変わるとか考えたら尚更無理だって。

だから最低限付き合うことにしたんだが……留美が暴走することが度々あるのでく

そ面倒。

「ほんと、やるなら許可取れよな。そして俺にも一枚かませろ」

「やめさせる話じゃなかったのか!？」

「……対価は？」

「最新高性能カメラと絶対にはべれない場所の提供」

「……乗った!」

「もう流が何を考えとるのか分からんわい……」

呆れたような秀吉を尻目に俺達は握手を交わす。

本音を言うことと止めさせた方がいいのだろうが、こんな無法地帯の学校でそれをやめさせても意味がない気がしたので混ざることにした。

いや楽しそうだし。

と、ここで秀吉が卓袱台に顔をうつ伏せてピクリとも動かない明久を発見した。

「一体どうしたんじや、明久よ」

「……」

昨日の事のせいかな言葉も発しない明久。それを見かねた俺は、コンビニで買ってきたおにぎりを明久の卓袱台に乗せて「食えよ」と言っておく。

「……あ、ありが、とう」

か細い声でおにぎりをつかみながら礼を言った明久は、そのままのそのそと外装をはがしてゆっくり食べ始める。

その姿を見た秀吉は「一体何があつたんじゃ？」と訊ねるが、明久は答えない。

その代り、雄二が説明した。

「こいつのせいで今週末プール掃除しなくちゃいけなくなつた」

「元はといえば雄二のせいじゃないか！」

「どっちもどっちだろお前ら……しかもそのせいでお前らの監視に俺が行くことになつたしよ」

「そうなのか？」

「聞いてなかつたのかよ雄二。何しでかすか分からないからその監視で俺が行くことになつたの」

「え、僕聞いてないけど」

「お前は反省文頻りに書いてたからな。当たり前だ」

「でも面倒だなープール掃除」

元気が戻つて来た明久がそんな文句を言うと、雄二が「そういえばプール使つていいとか言つてたな」と眩く。

「野郎三人でプール自由とか言われてもな、実際」

「なら女子を連れていけばいいだろ」

「秀吉来るよね？」

「その流れで真っ先にわしの名を呼ぶでない明久!!」

「……シャッターチャンス」

何故か先に集まったのは男子。いや、順当な結果か。

霧島は勝手に雄二についてくるから一人は確定として……どうすつかな。

「姫路に島田も呼ぶか」

「え、悪いよあの二人に手伝ってもらうなんて」

「呼びましたか？」

「呼んだ？」

耳がいいのかすぐさま来た二人。その二人に対し、雄二が言った。

「今週末秀吉含めた俺達五人でプールを使わせてもらうんだが、どうだ？」

「行きます」

即答。

雄二の奴扱い方分かってるなーと思いつつも良く分かってない明久をスルーしているのと西村先生が来たので、俺達は自然と自分達の席に着いた。

プール掃除当日

プール掃除当日。

水着などを入れたバックを持って門の前にたどり着くと、すでに姫路さんと康太と秀吉と明久がいた。

「ういーっす」

「あ、流。僕達よりゆっくりだなんて珍しいね」

「俺基本的に15分前ぐらいに着くようにしてるから」

「それでも早い方なのじゃ」

「ですね。流君はマメですね」

「まあ性格のせいでもあるかもしれないけど……雄二と霧島は？」

「二人で鍵を取りに行ってます」

ふーん。大方雄二二人で行かせられないとか言う理由なんだろうな。それか、もう夫婦の認識をしているか。

若干早いんだよなー。やっぱり教えないとダメかなーなんて思っていると、「奇遇ですなお兄様！」との声が聞こえた。

後ろを振り返りたくない俺は明久に聞いた。

「なあ明久。気のせいだよな。お前呼んでないよな」

「え、うんよばぶれされあしね」

「明久よしっかりせい」

「もうお兄様。留美は吉井さんに話を聞いたわけじゃありませんよ」

おかしくなった明久を秀吉が戻していると幻聴ではなかった留美の声がさらに近くで聞こえたので観念して振り返ると、由美と薫もいた。見ると全員水着でも着るのかバックを持ってきていた。

まあ明久に聞くことは絶対にならないか。そう思った俺は彼女達の後ろから元気よくこちらに来て明久の鳩尾に体当たり！ を目撃してスルーした。

「バカなお兄ちゃん二週間ぶりです！」

「う、うん……そうだね……」

まあこれで全員（呼んでない奴含め）来たな。

さつさと戻ってこないかな雄二達……と思っていると、「なんか人増えたようだが……まあ良いか。さつさと行こうぜ」と雄二の声がしたので俺達も移動することにした。

「じゃ、プールサイドで」

「はい」

そう言つて俺達はそれぞれの更衣室に……つて。

「ここら葉月ちゃんだっけ？ こっちは男子更衣室だから女の子はダメだつて」

「そうだよ。秀吉に薫…君もこつちじゃないでしょ」

「わしはこつちであつとるぞ明久よ」

「そうですよ。僕も男ですからね」

「そうだ何言つてやがる明久。お前男に欲情するのかわよ」

「やだなあするわけじゃないじゃないか」

「ならいいな」

「ほら葉月こつちよ」

「はいです」

何故か秀吉や薫まで女子更衣室に行かされるところだったので阻止して更衣室に入った。

のだが。

「どれ、脱ぐかの」

「そうだね」

ブシヤアアア×
!! 2

「おいどうした明久、康太！」

「やれやれ。この馬鹿どもが……」

「え、どうしたの二人とも」

「そうじゃ。一体どうしたんじやこの二人は」

……あゝあゝ。

まったく面倒なことしやがってこいつらは……。

こめかみを抑えながらそう思った俺は、ため息をついてから言った。

「悪い秀吉に薫。大変心苦しいんだが、別な場所を着替えてくれ。すまん」

そう言つて俺は二人に頭を下げる。

すると二人は渋々ながらも「まあ流が言うのなら」と言つて着替えを持って出て行つてくれた。

残された俺達四人（実質的に俺と雄二のみ）は、鼻血を出して倒れている二人を更衣室前へ捨てて着替え、プールサイドに出てから掃除道具を持ち出して黙つて掃除することにした。

効率よく掃除すること十分。

先程よりきれいになった更衣室に満足した俺はプールサイドに出た。

「あー疲れた」

「まったくだ。あいつら余計な仕事を増やしがって」

綺麗にした更衣室に明久と康太を入れて今頃着替えてるんだろーなと思いつつながら準備体操を雄二と二人でしていると。

「あれ？ バカなお兄ちゃんはまだですか？」

大きな胸をした葉月ちゃんがプールサイドに現れた。

……。

「ここから葉月ちゃん。その胸につけている物を返してからこっち来なさい」

「あうう。分かりましたです」

そう言つて葉月ちゃんはすぐさま戻った。

「お前は大人だな」

「いやーあれで欲情するのは高校生としてどうかと思うぜ？」

「そりやそうだろうけどよ」

葉月ちゃんと入れ違う様に明久と康太（カメラと何やらクーラーボックスを下げた）が来た。

「あれ？ 誰か来てなかった？」

「葉月ちゃん来たけど戻った」

「あ、そうなんだ」

「ところで康太よ。お前のそのクーラーボックスの中身はなんだ？」

「……輸血パック」

どうやって入手したのかは聞かない方がいい気がしてきたし、そこまで出血することが確定しているなら連れてこない方がよかつたんじゃないかと思えてきた。

まあそんな時はそんなだよな……と諦観にも似た思いを抱いていると、葉月ちゃんと島田さんが来た。ただしパッドなし。

「ちゃんと準備運動やつとけよお前ら」

「あ、そうだね」

「バカなお兄ちゃん、一緒にやりましょう！」

「ぐふっ……あ、うん」

そうやって葉月ちゃんと明久と一緒に準備運動をやるうとしたところ、急に島田さんが大げさに咳き込んだ。

「あーごほんごほん。その……アキ？」

「どうしたのさ美波。身体の調子がおかしいの？」

「そうじゃなくて……その、どう？」

「どうって？」

分かってないのか素で首を傾げる明久。それを見た島田さんは一瞬拳を強く握った

がほどき、「似合うのって聞いているのよ!」とついに叫んだ。

「え、うん。胸の小さい美波にはとつても似合って右足の骨が折れるほどにイタ
イイイイイ!!」

「ふん!」

殴られるよりましだと思うのは俺も侵されつつあるからだろうか。

ちよつとヤバいかなと内心で思っていると、雄二が「島田安心しろ。明久はその姿に見惚れていた」と言った。

それを聞いた島田さんは「そ、そう……? なら素直に言いなさいよ」と頬を赤くしながら言った。

これは正しく伝わってなさそうだなーと思いつながら不意に女子更衣室の方を向ける
と霧島がその理想的なプロポーシヨンと長い髪をなびかせながら雄二に近づき――

「私以外の女を見ないで(ブスッ)」

「ぎやあああ! 目が、目がああああ!!」

――流れる様に見つぶしを行った。

「つておい霧島! ナチュラルに目を潰すなよ!! お前の旦那がお前の姿を見れないん
だぞ!!」

「誰が旦那だ流!!」

「……それはうっかり」

「うっかりじゃねえ！ 明らかに衝動的じゃねえか！」

目を抑えながらもツツコミを入れてくる雄二。

だけどそいつは無視され、明久や美波、葉月ちゃんの見線は霧島へと向けられる。

仕方がないので俺は雄二の方を歩き、「目薬あるけど使う？」とパーカーのポケットに入れていた目薬を取り出す。

「ああ。ありがたく使わせてもらおう」

それが終わったので今どうなってるのかなと思つたら、姫路さんの登場で場が一気に地獄と化した。

その最大の理由はなんと言っても胸だろう。明久なんかはおそらく自分の目を自分で刺して直視を避けているが、見てしまった康太は死にかけ、美波に至ってはドイツ語で神に怒りを訴えていた。

霧島は追撃しそうだったので必死に説得して止めていると、姫路さんがこちらに来て「皆さんどうしたんですか？」と訊いてくる。

天然でこれは確実に萌え死する奴らいるだろうなと霧島が落ち着いたのを確認した俺は、雄二と一緒に姫路さんから離れてもらい、咳払いをしてから答えた。

「自分達にとつての凶器を目の当たりにしたんだよ」

「凶器、ですか？」

「ああ。ま、些細なことだと思えばいいさ」

「そうですか……分かりました」

とりあえずささつと追い払う。その間明久は覚悟を決めたようだが、すぐさま来た姫路さんを直視して鼻血が緩みきった蛇口のごとき勢いで流れ出た。

…体も正直だな。

口には出さずにそう思いながら見ていると、明久が上を見たまま出血しているのを見て姫路さんがあわてていた。

ここまで来れば笑えるもんだなと思いつつ見ていると、「お兄様！ 留美もあれから成長……」とだんだん元気をなくしながら留美が来た。

ま、そりや当然だろうな。

そう思ったが、俺は口に出さず掃除が大変だと後々の事を思いため息をついた。

遊ぶ

「姫路さんはあれですね、女性の敵ですね」

「はい……」

「そうですね」

「ええ!? な、なんでですか!?!」

女性陣が何やらいざこざをやっている様だが俺には関係ないのでパーカーを脱いでさっさとプールに飛び込んでゆっくり背泳ぎをする。

「お前よく入れるな……まだ秀吉と薫が来てないだろ?」

「暇なんだからしようがない。俺はお前達みたく一緒に居る異性がないからな」

「……夫婦（ポツ）」

「俺の意志はないのか!?!」

とりあえず二十五メートル泳いだのでターンしてクロールで戻る。

戻ってきた時プールサイドが一瞬にして静まったので、俺は上がって何事か見て見ると。

女性用の水着を着てシヨックを受けている秀吉と、アニメキャラが入ったトランクス

タイプの水着を着て誇らしげな薫が来ていた。

俺は直球で訊いた。

「秀吉。お前店員さんに間違われたのか？」

「どうやらその様じゃ……」

「でも僕は間違われなかったよお兄ちゃん！」

「そりやお前はそうだろうがよ……」

どうせ行きつけの店行つたんだらうから間違われることないだろ。そう言いたかったが別にそこまで追求することでもない事象のため首を左右に曲げてから完全に見惚れていた明久に声をかける。

「あの二人は男だぞ」

「せレア k j k ふあ s ふあえ!!」

「何言つてるか分かる人ー?」

明久の言語が分からないので聞いてみたが誰も分からないらしい。

とりあえずプールに落とせば元に戻るかなと（危険なのでやめましょう）考えていると、薫が「お兄ちゃん！ 僕男っぽいかな？」とわざわざ近づいて訊いてきた。

「それを俺に聞くのか？ まあ小柄なのに体幹はしっかりしているみたいだし、か弱い女ではないな」

「本当!? それじゃあ秀吉さんとどっちが男っぽい?」

「それは……」

現状どう考えても秀吉の方が女に見えなくもない。それを言ってしまうと秀吉が完全にいじけてしまいそうなのでなんとも答えづらい。

「純粋無垢ってすごいな……いやこれも計算の内か?」 などと勘繰りながら急かす薫に言った。

「似たような境遇の人がいるからって比べるなよ薫。お前だつて女っぽいと言われるのが嫌いなんだから、そう言われるのが秀吉も嫌だつてわかるだろ?」

「……あ」

「なによりそうやって同類で差別しようとしている時点で男らしくないぞ?」 どちらかというとなんか奴らのすることだ。そうだな……お前達の家みたいだ」

「え、それじゃ僕ひよつとして……」

「すぐさま気付いたらしく声のトーンを落とす薫。」

「やっぱり聡いなと思った俺は、薫の目線に合わせて頭を撫でながら「分かったのなら秀吉に謝って来いよ」と笑顔で言っておく。」

「うん分かったよお兄ちゃん」

「そう言つて秀吉の基へ行く薫の後姿を見ながら何とか誤魔化したという成功のため」

息を吐いた俺は、何故か視線を一身に帯びていることに気付いて首を傾げた。

「どうしたんだお前ら？」

「スゴイお兄ちゃんまるで本当のお兄ちゃんみたいですよ……」

「まあ薫とはあいつが五歳の頃からよく一緒に居たし、あいつには上がいないからな。自然と俺の事を兄のように慕っているんだろ」

「そうなんですか……」

更に静かになったプールサイド。何やら湿っぽい空気になってるのは決して俺のせいではないはずだが、とりあえず誰か何か言つて……つて。

「おい康太どこ行つた？ さっきまで血の海に沈んでいただろ」

「ああお兄様。そういうえば先程クーラーボックスから輸血パックを取り出して黙々と輸血している殿方がいらつしやいましたわ」

「どうりで静かなわけだね……」

しかもまだやつてるらしい。もうなんか、哀れとしか言いようがなかった。

で、なんとか康太の輸血が終わつたようなので。

「んじゃ、改めて……ヒヤッホー……！」

ザバン！

「テンション高いわね豊橋」

「よっぽど忘れたい何かがあるのか、それとも全力で遊びたいからか分からんが……気持ちわぷっ」

「はっはっはっ！ さっさと入ってこいや雄二!!」

「上等だ！ テメエを沈めてやる!!」

とりあえず俺はプールに入って全力で遊ぶことにした。

んで、雄二を怒らせて追いかけてつこを今やっていると、同じくプールに入っていた明久が姫路さんから相談を受けていた。おそらく泳ぎを教えてもらいたいのだろう。

追いつかれて殴りかかられたので潜って雄二の足を引っ張って沈めてから逃げる時に浮きあがったところ、今度は島田さんと姫路さんのペアに。

薫と秀吉は二人で水を掛け合い、康太はそんな二人の写真を連射していた。

葉月ちゃんは今久に近寄っており、霧島は……あれ、どこ行つた？

「よくも沈めやがったな！」

「すげえな雄二」

自力で浮かび上がって怒りの形相で俺の事を追いかけてきたので、素直に感心しながらも逃げる。

逃げながら留美や由美は何してるのかなと見渡してみたら、どこから持ってきたのか知らないがパラソルとデッキチェアがあり、それに二人は座っていた。

「おうらー！」

大振りを沈んで回避した俺は振り返る。

そこにはそれを見越して沈んできた雄二と、その雄二の背後から音もなく忍び寄る霧島の姿が。

突っ込んで来ようとする雄二はそれに気付かないまま来て——霧島に足をつかまれたらしい。

動きを止められた雄二は何度も足をばたつかせるものの霧島には勝てないらしく、そのまま引つ張られる。

引つ張られた反動で息を吐いてしまった雄二は思わず水上に顔を上げて酸素を確保するようだ。

これは俺のせいじゃないんだがな……と顔を上げた俺に雄二が「テメエの、仕業か!？」と叫んできたのでおとなしく首を横に振る。

それで次の候補を見つけたのか「テメエを沈めてやるぞ明久!!」ともものすごい勢いで葉月ちゃんの近くにいる明久めがけて泳いで行つた。

三つ巴のバトルというか一方的な負の連鎖のような気がするんだがなと思った俺は、

ゆっくりとプールサイドへ上がった。

改めて自己紹介

「で、お前らは泳がないのか？」

「お兄様が子供のようにはしゃいでらしたのを鑑賞していたのです」

「とてもかわいらしかったです、流様」

由美はどうして頬を染めて言うのだろうかと思いつながら「来たんだから入れよ」と言っておく。

それに対して留美は頷いたと思ったら何か思いついた顔をして「ああお兄様。その前に日焼け止めを塗っていただけませんか？ 肌が弱いので」と言ってきた。

咄嗟に俺は振り返って飛んできたボールを蹴り上げてキャッチ。

なにやら殺意を持っている康太と明久に対し、「一々反応するなよ」とバレーのジャンプフロッターサーブでボールを返して二人の顔面へ直撃。

着地と同時に二人が水に浮かんだのを見た俺は、つい反射的にガッツポーズして

「おっしやあ！」と叫んでしまった。

「って、何やってるんじやお主は!？」

「なにして、報復」

「清々しいほどの笑顔でひどいことをさらっと言いおったな！」

やられたら徹底的にやるのが普通だろうになんて思いながらも秀吉を見て思いついた俺は、「そうだ秀吉」と声をかけた。

「なんじゃ？」

「留美の日焼け止め塗ってやれないか？」

「なんでわしがやらんといけないんじゃ!？」

「そうですねよお兄様! どうしてお兄様がやって下さらないのですか!？」

勢いよくそう言う留美に対し、俺は「いや……なんで俺がやらんといけないんだよ」と正直に言う。

「というかお前日焼け止め塗らなくても肌黒くならないだろ? ガキの頃よくプール一緒に入った時日差しが強くても肌黒くならなかっただろ」

「そ、それは昔の話ですわお兄様! というより、よくそんな昔の話を覚えておりますわね!!」

「ならいいだろ別に」

「うっ……」

何も言えなくなったようなので、「おとなしくプール入れよ」と言っておく。

「うう……お兄様のいけず。少しは留美の気持ちに気付いてくださってもよろしいのに」

……」

「流様。翔子さんと一緒に泳いできます」

「おう楽しんできな」

「それで、その……泳ぎ終わってから、なんですけど」

「ん？」

「一緒に帰りませんか？」

「ん？ そんぐらいなら（パシパシッ）別にいいけど」

「ありがとうございます！」

明久と康太からの攻撃を受け止めた俺は手を振って由美を見送る。

それを見ていた留美は衝撃を受けたらしく、「で、でしたら留美も同席してよろしいですか!？」と頼んできた。

それぐらいなら別にいいかなと思った俺が頷くと、「私も泳ぎます！」と綺麗なフオームで飛び込んだ。

「おー」

「なんとというかお主は……」

「まあお兄ちゃんの場合過去が過去だからね」

「む。それは一体どう事じゃ？」

「その話はまた別な時にするさ。必要があればな」

「そうか。なら今は敢えてきかねえよ」

「お、雄二。やつと解放されたのか」

「なんとかな」

いつの間にか男子勢がプールサイドに上がっていた。康太なんてすでにカメラでパシャパシャと写真を撮っている。

明久も上がっている姿を見た俺は、ふと先程の光景で疑問が浮かび聞いてみた。

「なんでプールあつたんだ？」

「ああそれか。用具室にあつた」

「それじゃ島田さんに抱きついてるのは？」

「あれはDクラスにいる清水という女子じゃな。試召戦争のときでも島田に対してはただならぬ執念を燃やしておったわい」

「それじゃ、今新しく入ってきたのは工藤なんだな」

「え？ あ、本当だ」

「あ、吉井君たちじゃん。どうしたの？」

工藤は普通に入ってきてきて平然と首を傾げて訊いてきたので、俺は逆に「そう言うお前は どうしているんだよ？」と訊ねた。

「いやー今日部活休みだったのを学校来るまで忘れててね。まあみんなで遊んでるみたいだしいいよね?」

「どうよ雄二?」

「いいんじゃないか別に。どうせ俺達の貸切だからな」

随分と太つ腹な雄二。まあこの懐の深さが指揮官としての素質なんだろうきつと。

なんか暇になったなあと欠伸をしながら座っていると、康太が二回目の輸血をしている姿を発見。

あいつはあいつで大変だよなと思いつながら工藤を見送った俺は、「なあしりとりでもしねえ?」と明久たちに持ちかけた。

で、毎度毎度明久が終わるので罰ゲームだなこりやとなり、その内容を決めていると、明久が気付いた。

「ねえみんな」

「ん?」

「なんじゃ?」

「どうした」

「あそこすごい白熱してるんだけど」

そう言って示した方向を見てみると、島田さんと清水さんペア、霧島と姫路さんペアでバレーをやっていた。留美と由美はサイドラインを見ており、工藤は審判をやっていた。

その雰囲気はただならぬ感じだったので、俺は思わずつぶやいた。

「白熱つつうか、こりや険悪そのものだろ」

「だな……特に島田と姫路の間がすごい」

「ただならぬ気迫を感じるの」

「何か賭けているんですかね？」

薫のその言葉にピンときたのか、雄二は明久に聞いた。

「なあ明久。お前にあげたチケットどうした？」

「あれ？ 美波と姫路さんが行きたそうにしてたから二人にあげたよ」

その言葉を聞いた瞬間、明久以外の声が被った。

「二」「それが原因だな（じゃ・です）」「二」

「え？」

まるで分つてないという顔をしてる明久。それに関しては本人が気づくか否かの問題なので俺達は何も言わず、この勝敗の予想を考える。

「どう見るこれ？」

「島田と姫路なら勝負は決まったようなものだが、姫路の方だな」

「そうですね。島田さんのパートナー、わざと手を抜いてるようですし」

「ふむ。確かにの……これは島田にとっては残念な結果になるやもしれぬの」

「頑張ってくださいですお姉ちゃん！」

「……シャッターチャンス」

いつの間にか一か所に固まった俺達。そして勝負を見るといいう形に。

未だにわかってない明久の事を放置して見ていると、ついに二セット目に入った。

「このままだったら姫路さん達勝利確定だな」

「そうじゃの」

そう言い合った、その時だ。

『あなたの事を明日から『清水さん』と呼ぶわ』

『……』

「ね、ねえ見た雄二！」

「なんじゃあのサーブは!?!」

「垂直に曲がるって……翔子もさすがに取れないだろ」

「あんなことできる人いるんですね……」

「は？ あれは多少難しいぐらいだろ。相手陣地に落ちて弾まないサーブよりは」

「あーそう言えばお兄ちゃん、よくそんなサーブやって封殺してたよね授業の時」

「あの時は七割ぐらいだったけど、今では100%そのサーブできるぞきつと」

「ええ!？」

薫が驚くのと同時に今度は破裂音が聞こえた。どうやら、ボールが割れたらしい。

「決着つかなかったな」

「そうだね」

一時休憩という形で姫路さん達もプールサイドに上がり俺達の方へ来た。

「みんなお疲れ様」

「すごかったの、あれは」

「ありがとうございます」

明久と秀吉の称賛に姫路さんが照れる。それを見ていた俺は由美に耳を引つ張られた。つたたた。引つ張るなよおい」

「見惚れてました」

「あいつには好きな奴がいるんだよ。そんな目で見るかっての。つうかよ、お前婚約者いるだろ」

『え!?!』

俺の発言に周囲が驚きの声を上げる。

だがさして驚くべきことのない俺達は普通に続けた。

「あれは、なくなりました」

「マジで？」

「本当ですわお兄様。清涼祭の時に起こったあれを起こして殴られた方が婚約者でしたの。あそこの家はもうありませんので婚約が自然消滅したんですわよ」

「そっかー消えたのかあの家。別にどうでもいいけど」

「でもあれは当然の結果だよお兄ちゃん。どの道浮いてたから」

「別にお前らの関係図に関しては大して興味ないんだが……そうか。金蔓になりそうな家が消えたか……」

『いやいやいや！ その前に色々説明しろ!!』

心底残念そうにつぶやいたが、そんなものは無視されて明久たちからの説明しろという叫びが強かった。

俺は留美達に視線を向けてからため息をついて言った。

「雄二と霧島、康太と秀吉に工藤は知ってると思っただが……しゃあない。今一度自己紹介するか。まずは留美からな」

「改めまして鈴鹿留美と申します。皆様ご存知だと思いますが、鈴鹿財閥の娘です。好

きなものはお兄様で、愛しているのもお兄様です」

「はい次」

「それじゃ、僕からで……。僕の名前は上下院薫です。日本医療のドンみたいな家の息子で、現在十三歳です！ よろしく願います!!」

「次は私ですね……。私、妃由美って言います。妃グループのトップを務める家の娘です。どうか今後ともお願いします」

「んで俺の名前は省略してこいつらとの関係性だけ言うと、留美は元妹。薫は元自称舎弟。由美は元婚約者だな。全部俺が家から追い出されたから一度切れたけど」

そう言つて見渡すと、案の定雄二と霧島以外は固まっていた。

まあこれぐらいなら言つても問題ない範囲だし。そう思いながらも留美に自己紹介に関して言いたいことがあったが、放置することにした。

その沈黙の中最初に口を開いたのは、明久だった。

「えつとつまり……。流つて元々鈴鹿さんと兄妹で、薫君にとつてお兄さんの存在で、妃さんとは婚約関係にあつたけど追い出されてこんな状況になった……。つてこと？」

「おお。すごいぞ明久そういう事だ。一番理解が追い付かなそうだと思つたのに、やるな！」

「さすがに僕そこまで馬鹿じゃないからね?」

「でも、どうして家を追い出されたのですか？」

明久の抗議の後に姫路さんが首を傾げてもつともなことを言う。それに共感するよ
うに秀吉たちも頷いたが、俺は笑って誤魔化した。

「義理立てする気はないけどそれは言えないんだよ。なんせ戸籍が抹消されてるから
な。『鈴鹿流が存在していた』なんて事実が必然的になくなり、『追い出された』という
事実はないことになってるんだから」

「そんな……」

「別にいいんだよ。おかげで別人として生きていけてるし、やりたいことやってるし」

そう言つて強引に話を終わらせた俺は「あー腹減った。更衣室に荷物置いてきたから
持つてくるわ」と言つて男子更衣室に向かった。

すぐさま荷物を持つてプールサイドへ戻つてきた俺が目にした光景は、姫路さんがバ
スケットを持つている姿だった。

すぐさま悲惨な状況になった光景がフラッシュバックしたが今度こそ大丈夫だろう
と思ひ直しつづ近づくと、こんな会話が聞こえた。

「——ですが、少ししたらお母さんとお父さんがトイレに籠つてしまつたんですよ。出
てきた時には顔が真っ青でした」

一体どうしてですかね？ と首を傾げる姫路さん。それを見ていた秀吉、康太、雄二、明久、島田さんは浮かべていた笑顔のまま固まっていた。

何作って来たか分からないけど食べたらヤバそうだなと直感した俺は、「よし、俺達男子で水泳競争やろう」と提案した。

「賞品は姫路さんが作って来たもの」

「え、でも三つしかないんですけど」

「なら俺が持つてきたものも分けてやる！ これでいいか！」

「「賛成!!」」

「あれ、僕は？」

「お前にはまだ早い!!」

薫が参加したそうにしてたのを一喝して却下した俺は、急いでスタートラインに立つ。

すると、工藤が「だったら僕がコールするよ」と言っただけで近くに立った。

全員が並んだのを見た工藤があげていた手を振り下ろすと同時に「よいいスタート！」と叫んだのを聞いた俺達は飛びこんで、我先にゴールへとめざ——

「くたばれえ!!」

——あいつら馬鹿だな。

結果。

「流。昨日は助かった」

「あ、西村先生。実はですね、秀吉と薰って女っぽいじゃないですか」

「いきなりどうした？」

「いや、それですね、着替えようとしたら明久と康太が鼻血出しまして」

「……」

「競泳してたら女物の水着着ていた秀吉の上が外れてプールが文字通り血の海になったんです」

「……………はあ。だったらその二人は別にした方がいいか」

「ちなみに掃除はちゃんとやらせましたんで。ルミノール反応が出ないよう、徹底的におかげで眠いです」

「……………本当にご苦労だったな」

という会話があり、内心二人に頭を下げていた。

発見される

「ん？」

李里香さんが置いていく書類が入った封筒以外にポストの中に入っていることに気付いた俺は、封筒を先に取ってからポストの中を覗く。

「ハガキ？ 一体誰がこんなの……」

入れたんだよと一人ごちに言おうとしたところで、そのハガキの差出人を見た俺はピシりと固まった。

なぜなら、差出人が無名だったからだ。

「……」

今日は土曜だが学校へは行かなければならなかったために誰もいない。

顔認識や監視カメラがある為その映像を調べれば一発で判明する。

だが、問題はそこじゃない。

李里香さん以外に教えていない家の場所を特定した誰かがいる。それが問題なのだ。まあ調べればわかるし、このハガキの内容も気になるな。

そう思った俺はハガキを裏返し——絶句した。

「……なんだこいつ」

そこに書かれていたのは、『至急連絡されたし』という文章と、電話番号だけだった。

とりあえずハガキと書類をプライベート部屋に置いてきた俺は、その隣にあるセキュリティ管理部屋となっている部屋に入って電気をつける。

「妖しさ満点の番号に電話するより特定だな」

はつきり言つて人物によつては電話する必要性すら感じない気がしている俺は、テレビを点けてノートパソコンを起動し、ケーブルでつないでテレビの画面がパソコンのデスクトップになっていることを確認する。

そこからちやちやつとソフトを起動して、俺が学校へ向かってから帰ってくるまでの間の玄関——ポスト近くを重点的に——の映像を再生する。

犯人の姿はすぐに分かった。

「ゴスロリで女……ねえ」

李里香さんが来る数分前に侵入し、ポストの中へ入れたようだ。

そこまでの行動力があるなら名前ぐらい書いとけよと思いつながらもこれぐらいかとお当に流しかけたところで、思わずその部分で映像を止めてしまった。

そこに映っていたのは居るはずのない人間。俺の所在を知っているはおかしいはず

の人間。

その人間はポスト付近まで入ってきたが特に何をするわけでもなく周囲を見渡して領き、そのまま背を向けて出て行った。それが、俺が帰ってくる十分ぐらい前の事。

あまりのすれ違いに安堵しそうになったが、逆に恐怖心が募った。

なんでだ。なんであいつがこの場所を知っている。この際あの女たちの方はどうでもいい。そんな些細なことより、こつちの方が何倍も重要だ。

不動産屋の口の堅さは信用しているから漏れている気はしない。万が一漏らしたという報告が上がった場合の条件を知っているのだから。

李里香さんも除外。あの人は遭遇することはないから。

他には誰も入れてないから絶対にばれることはない……はずだったのに。

漏洩の線が薄い気がした俺は、一つしか思い当たる可能性がなかったことに気付き、たまらず床に拳を叩きつけて叫んだ。

「なんでまだ監視されなきゃいけないんだよクソが!!」

その人物の名は——鈴鹿東角。

どのくらいそのままでもいいだろうか。ただ気が付けばノートパソコンの画面は真っ黒になっており、それと同じようにテレビも暗くなっていた。

俺はそのままパソコンの電源を切ってからテレビの電源を切り、床に叩きつけた手を握ったり開いたりして調子確かめる。

……異常はないか。多少血が流れているけど。

包帯巻いてほっとくか。そう思った俺は立ち上がって伸びをし、部屋の電気を切つて出た。

「あー畜生」

もはやハガキなんてどうでもよくなってきた俺は苛立つ心を抑えず、このアパートに俺以外誰もいないことをいいことに悪口を吐きながら李里香さんが置いて行った書類を一枚一枚確認していく。

「これで何度目だあの野郎。どんだけ追い出した人間の事を監視したいんだよバカじゃねえの？ 自分でやった癖に心配するとかどんだけなの？ こっちにとつては迷惑以外の何物でもないから関わるな来るな無視してろよって言いたくなるんだから」

一瞬ストレス発散に何か殴れるものがないかなと探したくなつたので頭を振って書類に目を通し、必要とあらば判子を押ししたりする。

何時かはばれると思つてたけどこれは早すぎて笑えない。笑うどころか憎悪が噴き出てきた。

思わず持つていた判子を折りそうになつたので判子をテーブルに置いて伸びをし、何

も食べていないで作業をしていたのを思い出した。

現在時刻午後七時。完全に夕飯の時間である。

弁当箱も洗ってなかったなと思いついた俺はカバンから弁当箱を取り出してキッチンの流し台に放置して冷蔵庫を確認する。

「うわー相変わらずほとんど入ってねぇ」

我が冷蔵庫ながら入っているのはソースや卵、ハムやケチャップといった類のみ。野菜なんかはなく、冷凍庫の方も見てみたが氷以外入っていないかった。

外食する気なんて起きないし、今夜はどうすつかな…と頭を悩ましていると、携帯電話が鳴った。

夕食の件を一旦放置することにした俺は、相手が李里香さんだということを確認して電話に出た。

「もしもし」

『社長。今お暇ですか？』

「あー……まあ」

さつきまで書類の確認をしていたことを伏せてそう答えると、『夕食は食べましたか？』と質問が。

「今から食べようと思っていたところだけどそれが？」

『そうですか。でしたらご一緒はどうですか？　ちょうど割引券が二枚ありますので』

この瞬間。俺の頭の中では自炊するために食材を明日の分まで買いに行くのと、夕飯を李里香さんと一緒に食べて帰る時にコンビニで朝食を買い、明日は明日で買い物をするという選択肢が攻防を開始。

脳内時間にしてわずかに四秒で決着がついた俺は、「その店って格式高かったりする？」と訊いてみる。

『別に高くはありません。隠れ家的なお店みたいですが』

「まあいいや。お願いしますよ」

『実はもう家の前にいます』

どこぞの都市伝説かよ……と思いつながらため息をついた俺は財布と携帯電話を持って部屋を出て鍵を閉め、高校の制服のままだということに気付き急いで戻って着替えてからアパートの玄関の方へ行ったら、本当に李里香さんが待っていた。

「いつから待ってたの？」

「ほんの五分ほど前です」

怪しい人に思われなかったのか……？　と考えたがそこら辺は大丈夫だろうと思った俺は「それじゃ、お願いします」と言った。

ちなみに。

「お、流。ここ来るの初めてだろ」

「そういうあんたはここで飲んでいいのかよ——警視總監」

「いいんだよ。ちゃんとやることは終わらせた」

李里香さんに連れてこられた隠れ家的なお寿司屋さんに入ってみたとところ清涼祭二日目に来たサングラスをかけていた男——警視總監と再会した。

思わぬ再会があつたなと思ひながら李里香さんを口説こうとして失敗したのを笑つてやつた。

そーいや明久たちバイトするんだつたなという話を思い出したのはその時だった。

手伝わせる

教室に入ったたら力なく卓袱台に突っ伏している雄二と明久の姿を目撃した。

俺は近づいて「どうしたんだ一体」と質問する。

答えたのは、雄二だった。

「バイトやったら翔子たちのせいで滅茶苦茶になった。そのせいでバイト代ももらえなかったんだよ……」

「ふーん」

「もうバイトなんてやりたくないよ……」

明久がそんな風に弱音を吐く。

そんな様子を見た俺は、そう言えば今週末のイベントの人手が足りないとか言ってたなあと思ひだし、「まだバイトしたいのなら俺が紹介するけど?」と提案する。

のそのそと顔を上げた雄二は「本当か?」と疑わしそうに聞いてきた。

「本当本当。内容とかは簡単なことだし、向こう次第だけど日給は高い方だと思う」

「……いつやるんだ?」

「今週の土曜。確か西村先生の都合で補習ないだろ?」

「ああそうだな……しゃあねえ。やるか」

「明久やる？」

「僕は……どうしようかな」

明久が渋っていると、康太と秀吉が近づいてきた。

「何の話をしておるんじや？」

「ん？ バイトの話。今週末知り合いが人手足りないって言ってたのを思い出して」

「……あの時は散々だった」

「そうじやの……色々と衝撃的なバイトじやった」

「で、やる？ 雄二は参加するって」

「……俺もやる。結局お金が入らなかつたから」

「わしも参加するとしようかの。流が斡旋するバイトなら安心して働けそうじやから」

「え、秀吉も参加するの？」

「なんじや、明久はやらぬのか？」

「うんやるよ」

「さつきまで渋ってたよなお前」

「……今更だけど背に腹を変えられない現状だったことを思い出してね」

「お前がそんな言葉を知っているだ?!？」

「流それはいくらなんでも失礼じゃない!」

俺が驚くと明久が反論したが、雄二達は黙って視線を逸らしたことにより浮き彫りに。

ヒドイや! と泣きにはいる明久を放っておくことにし、「じゃ、土曜日午前七時に校門前に集合。他言無用でよろしく」と集合時間と場所を言っておいた。

で、土曜日。

六時半に校門前で待っていると、秀吉と康太がいつもと変わらぬ感じで来た。

「おっす」

「おはようなのじゃ流。今日はよろしく頼むぞ」

「……よろしく」

「そーいや朝食食べた?」

食べてない俺がそう訊ねると二人とも食べてないと言ったので、会場へ行く前にコンビニへ行って買うかと移動の予定を瞬時に考える。

六時四十分。雄二が肩で息をしながら来た。

「…ハア、ハア……何とか撒けた」

「何やってたんだよ」

「……翔子から逃げていた」

「……なんかすまん」

そう言うのと「こんな朝早くに集合なんて、一体どこへ向かうんだよ？」と質問があった。

「それは全員そろって移動中に話をするから」

「あー眠いや……」

「言ったそばから来たの」

「……たぶん徹夜」

「あいつ休みの日はずっとゲームやってるからな。家族がいないからって」
「ふうん」

適当に相槌を打ちながらのそのそと歩いてくる明久を待っていると、その後ろから乗用車がクラクションを鳴らさずに来ていた。

明久はそれに気付かず俺達に近づき、欠伸をしながら「おはよう」と挨拶をする。

「間抜け面だな」

「……バイトやるとは思えない」

「さすがに呆れてものが言えんわい」

三者三様の言葉にも明久は動じずにいたので俺はとりあえず眠らそうと考えて「今来た車に乗ってくれ。こつから小二時間ぐらい移動するから寝ててもいいが、途中で朝食買うためにコンビニ寄るからな」と言っておく。

それを聞いた雄二達は財布を持つてくるのを忘れたようなので、「まあ俺が適当に買つてきてやるよ」と言いなおす。

「すまないな」

「……お金は後で返す」

「恩に着るぞい」

「ありがとうございます流様」

「……明久を眠らせた方がいいと思う人」

「「異議なし（じゃ）」」

とりあえず明久眠らせて車に乗った俺達は、途中特に何があつたわけでもなく目的地に着いた。

「着きましたよ」

「あー悪いね」

「「「ありがとうございます」」」

俺は助手席から降り、明久たちは後部座席の方から降りて運転してくれた人——高野さんにお礼を言った。

高野さんは手をひらひらと振るだけで言葉を返さず、そのまま車を発進させた。

それを見送った俺は、会場となる建物を見上げながら「んじや、車の中で説明した通りな。まずは挨拶するぞ」と言つてその建物——ブリッジゲームズ支社隣にある発表会場専門のビルの中に先陣を切つてはいることにした。

……そーういや俺が社長（実質的）だつて言つてなかつたよな。
そんなことを思つたが、別にいいかと思ひ直した。

「つうかいイベント会場設営のバイトつて聞いたことないぞ」

「……俺はそれに撮影も含まれている」

「わしと明久と雄二は裏方じやな。……ところで、明久は何を呆けておるのじや？」

「えつ、ここブリッジゲームズなんだよ？ ゲームをやつてる人にとつてはこれほど」

「言つとくけど明久。ここは本社じやないから。ただ発表する場となつてただけだから」

「……え？」

更に目を丸くする明久。それを見た俺達はため息をついた。

「お前入口にちゃんと書いてあっただろ」

「そうじゃ」

「うっ……だつて会社名見たら誰だつてそう思うじゃないか！」

「よく見ればその隣にちゃんと書いてあつたぞ」

「……見落とすし」

「ぐふっ」

項垂れる明久。正直いって邪魔になるのでさっさと起こし、俺は今回のトップ——春日部さんを探す。

と、向こうがこちらに気付いたのか「来ましたか！」と大きな声で呼びかけてきた。

反射的に声がした方へ振り向くと、こちらに向かつてくる白衣を着た長身の優男が途中でこけた。

「「「「……………」」」」

黙つてその様子を見守る俺達。一方で、周りの人たちはお構いなしに作業を続ける。

倒れて数秒でむくりと春日部さんは起き上がり、「いやーごめん。ちよつとコード踏んだみたいで」と言いながら近づいてきた。

雄二は俺を肘でつついて訊いてきた。

「あの人が今回のバイトを紹介してくれた人か？」

「ああ。春日部さんっていうんだよ」

「流よ。お主の交流関係はどうなつとるんじや？」

交流関係というかこの会社一応俺が経営している（書類上では李里香さん）んだが、そう言おうと思つたが今回俺は知り合いという設定を作っているのでうまく誤魔化

「社長。この子たちが今日バイトしてくれる子たちですか？」

——せそうにないな、これじや。

ドジなのは知ってるがいくらなんでも考えなしてみたいだぞとため息をつく、案の定雄二達が『社長？』と首を傾げる。

その反応でやってしまったのをやっと認識したのか、「あはは、社長と知り合いなんだよね、流君」と慌てて誤魔化する。

雄二が何やら考えている時点でもうバレるのは確定なんだがな……なんて考えながら「まあそうですね」と返すと、「まあいいか」と雄二の声が。

自分で放棄してくれてよかつたと思つた俺は、「それじや、さつそく指示をください」と春日部さんに言った。

午前九時。

春日部さんからの指示により別れた俺達は、向かった先の人たちからの指示を受けて働く。

ただし俺はというと、一人設営会場の上の階に来ていた。

「すいません社長お手を煩わせて」

「そう思うならあいっらの日給上げたれよ」

「そうですね……あ、さっきはすいません。思わず言ってしまったて」

「まったくだ。ばれたぞ完全に」

ため息をついてそう言うのと、春日部さんが「本当にすみません」と書類を見ながら謝ってきた。

「まあいいや。んで？ 今日ってパソコン教室だっけ？ 月に一度の」

「そうですね。今日はプログラミングについてになりますよ。受講者は段々と増えているようですし。何より受けもいいですね」

「まあ良かったよ。このボランティアの評判がよくて」

「うちのボランティア活動はその筋じゃ有名ですからねー。あ、ここ間違ってる」

「昨日何してたんだよ一体」

「あーちよつと次のゲームについて軽い論争をしたので……今この有様なんです」

「お。もう計画するんだ？ 頑張ってくださいよ」

「社長も手伝ってくださいいよー」

軽い悲鳴を無視した俺は、「それで？ この場に呼んだ理由って何？」と質問した。すると書類確認をやめ、真顔で質問してきた。

「自分で経営を立て直したのに、何ほつという学校に通っているんですか？」

「……」

ようやくというかよく今まで言われなかったなと思いつつ黙っていると、「社長にとつてここはその程度の物だったんですか？」と言われる。

ふうと息を吐いた俺は「今までよく言わなかったな」と感想を漏らす。

「別に社長の事だから言わなくても考えていたことでしょう。ですが、誰かが言わないといけないと思っただんです。いくら年齢が未成年だからといって、実質的社長であるんですからね」

「だから李里香さん書類回して来たのか……」

「実際彼女は頑張っています。社長の代わりに矢面に立って。彼女がいなかったらこの会社はありませんし、社長だつてこうして自由に生活できていませんよ」

「だろいな……今度何かお礼でもするか」

「というより、先程の質問に答えてもらっていいのですが」

今更話を戻してきたので、俺は考えるそぶりを見せて即答した。

「言わなかったっけ？ ある程度軌道に乗ったら権限を譲渡するって」

「それで高校に入学ですか……」

「ま、ぶっちゃけて言うのと引き取ってもらった人が兎にも角にもいい加減な研究者だね。

俺を引き取った理由が『システム解析がサクツと終わるだろうから』だったよ」

「……なるほど。確かにそれじゃしょうがないですね。先代の社長も笑って許すしかないでしょう」

「夏休みになったら墓参りするか」

「社員一同で行かせてもらいますので日付の連絡よろしく願いますね、その時は」

「つたく」

ちやつかりしてるといふかなんというか。そんなことを考えながら息を吐くと「春日部さん。登場お願いします！ ……って、社長!？」と言われたので席を立つ。

「戻るんですか、社長」

「ああ。うちの学校の奴ら真面目なんだけど一直線な奴らが多くてさ。正直退屈しないんだわ」

「そうですか。ま、楽しそうならいいですよ。社長。頑張ってください」

「ああ」

ま、高校卒業したらこっちに帰ってくるんだけどな。そう思いながら春日部さんと拳を打ち合わせて部屋を出た。

ちなみに。

俺が会社の経営者だという事は当たり前のようにバレたが、そんなのあまり関係ない様で。

『だって流だから（じゃから）』

の一言で解決したらしい。

バイト代は二万弱（康太だけ三万弱）貰ってみんなうれしそうにしていたので、まあ良かったのだろう。

合宿の話

合宿数日前の日

梅雨の季節となる六月。

竹教頭の後釜を引っ張ってきてそいつに全部押し付けようとしたのに解析を丸投げにしやがったババアに対する恨みつらみを吐いたところかどうかどうしようもないのでいつも通り朝早くから学校に来て新しく赴任した教頭と一緒にやっている。

「あのさ、流君」

「んー？」

「僕、一応君より年上のはずだし、立場も僕の方が偉いはずなんだけど」

「だなー。あ、スパコンにデータ出力終わった？」

「まだ八割……って、僕まだ書類終わってないんだけど」

「二時間で終わる終る。あ、元の方は送信終ってる」

「え、本当？ それじゃ二割ほど来てないってことになるんだけど……って、うわっ」

「あー一気にデータ来たのか」

———こんな風に。

「流君流君！ そっちの方みてないでこっちのデータ処理やってよ!! 僕書類やりたいから!!」

「えー書類なんてすぐ終わるじゃん」

「久し振りにこんなの扱ったから効率の良いやり方忘れたの!」

後ろの方からそう叫ぶ教頭。

それを聞いた俺は、システムにつないでいたノートパソコンを床に置いて立ち上がり、慌てているらしいそっちに向かった。

この学校に新しく赴任してきた教頭。名前は荒木新座衛門。あらかしんざえもん

色々あった去年に知り合い、今もなおバイトをしてるようなので昔の好で頼んだら二つ返事で了承してくれた三十四歳だ。

商社へ派遣などをやっていたらしく金に関することやその他諸々をそつなくこなせる人。教えれば一時間ぐらいで『プログラム言語って難しいよね』とか言いながら教えただことやるんだから大した人だよな。

「ふう。これでよしつと」

「もう八時になるのか…食堂空いてる?」

「多分空いてるんじゃない? 俺も教室行かないと」

「行つてらっしゃい」

ひとまずシステムデータのコピーが終わった時刻が登校時間のリミット近くだったので俺は急いで教室へ。

朝食は研究室ルームでエナジードリンクと栄養補給食品だけなので腹は減っているが、その分弁当の量は多いので色々大丈夫だろう。

部屋の近くに誰もいないことを確認した俺はそのままFクラスへ向かうことにした。

「What's up, Hideyoshi?」

「異常事態じゃな」

なにやら扉の前に着いたらそんな会話が聞こえた。

が、そんなことに興味を持ってない俺は普通に開けて挨拶することにした。

「おいっす」

「あ、な、流。Good morning」

「動揺しすぎだ。人いなくなりにさっさと行け」

「あ、うん。それもそうだね」

そう言つて明久はダッシュで教室を出て行った。

その後ろ姿を見たららしい秀吉が「一体何があったのじゃ?」と質問してきた。

「さあ? 俺に分かるのは急いでいたということぐらいだな」

「なぜじゃ?」

「さあ? このクラスに殺されるからじゃないのか?」

「それなら納得いくのじゃが:それはそれで問題だと思うのは普通かの?」

「普通普通。何事も暴力沙汰でエンドレスループしてるより普通」

「……ところで流。お主今日はどこか淡泊ではないか?」

「ん?」

普通に会話していたところ秀吉がそんなことを言ってきたので作業する手を止める。

そこまで露骨に態度に出てたかと思いいながらも黙っていると、秀吉が「何かあったのか?」と質問してきた。

まあ別に隠すようなことでもないしなと思いいながらため息をついて言った。

「留美と由美の二人から合宿が終わったら遊びましようと言われた」

「それは脅されたと言わぬじゃろ」

「明久と雄二のトーナメントで勝つための証言を盾にしてきたんだぞ? それ脅し

じゃなくてなんて言える」

「……すまなかつたと思っておるのじゃ」

「まあイメージ回復のためなら必要の犠牲だと割り切ってるけどよ……鬱だ」

「割り切れておらぬじゃろそれは……」

何やら外から叫び声が聞こえているが反応する気もなく、ただ机に突っ伏す俺。

ちなみに他人には聞こえないような小さな声で話しているので反応はない。前に試して問題なかったため、聞かれない話はこの解決できるようになった。

……というか、問題はそれ以外にもあるんだよな…。

昨日転校生の話をババアから聞いたせいで鬱に更に近づいたことを悟られない様にといいながら、色々な要因が重なって一層騒がしいクラスの中静かに俺は寝ることにした。

眉間に思いっきり何か当たったので顔を上げる。

すると、西村先生が睨んでいた。

「おはよう豊橋」

「おはようございませす」

「ぐっすり眠れたか？」

「数十分ですけど脳がすつきりするぐらいには」

「そうか……では話を聞いてなかったな？」

「はい」

「詳しくは机にあるパンフレットを見る様に。あと、今から転校生を紹介する」

俺は話半分にパンフレットを暇潰しがてらめくる。

「その間に誰かが『女ですか!』と質問したが無視され、「いいぞ」と廊下の方に声をかける。

ちらつと見ずとも先に誰か来るのか分かっていた俺は、クラス内の興奮がすごい中ひとり全日程を読んでいた。

……やっぱり秀吉と薫は男子から外されたか……つて、あれ？　俺も外れてないかこれ？

そんな事実気付いたのは、入ってきた女——アデルⅡアミエの名前を聞きながらだった。

「……であるから……で」

黒板に字を書きながら解説する福原先生の声を聴きながら周囲から発せられる殺気を感じ取りつつ、隣に座っているアデルを見る。

表情は変わっていないがさそうだがどことなくつまらなそうな感じが分かる。

参謀貴族つてのはやっぱり頭がいいんだなと思いつつ、黒板に書かれ、先生が説明している部分をささつとまとめてノートに書き留めていた。

なぜこいつがいるのかというと、先程フランス語で隣に来た際説明してくれた(紙に

書いてあったもの。

要約すると参謀貴族のリーダーである妹——セリーヌⅡアミエがこの学園に入学したいという我が儘をかなえた結果、自分も入学せざるを得ず、俺を見張るためにこのクラスに自分が入ることになったそう。

……歳は俺と同じらしく、妹は一つ下らしい。

日本語とフランス語を流暢にしゃべれるのだから頭はとて面白い方なのに大変だと憐れみそうになったが、どんだけ妹好きなんだよとしか思えなかった。

まあ戦力としては申し分ないんだよなと考えながらもこうして授業が始まっていくのだが……どうにも視線が厳しい。

いやまあ理由は察することができるし同情も出来るのだが。

そこは抑えとけよ……とうんざりしながらも授業が終わったので俺は黙って窓を開ける。

「どうしたんで？」

「逃げる」

不思議そうに首を傾げて訊いてきたアデルに親切に答えて俺は何度目かになる飛び降りて脱出した。

そーいや現地集合なんだよな、うちのクラス。ま、俺初日に遅れるけど。

出発（別行動）

そんなもって合宿初日。

俺はあらかじめ雄二やババア、西村先生にメールを送っておいたので、現在日程が重なった社員旅行に社長として参加することになった。

旅行地が若干遠いのでぶっちゃけ夜に着くには夕方辺りに電車に乗らないといけないのだが、久し振りに俺が来たのがそんなに嬉しいのか、借りたバスの中で俺はひっきりなしだった。

「社長！ 今度またゲーム大会やりましょうよ!! 絶対負けさせますから!」

「言ったな? だったら今この場でやろうか? ゲーム機はあるんだから」

「ちよつ、社長が持つてるゲームで勝てるわけないじゃないですか!!」

「社長。今日行く遊園地一緒に回りませんか?」

「楽しんできな」

などなど。

まあそんな感じで移動中バスに乗っていた奴と喋って（六台編成のうちの一台中）疲れ
た俺は、自分の席に座って欠伸をする。

夜更かしをしたわけではなく単純な疲れ。後二時間は移動するとさすがに気が滅入る。

今頃あいつら移動中かなと思いつながら、何かよからぬことが起きそうだという考えが頭をよぎった。

「着きましたよー社長」

「別に俺最後でもいいって」

「こういうのはやっぱり偉い人が最初ですよ」

そんな風に言うので、仕方なく俺はバスから最初に降りた。

来た場所は遊園地。移動して最初の目的地がここ。

ここで二時間遊んでからさらに移動して牧場で体験してからホテルというのが初日の日程らしい。

ホテルへ移動する際に俺は消えるのでその後の日程は関われないが、まあゲーム大会での景品は李里香さんに教えておいたからそら辺で問題が起ることはないだろう。

問題が起るとしたらさうだな……ホテルへ移動する前に俺が一人消えるという点だろうか。さすがに引き止めるなんてことないだろうが、そうなった場合の対策も考えないといけないのだろうか。

面倒だなと思いつながら降りてくるのを待っていると、二号車に乗っていた李里香さんがこちらに来了。

「色々考えているようですね」

「まあ。両立つていうのは面倒だなと思いつながらね」

「社長が選んだ道ですから」

「そうなんだけどもね」

続々と集まる社員たち。これはツアーじゃないのでガイドはいないのだが、俺達が立っている場所に自然と集合してくる。

まあいいことだよな。そう考えた俺はそろつたようなので「はいそれじゃ、二時間後に集合！」と叫んで手を鳴らした。

「さてどうすつかね……」

ひとまず入園してみたのはいいが、俺は特に遊びたいアトラクションの目星をつけていないので手持無沙汰になってしまった。

入口の方でどうすつかなどパンフレットと睨めっこしていると、「すいませーん」と誰かを呼ぶ声が聞こえたが無視。

「すいませーん！」

「つってもここ、家を出る前に遊びつくしたと言っても過言でもないからな。真新しいものもなさそうだし、ゲームコーナーで時間でも潰そうかな。」

「すいませーん、つて言ってるじゃないですか！ 聞こえてませんか!?!」

「ん?」

何やらうるさいので顔を上げる。そこにいたのは、サングラスをかけた女の人。

「この人どこかで見たことあるな…….」と思いながら黙って周囲を見渡すと、「あなたです! あ・な・た!!」と指差してきた。

「なんですか一体?」

声をかけられた理由が分からないので首を傾げる。

「が、相手はカメラを俺に見せてこう言った。」

「一枚撮っていただけませんか?」

俺はカメラを触って怪しいものがないか探し、問題なかったのでハンカチで指紋を徹底的に拭いてそのまま彼女の方へレンズを向ける。

「撮りますよ!」

「え、ちよつと早くないですか!?!」

「はいチーズ!」

彼女の抗議をスルーして写真を撮った俺は、写真の画像を見ずに指紋をふき取って彼

女に渡す。

が、彼女は受け取らなかった。

「不意打ちはひどいです。もう一回お願いします!」

「一枚という話でしたので引き受けましたけど」

「いいじゃないですか! もう一枚お願いします!!」

「……ハア」

面倒になったのでため息交じりに距離を取り、ハンカチを使ってカメラを持ちながら「それじゃ撮りますので」と彼女に向ける。

言われた彼女は慣れた動作で自分が撮りたいポーズをしたので、そういやこの人C M撮影の時にいたなと思いつき出しながら写真を撮る。

パシャという音が聞こえたのかポーズをやめて彼女は近づいてきたので「どうぞ」と返す。

「ありがとうございます! 一生大切にしますね!!」

「はっ」

「あ、いえ! なんでもありません!! では!」

おかしい言葉が聞こえたので思わず聞き返したところ誤魔化して逃げた。

なんだったんだ一体……と思いつながら彼女の正確な経歴を思い出した俺は、思わず地面

を叩きそうになった。

なんだってこんなところにいるんだよ財閥の嫁がああ!!

「……どうしたんですか、社長?」

自由行動が終わり移動中。頭を抱えている俺に社員の一人が声をかけてきた。

別に言っても言わなくても変わりはしないので顔を上げて黙っていいよかと思っただが、この際巻き添えになってもらおうと思ひ答えた。

「どこ巡ろうか考えていたら菊谷財閥の嫁さんと遭遇した」

「へー……え?」

「写真撮ってと言われたから指紋を残さずに撮影したが……うちの会社のゲーム宣伝のCM作成時にいたよな。あの人、タレントの方が有名だから」

「え、あれ? マジですか?」

「おおマジ。気付いた時にはあっちが消えた後だからやるせない怒りに頭を抱えていた」

「えつと……ドンマイ?」

そう言われたがさすがにその言葉で解消されるほど俺の闇は浅くないので深いため

息をついた。

「どうすんだよマジで……よりによって滅茶苦茶厄介な財閥じゃんかよ」

「そうなんですか？」

「どうやって潰そうかな……」

「いや社長正気ですか!? 財閥にケンカ売るって!!」

「ん? いやいや。喧嘩は売らないよ。売ってきたと判断したら報復するだけ」

「……一番ケンカ売っちゃいけないタイプですね、社長」

何やら隣の奴が意気消沈したようだ。その代りに俺の気持ちは上向きになったので、

「ありがとう」と肩を叩く。

「元気になって良かったです社長……」

「いやーあそこのゲーム機のスコア全部塗り替えてもまだ苛立つてたからなー熊原さん

のおかげだ。お礼にこれあげる」

「……あの、社長これって……」

何やら恐る恐るだったので、俺は首を傾げてから言った。

「別に問題ないよ。こういうのって申告する必要ないだろ？」

「いやそうですけど……この時計、結構高いですよね？」

「別に俺は安物でもいいし、たまにしか着けてない。その上メンテナンスは俺の知り合

いだから万全。それに、もう一つ持つてるし別なの」

「……いいんですか？」

「あげるあげる。愚痴聞いてくれたお礼」

そう言う熊原さんは「ありがとうございます！」と頭を下げてきたので「こつちこそ」と言つて目を閉じた。

……本当、どうすつかなー。

で、牧場体験の方だけど……まあそつちは何事もなくてよかつたよ本当！ マジで警戒心引き上げて行動したからな俺!!

搾乳とかいろいろやって一部の奴らが『次のゲームに使えるかも……』なんて言つてるからどうしようもねえなとか思える位何もなかつた。

だったらもう大丈夫だな。そう思つた俺は一人でバスに移動して荷物を取り、そのままタクシーを拾つて合宿所へ向かつた。

……面倒な事態が引き起こっていることも知らずに。

証言（見てないけど）

とりあえず何とか風呂に入る時間までに間に合った俺は、そのことを報告しに事前にもらったパンフレットに書かれていた西村先生の部屋へ向かう。

荷物をそのまま持つての移動なので細心の注意を払いながら誰とも会わずにたどり着いた俺はノックする。

『誰だ？』

「西村先生。ただ今到着しました」

『豊橋か。丁度いい』

そう言うのと部屋側から扉が開いた。開けたのはなんと秀吉。

「なんでお前が？」

「うむ……今反省文を書くためにここに連行されたところなのじゃ」

「？」

「ともかく入れ豊橋」

「ういーっす」

何があったのか知らないが西村先生が急かすので俺は荷物を持って部屋に入る。

そこにいたのは案の定、康太、明久、雄二の三人。しかもどこか安堵した様子。荷物を置いて近づいた俺は西村先生に聞いた。

「何があったんすか？」

「こいつらが女子風呂を覗こうとした」

「へえ」

嫌な予感つてのは当たるものだなと思いながら「その前に何か騒動ありましたか？」と質問すると、「女子更衣室にカメラが仕掛けられていたそうだ」と返ってきた。

……なるほど。

「確証はないですけど、少なくともこいつらができる可能性は低いと思いますよ？」

「なぜそう思う？」

一通り頭の中でシミュレーションして一番可能性の高いことを口にしたら当然の様に食いついてきたので、俺は雄二に聞いた。

「なあ。ここに来た時お前達どうしてた？」

「あ？ ……ムツツリーニが乗り物酔いでグロッキーで明久は栄養失調気味でフラフラ、俺や秀吉はその二人の介抱で付きつきりだった」

「そうじゃの。電車から降りたらムツツリーニがいきなり吐いたから慌てたぞ」

「つて、あれは僕の食事を雄二達が奪ったからじゃないか!!」

「……先程まで酷かった」

移動中に色々あったのが容易に想像つく証言の数々。

まあそんなことはいいとして、俺は西村先生に言った。

「とまあ、本人達はこう証言してますからね。それに、一緒に来た人たちならわかるはずでしょ?」

「……お前達と一緒に来たのは誰だ?」

「鉄人が僕達の話を目撃して聞こうとしてる!?!」

「西村先生だ。吉井、お前は俺をなんだと思ってる」

「鬼教師」

「お前は英語の反省文だけじゃなく数学のプリントもやってもらおうぞ」

「横暴だ!!」

明久の罰が増えたのは自業自得なので無視していると、「一緒に来たのは島田に姫路、それにアミエ姉妹もいたの」と秀吉が代わりに答えた。

それを聞いた西村先生は目を瞑って何かを考えていた様子。

俺は正座している明久と雄二と康太に近づいて「初日から災難だな」と言うと、「ああまったくだ」と雄二が吐き捨てた。

「こっちはこっちで面倒なんだがな」

「何かあったのか？」

「脅しをねつ造された」

「……それまたなんで？」

「知らん。身に覚えのない言葉が録音されていたんだ。きつと今回のカメラ騒ぎの犯人にな」

「あ、同一人物だつてわかつたのね」

「ああ。だが肝心の奴だけは分からん」

「だから覗きを、ね」

「……その話詳しく聞かせてもらおうか坂本」

長考の際にも話を聞いていたのか急に反応してきた西村先生。その態度を見た雄二が反射的にしまったという顔をしたので肩を叩いて「俺に任せろ」と耳打ちして西村先生の方を向いた。

「西村先生。雄二達は少々答えづらいそうなので俺が代わりに言ってもいいですか？」

「来たばかりのお前がなぜ説明でき……いや、分かった。話してもらおう」

「まあ言われた通り来たばかりなので大部分が想像なんですけどね、簡単に言うとは脅迫犯を探すためにのぞきをしようとしたそうです」

「脅迫だと？」

「ええ。雄二は身に覚えのない発言が彼女の元に「あいつは彼女じゃない！」あるそう
で。康太と秀吉は手伝いで、明久も脅されたんじゃないですか？」

「そうなのか吉井？」

「は、はい……」

「まあ合宿のパンフレットを渡された日に人目のつかない場所——つまり屋上へ行つて
確認してわかったんでしよう。外で叫び声が聞こえたのを覚えていますから」

「流つて本当にすごいね。尚更Fクラスにいる理由が分からないや」

「まあそこは置いといてくれ。……で、カメラが置かれていたという話で標的にされた
時に気付いたんでしよう。自分達を脅した奴とカメラの騒動の人間は同じだって」

「なるほど……その話は本当か坂本？」

「あ、ああ。流の言うとおりで」

「そうか……」

そう言つて再び考え込んでしまったので、どうしたものかと思ひながら視線を彷徨わ
せていると、没収したと思われるカメラが普通に置かれていた。

「これ風呂場のですか？」

「ああ」

考えているのか短く返事をする先生。

その際に俺はハンカチでそのカメラを持つて様々な角度で会社名を探し、それを脳内で記憶している学園内の隠しカメラの会社名及び購入者のリストを照らし合わせる。

とはいってもそれほど種類は少ないのですぐさま該当した。

……清水美春、か。

理由も見当ついたしどうしたものかな……と頭を悩ましていると、西村先生が「明日お前達と一緒に来たやつらに話を聞くから犯人探しのための覗きはもうするなよ」と言ってくれた。

が、雄二は眉をひそめた。

「どういう事だよ？ 脅しに怯えてろって言いたいのか？」

「違う。お前達は真面目に勉強しろと言ってるだけだ。犯人探しは俺達の方でやっておく」

「鉄人が生徒思いな発言をしただつて!? 僕は今夢を見てるのか!？」

「……生徒のトラブルを解決するのも教師の仕事の一つだ。お前達は学生の本分である勉強をしろ」

おー西村先生が輝いて見える。

と、俺だけ思っていたようで。

「鉄人の癖に話が分かる、だと……!？」

「……しかも教師らしいことを言っている!!」

「何かの前触れだよきつと!」

「驚きが隠せぬのじゃ……」

四者四様の驚きがあったようで、それだけで普段西村先生の事をどう思っていたのかわかった俺は苦笑いし、当の本人はため息をついておでこに手を当てていた。

「……お前らが俺の事をどう思っていたのかはこの際置いておこう。今はこれからの事だ」

そう言うと西村先生はどこからか段ボール箱と筆記用具、原稿用紙を人数分取り出した。

「犯人探しは任せてもらうが、今日の覗き未遂に関しては反省文を書いてもらうぞ」

「「「なっ!」」」

「それと吉井、お前は数学のプリントをやってももらう。丁度一枚だけ余ってたからな」

「鬼教師!」

「ああ、豊橋。お前は風呂に入って部屋へ戻ってろ」

「了解つす」

「ああ待ってよ流!」

「お前達は廊下で書け!!」

二日目（勉強する気ゼロ）

二日目。

Aクラスと合同での自習ということのだが、俺は一人別なことをしていた。

「あらお兄様。おはようございます。何をなさっているのですか？」

「んー？ 見ての通りの事をしている」

「…留美には電卓を縦横無尽に操りながら何かを記入しているようにしか見えないのですが」

「ああその通り」

暇だからって教頭のところへ行ったら書類を回されたので現在やっている。

別にみられて困ることはないというか見られても分からないと知っているのでもやっている。

……まあ、雄二達に変な気を起こさないよう見張るといいうのもあるが。

あと十二秒で終わるなと思ひながら書き連ねていると、「……流石」と年若い声が。

顔を上げずに「勉強どうした勉強」と言うのと、「…つまらない」と日本語で返ってきた。

そうこうしている内に終わったのでパパッと書類をまとめてから立ち上がり、「なら

「広東語でも勉強してな」と言つて監視している先生のところへ行き「これ持つててもらつていいですか？」と渡してから先程の場所へ戻る。

すると、留美とセリーヌが睨み合つており、その場にアデルと由美が立っていた。

「何この修羅場と思ひながら荷物を黙つて片付けつつ気配を消して雄二達の方へ近寄り、声をかけた。」

「うつす。どう？ 勉強」

「まあまあだな」

隣に霧島がいるせいか、それとも声をかけられたからか知らないが無然とした態度で返してくる雄二。

まあ俺にとってはどうでもいいのでちらつとページを見てから指摘した。

「そのページの答え全部違うぞ」

「なつ、マジかよ」

「…だから私が教える」

「お前はお前の勉強しろ。俺は俺の勉強をするから」

「そこまで意固地にならんでもいのにねえなんて思いながらも隣の明久を見ると、なにやらやつれていた。」

「飯食つたのにどうしたんだよ？」

「……どうして一緒なのか分からないし、反省文で眠い……」

「一緒にやる理由は、Fクラス俺達を見てAクラスが『落ちてたまるか』と思わせ、逆に俺達が『こうなつてやる』って思わせるようなクラス分け」

「へえ……そうなんだ……」

眠そうな明久に対し、俺は少し考えてから耳元でつぶやいた。

「優しく教えてもらおうのと厳しく教えてもらおうの、どっちがいい？」

「え？ それはもちろん優しく教えてもらおう方だけ……」

「オツケー。なら姫路さーん」

「どうかしたんですか、豊橋君？」

とてとてと言う音がしそうな感じで来た姫路さん。

「そういうや昨日の騒動で処罰したのかなと思いつながら「明久が勉強教えてほしいってさ」と耳打ちする。」

それを聞いて驚いた姫路さんは小さな声で「本当ですか？」と訊いてきたのでウインクして頷く。

訳が分からない感じの明久を放置した状態で進んだこれは、姫路さんがやる気を出して「明久君。私が勉強教えてあげますね？」と笑顔で言ったことにより決着がついた。

「……お前って本当に感情操るの上手いな」

「いや全然。正直その場しのぎの方が多いかな」

見れば明久は姫路さんの話を熱心に聴きながら問題を解いている。

正直Fクラスに染まってきている彼女がいつ物理攻撃に走るのが心配ではあるが、其の前にFクラス男子同胞の殺意及び島田さんの嫉妬心がぬぐえていない。

切り捨てたいが面倒だなと考えた俺は次に島田さんと呼ぶ。

「島田さん。ついでだから明久の隣で姫路さんに教わったらどうよう？」

それを聞いた島田さんは一瞬驚いた顔をしてから立ち上がり、「ま、まあそうするわ」と言つてこちらに来て明久の隣に黙つて座つた。

「お前……」

「勉強するなら別にいいだろうに。それよりお前はお前の勉強しろ」

「……ああ。そうするよ」

明久に対する殺意が具現化されるんじゃないかと思われるほど濃密になつていてのを感じ取つた俺は、Fクラスの奴らが固まつている場所へ歩いてから手を鳴らして視線を集める。

殺気がこちらに向いているのが丸わかりだが、この程度で怯える環境にいたわけではない。

この手の奴らの殺意の散らし方位心得ている俺は、咳払いしてから言つた。

「さあ諸君。君達はモテない。それは何故か知ってるか？」

『お前みたいなのがいるからだよ!!』

「ま、それもあるが……一番の理由は勉強ができていないからだ!!」

『な、なんだってー?!』

随分ノリがいいのか、それともマジなのか知らないが、まあいいか。

そう思った俺はそのまま続けた。

「いいか？ 世の中でモテる奴の大体はルックスだ。それは認めよう。だが！ それでも勉強ができる奴がモテる！ 勉強ができてルックスもいい！ それが女性の視線の一部だ！」

まあ実際は多種多様な好みがあるので一概には言えないのだが。

別にいいかと思いなながらも興味津々な顔つきで訊いてる奴らに俺は言う。

「今ここで勉強して隣のＡクラスに勝てる位になったらお前達はモテる（かもしれない）

!!」

『!!?』

「やるなら今だ！ トップに胡坐をかいてる奴らに目にモノ見せてやれ!!」

『オツシヤアア!!』

そう言った瞬間殺気は消え、奴らは一斉に勉強を始めた。

集中できる時間が正直どのくらい分からないので不安だが、まあもうすぐ終わるので持っだろう。

いやーやり切ったと思つた俺が伸びをしていると、何故かこちらに視線を向けてくるAクラスの連中 α 。

特に雄二の視線とセリーヌの視線が強い気がするが、悪い事をやつた気がしないので親指を突き出して笑顔で返した。

で。

「暇だな……」

「勉強したらどうじゃ？」

かなり暇なので机に落書きしながら秀吉に勉強を教えている。

「ミレニアム問題考えるのが苦痛だからいい」

「なんなのじゃそれは？」

「懸賞金が掛けられている問題で、解いたら一躍有名人。解けてないから未だに懸賞金がかかったままだけど」

「何やらすごいそうじゃの……」

「すごそうじゃなくて、すごい問題ばかり。解けたら多分、価値観ひっくり返るし世の中の常識変わるだろうな……あ、そこ違うぞ」

「む。そうなのか。すまぬの」

「そこはその前の式を代入して……」

「ほうほう……おお！　こういうことか!!　さすがは流じやな!!」

「これぐらいお前の姉だつて解ける」

そう言いながらも机に落書きを続けるのを忘れない。

書いているのは人の顔。しかもアインシュタインの。

鉛筆一本だけど何とかなるもんだと思いつつも書いていると、「流様。この問題を教えていただけませんか？」という声が。

「あーちよつと待つて……と。ああそれね。ひっかけが存在するから注意すれば解けるよ」

「具体的に教えてくれませんか?」

「ヒント。今のままで間違つた答えになるからもう一度やり直し。文章の裏を読み取つて」

「……あ、なるほど。さすが流様です。ありがとうございます」

そう言うのと由美は頭を下げてから嬉しそうに自分の席に戻っていく。

それを見送らずに似顔絵を完成させた俺は天井を見上げて息を吐く。

「ふうー」

「のお流……つてお主何を書いたんじゃ机に!？」

「ん？ アインシュタイン」

「教科書で見たことあるが……まるでその写しのような完成度じゃな」

「そんで？ 何か聞きたいことあるの？」

「いや……それは今度にするのじゃ」

「そう……ちなみにだけど、今書いてる答え間違ってるから」

「何じゃと!？」

そんなことを話していたら急に扉が開いて何時ぞやに見かけた清水美春が乱入してきたので、もう知らんぷりして狸寝入りを決めた。

……一度矯正どこかでいれようかな？

犯人予想（目星はついてる）

その日の夜。

マンガ読んで寝るまで時間を潰そうと考えて荷物を漁っていると、明久が俺を呼んだので中断してテーブルに集まっている方へ向かった。

「どつたの？」

「お前、俺達を脅迫した犯人誰か知ってるよな？」

口火を切つたのは雄二。確信を持った問いかけにどんだけ鋭いんだよと思いつながら、「そう言うお前は見当つかないのかよ」と挑発してみる。

と、あつさりとして雄二は「ああ」と認めた。

「俺達を知っている情報は、尻に火傷の跡がある女とムツツリーニ並みの技術があるということぐらいだ。それだけで絞り込むのは難しい」

そこに明久が「あのさ、工藤さんじゃないかな、犯人」と口を挟んできた。

それに対し俺は反論した。

「お前達貶めて何の得があるんだ工藤さんに？」

「え？ ……あ、そうだね」

「……愉快犯の可能性」

「それはないよ。じゃあどうしてお前達とさつき一緒に居たんだよ」

「……」

康太も黙る。

と、ここで部屋をノックする音が聞こえたので俺は立ち上がって誰が来たのか確かめることにした。

「こんばんわ、お兄ちゃん」

「どつたの薫」

「遊びに来たんだよ、暇だから」

「おおーそうか。じゃ入れ入れ」

正直あそこで全員の思考が止まったのが予想外だったので薫には気分転換の贅となってもらおう。

こういうのを楽しんでるのはやっぱり若いからかと思いつつ「遊びに来たよ秀吉さん、みんな」と言いながら部屋に入った薫を見ずに廊下を見渡してから扉を閉めて、俺も混ざることにした。

「しかし薫。良かったのか？」

「え、何が？」

秀吉の隣に座って俺が持ってきた人生再現ゲームの番を待っていた薫に秀吉がそう聞いたら聞き返されたようなので、「むしろ覗き未遂をやらかした奴らじゃぞ？」と補足した。

「俺はやってねえぞつと……お、ラッキー。雄二お前から三千円頂く」

「なっ！ てめえどんだけ俺をピンポイントで狙うんだ!!」

「いや偶然だって」

「そうだよ雄二。僕なんて所持金ゼロに近いんだから」

「……それは給料を片端からつき込んでいるから」

「なにやら現状の縮図のような気がするの……」

「雄二さんデキ婚するんですか？」

「するか!! というかして堪るか!」

そんな風に盛り上がりながら遊んでいると、不意に雄二が話題を戻した。

「……つて、こんなことしてる場合じゃないだろ」

「え、今雄二の番だから早く回してよ」

「お前呑気だな」

そう言いつつもルーレットを回す雄二。止まった数字分駒を動かしながら「流、ヒン

「トくれ」と言ってきたので、止まったマスを読み上げてから俺は言った。

『二人目が生まれました。男の子です。全員から祝い金として五千円もらえます』だつてさ。おめでどう」

「え、ちよつと待つてよ！ 五千円払ったら僕本当に一文無しになつちやうじゃん！」

「……おめでどう」

「うむ。仕方のない事じゃの」

「スゴイね雄二さんは」

「リアルになりそうだなお前の進んだ道」

「やめろ怖いこと言うな！ って、だから！」

「ヒントね。まあ簡単なものを言うなら、犯人を女と断定した場合、どうして女子更衣室にカメラが存在していたのかっていう理由を考えろつてところかな？」

「理由、だと？」

「そ。これが今回の動機の一つじゃないか？ まあ証拠能力が低いからまだ確定するには早いけど」

「え、何の話？」

明久が自分の身に降りかかっている話に対してのヒントを理解しなかつたようなので無視し、「どこまで回った？」と確認することにした。

結局雄二達が風呂に入るまでこのゲームは続き、康太が優勝するという幕切れで終わった。

で、明久たちが風呂へ入りに行き。

俺と秀吉と薫は部屋に残ってのんびりしていた。

「のお流。さつき言っておった理由とはどういう意味じゃ?」

「ん?」

電車の中で読破した漫画を最初から読み直していたら秀吉がさつきのことを訊いてきたので、俺は本を閉じて薫に振った。

「薫は分かるか?」

「えつと……犯人が女だと断定した場合女子更衣室にカメラを設置した理由?」

「ああ」

「うくん……僕犯罪心理学まだ専攻してないからあまりわからないけど、ムツツリーニ商会みたいにな売するためじゃないの?」

「まあその可能性が真っ先に出るだろうな。けど今回は違う」

「え?」

「じゃあなんなのじゃ?」

薫が驚いて秀吉が首を傾げたので、俺は言った。

「あまりにも簡単な理由だ。女子の裸を鑑賞したかった。それだけだ」

「？ どうしてなのじゃ？」

「……あ、ああなるほどね……」

薫が気付いたのかため息をついたので、まあ脱力するのも無理ないだろうなと思いつつ直球で言った。

「犯人の性癖はおそらく百合だ。同性愛者だ」

「……ああ。なるほどのお」

「ま、確証はないから雄二たちには言うなよ。あいつらに教えたら突つ走つて今日の行動が意味をなさなくなる」

「そうじゃの……雄二達に教えたら突撃しかねん」

「お兄ちゃんも大変だね……」

別に大変でもないが否定する理由がないので薫の同情に対して反論せずに締めた。

「以上。説明終了」

「……なんというか、つくづくFクラスにいる意味が分からの」

「そう言えばどうしてFクラスにいるの？」

今更な質問を薫がしてきた。

答えたくはないが別に傷つくことなんてないかと思ひ直し、正直に答えた。

「テストの時に予定が重なったから電話してサボったらこの様」

「……うちの学校、テストを受けられない事情があるうと零点は零点じゃからの」

「再テストなかったの？」

「ないからFクラスなんだよ。おかげで西村先生に登校日に怒られた」

予定というのは仕事。引き継ぎと言うか実質的経営者に全権を渡す際の連絡周りで取引先を行ったり来たりしたり海外の知り合いの応対で一日潰れたせいである。

もう酷いよねあいつら。俺の都合無視してひっきりなしに電話かけてくるんだから。

「副業なんかやって確定申告に色々記入するのが面倒なんだよ！」とそれぞれの国の言語で怒鳴り散らすのはもう嫌だな。

まあまだ向こうに電話番号が残っているのでちよくちよくかかってくるのだが、もうあつちの愚痴しか最近ない。

暇なら家族サーブスしろと言いたくなくなったり言ったりしながら電話をしているが、その内家の所在を知られるんじゃないかと危惧している。

「どうしたのお兄ちゃん？」

「いや……平穏な場所を確保したいなと」

「それは僕も分かるよ。最近お父さん達がうるさくてね」

「大丈夫かの、薫？」

「うん大丈夫だよ秀吉さん。ただお兄ちゃんの悪口を耳にタコができるほど言われてるだけ」

「……家を追い出されたと言い、悪口を言われていると言い、流よ。お主嫌われておるの」

「一部にはな。外国行つたら知り合い多いし俺の能力関係なく多分友好的な奴らばかりだから別に気にしてない」

「まあお兄ちゃんも上流階級とか財閥嫌ってるからどつちもどつちだけどね」

「違いねえ」

「そこはすぐに肯定できるんじゃない」

そう言つて互いに笑つてから風呂の時間まで時間を潰した。

風呂に入つてあとは寝るだけとなったが、直接部屋に戻らずに食堂へ俺は向かった。

「失礼しまーす」

「来たか流」

食堂へ入ったら待っていたのはこの合宿に来てゐる先生達。ババアは一人で寝ており、荒木教頭は書類が終わつたとか言つてすぐに寝た。

高橋女史や福原先生、大島先生や布施先生、西村先生と言つた各教科及び担任の先生が揃つている中に俺が混ざつている構図は傍から見ればおかしいと思うだろうが、察しのいい奴なら理由を想像できるだろう。

そう――

「ではこれより昨日起きた覗き未遂及び覗きを行った犯人に対する対策を話し合ひましょう」

――犯人探しだ（俺はすでに予測できている）。

考える（知らないふりしながら）

西村先生の会議の始まりを受け、高橋女史は真つ先に発言した。

「西村先生。初日にカメラ騒動があり、Fクラスの男子が覗きを行おうとしたという話は聞きましたが、覗きがあつたんですか？」

「高橋先生。それは今から説明します」

誰も俺がここにいることに関して言わない。その理由は多々考えられるがこの場で言ってもどうしようもないだろう。

「確かに吉井たちは覗きを行おうとしました。が、それは脅迫犯を自分達で捕まえようと考えたからだそうです」

「なぜですか？」

「秘密をばらされたくないからでしょう」

「…なるほど」

納得した様子だったので西村先生はこれ以上続けず、「それでこうして先生達に集まっていたいただいたのです」と言った。

「それは分かりましたが……現在も行われているとはどういう事ですか？」

「カメラがもう一台掛けられていたようです」

「え？」

「そうなんですか？」

「AクラスのセリーヌⅡアミエから報告があったので従業員の方に調べてもらったら奥の方にありました。私が持っている最初に見つけたカメラと同じものなので、犯人は同一人物でしょう」

「なるほど……わざと見つかりやすい場所に隠してもう一台あることを気付かせないようにしたと……随分用意周到ですね」

「ちなみにこれらはFクラスの男子には不可能だということは判明しています。ここに来てから対象となる男子は部屋で休んでいたのです」

「となると我々はどう行動するべきですかね？」

福原先生の質問に対し西村先生はこう答えた。

「風呂場近くで監視が一番でしょう。それ以外にやる事があるとすれば、豊橋に提案してもらいます」

面倒だなど思いながら、俺は言った。

「証拠は押収しているので犯人が分かるのは時間の問題でしょうが、それを回収しようとして探す生徒がいるでしょう。挙動不審の生徒がいたら別室で話を聞いてください」

「ということですよ。あと二日ありますのでよろしくお願いします」

そんな感じですぐさま解散となり、俺は自室に戻って布団に入って寝た。霧島がいたが、無視した。

朝。

綺麗に目が覚めたので起き上がって時間を確認したところ、午前五時。

随分早いな……と思いながら背伸びをした俺は、せつかくだからと言うことで旅館の外に出て散歩することにした。

「しっかし霧が出てるな」

散歩しようとして出てみたら霧が立ち込めて視界が悪かった。

こりや最悪道に迷うんじゃないかねえかな……と思いつつ適当に歩いていると、人影が映った。

背が低い感じなのである程度の予想はできるなと思いつつ近寄ると、案の定セリーヌだった。

俺は普通に「おはよう」とあいさつした。

「…おはよう」

「早起きとはどうしたんだ？」

「…：目が冴えた」

目が冴えた、ね…：。まあどうでもいいけど。

霧が段々晴れていく。見えたところは山とかそう言う自然。

綺麗だねえなんて思いながら立っていると、セリーヌがピタリと体を寄せてきた。

「どつた？」

「…少し肌寒い」

「そんなの知らんよ」

どうでもよかったので少し距離を置く。が、セリーヌもついてくる。

そういやこいつなんでこんな学校に来たんだろうと考えていると、「…ようやく二人

きりになれた」と言われた。

「どういうこつちや？」

そう訊ねると、俺の身体が急に横に動いた。

視線に映ったのはセリーヌの顔。ただし見下ろす形。

表情はうかがえない。まったく表情が変わっていない。

俺は一体何を言われるんだろうかと待っていると、その表情のまま彼女は言った。

「——あなたが好きです、豊橋流」

表情変わってない告白するのは意外と新鮮だなと思った俺は、それでも特に揺れ動かなかった。「いや、俺は特に好きじゃないから」と言って断った。

「そう……どうして?」

「どうしても何も情報はあるけど特に知ってる訳じゃないし。お前が俺を追っかけてきたというのはいすごい事だけど別にそこまで嬉しいわけじゃないし。あとは……正直言くと好みじゃない」

「……そう」

心なしか気落ちしてるような気がするが、そこで優しい言葉を掛ける事自体間違っている。それじゃ好かれてくださいと言ってるようなものだ。断っているのだからな。

と言うかこんな理由でここまで来たのなら本当にすごいなこいつ。一応そこを感心しながら向きを変えて自然を眺めようとする、「……あの女達が気がかり?」とどこか怒った口調で言ってきた。

何する気だろうと思いつながら「言っとくけど、あいつらに何かしようとしたら家ごと破滅させるぞ」と脅しておく。

「……しない。というより、出来ない」

「まあそうだろうな」

「…だから」

そう言うのと俺の耳を引つ張つてこう耳打ちした。

「あなたに好きになつてもらおう女になる」

体勢を戻した俺は、鼻で笑つて「ああそうかい」と突き放した。

そんな、朝の出来事。

で、恒例の自習中なんだが……。

俺はババアの元に来ていた。

「自習したらどうだい？」

「え？ 帰つていいなら帰るけど？」

「誰が帰宅の許可を出したんだい？」

「ま、俺には帰省する実家もないけど」

「……で？ 一体どうして来たんだい？」

これ以上埒が明かないからか話を戻しに来た学園長。

俺は読んでいた漫画を閉じて言った。

「合宿最終日にイベントやろうぜ。召喚獣使って」

「……それまたなんでだい？」

「折角合宿したんだから最後まで最後ぐらい遊ばせようぜと思ったり、勉強の成果確かめたいなと思ったり」

「だが景品とかルールはどうするんだい？ こんな急じゃ準備できないさね」

「ん？ そこはほら、俺の持つてる券類使えば。それに、ルールはある程度決めてるし」

「そう言うとき食いついたらしいババアは「参考までに聞かせてもらおうじゃないか」と挑発するようなことを言ってきたので、俺は敢えて乗る形で説明した。

「形式的にはバトルロワイヤル。教師陣も混ぜてくるといっておまけつき。制限時間内で取ったポイントが高い人が優勝。当然、クラスが上の方がポイントは高いし、先生も高い。で、負けたらその時点でのポイントが結果になる。そんなところかな？」

「そのポイント集計ってのはどうするんだい？」

「今朝早く起きたからアメリカの知り合いに頼んでカードをこの人数分発送してもらった。そろそろ空軍ヘリ辺りが落としてくるんじゃないか？」

「……一年の間にどれだけの人脈を築いたんだい」

「ま、それにポイントのデータと人物の名前入力すれば入れ替えの防止になるから、一応大まかな部分はカバーできてる」

「だけどあんたはどうするんだい？ 裏方じゃ納得する奴いないんじゃないか？」

「ん？ 参加するけど俺から勝負を仕掛ける気はないよ。それに、勝った奴にはボーナスとして副賞も用意してやろうと考えてるし」

「ふーん。そこまで考えてるなら文句はないよ。ただ、教師がランクインした場合どうするさね？」

「どうもしないさ。バトルロワイヤルなんだから集団で教師潰すのもアリだし」

「フィールドは？」

「そうだな……総合科目でいいんじゃないやね？ 合宿の中での集大成つてことで」

そう言うのとババアはため息をついて「そこまで言うならもう文句は言わないさね。さくつと張り紙したりしな」と折れた。

「ま、それは夜にやるさ」

「つたく。性質の悪さは血のつながってない義理の親そっくりさね」

「あの人は俺ほど捻くれてないって。ただ純粹に相手の首を絞めるのがうまい人間だっただけ」

「ほらさつさと作業に戻りな。どうせ自習しないんだつたら、さつさとやりな」

しっしと追い払うようなしぐさをしてきたので、俺はマンガを持って「はいはい」と

言いながら立ち上がって部屋を出た。

「あ、流。君宛てに空から落ちてきたんだけど」

「あざーっす。そんじや、部屋使わせてもらいますね」

「え？」

こうして最終日、バトルロワイヤルが開催されることになった。いやー誰が勝つんだろ。うな。

罰ゲーム（眺めるだけ）

ババアのところまで話をしてから注文したものが特急便で届いたので作業し、それが終わったので今度はポスターと言う名の予告を簡素に書いて張り出し、終えたのが午後六時。

覗き犯と言うと、なんかすぐにぼろを出した。

当然、清水美春である。

あいつ風呂場前で必死に何かを探してたようで西村先生が強制的に連行してカメラ見せたら食いついた。

今はその西村先生のとこで一人正座しているとのこと。

まったくバカだよなと思った俺は面倒だなあと今後を考えつつ現在――

「はいあがり」

「強すぎるよ流……」

「……大富豪十連勝」

「引きもそうだがハツタリにポーカーフェイスが尋常じゃねえぞ。さすがは社長やつてるだけあるな」

「これでまたわしらだけかの」

——明久たちとトランプに興じていた。

「つていうかいきなりバトルロワイヤルつてババアも何考えてるんだらうね」

ハートの七を場に出しながら早速その話題を出したのは明久。

それに対し少し考えてから「パス」と言った雄二は「だな。その割にトップテンにランクインした景品が意外としっかりしてるんだよな」と言った。

「そうじゃの。最新映画の試写会に食事券、その上旅行券まであるというのじゃから……これじゃな」

続く形でスピードの九を出しながら言う秀吉。次の番の康太はクローバーのキングを出して「ただし教師や流が参加する」と言った。

「いや、俺も生徒だしさ。参加したっていいだろ?」

「まあどうせこれ考えたのお前だろ?」

「あ、ばれた?」

あつさりと言うと予想していたのか全員がため息をついた。

「まあお主以外こんなこと考えるのはおらんじやろなと」

「ああそうなんだ……」

「なんで元気なくすのさ?」

「え……だってサブライズ的な？」

「……流の性格を知ってる人は気付いていた」

「な、なんだってー」

「棒読みじゃねえか……つと、俺あがりな」

「あ、雄二ー！」

気が付けば雄二が二番目にあがっていた。それを見た明久たちは驚く。

「ほらさっさとやれよ。明久は罰ゲームリーチだからな」

「分かってるよ」

「次はわしじゃな」

「……負けない」

そう。この大富豪、罰ゲームがある。俺の話で有耶無耶になりそうだったが、雄二は確実に覚えていた。どれだけやらせたんだよ。

ま、それも仕方ないか。五回負けたら罰ゲームというルールで最初の被害者が雄二なのだから。

次は誰だろうなと思っていると「これでどうじゃ」とクローバーの九を出す。

「……イレブンバック」

「ええー……パス」

「なら三じゃな」

「……パス」

淡々と行われているゲームを尻目に、雄二は俺に耳打ちして聞いてきた。

「犯人は？」

「……ああ。簡単にぼろ出して西村先生の部屋で正座中」

「そうか……これで解決したわけか」

「ま、誤解は解かれてないけどな」

「そりやそうだが……まあその際それは気にしない」

「ああー!! また負けたー!!」

明久がトランプを放り投げてそう宣言したのを聞いた俺達。

「なんというか予想通りだなと思いつつ「さ、雄二と明久の罰ゲームどうするよ?」と訊ねる。」

「うむそうじゃの……」

「……中々面白いものが浮かばない」

「だよな……雄二には霧島当てれば十分だって感じてネタが「おい! それ本当に罰ゲームじゃないか!」一本しかないし、明久は常日頃から自分で罰ゲーム受けてるみたいだし」

「ねえ流。その発言の意図を詳しく聞いていい？」

「そうだ！ 意味深なメールを送ってやればいいんだ!!」

「え!?!」「おい!」

俺の提案が不満なのか抗議をする二人。だがお前らに拒否権などない!

「俺が勝者だ! 負けたお前らの羞恥心や外聞などを考慮する必要はない!!」

「清々しく言い切ったの」

「……でも事実。一度も大富豪から落ちてない」

「いや本当に待って! 雄二は別に変らないからいいとして、僕なんかそんなの送つたら迷惑だつて!!」

「ん? ああ大丈夫。メールを送る相手は男だから」

「外道だ!! 本物の外道がここにいる! 雄二なんかよりよっぽどたちが悪い!!」

「やめろ! それをされたら本物だと学園で認識される!!」

絶叫にも似た叫び声で懇願してくる雄二と明久。

さすがに可哀想だと……

「思うわけないだろ携帯出せ携帯」

「おい荷物持って逃げるぞ明久!」

「うん!」

ダッ！（二人が駆け出す音）

ビタン！（二人同時に顔面から倒れ込む音）

「甘いなー。湯煎したホワイトチョコレートに砂糖混ぜて飲んだ時ぐらい甘いなー」

「流よ。いつの間に二人の足に手錠をかけておったんじゃ？」

「荷物取りに行つたとき。足に注意がいつてないから簡単だった」

「……というより、なんでそんなもの」

「何かあつた時の犯人拘束するために持つてた。必要なかったから今使つた」

「くそっ！ これも流の計算の内か！」

「ヒドイや流！ それでも人間なの!？」

「だつたら五回負けたお前らが悪い。……ま、流石に男相手にメールを送るのは可哀想

なので冗談だが」

「冗談だつたらいうな（言わないで）！」

「一応明久は今から始めるつもり」

そう言うと同時にコンコンと控えめなノックの音が聞こえたので「どうぞ勝手に入つて。鍵はかかってないから」と部屋の外に聞こえる様に言う。

するとガチャリと扉が開いてから「お、お邪魔します」とこれまた控えめな声が。

その声を聞いてるうちにおとなしくなった二人の手錠を外さずに立ち上がった俺が襖を開けると、来たのはなんと姫路さん。

もちろんこれには明久も驚いた。

「姫路さん!!? ど、どうしてここに!?!」

「あ、あの…豊橋君がカメラ騒動の犯人をメールで送ってくれたので皆さんに謝りに来
たんです」

「なっ! テメエ流! 俺達に教えないのはどういう事だ!!」

「そっだよ!」

噛みつかんばかりの勢いで抗議してくるので、俺は頭を掻きながら訊いてみた。

「いや…お前ら犯人分かったら分かったで覗きしそっだなと思っただが…:違うか
?」

「(スツ)(ツ)」

俺の質問に視線を逸らす二人十一人。

案の定だったのだからため息をついた俺は、「だから教えないんだよ」と締めた。

それを見ていたかどうか知らないが姫路さんは寝そべっている明久に向かって謝ろうとしたので、とりあえず一旦姫路さんを止め、明久の手錠を外して立ち上がらせてから再開させた。

「さ、どうぞ」

「あの……坂本君はいいんですか？」

「ん？ 逃亡されても困るからこのまま」

「豊橋君も結構ですね……」

苦笑しながらそう言った姫路さんは改めて明久に面と向かって頭を下げ、「ごめんなさいー」と謝った。

「明久君たちと一緒に来たのに疑ってごめんなさい!!」

「あ、うん。大丈夫だよ」

「でも、ひどい仕打ちをしてしまいましたし……」

「大丈夫大丈夫。いつもと変わらないから」

笑って誤魔化せるって本当にすごい気がするんだが……数々の死地へ向かわせる所業を見てきた俺はそんなことを思いながら、パンパンと手を打って二人の視線をこちらに向ける。

「はいはいそこまで。謝って許されたのならもう謝ることないよ姫路さん」

「そ、それはそうですね……」

まあ納得はいかないわな、姫路さんの性格じゃ。

そう思った俺は話題を変える様に「そう言えばメールに書いたもの、持ってきた？」と

訊ねる。

突如として変えられた話題に戸惑いながらも姫路さんは両手で持ってきた箱を持ち上げてこう言った。

「一応自前の化粧箱を持つてきましたが……一体何をやる気ですか？」

「！……さらばだあ！」

ダツ！（危機感を覚えた明久が逃げ出そうとする音）

ビタン！（再び顔面からダイブする音）

「学習しないな、本当」

「あの、大丈夫ですか明久君？」

「うん大丈夫……つて流！ 君は僕に恨みでもあるの!？」

「え？ 記念だよ、記念」

そう言うのと俺は指を鳴らして「さ、秀吉準備」と言う。

「やれやれ……ま、これも学園生活を円滑に過ごすためじゃ。悪いの明久」

「秀吉まで！ 僕は秀吉にもひどい事なんてしてないじゃないか!!」

「わしの性別は男だというのを一切信じてないのが酷い事じゃが……それはまあ良しとするかの。姫路よ、その化粧箱を貸してくれぬか？」

そう聞かれてやっと意味が理解できた姫路さんは「え、えつと……」と尻すぼみする。

すかさず俺は勧誘する。

「姫路さんも一緒にどう？ 謝罪の形としてさ」

「え、で、でも……」

少し頬を赤らめている。

もう少しかなと思つた俺は彼女に耳打ちした。

「撮つた写真焼き増しして全種類タダであげる」

「！」

「それじゃあ足りないというのなら寝顔付きでどう？」

「——分かりました！ やります!!」

「え、姫路さん!? い、いいの!？」

「はい!— どんなポーズでも大丈夫です!!」

自信満々に即答する姫路さん。

これで何とか無駄にならなそうだと思つた俺は康太に「さ、撮影会準備するか」と言つて明久と雄二の手錠を外してテーブルなどを移動する。

自力で立ち上がった雄二は、秀吉に連行された明久を見送りながら「やっぱりお前す

ごいな」と呟いた。

「別にすごくねえ……なんて言わないが、俺よりお前達の方がすごいと思うけどな」

「そうか？ お前みたいに人を思い通りにコントロールできるのは充分だと思うぞ？」
「だからできないっての。俺は、お前達があんな仕打ち受けても普通に接することができることにすごいと思ってるんだよ」

「ああ……」

受けてきた所業を思い出したのか急に遠い目をし出す雄二。康太の邪魔にならない様に移動しながら雄二のバックから携帯をとった俺は、明久の携帯と同時操作でメールを打つ。

送る相手は霧島と島田さん。一応島田さんの方は自習中に謝ったようだが、まあサブライズと言ったところ。

どちらかを応援するわけじゃないので均等にチャンスをやるという考えで行動するので傍迷惑とか考えていない。

手早くメールを打ち終えた俺は両方のメールを送信して電源を切ってバックの中に携帯を戻した。

で、隣を見たら未だに戻ってこない雄二が。

「つて、おい雄二!!」

「よく考えたら俺何も悪いことしてないんだっつたよな……なのになんであいつは……」

「くそっ！ こんな時に!!」

「すまぬな姫路」

「い、いえ大丈夫です！　ありがとうございます!!」

「？　なぜ礼を言われるのか分からぬが……と、流。一体何をやっておるんじや？」

「正気に戻らすためにジャーマンスープレックスを」

「それをやったらただじゃ済まぬぞ!？」

「うう……ヒドイや秀吉」

「……準備完了」

「せいっ！」

「ぐあああ！　あ、頭があああ!!」

写真撮影前に軽いカオスとなった。まあ、先生こなかったからマシだな、うん。

寝る（関わる気なし）

「そーいやよ」

寝る前となって思い出したように——実際にはただ言わなかったただけなんだが——
みんなに話を振る。

布団に入った雄二達はそれぞれ反応をしながら「どうした？」と質問してきた。

「大富豪で負けた罰ゲーム。あれ言ってなかったわ」

「そーいやそーじゃったの」

「……撮影会に熱中していた」

「うげっ」

「え、僕まだあるの？」

聞いてなかったという声を上げる明久。それに対し俺は言った。

「しりとりでぼろ負けしたから罰ゲームだって話になっただろ、プール掃除で」

「……あ」

「そーいやそーだったな」

「姫路たちの試合で忘れておったわい」

「……死に掛けた」

康太の言葉は無視しておいて、俺は布団をかぶってから言った。

「霧島と島田さんに犯人は別だってことを信じているなら、謝りに夜一人で来てというメール送つといたから。今から返事したところでこの時間帯に来てないんだつたら謝る気ないんじゃないかね？ お休み」

「……つて、ちよつと待て！ お前今さらつと罰ゲームの内容言つたが、明らかに最悪じゃねえか!!」

「そうだよ！ 雄二なんて別に関係が変わらないからいいけどさ、僕が美波に送つたら変な意味にとらえられちゃうでしょ!?!」

「……ゲー」

「嘘だろ!?! この状況で堂々と寝やがった!!」

「つて、それどころじゃないよ雄二！ 下手したら寝てる間に……」

『お前から何時まで騒いでいるんださつきと寝ろ!!』

「ゲツ！ 鉄人!!」

もう知らん。

合宿中俺は入り口側の隅の方で寝ている。一度寝たら鈍器で殴るぐらいの衝撃を与えない限りどんなことをされても起きないと周囲に言われているが、寝返りうたれて被害が少ない場所のほうがいいに決まっている。

ま、そんな訳で昨日一昨日と割とぐっすり眠れているのだが（押し入れの中でも寝れるが、それをやったら点呼の時に怪しまれるのでやめた）、体感的に一時間位後に誰かが俺の近くに来ていた。

自然と意識が覚醒していく。眠っていた思考が通常通りになっっていく。

なんでだよ畜生と思いつながら欠伸をしつつ体を起こすと、明久を起こしている島田さんと雄二のマウントポジションを取った霧島、そして隣に留美がいた。秀吉は寝ており、康太はカメラを構えている。おそらく島田と霧島の写真を撮るのだろう。こちらに向けるほど馬鹿じゃないはずだきつと。

起きた原因こいつか……なんて考えた俺は嬉しそうにしている留美の頭をげんこつしてから再び眠りにつこうと……

「(つて、なんで殴るんですかお兄様!?)」

……小声で怒ってきたために妨害された。

俺はため息をついてから言った。

「(合宿で夜這い掛けるとは何事だ)」

「（夜這いではありませんわ。添い寝です）」

「（どっちも一緒だろ……で、お前と一緒に島田さんと霧島が?）」

「（ええ。丁度ばったり会いまして）」

見ると島田さんが明久の口を手で抑えている。叫ばれたら大変だという自覚はあるようだ。

だから人の感情を操れるわけないだろ雄二……なんて今にも貞操を奪われそうな友達を見ながら考えた俺は、押し入れを静かに開けた。

それを見ていた留美は若干興奮しながら訊いてきた。

「（お、お兄様。押し入れを開けてどうするつもりなのですか!?)」

答える気も失せた俺は押し入れの布団が入っていた方へ上がって静かに閉めてから言った。

「お休み」

「（ああ！ お兄様の生殺し!!）」

いやー落ち着く。

合宿最終日。朝。

押し入れから出た俺は首を回して腕を伸ばしつつ「よく寝た」と言う、「そりや良かったな…」と恨みがましそうな目を向けながら雄二が呟いた。

俺は少し考えてから親指を突き立て笑顔で言った。

「罰ゲームイエー！」

「罰ゲームイエー！　じゃねえ!!　あの後マジでヤバかったんだぞ!!」

「だからこそその罰ゲーム。と言うより俺も予想してなかった。寝る前に来るものだとばかり思ってたからな」

『『夜に』なんてフレーズ入れたらあいつは夜這い掛けてくるんだよ!』

ある意味純粹だねえなんて考えた俺は「でもまんざらじゃ……そういや明久は？」と話題を変えた。

「あいつならトイレで寝てる。逃がした後トイレ行ったら戻ってこなかったから……つて、お前今言いかけた言葉言ってみろ」

「良かっただろ？」

「絶対違う言葉だったろ!!　その上最悪だったわ!!」

「嘘つけよ。本当は嬉しかった筈だろ〜？」

「テンメエ……!!」

雄二が朝から顔を赤くしながら拳を力強く握っているの、凶星だろうなと思いつつ

「なんじゃ騒がしい。もう少し眠りたかったわい」と目を擦りながら秀吉が体を起こした。

その瞬間、立ち上がっていた雄二が俺に向かって拳を大きく振りかぶって接近してきたので、何も持っていない俺はとりあえずしやがんで枕を持って大きく振りかぶって雄二のむこうずねを打った。ちなみに中身は小豆。

「(ごすつ)　ゝゝゝ!!」

そりや痛いだろうなと思いつつ立ち上がると、痛みをこらえながらまだ向かってきたので執拗に同じところを今度は蹴りで狙う。

がすつ、がすつ、がすつ、がすつ、がすつ、がすつ、がすつ、がすつ……

「って、流止めるのじゃ！　雄二の動きが完全に止まっておる!!」

「なんだと!?　それは大変だ!!　すぐさま霧島呼んで人工呼吸を——」

「なんでそうなんだよ流ええええ!!」

「朝からうるさいぞお前ら！　さっさと起きて朝食を食べろ!!」

「うーっす」

怒られた俺は切り替えてからさっさと着替え、雄二達に「ほら早くしようぜ?」と促した。

ちなみに明久は部屋にあるトイレじゃなく部屋を出たところにあるトイレの個室で

寝ていた。

島田さんと明久の様子がおかしいのはまあ、あんなことしたからじゃないかねえ。

始める（呑気だけど）

で、その日の昼位にテストを行い、夕食を食べた後まで時間をすっ飛ばす。

俺は館内放送を使って放送を流した。

『あーあーマイクテスト、マイクテスト……ごほん………ん、これ本当につながってるのか？』

『つながってる!!』

こちらからでも聞こえるツツコミで確認した俺は、もう一度咳払いしてから話し始めた。

『えー合宿も最終日となり、明日帰るのみとなりました……が。もうね、ただ勉強するだけどここまで来るのってつまらんよね。ぶっちゃけ遊びたいよね。それもせっかく勉強したんだからどのくらい成果出たか確かめたいよね。と、いう訳で！ なんと今回からバ、学園長が!! 総合科目のみのバトルロワイヤルを行うことを決めたそうです!!』

「今ババアって言おうとしたね」

『はっはっはー。実況席にいる学園長が何か言ったようだけど聞こえないからさっさと

説明しよう。とはいってもルールは簡単！ 開始時刻の午後七時から午後九時の二時間間にどれだけ多くの相手を倒せるか競うというもの!! 徒党を組むもよし! 裏切るのもよし!! 身代わりにするのもよし!! ともかく様々な手段を使って二時間後に持っていた点数が一番高い人が優勝!』

うおおおお!! と叫び声が聞こえる。やはりみんなも遊びがしたいようだ。

そりやそうだよなーと思つた俺は、補足説明をした。

『で、重要なことを今からのべる。参加するのは生徒だけじゃなく教師もいるから緊張していけよ! それと、ルールは張つてあるポスターに書いた通り。配られたカードの中にある自分の点数が書かれた一枚だけ自分に勝つた人に渡すこと。負けたらその場で参加資格が消えるのでそこんどこよろしく……つと、忘れてた。俺に勝つたやつには順位に関係なく豪華賞品をプレゼントしてやる。その気があるならかかって来いよ』
じゃ、学園長に渡すわ。そう言つてから俺は館内放送室内に作られた実況席に座つて
いるババアにマイクを投げる。

受け取つたババアはこちらを睨みながら言つた。

『頑張るんさね』

「いや終わりかい」

『はっ。教師を混ぜたとかとんだカオスじゃないか。圧倒的に教師陣有利だろ』

「あーそう言えば忘れてた」

そう言つて俺はババアからマイクを奪い、追加説明をした。

『先生の点数は全体的に四千点ぐらいなので頑張れば勝てるぜ、きつと』

「……一体どんなテスト作ったんさね」

「ん？　そこは隣にいる教頭に聞いてくれ。俺は丸投げしたから知らん」

そう言うと同じく実況席に座っていた教頭が「いや、難しいの頼むつて言つたの君じゃん」と反論してきたので「でも作ったじゃん」と返す。

「まあ、そうだけど」

「……あんたの知り合いつてのはとんでもないさね、やつぱり」

「そうかあ？　まあ自力で知り合つたんだから自慢はできるな」

「それよりそろそろ始まるけど？」

そう言われて俺は時計を見る。すると、開始時間まであと三分となつていた。

慌てた俺はマイクで『開始の合図は学園長が言うからそれまで血をたぎらせて待て！』と言つてババアにマイクを渡して放送室を飛び出した。

『あー…残りあと二分かい。まったくなんだかんで急じゃないか。……さてジャリドも、勝ち抜く意思はあるかい？　あるんだつたら最後まで生き残りな。それじゃ、さつさと始めようかね』

俺が移動中にババアはそう言って、開始時刻一分前に始めた。

「……で、十分経過、か……暇だな」

現在俺がいるのは三階の一番隅。他の奴らは大体一階の廊下だったり目立つところにいる。

なんで俺がそこに行かないかという、行ってしまうとそこで終わってしまうからだ。おそらく、俺が。

そんなのつまんねえからなと思ってるので人のこない場所にいる。

壁に寄りかかりながら人つ子一人気配を感じない此の場所。異空間にでもいるんじゃないかと錯覚してしまう。

俺は隣にいる相変わらずフードで顔を隠した召喚獣に視線を向けて話し掛けた。

「なあ？ 俺達このままでも問題ないよな？」

当たり前のように返事はない。そして俺も返事があることを期待していない。単なる独り言と言い換えても差し支えない。

下からは絶叫や悲鳴などが聞こえる。生き残りゲームなので誰に攻撃しようが問題ない。

これだけ一斉に召喚しても落ちてないんだからなーなんて思いながら伸びをした俺は、壁から離れる。

「さあつてと、とりあえず様子見る為に動いてみるか」

どうせ俺に向かってくる奴今のところ居ないし。という言葉を飲み込んで、俺はその場を離れて戦地へ向かうことにした。

のだが。

「居たぞお！ 重罪人だあ!!」

「……………おいおいおい」

二階へ降りた時に黒い布で全身を隠し、その頭部に赤い字で『FFF』と書かれた連中が一目散に向かってきた。

その集団の異常な殺意に周囲が誰も止めないために俺の方にそのまま向かってきたので、俺は一緒になって動いている召喚獣を指さして「消して来い」と言った。

すると俺の隣にいた召喚獣が消えたと思ったら、向かってきた連中の戦闘の召喚獣を文字通り消した。

「なっ！」

先頭が驚いて足を止める。そのせいで後続がぶつかり、逆将棋倒しのように積み重なっていく。

その間にも俺の召喚獣は向かってきた集団の奴らを倒したようで、何ともなしにゆっくり戻ってきた。

戦死者は補習しないから今回と思いなながら近づいた俺は仲間割れを起こしている連中からカードを一枚ずつ抜き取ってから呑気に前へ進んだ。

時間経過して（ただ傍観するだけ）

「いやー二階だつていうのに阿鼻叫喚だ」

教師も生徒も関係ない。そこにあるのはただ己が勝つために戦う人たちの姿。物理的にもFFFの連中を倒した俺は、積み重ねた上に座つて見物していた。

「結構派手にやってるねー先生達も本気だよ全く」

『さて教頭。現在どうなってるんだい？』

『え、ハア……現在三十分が経過して教師は全員残ってますね。逆に生徒は十人単位で減ってます』

『ま、当たり前前つていえば当たり前さね』

スピーカーから聞こえてくるそんな放送。

まだそれしか時間が経っていないのかと思つた俺はどうしたものかと思ひながらぼけつとしていると、前方から矢が飛んできた。

「撃ち落せ」

召喚獣の方を見ずにそう言うと、飛んできた矢が粉々になった。発砲音が聞こえたから銃でも撃つたのだろう。

「ここも危なくなつたな—と思つた俺は、バリケードみたいになつてしまつた人の壁から降りて三階へ戻ることにした。」

『二階の通路に人の壁が出来てるさね』

『みんなFクラスの様ですね。しかし不気味ですね』

『二階の連中はあれのせいで真のバトルロイヤルになつたようさね。逃げようにも逃げられないとは随分ひどいことするさね、あいつは』

『まあ流君だからしようがない気もしますけどね』

随分呑気な解説者達だと思ひながら未だ静かな三階に戻つてきた俺はまた手持無沙汰になつたのでどうすつかかな—と考へてから、散歩することにした。

——電話をしなから。

「ういつす。どうよそつちは？　どんちゃん騒ぎで本音ダダ漏れ？」

『そつちはつて……社長。そつちは何をやってるんですか？』

「サバイバル」

『えつと……無人島とかじゃないですよね？』

「召喚獣を戦わせたサバイバル。俺を除く生き残つた誰かが優勝」

『……暇だつたんですね社長』

電話越しから騒ぎ声が聞こえるのに李里香さんはいたって冷静。酒が入ってない証拠なのだろう。

……まあ、前に飲ませて大変だったことを全員知ってるだろうから無理に勧めないだろうし。

ともかく時間つぶしになるだろうなと思いつながら、「で、楽しんでる？」と質問すると、『ハイ』と返事が。

『社長に対する愚痴を……』といえど少々語弊がありますが、まあそんな他愛のないことを酒を飲みかわしながら言ってる騒いでます』

「そりゃ良かった」

『殴り合いで次の開発するゲームを決めたりしてますね』

「そこは普通止めようぜ」

何やってるんだうちの社員。旅館に迷惑かけてるんじゃないよ。

ため息をついてそう思った俺は、「まあいいや。ところで何か変わったことある？」と質問する。

『いえ特には。ビンゴ大会の商品が予想以上に豪華でしたので皆さん喜んでいましたね。私も当てました。カタログでしたけど』

「カタログかあ……宝石？ 時計？ 実用品？」

『実用品ですな。丁度鍋とかフライパンが欲しかったので』
「そりゃよかった」

電話しながら無防備に歩いているが誰も来ない。一階二階で固まってしまったせいだろうか。

ここに隠れる人位いるだろうになんて思いながら歩いていると、『そう言えば社長。夏休みはどのぐらいあるんですか?』と質問してきた。

「うーん……補習で休みが削られるからなー。行こうとしなければいなくてもいいかもしれない。俺の扱いが現在どうなってるか分からないから、普通に補習で潰されて二週間ぐらいあれが良いかも」

『それぐらいあれば墓参りいけますね』

「まあどうなるかは分からない……消して来い」

『はい?』

目に留まった召喚獣を従えた奴がいたので指示して消した。

「ああすまん。ちよつと召喚獣に戦わせてた」

『なるほど……まあ決まったらちゃんと連絡してください』

「ういいうい。またねー」

……

「暇潰しには一応なったか」

「とんでもないな!？」

「さっさとカード出せよ」

そう言つてカードを没収する。

確かあいつBクラスだった気がしたな……なんて思いながら奪つたカードを確認した俺は、他に誰もいないか探すことにした。

『ただ今四十五分が経過しました』

『なんとというか、教師陣もちらほらと脱落者がいることに喜んでいいのか分からないけど、やっぱりAクラスが残ってるさね』

『Fクラスでも残ってる奴もいるみたいだけど、まあいつものメンバーみたいですね』
「だんだんぎつくりとしてきたな」

三階を徘徊し、向かってきた奴を全滅させたため誰もいないということではげつと廊下で座りながら放送を聞く。

残り人数を把握できないが、どうもAクラスと吉井たちが奮闘しているらしい。教師も脱落するこの戦場内で生き残っていられるとは。恐れいった。

というかまだ開始三十分しか経ってないのか。あまりにも暇過ぎて寝てる間に不意

打ちくらって負けるパターンが見えてきたぞおい。

点数一点も減っていないからな……と思いつながら壁に頭をつけて天井を見上げていると『そう言えば流君だけが生き残った場合は?』と荒木さんが質問する。

『あん? あいつは残っていても順位に入り込めないから関係ないさね。あいつだけになつた時に集計で結果ですよ。とはいっても逐一点数は更新されていくんだけどねえ』『となると流君ともう一人になつた時点で生き残りボーナスが発生するわけですね?』『そうさね』

生き残りボーナスとは最後まで残つた一名にのみ加算される点数の事である。それが結構高く、それゆえ逃げ回っている奴もいるだろうと考えてこうして三階を歩き回っているのだが……意外と少なくてこうして暇を持て余している。

隣の召喚獣もけだるげに壁に寄りかかっている。寝てるんじゃないかと思うぐらい動きがない。

動きにてるな俺達の……と観察しながら、今なら俺の召喚獣の顔を見れるのではないかと思いつる。

……やってみるか。

そう思い立つたら即行動したところ……触れない。

まあ分かってたけど。なんとなく空しくなりながらため息をついた俺は一時間経つ

たら全滅させようと思いい立ち欠伸をしてから立ち上がった。

特に何をするわけでもないが。

「……暇だな」

『さあ開始四十五分で半数が脱落したこのゲーム！ 果たして優勝するのは誰なのでしようか!?!』

『高橋先生じゃないさね』

『なるほど……確かにそうですね。教師陣という立ち位置でも、点数という点においても絶対に最後まで残りたいでしょうし!』

『それもあるさね』

『他にも根拠が?』

『加減を知らないからねえ』

『あ、そつちですか』

なんだか気の抜けた返事をする荒木さん。それを聞きながら手首を回していた俺は
呟く。

「さすがにあいつらに集団で襲いかかられたら高橋先生でも無理じゃね」

『そんなこと言っていたら西村先生が三十人を一気に減らしたあ!!』

「嘘だろっ!?!」

聞き捨てならない情報に俺は反射的に突っ込む。が、不意にこの学校の先生という時点で研究者の面も持ち合わせているのだからおかしくはないかと思ひ直す。

しかし他の連中は素直に聞き入れなかつたらしい。

三階にまで響き渡る声で『なあにいい!?!』と絶叫していた。

『こりゃ西村先生が残る可能性も出て来たねえ』

『まあ流君には勝てないでしょうけど』

余計なひと言じゃねと思ひながら、俺は仕方がないので二階へ降りることにした。

合宿を終えて（苦労が増えた）

三階にいた奴らはうち漏らしなく全滅させたので、残っているのは二階と一階にいる奴ら。

二階の壁、どうなってるかなと思いつつ降りたところ、未だ積み上がっていた。

びくびくと動いているのを見ると生きてはいるようだが、少し他人の関節巻き添えにして積み上げたせいか動くに動けないらしい。

こうなったら完全に手出しができないので、ご愁傷様と手を合わせてから一階に降りることにした。

一階で待っていたのは高橋先生と生き残った生徒達。他の奴らは全員悔しそうにしていた。

生き残った生徒達は大体がAクラス。久保利光とか霧島翔子とか工藤愛子とか、木下優子とか。留美やセリーヌもいるようだが、他の奴らはみんな上なのだろう。

現状対峙してるとやうなのでこっそりと見ていようと考えたがさっさと全滅させた方が時間短縮できるよな。

そう考えたのが伝わったのか、召喚獣はいつの間にかスナイパーライフルを構えて地面に伏していた。

言わなくても伝わるんだなと思った俺は、柱の陰に隠れて「やれ」と呟く。

その瞬間、高橋先生の召喚獣は消滅した。

『え?』

全員が言葉を失う。それを聞きながら笑いをかみしめていると、俺の召喚獣は次々と速射していた。

一発撃つごとに一体。命中率100%で気が付けば全滅していた。俺の点数は少し減っていた。

銃弾一発ごとに点数減るのか? と思いつつながら姿を現して彼女達に近づく。

「うっす」

「……流の仕業?」

「そういうこと。ほら全員カードくれや」

「つていうか、どこから狙ってたのよ!」

「え、階段近くの柱」

そう言つて全員のカードを回収していると、「お兄様、昔より賢くなつてません?」と留美が聞いてきたので「何言ってるんだ? そりゃ年取れば老獪にも賢くもなるだろ」

と答える。

「それはそうでしょうけど……一万点に近いってちよつとした暴力ではございませんか？」

「取れないのが悪い」

バツサリと切り捨てた俺は、回収したカードを弄びながらこの階を後にした。

『一階は全滅。そりゃ流が出たらそうなるさね』

『しかしスナイパーライフルで全滅ですか。フィールドが全体ならではですね』

『まあ基本はまばらだからね』

そんな実況を聞きながら二階に戻ってきた俺は、未だ聳え立ったままの人の壁を見上げて呟く。

「これどうっすかなー」

まあ二階で生き残った奴が優勝だから俺が手出しする必要はないかなと思っていたら俺の召喚獣は人の壁をよじ登って頂上に立ち、スナイパーライフルを構えたと思ったらパンと発砲した。

「いたっ！ あ、頭がああああ!!」

『吉井君見事にヘッドショット決められました！』

『フィードバックあるから脳天を貫かれた痛みと衝撃が走って悶絶してるさね』
『これは気絶必死だー!』

「え、マジで？ 明久すまん!!」

明久の悲鳴と実況二人の解説に状況を理解した俺は手を合わせて謝る。
が、無情にも召喚獣は次々と狙い撃つ。さながら仕事人のごとく。

そろそろやめようかと思った俺の想いが通じたのかスナイパーライフルを肩にかけ、人の壁から飛び降りてこちらにきた。

『……さて、教頭先生。残ったのは誰だかわかるかい?』

『えーつとですね。Fクラスの坂本君とAクラスの妃さん、そしてBクラスの上下院くんですね』

『これ、二時間もいらなかったんじやないかい?』

『いやーそう言われましたも……って、始まりましたよ』

そこから叫び声などが聞こえ出したので、がんばれーと思っていると人の壁が崩されそこから西村先生が明久を抱えてきた。

「お疲れ様でした。そしてすいませんでした」

「まあ銃弾を避けるなんて言うのは難しいが……なんであんなに完璧にとらえられるんだ」

「あつちで拳銃使つてましたからね。そのおかげでしょう」

「そうか……まあ相変わらずでたらめな奴だな」

そんな話をしてしていると、ババアと荒木さんの二人が『さあ生き残りは妃さんとなりましたので、現在集計を始めようと思います！』と言つたので「終わったようつすね」と言う。

「だな。清水の方はどうなつた？」

「俺は知りませんよ。会う前に終わつてたと思います」

「そうか。まあ吉井を置いてきてから清水を再び捕まえるか」

「もう大丈夫だと思えますけどね」

そう言つて西村先生は階段を降りていったので俺は壊れた人の壁を通り抜けて「お疲れー」と声をかける。

「……ああ、疲れたぜまったく」

「とんでもなく楽しかった！ みんなすごかったしね」

「はい。先生方の本気というのも初めてでしたし」

「そりや良かったぜ」

「教師陣の実力を知れたのは収穫だ。そのことに関しては、お前に感謝してもいいな」

「……つて、お前教師に喧嘩でも売るの？」

「売るかよ！　もしものためだもしもの!!」

「あつそう」

そう言つて談笑していると、他の奴らが沈黙しているのが気になったので質問してみた。

「つうかなんで周りにいる奴ら全員沈黙してる訳？」

「あ？　全員鉄人の化け物加減に意気消沈しているんだよ」

「……ああ、なるほどね」

雄二の説明に納得したところ、『集計が出たさね』というババアの言葉に反射的に上を見る。

『じゃ、教頭先生よろしくさね』

『え、あー分かりました。それでは発表します……第一位は』

そう言つて一旦区切つてから次に名前を言った。

『I—A、妃由美さんです!』

「……え、本当、ですか、流様」

「そうなんじゃね？　集計に参加してないから分らんけど」

「嬉しいです!」

「うおっ」

あまりの嬉しさに俺に飛びついてきた由美。俺はそれを抱き留めて昔のように頭を撫でてしまった。

途端に嬉しそうに目を細める彼女。俺はすぐさまやめて彼女を引き離す。

名残惜しそうな彼女を見た俺だったがやっちゃまったという思いに駆られたのと現状からの脱出のため、駆け出した。

『死ねやアアアア!!』

「ダメエらその元氣どこから出てくんだよ!」

——こうして、合宿は終わった。

ちなみに、一位の商品は二泊三日のペア旅行券なんだが……なんだかとても嬉しそうにしていたので「俺はいかんぞ」というと露骨にシヨックを受けていた。

もう一つおまけに言うのと十位圏内に雄二と明久が残っていた。後は大体Aクラスと西村先生に高橋先生という二人以外は想定内の結果だった。

——で。

「あ、なんだつて？ もう一回言え文科省」

『だから君達の学園から試験校を切り替える話が決定した。正式な通達は明日以降になるが君にはお世話になったから先に報告しておこうと……』

「だったらなんでそんな話が決定したか。その理由をちゃんと説明できるんだろぅな!？」
俺が、きちんと、納得できる理由を!」

『それは……大変言いにくい理由なんだが、君達の学園で問題行動がたくさん起きているのが一番の理由だ』

「二番目の理由は! んなの俺が一番よく知ってる!」

『二番目の理由は……急に偉い方が方向転換をしたんだ。君達のシステムとは別の勉強促進システムに興味を持った……と言えば聞こえはいいんだが』

そう言われて俺は奥歯をかみしめながら原因に思い当たり、電話を切ってから自室の壁を殴って叫んだ。

「ふざけんなよ極聖学園! 何いきなりふんどつてやがる!!」

振替休日の話

考えてみる

合宿から戻ってきた俺にかかってきた電話は、俺に怒りを覚えさせるには充分だった。

という訳で、振り替え休日を利用してババアの家へ乗り込んだ。

「うつつ学園長。ただいま」

「引き取って一度も来てないのによく言うね全く……で？ お前さんはあのことについて訊きにいたんだろ？」

「ああそうだ。どうする気だ、これじゃあうちの学園事実上の廃校だぞ？」

「確かにね」

ババアの部屋に上がり込んで話し始めた俺の態度に気にせずため息をついて「こうなった原因に心当たりは？」と質問してきたので目を瞑って少し考え「あるにはあるが、全部向こうの逆恨みだぞ？」と言っておく。

「逆恨みでも立派に理由になるじゃないか。しかもあんたが原因だろ？」

「だから俺のせいにされても困るって。あいつらが転校したのは自分の意志、俺が退学

したのは親の意向だから面目潰されたとか思われても知らないって」

「ああ、なるほどね……それで躍起になったのかいあの学園は」

ババアもあの学園について知ってるようで遠い目をする。

まあその反応は分からなくもない。何せあの学園はくそがつくほど居心地がよく……くそがつくほど最悪な場所だったのだから。

思い出しただけでも吐き気を催してきたのでこれ以上掘り起こすのをやめ、「つたく。トップが何呑気にしてやがる。西村先生たち引き抜かれる可能性だってあるし、借金抱える可能性だってあるんだぞ」と言っておく。

「そうさねえ……あっちのがなんなのか分からんけど、全面戦争かねえ」

「なんで俺見ながらそんなこと呟く」

「この際使えるものは何でも使おうってね。どうせあんたもはらわた煮えくりかえってるんだろ？ だったら向こうを廃校にしたところで私は文句は言わないさね」

そう言われて俺は頭を掻きながら「やり方ならすでに百通りぐらい思い浮かんでるんだけどよ……」と呟く。

「私が言っておいてなんだけど、あんた本当に嫌いなようさね」

「当たり前だろ。つうか、仮に俺がああの学園を存在自体潰したとする」

「まあそれで今回の件は終わりになるだろ？」

「いやーそれだけで終わりにならんのがまた、ね」

「ん？ どういうことだい」

「しらばつくれるなよババア。あの学園俺が潰したらこれまで我慢してたのが全部不意になって恐怖政治になるだろうが」

「そうならないようにうまくできるんじゃないかい？」

「出来なくはないが……恨み潰し回るの面倒なんだよな……うつかり関係ないところ潰しそうで」

「だったらどうするんだい」

「だからそれを考える為に来たんだよ。そう言うと、ババアは「つていうか、なんであんたはその事を知ってるんだい」と今更なことを聞いてきた。

「え、文科省の役員に知り合っているから」

「……もう大統領の知り合いとか言われても驚く気も起きないさね」

「いやいるけどよ」

「……あんだ、あの爺に引き取られる前にとんでもない人脈造ったね全く」

「そう言つて嘆息するババア。」

「つて、だからそんなこと話すために来たんじゃないつて」

「ああそうさね。で、どうやってあの学園の面目潰す気なんだい」

「というか勝手に自爆して潰れてほしいんだけどなー、非人道的なことに手を出したとか裏金が発覚するとかでき」

「そんなものが簡単に露見するわけないさねあの学園では」

「だからねー、もう正直困ってる訳よ。本当に全面戦争でどちらのシステムが成績向上に役立つかモニターして第三者に決めてもらうってのはどうよ」

「そんなこと言ってもねえ。その人員が本当に公正な人間か分かりやしないさね。どうするきだい」

「こっちで人用意すると面倒だし、あっちに人用意させるわけいかないし、かといって文科省は完全にあっち側に着いたと考えてもいいからな……本当どうしよう？」

そう言っつて首を傾げると、「あんたみたいな化け物に思い付かないこと、私が思いつくと思うのかい？」と再び嘆息した。

「いやーぶっちゃけ観察対象の確保だけすればあとはとんとん拍子に話進むんだけどよ……本当どうすつか。ババアみたくシステム自体に手を加えててんやわんやしてるだけと同じ状況だからな……」

「いつあたしがてんやわんやしたって、クソガキ？」

「あーこうなったら人は向こうの学園とこっちの学園で交換するしかないかもしれないな……あ？ 試召戦争終つてすぐにシステム暴走させたことがてんやわんやじゃな

いのかよ」

「……」

すつと視線を背けるババア。それを見た俺はため息をついて「そんなことはどうでもいいんだよ。今は廃校寸前のここをどうやって復活させるか考えないと」と頭を掻き巻く。

「どうやって俺の影響なしでやろうかな……」

「それは無理なんじゃないさね」

「あーやつぱり？　そこは開発者のババアが矢面に立つてさ……我が物顔で意見主張してこぎつけてくればいいんじゃないの？」

「いくら開発者だからって知り合いいないんだからできるわけないだろクソガキ」

「だよなー。知り合いいたら今頃乗り込んでるだろうからな」

「あんたは乗り込んだのかい？」

「いや？　俺は電話で怒鳴ってから『じゃあどうするか』という事をババアと相談して、そこから乗り込む予定」

「結局乗り込むんじゃないか」

「じゃねえとはらわた煮えくりかえって日本破滅させかねないし」

「さらつと怖いこと言うんじゃないよ！　……つたく。そこら辺はあの爺さんと似た者

同士さね。血のつながってない上にそれほど長くいなかったというのに」

「あの人とは波長が合ったからな。結構いい人だよ」

そう言つて話題が変わる前に終わらせ、「さつて、本気でどうすつかねえ」と天井を見上げながら呟く。

「あのくそジャリどもに被検体になつてもらえばいいさね」

「それ俺がさつき言つた奴じゃん。なんか人身御供っぽくていやだ。洗脳されて戻つてきたらどうすりゃいいのさ。死の淵に追い込んで覚醒させるぐらいしか思いつかねえぜ？」

「なんでそんな発想にまで飛躍するのか不思議だけどそれは置いてこうかね……で、本気で今言つたこと以外に手立てはあると思うのかい？」

「だからその話をしに来たんだろ」

スゴイループに入つてる気がするなんて思いながらふんぞり返つていると、「……それなら、これはどうだい」とババアが珍しく提案してきた。

「なんだよ……」

「あの学園のトップを闇討ちして亡き者にする」

「いいねえ……つていうと思つたかババア。なんだよ闇討ちつて。そんなこと俺が……いやなんでもない」

「ちよつと待ちな。今なんか自白しそうになつてなかつたかい？」

「え、やつてないよ闇討ちなんて。ただオイル撒いて半年入院させたぐらいだよ」

「……あんだ、直接的な原因造つてるじゃないか」

ジト目でこちらを睨んでくるので肩を竦めてから言った。

「そんなの小学生の頃だし。犯人俺だつてばれてないし。そもそもいたずら好きとして完全犯罪させてたから実質的に俺が手を下したわけじゃないし」

「尚更最悪じゃないかい！ あと完全犯罪とか言うんじゃないさね！」

「本格的な犯罪行為はしてないつて。精々が人が出たとか、入院者が出たとか、持病が悪化したとかその程度だから、軽い軽い」

「確かに……つて全然軽くないさね！ 持病が悪化つて下手したら死ぬじゃないかい
！」

「だから悪化させて入院させて、治療受けさせたんだよ」

「……ああ、なるほどね」

納得してくれたようなので、実は憂さ晴らしの気持ちが強かつたというのは呑み込むことにした。

そして、これ以上話しを続けても無駄のような気がしたので俺はため息をついてから言った。

「ババア。この事に対する意見文と、どちらが良いかという勝負についての説明を書いた書類を作って文科省に送りつけようぜ。『読まないで破棄した場合は容赦なく首を飛ばそうと考えています』とか付け足して」

「本気で隠す気あるのかいあんた？ 一応向こうがいきなり変更した手前読むんじゃないかい？」

「上がアホばつかだから捨てられる可能性あり」

「堂々とアホと言いつ切るのすごいさね全く……まあいいさ。内容については話し合おうじゃないか」

「了解」

そうして俺とババアの二人で抗議文という名の挑戦状（脅し付）を作成し、文句を書いてたらきりがなかったので別にまとめてそれぞれ郵送した。

あつちの業務が滞っても知らん。

ちなみに。

ババアの家から帰っていたら李里香さんから電話があり、内容が学園に関してでどこから聞いてきたんだらうかと思いつながら聞いていたり、今まで知り合った連中が似たよ

うな感じで電話してきたので苦笑しながら全部聞き流した。
引き抜く気満々じゃねえかと心の中で思いながら。

つけの清算

合宿の振り替え休日二日目。

初日は完全にババアの家で籠っていたので全て終わったのだが、そのせいで二日目に用事を全て回さなければならなくなった。

その用事とは……。

「あの、お兄様？ わたくし由美と別な日を指定したはずなのですが？ どうして一緒にいるんですか？」

「その前にお前、軽く時間過ぎてるだろ」

「嬉しくて眠れなかったからと言って自分で決めた約束の時間に遅れるとは何事です」

「……色々おかしくありませんか？」

現在位置如月ハイランドパーク入場門前。

集合時間三十分前に来ていた俺はその十五分後に由美と合流し、その三十分後に留美が到着した。

二人の格好は自分で指定した場所に合わせて来たのかそれなりに質素だが、いかにせん金銭感覚にずれが生じているので俺からしたら一着何十万とかバカじゃねえかと思

う。

あ、俺？ 普通にそこらのチェーン店で売ってる服。安いし。

なんで服装のギャップが滅茶苦茶あつて注目の的になつてゐるんだが、まあ留美の方はそんなことより気になることがあるらしい。

答えるとしてもこの場でというのは時間の無駄なので、「ほれさつさと入ろうぜ」と言つて先に門をくぐつた。

「さて……どうして二人が俺の腕にしがついてゐるかなんて聞かないからさつさと行くぞ」

「冷たいですわお兄様！ そこはもう少し優しくしてもらつてもいいのでは!？」

「あの、流様。わたし、ジェットコースターに乗つてみたいです」

「ああそう。そんじゃ先に乗るか」

「待つてください！ でしたらわたくし、お化け屋敷に行つてみたいです!!」

「それは後な」

「そんな！ 妹の頼みを後回しにするなんて!!」

「俺の貞操狙つといて今更妹使つてんな。ほら、さつさと行こうぜ」

美女二人に腕を組まれている俺は完全に嫉妬の視線に晒されているが、そんなことよ

り現状からさっさと解放されたい気持ちが強いのでどうでもいい。

そんな訳で由美の言葉通りジェットコースターへ向かった。

「……なんで由美と一緒に乗らないといけないんですの…?」

「私も流様の隣に乗りたかったです」

「別にいいだろうが。乗れたんだから」

何やらぶつくさ言われてるが、そもそも俺はお前達と付き合う気もないし好きになることもないのだから無駄なんだがな。

冷静にそう考えた俺は後ろに乗りながら急降下に備えて口数が減っていく二人を見てこいつら大丈夫だろうかと考えた。

「キヤアアアア!!」

「ひやああああ!!」

「やつほー」

二人が本来の楽しみ方をしている中、俺だけは緊張感も何もない口調で目を開けて声を出す。

なんかもう、こういうので恐怖を覚えるという感覚がマヒしている。人生いろいろあったというのもあるし、あのクラスの流血に慣れてしまったためでもあるだろう。一言しやべると自分で地雷を踏み抜いてすぐに流血する奴もいるし。

そんなことを考えながら悲鳴を上げる二人を尻目に後ろで欠伸をしながら終わるまでぼけっとしていた。

ジェットコースターから降りて。

なにやら叫び疲れたのかげっそりしている二人とは対照的に眠気が出てきた俺。

欠伸をしながら「大丈夫か？」と一応心配すると、二人は俺を見て慄きながら似たようなことを言ってきた。

「どうして眠そうにしておられるんですか（の）？」

それに対し俺は「もう慣れた」と言って腕を伸ばす。

「やはりお兄様は凄いですわ」

「さすがです流様」

「お世辞はいらん。さっさと次行こうぜ」

「あ、待つてくださいいお兄様！」

「お待ちください！」

俺が先に行つたところ二人が何とか追いかけてきたようなので、これじゃどつちが誘つたのかわかんねえなと思ひながらゆっくり歩くことにした。

次はお化け屋敷である。どうにも庶民的なところへ行きたい人たちである。

所詮娯楽目的で作られた施設である。どうあがいても恐怖心は一定以上を超えることがない。

まあそんなことを考えている時点で卑屈な思考の持ち主だったり夢のない奴だとか言われたりするんだろうが、そんなの関係ない。

なぜなら人は一定の経験を超えるとそれがただの行為に成り果ててしまうからである。

だから、俺の腕にしがみつきなながらお化け屋敷に入る前からすでに及び腰になっている二人に対して新鮮味を感じている。

「確かに再現度は高いだろうがな……入る前からお前ら大丈夫か？」

「だ、大丈夫ですわお兄様」

「も、もも、問題ありませんな、流様」

「声震えてるぞお前ら」

そう言いながら普通に入ろうとしたところ、二人が動かないせいで俺は前に進めなかった。

「おい」

「あ、な、なんですかお兄様」

「動こうぜいい加減お前ら」

「え、エスコート……お願いします」

「べ、別に怖いわけでは……ありませんけど……」

「素直に怖いって言え」

作り物だしそれほど恐怖心なんてないだろうになんて思いながらため息をついた俺は、腕におもりがついている感覚だなど酷い事を思いながら歩き出した。

「ぐわああ!!」

「キヤアアア!!」

「作り物だろこれ。メイクの中途半端感が拭えんし」

「うくらくめくし」

「キヤアアア!!」

「あ、おい……元気に逃げ出してまあ。あ、どうもこんにちは」

「あ、こんにちは」

とまあこんな感じで動じないで普通に歩き切った俺が建物から出てきた時に見たのは。

見事にガタガタと震えている二人の憐れな姿だった。

平然とした表情で出てきた俺に対し信じられないような目で見てきた留美は、声が震えたまま聞いてきた。

「お、お兄様……どうして顔色一つ変えないのですか……？　結構怖かったですけど」
「むしろなんでそんな怯えているのか分からん。常日頃明久たちの流血沙汰に悲鳴を上げないのに」

「お化けや幽霊など実体が不明なものは怖いです普通」

「ああそうか。昔トラップハウスのポルターガイスト騒ぎを実際に観に行った時に恐怖心がごっそり消えたんだ俺」

「ひいひい!!」

何故か知らないがもっと怯えてしまった。それほど変な事実を口走ったわけではな
いんだが。

もう完全に小鹿の様に身体を震わしてる二人を見ながら首を傾げた俺は、どうしたも
のかと空を見上げた。

二人が元に戻った時にはすでにお昼を過ぎていたが、そんなの騒いでいた二人には関
係ないようで。

「お兄様！　あそこに屋台の如く並んでいるお店は一体!？」

「お前見たことあるだろ。普通の食堂みたいな場所だ」

「流様はしたないと思われますでしょうが、お腹がすきました」

「いや別にそんなこと思わんし。適当に買ってこい」

「お兄様もご一緒にどうですか？」

「行きましよう流様」

「……えー」

先程とは逆に俺が引きずられながら、昼食を食べる為に行くことになった。

まあそんな感じで振り替え休日が終わった。

ちなみにだが、学校が潰れる云々の話は誰もしなかった。知ってたかどうかはさておいて。

交換留学生の話

招集

「はいというわけで、来週から明久と康太と根本と工藤と霧島には極聖学園へ交換留学生という名のモニターに行つてきてもらいます。せいぜい勉強頑張れよ。わざと成績落としてやれ！」

「つて、ちよつといきなり何の話!?! 導入部分全く知らないんだけど!?!」

「……理不尽!」

「つて、なんで俺まで」

「……雄二が心配で行きたくない」

「つて、吉井君やムツツリー二君の言うとおり、どうしてそうなったのか知りたいんだけど?」

振替が終わつたその日。明久が島田にキスされてつるし上げられたとかどうでもいいので割愛することにし、放課後になつたのでいかせるメンバー（すでにこちら側は選定済み）を学園長室に集めて冒頭の話をした。

まあ普通に説明を要求されたな。ババア黙つてないであんたが説明しろよ。

そう思って視線を向けたところ、「そんなことより関係ない奴らが来てる理由はなんだい？」と言つてため息をついたのであえて見なかつたことにした猿轡をされている雄二に呼んでない薫、留美、由美、秀吉、木下姉、姫路、島田に視線を向けてからやつぱり視線を呼んだ奴らに戻し、事情を説明することにした。

「うちが潰れます」

「え？」

「……どういうことだ!？」

「おい一体どうしてそうなった!」

「……まさか」

「なんかとんでもないこと言われたけど、詳しい事情とか教えてもらえないかな？」

「えー、面倒だから嫌だ。そこまでいわなくても、この言葉だけでやる気になつてくれな
い? どうしてもというのなら、そこにいる元生徒の三人もしくは霧島に聞いてください
い。私は説明しません」

「口調変わっておるぞ、流」

「一から十まで説明する気なんてサラサラないつての。向こうだつて本気で潰しに来る
ために交換留学生生扱んで送り込んでくるのが予想されるんだ。これからその対策考え
たいの」

そう言つてそつぽを向くと、「……流。わざと成績落とせばいいの?」と霧島が聞いてきたので俺は「あつちがどんな風なものを作り上げたのか。それを体験してもらいたいつてのが本音。潰したくないなら成績上げてもいいけど、最悪明久が点数上がったら学校終わりだぜ?」と答えておく。

当の本人は首を傾げたので、姫路さんに視線を向け説明を促した。

「つまりですね、明久君が成績を上げて他の皆さんが下がった場合、手を抜いたと言われるんです」

「まあ明久にだけ集中的に成績上げさせるように仕組めば他の連中が下がったところで同じこと言えるんだが……まあそこに關しては心配しなくていい。ちゃんと一日ごとにレポートで各人の勉強風景を報告することが義務だから」

「なるほどねえ。そうすれば吉井君だけに集中的にやるとか言う不正はできないもんね」

「それは俺達も同じことなただけだな。まあ基本的にあつちは頭いい奴しかいないから。薫クラスより下が平均だったかな?」

「そうですねえ、お兄様」

「……えつと、つまり?」

「ん? つまりお前がバカでもわかる数学とかで集中的に勉強を教えてもらわないって

「と」

「あーなるほど……?」

あ、こいつ分かってないな。瞬時に思ったが、この場で説明しなおすのも面倒なので「あ、あと」と付け足すことにした。

『交換留学生』なので、基本的に扱いはあっちの生徒になります。問題を起こした場合のはあっちの学園に従って処罰されます。なお、問題を起こした生徒に関しての成績データは……零点となります。システム以前の素行の問題だからな」

以上で説明終わり。そう言って閉めて出ていこうとしたところ、ババアが引き留めてきた。

「待ちな。その前に学園について話したらどうだい?」

ドアノブに手を掛けた俺は少し動きを止め、「だったら適任が三人いるんだ。つい最近まで居たんだから、あっちの方が詳しいぜ」と言って今度こそ学園長室を出た。

「ふう……」

校舎を出て帰り道。ゆるりと下り坂を歩いていると、なぜか上空にヘリが飛んでいる

のが見えた。

誰か来たのかなと思ひながら歩いていたらところロープが垂れ落ちてきたので木の枝に結び、そこから駆け出す。

絶対あつちの学園の誰かが宣戦布告だかて来たよ。やつてらんねえ。

内心でため息をつきながらなんか途中までロープで降下し、受け身をとつて着地してきた奴がいたので思ひつきり顔を蹴つて助走をつけるようにスピードに乗る。

あれどつかの私兵部隊だったな。どこだつけ？　なんてどうでもいいことを考えながら止まらない足で走っていたら、坂道の終わり付近で車が一台遮るように止まったのが見えたのであ、これ面倒な奴だとすぐさま思つた俺はスピードに乗つた状態でジャンプして木の枝をつかんで車を飛び越え、由美に返そうと思つていた拳銃をハンカチでつかんで着地と同時に車の下に投げる。

ちょうど降りてきた時に飛び越える準備ができたのでこつちには気付いてないだろうなと思つた俺は、そのままダッシュでその場を離れることにした。

今日はホテルだな。明日補習だから別にいいけど。

そんなことを考えながら警察に銃刀法違反してるえらい子供がいるという密告をしつつホテルを探すことにした。

書類もやらなきやな。

敵

次の日。

そういうや明久たちってどうやって学校に行けばいいんだろうかと起きて思いながら泊っていたホテルで身支度を整えお金を払って出る。

そのまま学校に行くのが普通なのだろうが、まだ時間は五時。書類とか溜まってそうだなと思いつながら家へ帰るために霧がかかっている道を歩く。

警視總監の話では銃刀法違反で補導する際妃家の者が介入して補導されかけたのが回避されたそうで。

貸しが出来ただろうなああの家なんて振り返りながらのんびりコンビニへ立ち寄り、朝食用に適当に買いこんでから帰宅する間までにさらつと思ひ返す。

極聖学園。またの名を『才能者達の楽園』。

その二つ名が表す通り、あの学園には才能の塊みたいな奴しかいなかった。それらが総じて金持ちの子息息女ばかりというのも、また。

カリキュラムもまたそれに応じた厳しいものだったが、あの学園しか知らない奴からしたらそれほど苦でもないのだろう。

俺もその一人だったが、中学途中で退学して渡米。その時になって、あの学園の異常さを初めて実感した。

いや、通っている時から薄々気づいていたのかもしれない。『この学園は何かがおかしい』ということについて。

それでも実感したのはアメリカの大学に飛び級で入った時で、その時になって俺はあの学園の異常さと同時にイカレタ教育理念を発見することができた。

出来たが、ぶつちやけもうどうでもよかつたので放置することにした結果、こうして牙をむいているわけなのだが。

「あの餓鬼今度つるし上げてやろうかな……」

思わずそんな言葉を漏れる。当たり前にも人の心配がないので幸いだろうが、聞かれています。ようがいまいが、こちらにはあまり関係ないし聞いた人間にも関係ない。

そういや召喚獣システムメンテしてるとか言ってたが大丈夫だろうかババアと話題を変えつつ、自分の腕輪の能力を知らないって存外怖いよなと今更ながらの事を思い歩いていた。

で。

「おいーつす。今日から明久（アイツ）いないが、すこぶる調子がよさそうだな雄二」
「ああ。朝から翔子（アイツ）に追い掛け回されずに済んだからとてつもなく機嫌がいい」

教室に入ってそんな互いの言ってることが違う会話を楽しんでから、席に着いた俺は盛大にため息をつく。

「あー……つぶれねえかなー」

「何が？ 極聖学園がか？」

「え、いや。そんなのは適当に情報操作すれば簡単につぶせるけどよ」

「さらつと言ったな」

「財閥とか古くからの名家とか。そこら辺の金持ち全員没落しねえかなって」

「お前どんだけ嫌ってんだよ」

「少なくとも、お前が霧島からのアプローチを逃げる以上には」

「あれがアプローチだど!? そんなかわいげ一切ないぞ！」

「なんじゃ朝から騒々しい。明久やムツツリーニがおらんから静かになると思ったんじゃが」

「秀吉おつす」「おお」

少しからかったところにちょうど秀吉が登校してきた。俺は挨拶してから、「来週か

「らあつちの学園の生徒来るんだよな」とぼやく。

「お前が決めたんだろ」

「ババアだよ決めたのは」

「流よ。お主までその愛称はどうかと思うぞい？」

「え、別にいいじゃん。俺の後見人だし」

「はあ!？」

「なんじゃと!？」

さらつと出した言葉に驚く二人。その反応を内心でほくそえみながら、「本当本当。家追い出されてから拾ってくれた人が死んじゃってき。どうすつかないと考えてたところ」にババアが話し持ち掛けてきたから乗ったわけ」と答える。

「あの妖怪ババアが養子だと……ありえねえ」

「雄二よ。それはそれでひどいと思うのじゃが……まあ理解はできるの」

秀吉もずいぶんひどいこと言うなと思いつつ、「けどまあ、来週から一週間静かになるんじゃね？」と秀吉の意見に賛同するように言う。

すると雄二も便乗した。

「だろうな。あのバカも少しはましになって帰ってくるんじやないか？」

「あ……それはない」

「あっさりとは断言しおったぞい、流」

「だろうな。俺もそんな想像できない」

「いった本人もか!? ならどうして言っただんじや!」

「一縷の夢い望み」

「俺は静かになるといっただけ」

そんな三人で他愛のない話をしていると、姫路さんと島田さんがなにやらひそひそ話をしているのが見えた。

面白そうなので黙って近づいてみると、二人とも明久について話していた。

「アキったら大丈夫かしら? 極聖学園って結構厳しい学校なんですよ?」

「そうらしいですね。でもわたしたちの学園も存続の危機ですから、明久君もそこはわかってはいるはずですよ」

「だといいわね」

「……口挟んで悪いけど、あの学園、美男美女が普通にいるから。明久それで緊張するんじゃないか?」

「! 流!」

「豊橋君!! き、聞いてたんですか?」

「まあ。なにやら不安そうに話し合ってたから二人が目下心配するであろう明久のモチ

期について確信的な答えを教えようと思って」

「そ、そんな心配ウチがするわけないじゃない!」

「そ、そうですよ! そんな可能性なんて存在しません!!」

わたわたしながら結構残酷な答えを出す二人に乾いた笑いを漏らしてから、俺は教え
た。

「結論から言えば、明久が恋愛対象として見られる可能性はほぼない。なにせバカで常識が欠落していて平然と友達を裏切り、陥れる。そんなやつがあこの学園でモテるわけがない」

「……ウチが言うのもなんだけど、あんたも結構ひどいこと言ってるわよ?」

「けれど」

「そこでいったん言葉を区切って一呼吸置き、少しだけ声色をまじめにしてからこう言った。」

「観察対象としてストーカーまがいをする連中だってあの学園にいるから、そういう意味では明久はモテるだろうぜ」

「……」

実際に言うところのほんの一部に馬鹿な男ほど好きになる属性を持った生徒が在籍してるので下手するとお持ち帰りされる可能性があるのだが、そこはあえて触れない。絶対に

触れたくない。

二人が黙つたので帰りに明久の家に突撃するのかねと思ひながら自分の席に戻ったとき、西村先生がちようど入つてきたので今日も頑張りますかと首を回した。

このクラスにあの学園の生徒は誰も来ない。そんなのいたらあの学園に在籍できないし。

そんなことを思ひながら授業を聞いていると、「流。この問題をこいつらにわかりやすく説明してやれ」と呼ばれたので顔を上げて内容を推測して、とりあえず立ち上がつてから「えつと……この化合物に関するものですか？」と質問すると「ああそうだ」と言つて周囲を見渡すので俺もつられてみる。

すると、雄二や姫路、島田や秀吉以外——つまり生徒ほぼ全員——が真面目に聞いていなかった。

よくこんな状態でここまでこれたなと思つた俺は仕方なく黒板の方へ移動し、「はいそれじゃ説明しまーす」と言つてからチョークでさらさらと絵を描いていく。

「とりあえずこの人物を今から説明する前のものとしようか。この容姿だ。他の奴らからすごい声をかけられるのは想像つくだろ？」

『『『そうだな』』』

とりあえず美少女キャラ書いて説明を始めたところ、案の定食いついたのでこのまま続ける。

「だがしかし。彼女は他の男になびくことはない。なぜなら——」

そういつて彼女の隣に化合物に必要な記号とイラストを描いていく。

「このようにすでにこの男が彼女のハートを射止めたから」

『『チツ。この——野郎』』

「はい放送禁止用語使うのやめろよ。で、このカップルの特徴というのが——」

と、このようにわかりやすく説明し終えたころには、授業を聞いていなかった男子生徒たちがすごい興奮しながらノートを描いていた。

本当にわかりやすいなと思いつながら黒板に書いたものを消さないで「席戻りまーす」と言つて席に戻り、校庭に視線を向けた。

今頃あいつらどうしてるかね……？ あ、準備や道順確認で休みになったんだっけ。
明久と康太。

雑談

授業が終わり。

腕を伸ばして休憩モードに入っていると、アデルが「よくあんな方法で教えようと思いましたがね」と言ってきたので「え、だってあいつら女子に飢えてるじゃん」と答える。

「確かにそうですね。私にも現に告白してくる人はいますし」

「そりゃああなたの能力と容姿のレベルが高いからだろ。モデルやってますといつても通用しそうだろうし」

「……そういうものですかね」

何やら美的感覚か何かがずれているらしいアデル。自覚ない美人ほど害のない奴はいないので「まあそこら辺はいいんじゃないかねえの？」と話題を終わらせる。

すると、秀吉が「しかしよくあんな絵を描けたの。イラストレーターでもやっておったのか？」と近づいて質問してきたので「ありや……図解の方が分かり易いからって絵を適当に書いてたときに参考にした本の一つの影響だったの」と答えてから「うちのクラス、結局覚え方の問題だと思っただよな」と呟く。

その言葉に目ざとく反応した雄二が「そうか？ 覚え方を変えたところで変わらん気がするが」と残酷な反論をしたので、「そこら辺は本人の覚える気次第じゃね？」と言つてから「例えばの話」と切り出す。

「雄二の場合は自分でも勉強できるだろうが、霧島がかかわればもつと集中できるだろう？」

「集中より先に身の危険を感じるわ！」

「いやだからな？ この問題が解けなければ軟禁状……お泊りになるとすれば、どうだ？」

「なんで言い直したんだよおい！ そして確かに回避したいから覚えるな!!」

「雄二よ。いい加減にあきらめたらどうじゃ？」

「坂本代表。女性からのアプローチを逃げるとは紳士失格です」

「アデーレ。あいつのアプローチは言葉通りのそれじゃない。別の何かだから逃げてても問題ない……!!」

そういつて強くこぶしを握るのでここらへんで弄るのは勘弁してやろうと考え「次は秀吉だな」とさらに例を挙げる。

「わしかの？」

「そうそう。秀吉なら台本形式でやった方が覚えるんじゃないか？ 演劇に集中して

るってことだし、ひよっとすると覚え方も演劇に合わせたほうがいいと思つて」

「ふむ。確かに台本を読み合わせるために覚えておるし、理に適つておりそうじゃの」

「秀吉さんは確かに演技力がありますからね。劇団に入ればそれなりにいい役を最初にもらえそうです」

「アデーレに言われると信憑性が増すから不思議じゃの……どれ、少しそのやり方で覚えようかの」

今更だが、アミエ姉妹はそれぞれ名前で呼んでいる。そしてアデーレは俺の事を「流」、雄二の事を「坂本代表」、それ以外をさんづけして呼んでいる……が、明久にだけは「吉井君」と君付けする。

理由はどうでも聞いていないが、さんづけするほど人間として全うじゃないとわかつていからだろうと勝手に推測する。

で、秀吉がやる気を見せたので、俺は「そんじや、さっきの授業を台本みたいにして見たから」と言つて原稿用紙三枚ほどを秀吉に渡す。

それを受け取つた秀吉はあきれていた。

「……なんでそんな準備がいいのかわからぬのじゃが」

「さっき授業が終わる前にこの話しようかなと思つてとりあえず書いた」

「……なんというか、流の滅茶苦茶具合になれたのは良いことなのかの？」

「どうなんだろうなそれ？」

秀吉のため息に首を傾げてみると、「社会に出ることを考えたらいいことだと思いません」と淡々とした口調でアデルが答えた。

「社会に出ることかの……：……：どうにも実感がいいから何とも言えんわい」

「うーん。俺の滅茶苦茶具合なんてまだかわい方だと思っけどな」

「よく言うぜ。中学中退でアメリカの大学に飛び級とかおかしいにもほどがありすぎて信じられねえよ」

「なんじゃと!?!」

復活した雄二がそんなことを言ったので秀吉が驚く。それに対し俺は笑って「信じなきやいいだろそしたら」と言ってから「しっかし、こんなまじめな話できるなんて思わなかったな」と話題をそらす。

「そうですね。私もこうしてクラスメイトと会話するのは初めてかもしれない。瑞樹や美波以外では」

「まあそうじゃの。わしらは基本的に騒ぎを起こしまくっておるからそれどころではないことが多いし」

「あとは妃や上下院、鈴鹿やセリーヌが来て騒ぎになるんだ。こんな静かな時間めつたにない」

「霧島も来ること忘れんなよ」

とまあこんな感じで補習の時間は過ぎていった。
のだが。

その帰り。というか教室を出て廊下を歩いているとき。

久保利光というAクラスの学年次席にいた男子生徒が自習か何かできていたらしいのだが、何やら様子がおかしい。

すれ違いざまにどうしたんだろうかと思っていたところ「そうか今日から吉井君はいないのか……」と残念そうな言葉が聞こえたので、聞こえなかったふりをして音もたずに帰ることにした。

そういえば康太が一部で明久の写真などが売れているって言うていたが……まさか伏兵がいたとはな。

あいつ性別構わずに愛されるってすごくない？　なんて考えながらその事実をそつと胸の奥にしまうことにした。

ちなみに。ムツツリーニ商会は一週間休業します。当人いないからそりやそうだろうよ。

初日朝

そしてついに来てしまった留学期間初日。

頭が痛いぜ。つたくよ……ババアからメールで受け取ったりスト見て思わず吹き出しちまったし。

なんだって俺に縁があるやつらなんだろうな。合縁奇縁とは些か無縁な生活を送りたかつたんだがなあ。

——初歩の時点で無理だとか言うなよ。あいつらはなんていうか……うん。

もしかしてあっち、自己推薦で人数決めたとかじゃないだろうな。

なんて嫌な流れなんだこん畜生なんてため息をつきながらいつも通り登校していると、普段誰も会わないはずの道に誰かが立っていたのに気づいた。

顔を上げてみると、金髪ツインテールで身長百五十あるかどうかで釣り目だというのに『かわいい』とか言われる女が腕を組んでいた。

まあ時間が時間（朝の七時前）だし、学校まである長い坂を上り始めたところにそいつがいなければ、誰も会わない道だといってもいいだろ。

というかなんでこんな時間帯にいるんだ……？ と訝しみ乍らも近づいた俺は、仕方

なく声をかけることにした。

「朝早くからご苦勞なこつたな」

「……………」

返事がない。

もう少し近づいてみると、立ったまま舟をこいでいた。

……放置だな。

俺はその状況のまま放置して学校へ向かった。

いつも通り自分の荷物を持ったまま向かうは作業室。要望なので仕方なく手伝うことになっている。メンテナンスを。

昨日買いだめしておいた朝食をレジ袋から取り出した俺は、栄養ドリンクを飲みながらコピーしたデータを百分割したものの一つを精査させていく。

正直解析ソフトをここに来る前に並行して作っていないければさらに時間がかかってどうしようもなくなっていただろうなと思いつつながらサンドウィッチを食べつつ眺めていると、備え付けの電話が鳴ったので食べ終わってから受話器を取る。

「はいもしもし」

『ああくソジャリかい？』

「ババアどうした?」

『どうしたも何も仁王立ちで寝てるガキがいるんさね。どうしたらいい?』

「……クラクシヨン鳴らせ」

そういつて俺は電話を切ると、外からクラクシヨンの音が響いたので本当にやったのかよと思いつながら、自分の作業を続けていた。

で、ババアが来たので交代する形で部屋を後にした俺は、自分の教室の自分の席に座り、相変わらず俺来るの早すぎるなあと思いつながら欠伸を漏らした。

八時十分前から教室に生徒が集まりだす。それより早いと秀吉やアデーレ、それに姫路さんとかぐらいい。だからたまに宿題について話したり世間話したり世界情勢について話したりしている。

そんでもって明久は約五割で遅刻する。まああつちに行くので大丈夫……だと思いつたい。

どうなるかねえと思いつながら挨拶しつつ外を眺めていると、ガラツと勢いよく扉が開き「ここに鈴鹿……いえ、今は豊橋だっけ? 豊橋流っているわよね?」と高圧的な口調で質問してきたやつが。

その瞬間俺は窓に手と足をかけたが、それと同時に黒い覆面集団——通称FFF団が

包围網を完成させていた。

その速度に戦慄しながら足を窓枠からおろした俺はどこからともなく取り出したコインを畳に叩きつける。

叩きつけられたコインは瞬時に爆発音と煙が充満する。F F F団の連中は前が見えないなどと言いながら互いで互いをつぶして居る隙に、俺は荷物をもって飛び降り、ロープを屋上のフェンスに投げる。

ロープはうまくひかつかつたので俺はある程度の高さで勢いがなくなり、普通にジャンプして地面に着地。

ロープを使われなくなかったのであとで回収しようと思いつつ分かりにくい場所にまとめ、そのまましばらく姿を隠そうと思った。

まあ、そんな都合よかつたら、西村先生いりませんけどね。

「どうした豊橋。もうすぐ授業だというのにこんなところに来て」

「あつはつはつはー……ですよね」

隠れてみようと思った場所に来たら西村先生と鉢合わせしたので仕方なく一緒に向かう。

「しかし、なんだ。こうしているのに廃校の危機になっているのはいささか信じられないな」

「でしようね。俺だつて聞かされただけなら信じてなかつたと思います」

「んで？ どうしてあんなところにいたんだ」

「逃げてました」

「……………またあいつらか」

はあとため息をつく西村先生。俺は苦笑いして「まあモテる奴は嫉妬の対象なんですよ」と一応フォローしておく。

「それで授業どころではなかつたら本末転倒だろ」

「男つてそんなもんでしょ」

「お前は違うだろ」

「まあ。結婚する気なんてないし、モテる奴は上つ面良くなくてもモテますしね」

「…………お前が言うのと嫌みにしか聞こえないんだろうな」

「なんででしようね」

ここですつとぼけてみる。自分の容姿がどうかなんて所詮外見上のもの。みてくれも自分の構成要素の一つであるにもかかわらず、それよりも…………なんて言ってるやつには賛同したいが同意はしない。

というより今はこの場に来ている『彼ら』とどう接していくべきなのかを模索しない

と俺の命が尽きそうで怖いから考えようとしているのだが。

いい考えなんて浮かばないんだよなあと諦めつつ歩いていると、「しかし吉井の奴、大丈夫か？」と西村先生はつぶやく。

「そこはもう、大丈夫だと思っほかありませんよ」

「それしかないのは確かだが、どうにもあいつがまともに登校してるのが想像できない」
「俺もです」

「おい」

「まあ大丈夫かもしれないですよ。帰ってきた時どうなっているか知りませんが」

「……それはそれでどうなんだ？」

向こうに渡したのであつちでどんなことが起こり、どんな反応になるのかわからな
い以上そういう答えでしかないけれど、西村先生は顔をしかめた。

「まあいい方向に変わっていけばいいんじゃないですか？」

「……確かに。少しでも勉強に向けられて帰ってくればいいな」

あまり想像できないのかさういいながらもため息をついたのを見た俺は、そろそろ教室に着きそうなので「それでは」と言って先に教室に入った。

初日昼

昼休み。

その日によって弁当だったり学食だったりする俺だが、会いたくもない奴らと遭遇する確率を少しでも下げるため、今週を弁当にすることに決めていた。

そのため、Fクラスで秀吉たちと食べるいつもの日常になるはずだったんだが、そうは問屋が卸さなかった。

「留学生としてきたのは誰じゃったかの？」

「俺より流のほうが詳しいぞ秀吉」

「……嫌だ口にしたくない」

「どれだけ嫌っておるんじゃ!?!」

昼食。いつもなら明久と康太もいるのだが、生憎あいつらに入ってもらっていないので俺と秀吉と雄二のみ。

女子三人はAクラスへ行き、由美たちと食べている………つて。

「あ」

「どうした流。ついに自己破産したか」

「お前が霧島の告白を断る確率より低い戯言をありがとう。いや、姫路さんたちAクラスに行つたからそのうち留學生の奴らもこっちに來そうだなと思つた次第。だから、さらばだあ！」

「逃がすかあ！ 秀吉!!」

弁当を瞬時に片づけた俺はそれをもつてそのまま教室を出て、一目散に駆け出した。

「いやあ、わしは流石に……流には世話になつておるから遠慮するぞい」

「なら……須川！」

「どうしたあ？」

「クラス全員に通達しろ。『豊橋流は留學生の女子と知り合いだ』と」

「殺して来ればいいんだな？」

「いや、捕まえてFクラスに縛り付けておく。ただし、相手は天災級の天才だ。人海戦術である程度視認できる距離を保てるように指示しろ」

「了解」

指示を受けた須川はすぐさまクラスメイト達に雄二の指示を伝え、それを聞いた彼らは無言で教室を出て行つた。

残つたのは雄二と秀吉。

秀吉はにやけている雄二に懸念していることを聞いた。

「のう雄二」

「なんだ」

「もし雄二の考えていることを流が考えておつたら、どうする気じゃ？」

「追手が来るぐらい予想してらだろあいつのことだから。だから深追いさせないで
程度距離を保たせているんだよ。そうすれば疑心暗鬼になって行動しづらくなる」

「絶対にバレない場所に隠れでもされたら終わりではないかの？」

「そんな場所あるわ……」

秀吉の指摘を否定しようとした雄二だったが、記憶している校舎の構造を思い出して
いくうちに言葉を失った。

「どうしたんじゃ？」

「……俺達が絶対に入りたくない場所と教員じゃないと入れない場所。もしその二つの
どちらかで籠城された場合勝ち目はない！」

「あつたではないか。これでは流を出し抜くことなんてできなさそうじゃの」

「……いや！ あいつはFクラス男子だけで搜索してると考えているはずだ。そこに盲
点があるぞ」

「……」

急に勝ち誇つたように言い出した雄二に秀吉は、どう転んだところで流に逆手に取ら

れて終わりのような気がした。

「……というわけで、ババア。ちよつと研究室籠つてるわ」

「あ？ ふざけたこと抜かすんじゃないよくそじやり。学生だろ普通に授業でな」

「嘘だつ!!」

「遊んでるんじゃないよ！ ……まったく、この学校がつぶれる瀬戸際だつて知ってるくせい」

「俺関係ないし」

「大ありだろ！ あんたが恨まれてるのが原因なんだろう？」

「知らない！ 俺は本当に何も知らないんだ!!」

とかやっていた始業のチャイムが鳴った。

学園長室で熱弁をふるった俺は冷静になり、「んじや、そういうことで」と出ていこうとする。

ババアは書類を見ながら「待ちなクソジャリ」と呼び止めてきたので「断る！」と胸を張って叫んでおく。

「まだ何も言つてないさね！」

「はん！ ババアの頼み事で面倒ごとにならないことなんてなかったんだ!! 頼まれた

ことホイホイかなええると思うなよ!!」

「別に頼み事するわけじゃないさね。ただ、Aクラス行つて留学生達と交流及び案内をしろと命令するだけさね」

「死ねっ! そんなもんAクラスに任せておけや!!」

「生憎と、向こう側からのご指名さね。さんざん派手に暴れまわつたんだからしようがないと言つたらしようがないと諦めな」

「おうそうか。今すぐ突っぱねなければこの学園つぶしてもらうぞ」

「シヤレにならなすぎさね! あんた、本当にこの学園がつぶれてほしいのかい?」

「どっちでもいいんだよ俺は。ただ、Fクラスの奴らが面白いから残したいと思つただけ」

「……ふーん。そうかい」

それ以降何も言わなくなったので、俺はとりあえず雄二に対する報復を決めてから息を吐いて部屋を出た。

踏んだり蹴ったり

授業中であるにも拘らず、俺は現在Aクラス前に来ている。

今から誘った場合、報告に書かれることを思い出したので躊躇うことになった。

うん面倒。そう思った俺は回れ右をして、自分の教室に向かった。

「どこに行つて何をやっていた流」

「すいません西村先生。実は」

「廊下に立つてろ」

「言い訳も言わせてくれないだ?!」

普通に入つたら西村先生に廊下行きを宣告され、俺は弁解の余地もないことに驚く。

「なぜだ!?!」

「流。私が担当しているのは?」

「生活指導です」

「それが答えだ」

それ以上は時間の無駄だというように授業を再開したので、マジデスカ……と思いな
がらトボトボと廊下へ移動した。

体育すわりをしながら天井が綺麗だなと思いを馳せていると授業が終わり。

西村先生が教室を出てきた際に「お前には特別にスペイン語で反省文を書かせてやるから放課後までに持ってくるように」と言つて通り過ぎ、取り囲まれて縛り上げられて教室の中心に座らされた俺は、ふと我に返る。

「あ?」

「諸君! このにつくきモテ男に対する罰はどうする!!」

いきなり処罰の話に入った。

「いやなんでだよ!」

「黙れ容疑者! 貴様に人権及び発言権などない!!」

『そうだそうだ!! 有罪!^{ギルテイ} 有罪!^{ギルテイ}』

まったく事情が呑み込め……てしまったので、どんよりした気持ちのままため息をつく。

「さて……この——に対する処罰だが」

「はいっ」

「なんだ」

「逆さづりからの顔面ダイブでいいと思います!」

「いや、よくねえからな!」

『ちよつと待て』

俺の発言はスルーされ、FFF団の連中は声を揃えてこう言った。

『横溝、それではまだ温い』

温い、だと……!?!?

俺が戦慄していると、先程から進行している奴——おそらく須川——が「名誉会長、温い理由を説明してくれ」と隣の奴に話を促す。

隣の奴は「ああ」と言つて——雄二か——から説明した。

「まずそいつはセリーヌⅡアミエ、如月由美、鈴鹿留美から好意を受けている。その上、学年の好きな男子ランキングでぶつちぎりの一位であり、彼氏にしたい男子でも一位。さらには今来ている留学生の奴らにも知り合いがいる。こんな奴にその程度では温い。最低でも紐なしバンジーを屋上から六回経験させなければならぬ」

「なんでだよ!?!」

「うっせえ! テメエや明久みたいなモテるやつ見てるとな……全力で邪魔したくなるんだよ!?!」

「さいつていだい! お前本当に変わりすぎだろ!?!」

「なんとでも言え! 俺は絶対に陥れてやる……!?!」

滅茶苦茶なイカレ具合に俺はもう絶句しながら、それでも縄をほどいて立ち上がり、

驚く周囲に対し、息を吸ってから言った。

「須藤は！ 実は!! 目当ての奴がいるのかある喫茶店に入り浸っている!!」
『なんだと!?!』

一斉に視線が須藤へ向く。当の本人は首を高速に横に振り、「そ、そんなわけないだろ!」と否定する。

「一度行ってみたらかわいい子がいたな! そういえば!!」

『須藤を捕まえろ!!』

「だから違うって!!」

全力でターゲットを追いかけて行っただので、誰もいなくなつた教室の窓へフラフラと近寄つた俺は寄りかかつて盛大に息を吐き、「明久も大変だな」と同情の念を禁じえなかつた。

少しのんびりしていると、秀吉が戻ってきた。

「つて、なんじゃこの跡は!?!」

「ちよつとつかまつてた」

「……ああ、大変じゃつたの」

何かを察したのか同情の視線を向けてくる秀吉。俺は手をプラプラさせ「俺もさつきまでいろいろな意味で放心してたから驚いたわ」と何でもなしのように言う。

実際身代わりにできるやつ情報のなんてたくさんある。タイミングを見計らえば俺への実害をゼロにするなど、たやすい。

でもあそこまで恐ろしいともう笑ってられねえなと思いつながら少しまじめに考えていると、「そういうえば姉上が放課後Aクラスに来てほしいと言っておったのじゃ」と伝言を伝えてくれた。

「OK・OK・放課後ね。了解了解」

「しかし、なぜあんなブーツとしておったのじゃ?」

「んーやつぱり裏で支配しないと自分に対する被害がなくなりそうにないか……色々あつてちよつとやる気なくしてた」

「なるほどの……つて、何をしようとしておるのじゃ!?!」

「そのためには懐柔しなければいけないのか? いや、それでもモテるやつが気に食わない連中だ。俺への被害がなくなるわけじゃないだろう……うくむ。難しい」

これはかなりの難題だな。ミレニアム問題と同じくらいだろう。

秀吉の言葉をスルーしながら考えていた俺は、結局放課後まで自分の身の安全を確保するすべを探すのに時間を費やした。

……ん? そういえば西村先生に反省文提出とか言われて……げ。

やばい。一文字も書いてない……ぞ。

「ああああああ!! もう放課後じゃねえか!! あいつらの対策考えてたら放課後になっちまったじゃねえか!!」

頭を抱えてブリッジみたいのにのけぞりながら叫んでしまう俺。つついっやっつてしまったことに絶望を感じながら、ついでにAクラスに來いという話を思い出し、全力で頭を回転させながらひとまず反省文を言われたとおりのスペイン語で書いていると、

「ああ流。さっきの反省文の話だが、お前の状況を鑑みて特別になしだ。Aクラスへ行く用事を優先しろとのことだ」

とあっさり言っただけで通り過ぎてしまったので、シャーペンを止めた俺はしばらく固まった後コテン、と横になった。

……そりゃないぜ西村先生……。

留学組登場

西村先生に特例で反省文を免除された俺は、行くのが嫌だったので荷物をまとめてそのまま下校しようとしたところ西村先生に襟首をつかまれて連行された。

Aクラス前まで。

「嫌だー！ 絶対に嫌だああ!!」

「往生際が悪いぞ豊橋。割り切ったんじやないのか」

「わざわざ自分から死地へ向かうのに割り切れるか！ ともかく、時間切れになるまでに絶対逃げ切る!!」

「あ、おい……やれやれ」

一瞬のスキをつけて逃げ出した俺を見てため息をついたらしい西村先生は次の瞬間。

「逃げられると思うなああ!!」

「っ！ げっ！ くっそはえええ!!」

ロケットスタートのごとく勢いで駆け出して追いかけてきた。

確かに明久たちが逃げるのに追いかける力が必要だろうが、瞬発力がすごい。さすがにトライアスロンを趣味でやっているだけある……って。

「捕まえたぞ豊橋！」

「ぎやつ！ 速過ぎだろ！」

すぐさま捕まった。これを逃げられる明久たちの体力どんなふうになってるんだよ。

「まったく。お前もFクラスに染まってきたな」

「いやーそれはないと思つてたんですがね」

「まあ、実際まともなのがお前とアデーレ、姫路ぐらいしかいない」

「それ言つていいのかよ!?!」

「だからこれ以上問題を起こさないでくれ」

再び引きずられる。今度は俺も抵抗する気が失せた。

これ以上やつても捕まる未来しか見えないし、それならもう腹くくつていくしかない。
い。

覚悟を決めた俺は引きずられながらこの先に起こりうる未来の対策を考えることにした。

「行つて来い」

「うす」

再びAクラスの前。

西村先生の声に後押しされた俺は普通に扉を開ける。

その先にいたのは――。

「やつと姿を現したわね鈴――豊橋流!!」

「おー今朝ぶり。早起きしてその場で寝てたせいでクラクション鳴らされたオチビちゃん」

「!? な、なんでそんなことあんたが知ってるのよ!? それと、チビなんかじゃないわよ!」

やたらとかみついてくるので適当にスルーを決め込んだ俺は、案の定見知った顔しかないの（というか、誰が来ても一緒だった）無礼講で行くことにした。

「おっすお前ら、つぶれろ!」

『いきなりかよ』

全員が息を合わせたかのようにツツコミを入れてきたので満足そうにうなずいてから「あんなんパンフ見れば大丈夫。じゃ、これで」と言つて踵を返すと再び『待て』と八人の声か。

「えー? 案内要らないじゃん。俺じゃなくても同じクラスの妃とか鈴鹿とかいるじゃん。隣のクラスにも上下院いるんだし、俺不要じゃん? 今底辺クラスで楽しくやってるからあばよ!」

「いや、だから待てて」

そういつて俺の肩に手を置いたのは学園祭で遭遇した空天高人。

そいつは振り返って嫌な顔をしている俺に「折角こうして再会できたんだし、お互いに情報交換しようぜ?」と言つてきたのでどういふ意味か考えてから「お前、自分で言つてる意味わかつてるのか?」と確認する。

「分かつてるつて。今回の件、うちの理事長が圧力かけて勝手に始めたことだから。巻き込まれた側で、こうしてついていけないやつらが立候補してきたんだからよ」

あつさりと内部事情をばらしたので、ひとまず信用することにした俺は「正味な話、この学園から送り込んだのはあつちの学園でついていけない奴が数人いるから、多分俺達の勝ちになるだろうとは思つてる」と予想している結果だけを教える。

すると高人は「だよな」と頷いていた。

「もともとうちの学園の基準がおかしいですもの、催眠術や洗脳でもしない限りついていくのは難しいと断言できますわ」

「ん? 時森居たのお前?」

「い、居ましたわよ最初から! はつきり認識しておりましたわよね!」

顔を赤くさせながら精いっぱい怒る女子——時森かなえ。同い年のはずなのに身長のせいで子供が怒つてるように見えないのはかわいそうというかなんというか。

まあチビ——正道院朱莉より身長低いからなと思いつながら件のチビの方を見ると、反射的に一步下がり、顔を赤くさせながら「な、なによ」と呟いた。

何もないんかいと言いたいのを抑え、残り二人——八人のうち三人は留美たち——に改めて視線を向ける。

片方はナルシスト。そしてもう片方が——

「師匠！ お久しぶりです!!」

「……なあ高人。こいつまだこんなこと言ってるのか？ いい加減ひっぱたいて現実に戻した方がよくないか？」

「いや、それがな？ お前が退学した後大泣きして。その数か月後に戻ってきたら『うじうじしていても師匠に会えぬ。だから絶対にこの学園のトップになる!』と宣言して必死に勉強してるからよ……」

「師匠！ しかしながらトップになることはかなっておりません！ 私の勉強不足です誠に申し訳ありません!!」

「……うっぜー」

——俺を師匠と呼ぶ少女。実際は思い込みの激しい奴である。ちなみにナルシストは鏡を見ているので話には参加していない。一応名前は宇月彦摩呂という。

それで思い込み全開少女は遠坂華凜。武芸の方に才能が持っていていかれたのか勉強の方は凡人レベル。

とはいっても、ここだとAクラスに所属できるぐらいなので、あの学園のレベルの高さがうかがえる。

どうでもいいが。

まあそういうわけで留学生の紹介終了。用件も終わったことだし、俺は普通に背を向けて「また明日ー」と逃走を謀る。

だというのに、今度は留美達が待ったをかけた。

「お兄様。お待ちください。まだお話は終わっておりません」

「内輪で話せばいいやん。俺関係ないし」

「流様。これは流様にもかかわるお話です」

「なに」

ぶっちゃけ縁が切れたところから話が戻ってくる理由も見当もつかないので仕方なく聞くことにしたところ、薫が「お兄ちゃんのこと好きなんだって。理事長が」と言ってきた。

……………。

「あの泣き虫根暗の二十歳理事長が、ね……」

「うん」

「……忌々しいことに」

「……悲しいことです」

「つて、流はともかく鈴鹿さんと妃さん？ 今何か言わなかったか？」

「いいえ？」

はつきりと聞こえた俺は迫及する気もないので「そんなの今更じゃね？」と肩をすくめる。

その反応に対し、一同は驚きの声を上げた。

『はあ!?!』

「あれ、知らなかった？ 退学するとき散々泣かれたんだけど」

「そ、そんな話聞いたことありませんわよ!?!」

「俺特に何をしたわけでもないのに時々呼ばれてたじゃん」

「あんた散々私たちの事弄り回したわよね!?!」

「結構露骨だったはずだけど？」

「全然わかりませんでしたよ師匠!?! たまに一緒にいた時お会いしたことがあります
が、そんな雰囲気一切ありませんでした!」

「お前ら鈍感だなー」

『お前マジで何なの!?!』

絶叫に近いツツコミを聞いた俺は耳をふさいでから呟いた。

「断つただけだな。退学する時に」

シン——と、一瞬で静まったので「あのシヨタコン俺ほしくてこんな手に訴えているのかひよつとして」と可能性を呟いてみる。

完全に諦めたわけじゃないのだろうかと少し悩んでいると「あのお兄様？ ひよつとしてですが私や由美がお兄様の事を好きだというのは承知だった、ということになるんですか？」と慎重な口調で聞いてきたのであつさり「もちろん」と返しつつ、あの人やること子供じゃねえかと考えてげんなりする。

「はあ……」

「いや、ため息をつきたいのは僕たちの方だ豊橋。ずいぶんあつさりともろもろ暴露されたせいで、どうでもよくなってきたじゃないか」

「実際お前、自分以外どうでもいいんじゃないの?」

「失礼な! 確かに我が一族内で最も映えている僕自身が一番重要であるが、だからといって学校内の空気がおかしいことを容認するわけがない!」

「へー」

「つうか鈴鹿さんと妃さん、顔真っ赤にしてぶつ倒れたんだけど、これどうやって收拾つ

ける気？」

「しーらね。じゃ、俺帰るから。あとよろし」

『えっ』

あつげにとられている間に俺はさっさと教室を出て帰ることにした。

その日の夜。

「あ、もしもし霧島？　そういえばいつぞや霧島がいない日に雄二が構ってもらえないからかとても寂しそうにしていたんだが……うん。そう。いや、でもいきなり突撃はまづいからさ、ここはひとつ穏便に悟られないようにしないと喜んでもらえないぞ？　だから……」

仕返しとばかりに霧島に電話をかけて雄二の未来を確定ルートにさせるべく吹き込んだ。

ま、多分しなくても確定だろうけど。

流石に格が違った

留学生活二日目も特に何ともなく過ぎていき——強いて挙げるなら初日の報告書にて明久の遅刻が書かれていたことぐらい——三日目。

いつも通りの朝を過ごして教室に入った俺が目にした光景は、簀巻きにされてどこから調達したかわからない角材に括り付けられている明久の姿だった。

「助けて流！」

いるはずのない人間の声が聞こえた。いるはずのない人間の姿が見えた。

「幻覚でも見てるのか、俺……」

「幻覚じゃないから！　ちゃんと僕だから！　生きてるから!!」

……。

「おはようみんな」

「そしてこの状況で無視?!　流、君はそんな人間じゃなかったはずだ！」

喚く他人の空似を無視し、俺は黒ずくめの一人に話を聞いた。

「どつたの？」

「ああ流か。実はこの吉井明久という生物がな」

「いや僕人類に属しているから！ れっきとした人間だから!!」

「ここまで女を侍らせていたんだ……!!」

『しかも結構な美少女を二人も!!』

予想通りの言葉……だと思ったが、なんか人数がおかしかったのもう一回聞いてみる。

「二人って言った？」

「そうだ」

「……」

あれ？ もう一人誰だ？

ものすごい不思議になった俺はとりあえず考えることにして「ま、ほどほどに」と言っておく。

「って、止めてよ流！」

『諸君。このにつくき野郎に今こそ正義の鉄槌を！』

『ガンホー！ ガンホー!!』

「い、いやああああ！」

ふむ。一人は確定しているのだが、もう一人って誰だ？ あのマッドはこの学園に転校する気ないだろうし、耳年増は多分、康太たちと仲良くなっているはず。マゾヒスト

なんて論外だ……ろう。

「やめて！ 僕のイケているお顔が!!」

『不細工が黙ってる!!』

「ぎやああああ!」

となると本当、一体誰を連れ帰ってきたんだあいっなんて肩ひじをつけて考えていると、処刑が終わったのか「こんなものでいいだろ」と言っただけで解散していった。

残されたのはぼろ雑巾のように捨てられた明久らしき存在。

朝から大変だったなと思っていると、廊下を走る音が聞こえてきた。

そのまま開く我がクラスの扉。

「ちよつとアキ!? 女の子と一緒に登校してたって聞いたけど、本当!?!」

「らしいぜ」

俺の言葉にピキッと何かが壊れる音を立てた島田さんはそのままずんずん明久の前まで進んでから、ぼろ雑巾になっているというのにアルゼンチンバックブリーガーをきめながら「どうしてそんなことになっているのよ!?!」と叫んだ。

「痛い! 痛いよ美波!! って、ちよつと本当にしまってる! 首が! 足が!!」

「う、うるさい! う、ウチが勇気を振り絞ってあ、あんなことをしたのに他の女子と一緒に登校だなんて……!!」

「へえっ!? あ、そ、それは……!」
「ん?」

なんか島田さんが盛大に暴露した気がするんだが……まあいいか。

それよりもう一人本気で誰だあ? と考え込んでいると「おはようございます……つて、あ、明久君!」と姫路さんの驚いた声が聞こえた。

この時点でもう俺の集中力は消えており、誰でもいいやと投げやりになった。

仕方ないので惨状に視線を向けると、島田さんが4の字固めで明久に追い打ちをかけたおり、姫路さんもそれに倣うかのようにもう片方の腕をとって4の字固めを敢行。その結果タツプすることさえ許されない明久は首を必死に左右に動かして訴えるが、誰も助ける気がない。

「おはようなのじゃ……つて朝から一体どうしたんじゃこの光景は!」

「よう秀吉。明久が4の字食らってる」

「ん? 明久が来ておるのか? まだ留学中ではなかったのか?」

「そうですよ明久君! どうしてここにいらっしゃるんですか!」

「ギブツ! 説明……する、から……」

「あ、落ちた」

「「え」」

与え続けられた痛みには耐えきれなかった明久は、真つ白になった男のようにぐったりと気絶した。

とりあえず明久を保健室に西村先生が連れて行っている間、俺は詰め寄られていた。

「なあ、どうして明久がここにいたんだよ？」

「そうよ。まだ期間中でしょ？」

「つてか、なんで俺に聞くんだよ？」

「学園長以外に向こうに行つた人たちの様子を知れるのは豊橋君以外にいませんので」

「うむ」

んなこといわれても……と頭をかきながら「一応機密事項なんだが」と呟いておく。

「明久、問題起こして追い出されたんだよ。とはいっても、いじめられていた現場を助けたんだがな」

「……それって、おかしいですよ」

「そうよ。助けたんだからいじめていたほうが悪いんですよ？　なのにどうしてアキなのよ？」

「それだ」

「それはだ……」

「……まあ、いいじゃねえか。これでこっちの学園の廃校は免れたんだから」

何か心当たりでもあるのか俺の言葉を遮り、この話題を終わらそうとする雄二。

実際この学校の成績より下がってしまった場合、うちの学園のほうが有利になる。そのことぐらいいは向こうもわかりきっているはずだろうに一体目的は何だろうかと勘ぐってしまう。

まあ俺もこれ以上言いたくなかったので「そうそう。詳しい話はあいつから聞いてよ」と話題を終わらせることに。

ぶっちゃけていうなら二日連続で遅刻しかけたところで不良（位を笠に着てる奴ら）に絡まれていた（と、言うより多分高圧的態度で話しかけられていた）在學生を助けた際（勘違い）に殴り合いに発展したことが原因。

見事ボロボロになったが守り抜いて教室に入ろうとしてシャツトアウトという顛末

……あ

「そうか」

「どうしたんだよ流？」

「思い出した。明久が現状引つ張ってこれるもう片方の奴を」

「？ 何の話じゃ？」

「だ、誰よアキなんかを好きになるもの好き」

「だ、誰なんですか？」

お前らも物好きになるんじゃないかと言いたかったが黙っておき、話題を変えることにした。

「なあ雄二」

「なんだよ？」

「明久が零点になったところでほかの四人が劇的に成績を伸ばしたらこつち、廃校だぞ？」

「……：そーいやそーうだな。だがカンニング根本にムツツリーニが早々成績上がると思わん」

「ねえ誰なのよ豊橋」

「お、教えてください豊橋君」

話題は変えられなかった。

仕方がないので俺はヒントだけ教えることにした。

「白馬の王子さま好きな夢見がち超純粋お嬢様」

「？ だからどういふことじゃ？」

「吉井君がここまで美少女二人をエスコートして登校してきた話ですよ、秀吉さん」

「アデルか？ また珍しいの、もうすぐHRじゃぞ」

「出かけ先で少々トラブルが発生しましたのでその対処に手間取りました。話自体は学

校内で噂になっていましたよ」

「もうかよ。早いな」

「仕方ねえと思うよ？　なんとたつて坂道上る間に大概の奴は見るんだから」

「お前ら席に着け」

いつものメンバーになって盛り上がっていたところ西村先生が来たので俺たちは自分が普段座っている席へ移動した。

明久狙いの二人

尋常じゃない回復力で一校時前に戻ってきた明久を待っていたのは、男子生徒による視線の重圧と、姫路さんと島田さんからの無言の圧力、そして俺が予想した通りの少女が二人、ぴったりと明久の両脇に座っているという状況だった。

ドンマイ。

事の起こりはHR。西村先生が来たので席に座った俺たちは、「唐突だが、わがクラスに転校生が二人、来ることになった」という言葉でボルテージが最高潮になった。

が、予想できていた俺は関係がないので欠伸を漏らして教科書のカバーで隠した漫画をひっそりと読み始める。

「本来なら編入試験を行うのだが、本人たちたつての希望でこのままFクラスに決まった」

「先生、女子ですか!? 女子ですか!」

「……二人とも、入ってきなさい」

さらっと無視する西村先生。俺はもう我関せず。

い。しっかし面白いなこの漫画。何回読んでも、オチがわかっていても色褪せることがない。

こういう作品はやっぱり昔の方が多いいなあと考えながら読み進めっていると、「豊橋」と呼ばれたので中断することにした。

「なんですか？」

「今何読んできた」

「教科書です」

「そこに書いてあったのは？」

「『ふざけるな！』」

「こちらに持って来い」

……………。

……………。

「先生、俺が呼んできていいですか？」

「その前に読んでいた本を俺に渡せ」

逃げ切れなかった。

——と、いうわけで、断腸の想いで入れ替えた教科書を西村先生に渡して保健室行って明久共々連れてきて自己紹介してもらいさっそく一校時目になった。

警戒されているだろうから漫画は読めないなど思いながらノートを適宜まとめ——冒頭になる——いると、くしゃくしゃに丸められた紙が飛んできて俺の頭に当たった。

誰だよなんて思いながら丸められた紙を広げると、「たすけて」と書かれていた。

知らんがな。

身から出た錆。自業自得。そんな言葉が頭の中で出てきたので紙を破いて窓の外に流す。

というか、なんか大ごとになってきたなあ本当。授業を聞き流しながらノートをとっている状況でそんな感想が出てきた。

最初は廃校だけの騒ぎだったのが、今では向こうの学校から転校してくる人数が増えて向こうが瓦解しそうになってそうな。

まあ廃校自体が滅茶苦茶大ごとなんだがな。

今更深く考えたところでミスったなあとしか思えなくてやばいなあと、俺が助けてほしい状況になってる気がががが

「流」

「がががががが………」

「流!!」

「……んあ?」

耳元で叫ばれたので意識が覚醒する。なんかトリップ状態になってしまった。

深く考えたと負けつてこういうことなんだろうかと納得して声の主に向いてみると、雄二がどこか心配そうな表情をしていた。

「大丈夫か?　なんか、授業の途中からお前、窓の外を見ながら全身震わせていたぞ」

「全然大丈夫じゃない。なんか自体がだんだん悪い方向に向かっている気がするってて」

「いやだからそれだつて!」

「……考えすぎて、な。それよりどうした?」

「どうしたもなにも、お前がどう見ても異常だったから心配したんだぞ」

「なんだと!?!」

驚きの事実思わず声を上げる。そしてその声に驚いた雄二が「俺が心配するのはおかしいのか!?!」と言ってきたので素直にうなづく。

「だつてお前、クラスメイト平然と捨て駒にするじゃん」

「作戦上必要な犠牲だな」

「明久を捨て駒以下扱いしてるじゃん」

「あいつはどうでもいいだろ」

「流石に酷くない!? 僕だって普通に人権があるんだからね!」

「明久が人権を知っている、だと……!」

「そこに驚くの雄二!? 流石に僕だって知っているからね!」

「……で、俺はお前の現状にツツコミを入れたらいいのか?」

明久の現状。それは

・ 転校してきた女子二人にしがみつかれている

・ その周りをFFF団が囲んでいる

・ 処刑執行まで秒読み

「そして島田さんや姫路さんも第二陣として待機中……と。雄二、指示は?」

「いんや? 一人になったら捕まえて闇討ちしろとしか」

「思いつきしてるじゃねえか」

「いやそんなこと言ってるじゃないで助けて!」

もはや明久の公開処刑はお家芸なので何も言う気が起きなくなっている。それよりなにより気になることがたくさんありすぎて構う気がしない。余裕なんてものもない。

本当、深く考えすぎなのかねとため息をついた俺は雄二に「そういや、秀吉は?」と

聞くと「薫のところへ行つたんじゃないか？」と答えてくる。

「ふうん」

「というよりお前、少しは氣を楽にしていこうぜ？ 考えすぎなんだろうよ」

「確かにそうなんだけどよ……氣にしないと不安でさ」

「明久がここにいるんだから何とかなるだろ。最悪根本とムツツリー二ぐらいなら何とか始末できる」

「お、おう」

始末って……お前暗殺者かよ。

ここまでこの学園無法地帯だったか……？ と今更な感想を抱きながら「いやーそれは最終手段だろ」と冷静に却下する。

というよりそれを真つ先に思い浮かべる雄二が本当に何があつたといいたくなる。

……たぶん、霧島関連だろうけど。

ここまで変わる理由なんて、それ以外思いつかないし。そう結論付けた俺は「Aクラス奴らには頑張つてもらいたいな。それに、高橋先生たちにも」と呟く。

「逃げたぞおおお!!」

「死んでたまるかあ!」

「逃がさないわよアキ!」

「待つてくださいい明久君!!」

「朱に交われれば赤くなるとはよく言ったものですが、瑞樹は体が弱いのでは?」

「……愛の力じゃね?」

どうやって逃げ出せたのか分からないがクラスメイトのほとんどが消えたクラスで静かにアデーレと何事もなく会話していると、「今は豊橋という姓らしいですわね、流さん」と話しかけられたのでそちらに視線を向けてため息をつく。

「——そんなに明久が魅力的ですか、バカ専」

「あらジョークが効いてていいですわねその呼び名。まさに私を体現するにふさわしい」

「そつすね」

「誰です?」

アデーレが俺にか本人のどちらかに聞いてきたその質問に対し「自己紹介」とシンクロして答え、一瞬視線が合つてすぐさま視線を逸らす。

「すいません。そうでしたね。確か……但野明美さんでしたか。ところで、お二人の息が合っていたようなのですが、どういった関係だったのです?」

もしかしてリサーチなのだろうかと思いつつながら「二元幼馴染」とまた意識せずにシンクロした。

「とはいっても学校が退学するまでずっと一緒に、帰る方向が大体一緒だったというのとぐらいいですけど」

「なるほど。ではあちらの方は？」

そういつて視線を向けた先にいる人物を俺たちも見てから、数年ぶりだというのにすらすらと交互に説明してしまった。

「あちらの方は長浜文華。お堅い一族の間で大切に育てられたからか、少女漫画のようなシチュエーションに弱い、純粋な方ですわ。こんな捻くれて追い出された奴と違って」

「で、俺はパーティの時にあったぐらいでそれほど面識はない。ただ、ダメ人間大好きなこいつとは昔から仲が良かったな」

「……ツッ！（メンチの切りあい）」

「犬猿の仲、と」

と、ここまで会話に参加してくるのが珍しいことに気付いた俺は「なんだ、トラブルつてセリーヌのことか？」と確認してみる。

それに対しメモをしていたアデルは書き終えてから「ええ」と悔しそうに答えた。

「大方この捻くれ超人のストリートな物言いに心が折れたのではありません？ 私もそのせいで再起不能になった人たちを星の数ほど見てきましたから」

「いや、俺悪く無くね？ 不正やってたあいつらが悪いだけじゃね？」

「不正暴く以外にも潰した人間何人いるのか忘れましたか？」

「興味ないし」

そうあっさり言うのとアデルはため息をついて「これは……絶望的な状況のようです」と漏らした。

ちなみに。島田さんと姫路さん、そして秀吉と雄二は普通に戻ってきたのだが、それ以外の奴らは帰ってこず雄二曰く西村先生につかまり、全員生徒指導室で授業を受けることになったとのこと。

そして、セリーヌ、由美、留美の三人は寝込んだとかで学校に来ていません。原因俺だろうけど。

悩む

「ハア……………」

昼休み。雄二達と食べていたが、現在は安息の地を求めするために一人で食堂に来てい
る。

「師匠！ 前の席大丈夫ですか!？」

「他当たりなさい」

「すみません……………」

カツカレー定食を食べていると華凜が同席を願ひ出たのですぐさま却下して追ひ払
う。

周りには誰もいない。来る奴来る奴全員追ひ払った結果。周囲はにぎやかだが。隣
のテーブルが特に。

「お、遠坂お前もか」

「空天殿も?」

「にべもなく、な。時森なんか席に座ったと同時に移動されてたし」

「まったく失礼ですわ!」

「涙目になってたじゃないのあんた」

「そ、そんなことありませんわ!」

本当、隣が賑やかだ。

いやー本当、この学園がつぶれる瀬戸際だなんて思えないほど賑やかだなあ!!

「安息の地がほしい……」

「あ、あの、豊橋君。前、大丈夫?」

「ん……? 珍しいというか、明久のところ行かなくていいの?」

「えっと……その」

そう言いながら長浜は静かに腰を下ろしてしまった。

まだ食べている途中なので無暗に席を移動するのを許されなし、そもそも何か言う前に勝手に座られるのが不愉快なので「明久のことなら雄二たちに聞いてくれ」と不機嫌な口調で言う。

「……すいません。でも、吉井様のことをお聞きできるのが、豊橋君しかいなくて……他の人は怖くて」

自業自得なクラスメイトに同情する気がない俺は「ゲームが好きで奴だぞ」と一つだけ教えておく。

「そうなんです。ありがとうございます」

「あとはまあ、自業自得で毎日金欠だが……その支援はしない方がいいぞ。あいつのためにならん」

「なるほど……分かりました」

「だから食料は喜ばれる」

「……ありがとうございます！」

そういうと彼女はそのまま立上がり、スキップしながらその場を後にした。

残されたのは俺と、FFF団と、隣で視線をぶつけてくるAクラス留学生組。

どこから手を付けたものかと思いつながらスプーンの動きを止め、「そういえば横溝がナンパ成功したのかキレイ系の女子と一緒に歩いてたな、駅前で」と呟いて標的を変えらる。

生贄を差し出して周りがいなくなったので、今度は隣に視線を向けて「なんだ」ととりあえず聞いてみる。

返ってきた答えは「どうして文華さんだけ良かったんだよ」というもの。

「だって必要なことしか聞いてこないから。あいつ明久に惚れたみたいだし」

「つて、え!？」

「うそっ!？」

「本当ですか師匠!!」

「そーいや転校してきたとか言ってたな……但野と一緒にFクラスに」

「そーそう。あいつも明久狙い。知ってるだろ？ あいつの家系」

『ああ……』

それだけで一同が納得したようなので、食べ終えた俺はトレイを持ち上げて「そんじや」とその場を後にした。

さて――。

昼休みも終わり、午後の授業が始まったのだが、俺は今席を移動して窓側一番前でノートをとっている。そりやもうあっさりと了承してくれたからな。

これで爆心地から遠くなったので問題の一つが原則的になくなった。

残る問題としてはこの留学中の話。向こうの様子を断片的に知る限りでは昔より随分分かりやすい授業にシフトされていることぐらい。康太はなぜか制服について詳細に書いていた。あとは授業についていけているかどうかでことぐらいか。

このままやればこちら側の勝ちになると思うのだが、果たしてすんなりいくのかと思うと首を傾げてしまうのは生きてきた中の経験だからだろうか。

困ったもんだなとため息をついたら授業が終わっていた。

明久の大声が響く中、俺は静かに教室を出た。

「ちーっす」

「休み時間毎にこっち来るのやめてもらえんかね」

「いいじゃん別に。静かなんだし」

「……あんたね」

とりあえず学園長室に避難して騒ぎから逃げしておく。

なんとというか、ここ以外騒動が起きない場所がないから。かかるとマジ面倒だしな。

「つたく。いちいち逃げ込むんじゃないよクソガキ」

「いいじゃん。この戦いどうなるかなあっていう考えぐらいまとめたつて」

「観察処分者が戻ってきた時点で勝ったも同然じゃないか」

「先が見えないって怖いんだよ。向こうでほかの四人が点数上げてたら勝ち目ないしね」

「……そんなことできるとしたらAクラス代表ぐらいじゃないさね」

「おい」

ざらつとそれ以外を貶したので思わずツツコミを入れる。

「自分の生徒貶すなや」

「向こうの学力を鑑みた結果だというのに……それにしても、あなたのクラスの観察処分者は大したやつさね」

「褒めてる？」

「どっちでもいいじゃないかそんなの。いつも通りに遅刻した挙句に喧嘩して追い出されたら女二人連れてくるなんて。流星は観察処分者だね」

「それは流星と言えないだろ」

さてはこのババア、もう勝った気でいるな？

楽天家多すぎ……とため息をつく、「それよりメンテナンスどうなったさね？」と訊いてきたので「自分で確認しろやババア」と呟く。

「くそジャリ。あんたが自分でやり始めたんだろうに」

「ハア？　ここ数年まともにメンテナンスやってないで使ってるババアが悪いんだろ
うが」

「……」

沈黙した。

「なあ」

「…なんさね」

「マジでどうする？」

「何が？」

「この後」

「勝つたらかい？ そうさねえ……特に何もしないよ。期末テストもあるしね」
「なるほどねえ」

あくまで不問にして貸しを作ろうと。別にどうでもいいけど。

「あ、俺夏休みに墓参り行くからしばらく消えるわ」

「あ？ Fクラスは補習でつぶれるの忘れたのかい？ 丸々休めるわけないさね」

「知ってるけど。そこら辺どうにかならん？」

「無理さね」

にべもない。

一人だけ特例つてのも問題になるのは重々承知だったので「ところでさー転校する話
来てる？」と話を変える。

誰の、と聞いていないにもかかわらず、ババアは察したのか「来てないさね」と返事
する。

「いい加減、あんたも素直になつたらどうだい？」

「いつでも素直でーす」

「……そういやそうだったね」

ハアとため息をつくババア。その態度を見た俺はそろそろ授業が始まりそうだったのでソファから立ち上がり「また来るわ」と言っつて部屋を出ることにした。

……まさか家に呼ばれる、なんてないだろうな。

青空見上げて

さぼりたい。

現在の心情を一言で語るとしたらこれ以外に思い浮かばない。

理由を挙げるとしたら学園がカオスになっているから。

四日目という、もう少しで終わるといふのに俺は学園長室に籠るといふ選択を一校時目からしようとしていた。

だが、

「入ってくるんじゃないよクソガキ」

「おいちよつと待てよババア!!」

ババアに締め出されたのですぐにご破算に。

ドアをバンバンたたいていると、向こう側から「少しは混ざれないのさね、まったく」と聞こえたので「うっせえ!」と怒鳴ってその場を立ち去ることしかできなかつた。

そんなわけで屋上。

さぼったので西村先生の説教があると思うと背筋が凍るが、俺は少しばかりのんびり

したくなった。

「はあ……」

寝転がって空を眺めながらため息をつく。本当、どうしたものかと考えて。

大体、周りの奴が深く考えないのが悪いのだ。その行動によつて派生する影響を考慮しない奴らが多すぎる。

……目の前の出来事に一生懸命な奴はなぜかまぶしく見えるが。その結果がどうなるうとも。

これはやはり過去のせいなのだろうかとか己に問いかけてみたが、その質問はむなしく消える。

ハア困った。答えが出ない。思わずため息が漏れる。

人生というものに答えなんてない。自分で選んだ道を一步一步踏み出して満足することが納得いく答えである。

俗にいう、後悔のない選択である。

そんなことを考えて俺は不意に己に問いかける。

果たして、本当に俺はあいつらのことが嫌いなのだろうか、と。

確かに金持ちは嫌いである。だが、それとは関係なしにこの学園に来たあいつらのことを嫌う理由があるのだろうか。

大人になれば家を継ぎ、性格はどうあれ敷かれたレールを歩き続けていく道しかない。もつとも迷いのない道だが、それゆえ重圧は計り知れない。そんな奴らがこうして投げ打って来たというのに、俺は……。

「締まらねえなあ」

思わずそんな言葉が漏れる。

明久達との関係は楽しい。あんな風にバカやってそれでも意地通せる胆力に俺は素直に感心する。

他人のためにあそこまで自分の体や知恵振り絞って何とかやって、出た被害なんて考えない。それは、俺だったら絶対にしない。

だからこそ懂れるんだろうと分析しながらあいつらをふと思い返してみる。

親に反抗してこっちに来た薫。わざわざ聞きつけて転校してきた由美と留美。明久目当てで来た二人は除外して、学園長についていけないからこちらに来たという五人。

一度消えた身であるのにこうして集まって……くれたのはなはだ疑問だが、まあそこは考えないことにしておく。

なんだかんだで俺も甘いのもかもしれない。社会を渡ってきたのにどうにもここに来るから。

流れる雲を見ながら、チャイムの音を聞きながらこれからのことを考えてみる。

『失敗しない人生なんてつまらんだろ』

脳裏に昔言われた言葉が浮かぶ。

『若いうちに失敗してこそ価値があるってもんだ……年取ったらそれも忘れるけどな』

懐かしいセリフだ。初めてあの人に会った時に言われた。

瞼を閉じて思い出す。そして、あの人の——俺を最初に養子として引き取ってくれた

人の——最期の笑顔を思い出して、ゆっくりと瞼を開ける。決意する。

もう今回の件に関して考えるのはやめだ。出たとこ勝負にしよう。

山積みの問題も面倒だ。とりあえずやるだけやるか。失敗してもなんとかできるだろう。

「……………うし」

飛び起きた俺は背伸びして空を見上げ、雲の切れ間から漏れている太陽の光を眺めてから屋上を出た。

……ま、この授業が終わるまで教室に戻る気はないがな！

「……………」

「……………」

「……………あの」

「……………なんだ豊橋」

「確かに朝から授業出ずに屋上にいましたけど、なんで俺殴られたんですかね？」

「警告だ。次はないぞ」

「そうですか」

現在は西村先生専用個室となつている生徒指導室。そんな中俺は頭の痛みに耐えながら正座し、西村先生は椅子に座つて書類を書いていた。

「まあお前が授業に出なかつたのは学園長から事情を聴いているから特にいう気はない」

「俺、殴られ損ですよね」

「だが、言う気がないだけで態度で示したただけだ」

「言つてもらつた方が良かったんですが!？」

「……………その様子だと、大丈夫なようだな」

その言葉に俺は一瞬言葉を詰まらせてから「まあ」と返す。

「そうか。お前には色々とやつてもらつたからな。今回の件に関しては反省文は無しだ」

「ありがとうございます」

そういつて深々と頭を下げ——いわゆる土下座——で、顔を上げてから俺は思い出したように確認した。

「そういえば西村先生」

「なんだ」

「夏休みの補習つてどのくらいでしたっけ？」

「せいぜい二、三週間ぐらいだったはずだが」

「その補習、全部前倒しにはできません？ 俺だけ」

「なぜだ」

「いやーそのー、学園長より前の後見人の墓参りが補習の日と被ってしまったって」

「ふむ」

「俺が今疎遠になっている会社の社長だったので社員一同で行くことが決まっていたので、どうにかならないかなーと」

「そうか……………」

俺の話聞き目をつむって考え始める西村先生。

ちなみに話は本場で、元息子だが盆の墓参りに参加するのは社長として跡を継いでいるからその報告の意味合いが強い。

俺が行かないとそもそもその予定全部狂っちゃうんだよな…………とぼんやり考えて返事

を待っている」と「学園長に言ったのか?」と質問されたので「却下されましたけどね」と肩をすくめる。

「確かに例外を作ってしまうのはダメなんだが……お前は夏休みの補習をすべて前倒しにしてほしいと言っているんだな?」

「勿論です」

「なら、学園長に俺からも言っておこう。その返事次第では土曜日に残ってもらうことになる」

「ありがとうございます」

「別に構わん。生徒の頼みに応えるのは教師の役目だ」

……西村先生カッケー。

俺は素直にそう思った。

ちなみに明久達からの頼みならどうするか聞いたところ。

「ろくでもない頼みしかない奴らに応える気はない」

にべもなく断るらしい。日頃の行いのせいだろうな。

そう推測しながら生徒指導室を出た俺は、休み時間になったらAクラス行くかーと自分の教室に向かった。

回復

休み時間になったので教室に戻る。そして荷物を置いてさっさとAクラスに移動しようとしたところ……

「助けて流し！」

「何デレデレしちゃってんのよアキのくせに!!」

「やめなさいよ明久様が壊れるでしょ!?!」

関節技決められた明久を挟みながら島田さんと明美が口論をしている現場に遭遇した。長浜はおらず、姫路はオロオロしていた。

で、雄二以下その他はというと。

「全く懲りねえなあいつらも」

『全くだ』

「……武装してるお前らも人のこと言えねえけどな」

スタンバっていた。雄二以外。

俺は荷物を置いてから退屈そうに外を眺めている雄二に声をかけた。

「よお」

「何だ流来ていたのか？」

「まあな。授業さぼってたけど」

「すげえなおい」

「そういう雄二は何で退屈そうなんだ？」

「あ？……次の期末テストまでやることねえからな。やる気が出ねえんだよ」

「霧島いなくて寂しいのかと思ってた」

「ばっ、だ、誰が寂しいんだよ!？」

顔を赤くして否定する雄二の姿に俺は笑って「全く素直じゃねえんだから」と言っておく。

それで何かに気付いた雄二が「ねえ助けてよ!!」口角を吊り上げ悪役の笑いのそれで「……昔に戻っただろ？」と確信を持って聞いてきたので、「あ、戻っていいのか？」と俺も真似していう。

「戻ったら最後、お前の隠していることなんてお見通しだ!!」

「やめろ！ やっぱり戻らなくていい!!」

「つうか昔の俺ってどんなのだっけ？」

「今よりも手に負えない上、優等生の皮被った悪魔だったぜお前は!! 何度お前の掌で踊らされたか……!」

「ちよつとそんなこと言つてないで助けてよ！」

「お前は自業自得だろうが！」

「そんぎやつ!!」

明久が悲鳴を上げているが俺達は関係なくヒートアップする。

「大体、何の別れも告げずにアメリカに留学したとかどうかしてるんじゃないか!?」

「うつせえ! ありやあの野郎が『もうお前があの学校に行く必要はない』とか言いやがったからだ! 俺だつてもう行きたいなんて思つてなかつたけどな!!」

「それに、お前自分がどれだけ周りに被害出したのか分かるか!? 俺や翔子はともかく、お前自分の家標的にし過ぎだろ! 親戚何人飛ばした?」

「あれは犯罪してる向こうが悪い! そしてそれを見つかったのが悪い!! 悪いことしてる奴は通報するのが俺の正義だったからなあ頃!」

「子供の遊びでも何でもねえだろ。……つうか、マジでお前の家あんなに立て続けに晒されたのにビクともしなかつたよな。すげえとしか思わなかつたわ」

「あのせいで俺完全に恨まれて勘当されたんだよ渡米言い渡されたあたりで」

「原因それかやつぱり! 完全な自業自得じゃねえか!!」

「……もう、む……………」

「明久様!」

「アキ!？」

「明久君!？」

二人の悲鳴で何事かと雄二と一緒に振り返ったところ、明久がぐったりとしていた。おそらく島田さんの関節技で締め落とされたんだな……じゃなくて。

「ちよつと島田さんどいてくれ!」

その言葉にどいてくれた島田さんをしり目に俺は明久の胸ぐらをつかみ、揺さぶりながら叫んだ。

「おい起きろよ明久! お前の女装が高く売れているんだぞ!!」

「(ガバツ!) 何それどういうこと!？」

「ふう。手間かけさせやがって」

俺はそのまま手を放す。たたみに頭を打った明久はしかし、「ねえだからどういうことなの!？」とすぐさま起き上がって俺にしがみつきなから叫んだ。

「が、俺はそれ以上言う気はないので「起きたならいいか」と引きはがして教室を出ることにした。」

ちなみにそれは本当のことで、一部生徒の間で需要がありすぎ……て主力商品に食い込んでいる。一番はやはり秀吉だろう。康太の盗撮レベルも上がっているし。

Aクラスまで鼻歌歌いながら歩いてそのまま教室に入る。

「やっほー」

「!？」

驚き固まるAクラスの生徒たち。特に留学組は目を見開いて呆けている。

なんとなく言われそうな言葉を、先んじて否定することにした。

「言つとくが、グレイとかじゃないからな？」

「ではなんだというんですの？ 昨日までの態度を百八十度ひっくり返した今日のあなたは」

「少しハードルを下げただけ。お前らとつるむくらいなら別にいいかなってね」

「なん……だと……!？」

一同に激震が走ったらしい。すぐさま全員が少し離れた場所に移動してしまったので、「そんじゃ」と言つてAクラスから戻った。

謝罪と予想

放課後。

ささつと荷物をまとめた俺は明久達と軽くあいさつを交わして学校を出てタクシーを拾う。行く先は勿論……

「帰ってください」

「駄目っすか？ ちょっと由美に直接会って謝りたいんですが」

「寝込ませた張本人が何を言っているんですかねえ……帰らせなさい」

『ハッ』

「つておい汚いぞ！ SP使うなんて!!」

インターホン鳴らしたらSPに引きはがされ、少し離れたところでゴミのように投げられた。

「お前んちの常務横領中!!」

SPが離れて行った後にそう事実を叫んだ俺は、やっぱりだめかと頭を掻きながら制服が破れてないか確認しつつ気を取り直して別な家へ向かうためにタクシーをまた捕まえることにした。

そこから少しして、今度は留美の家……はスルーしてアデル達の家へ向かうことにした。

なんでスルーしたかって？ 同じ目に遭いたくないから。

なんかあの二人にはメールで送ればいいかなと思いつながら、彼女達が借りている木造平屋の一軒家の前にいる俺は「おい！」と引き戸のガラスをたたきながら叫ぶ。

初めて二秒ぐらいですぐさまアデルが引き戸を開け、俺を見て驚いた。

「なぜあなたがここにいますか？」

「住所ぐらい知っていてもおかしくないだろ？」

「確かにあなたなら違和感ありませんが……何か用ですか？」

これから夕食でも作るのか制服の上にエプロンを着ているアデルに対し、俺は「夕飯時に悪いね」と謝ってから伝言を託した。

「セリーヌに伝えといて。邪険に扱うようになるべくしないから学校に来なよって」

「……一体どういう風の吹き回しですか？ 昨日まであれだけ貶しまくっていたというのに」

「うん？ 青春つてのをやってみたくなつたんだよ。それじゃだめか？」

「出来の悪いウソですね……分かりました。うまく伝えておきます」

「おう頼んだー……とところでさ、パスポートの期限大丈夫？」
「ええ。言われなくても問題ありません」

ま、そんなことは杞憂だったか。そう思った俺は「じゃ、また明日」と手を振って駆けだした。

で、帰宅後。

とりあえず二人にメールを送った俺はこれからのことをソファに寝転がりながら考えてみる。

これから。というのはまあ極聖学園との勝負の話何だが……ぶっちゃけていえば五人平均の中で一人零点が確定しているので勝負にはなりそうである。

ただ、向こう側のレポートを見た限り得意な教科を重点的に押し上げていくことに並行して自分の意志で勉強させているのが肝らしく、見た感じでは印象はいい。

対しこちらに來ている奴らは元々が頭一つ抜けているので微々たる成長しか期待できない。このままいくと負けてしまいそうになる気もする。レポート見ても楽しいだけで勉強についてはそれなりにし書かれていない。

康太はなぜか勉強そっちのけで制服について散々書いてるが。あいつ鼻血出しまくってるなんて工藤のレポートにあったんだが。何で退学になってないのか不思議だ。

最終的な成績を見るのは留学する前に受けた総合テストより少し難しいテストを文科省に作ってもらい、その平均点が留学する前より高い方の勝ち。

ちなみに向こうから来た奴らは九十ぐらいで、こちらは60も満たない。主に明久と康太のせいである。

なので相当向こうで足引つ張ってもらわないといけないことが前提の人選……にしたはずなのだが。

「霧島が満点を取ることはもう予想できるとして、明久はリタイア。ここまでは簡単だな……」

あえて口に出して確定情報だと言い聞かせ残り三人について考える。

腐つてもAクラスにいる工藤も点数は九十五を超えるだろう。根本は九十行くかもしれない。

問題は康太。あいつの点数がどう伸びていくのか俺でも予想がつかない。その点数いかんでは負ける可能性がある。

「やべえなこりゃ。四人の予想平均時点で71点ぐらいって……マジでこれ負けるぞ」

冷静に計算してみても戦慄が走る。考えてみればバカを送り込んだ反動が結果的に自分の首を絞めている。

これで康太が零点になったとしたら万々歳なのだが、ここまで何の音沙汰もないので

テストを普通に受けるのだろう。

「つうかちよつと待て。最悪こつちに來てる奴等がテストの時間に間に合わなくて零点になつた場合……」

最悪な可能性が浮かんだので、風呂入ってから寝ることにした。

勝利確定……？

翌日。

暗澹たる気持ちで学校に来た俺はいつも通りに進捗状況を確認してからクラスに戻った。

ら、

「……どつたの康太？」

「……人違い」

普段ならだれもいないのだが今日に限って康太が顔を背けて席に座っていた。

俺はこめかみを抑えながら「何？ お前も退学言い渡されたわけ？ 盗撮とかで」と

質問してみると、「……盗撮はしてない」ときっぱりと否定された。

「んじや何を」

「制服を作って販売していたところを抑えられた」

「……ちなみにその用途って何？」

「……コスプレ用として買っていく人が多かった。正直一着十万が最低と価格が違う

……なんでもない」

「そういや二次元大好きグループがいたな。そいつらか」

それが見つかって退学してこっちに戻ってきてしまった、と……。

「よくやった康太！」

「……なぜ」

「お前のおかげで学校の存続がほぼ確定した!! お前は英雄だ！」

「……どうした流」

「残りが百点取っても平均が最初と変わらない! いやっほおおおお!!」

「……流もおかしくなった」

何やら不名誉なことを言われたが、不安要素が一つ取り除かれたことによる心の解放感に酔いしれていた俺は無視した。

「つうことで、ある程度は安心できるようになった! 流石だな!!」

「……それは素直に喜べるのかの……?」

「でもこうしてバカとムツツリーニが戻ってきたら残りは三人だ。翔子たちが満点とつてもこの馬鹿二人は零点。平均点は五人の合計だから零点が二人いる時点でこっちはかなり有利だ」

「……なるほど。だから」

「康太久し振りだからってカメラ構えて堂々と盗撮してるんじゃないよ」

「……これは望遠鏡」

「なおさら不要じゃろそしたら」

「ヘルプミ！」

一校時目が終わった休み時間。

康太が戻ってきたことによる現状の説明を本人を交えてしたところ、明久がいつものように悲鳴を上げた。

ちらつと見ると、どうやら島田さんにドロップキックをくらい教室を出て行ったらしい。

いつものことなのでスルーすると、アデーレが「一応の危機は脱した形ですか」と訊いてきたので「まあな」と答える。

「お前がそう言うんなら大丈夫だろ」

「下駄履くまでわからんだろ。詰めが甘いと逆転される可能性があるし」

「……疑り深い」

「用心深いと言ってくれよ」

「そこら辺は大丈夫ではありません豊橋さん？」

「あん？ 明久の介抱は？」

「文華と瑞樹が介抱していますわ。三人いては邪魔になりますし」

「ところで大丈夫ってどういう意味だ但野」

「そのままの意味です代表。あの学園に関してはあまり深く考える意味はないと」

「そうかの？」

「ええ」

秀吉の疑問にあっさり肯定した明美は「もし負けそうになったらこいつを生贄に捧げれば廃校は免れますわ」と俺をさして答えた。

「お前もゲスだな……」

「一番手っ取り早い解決策といってくださいませんか？」

「つてことはやっぱりお前が原因で起きたのかこれ」

「やっぱりつてなんだよ……」

どうやって推測したのか分からないのでげんなりしていると、「いや薫に話を聞いた」と返ってきたので「ああそう」としか言えなかった。

昼休み。

最近食堂で食べることが多かったので雄二たちと混ざって食べることにした。

もちろん食べる場所はFクラス内だ。

「にしても久しぶりだね流が混ざるのも」

「誰かさんが標的にしてきたから逃げてた」

「それは災難だったな」

「てめえだろうが！」

「……みんなで食べるのも久しぶり」

「そうじゃのお。こうして集まったのも久しぶりじゃ」

「それでも変わらずお前水しかないんだな」

「……仕送りがちよつと」

「止められても文句は言えんじやろ」

「当たり前」

「ゲーム売れよ」

「売れるわけないじゃん!!」

お前本当に破滅するぞそのうち。うっ。なんて会話しながらのんきに食べていたところ「おーい流ー」と聞こえたので廊下の方へ視線を向ける。

そこにいたのは高人と薫だった。

「混ざっていいか？」

「おう来いよ」

「邪魔するねお兄ちゃんたち」

そのままちやぶ台をくつつけ混ざる薫と高人。

と、弁当を広げていた高人が明久を見て「あれ、食べたのか吉井君は？」と質問してきたので代わりに答えた。

「食べたよ一応。な？」

「そうじゃの。いつも通りじゃ」

「……生きてるから問題ない」

「問題ないぞ高人」

「高人さん。気にしない方がいいですよ吉井さんはその……大丈夫なので」

「?」なんで周りの奴らが答えてんのか分からねえけど……大丈夫なんだな」

「う、うん……」

ぎこちない答えを返した明久を見た高人は納得した様子で「いただきます」と自分の弁当を食べ始める。

薫も食べ始めたところで俺は「どうしてまた？」と質問してみる。

「今日が最後だから、だな。お別れってわけじゃないけどお前のクラスの友達見たかったし」

「ふん」

「いよいよ終わりか……長かったな」

「本当じやおのお…色々あったわい」

「でも長浜さんと但野さんは帰らないよね。転校してきたから」

「そういやそうだったな……今にしてあの二人がうらやましい」

「これ以上Aクラスに戦力が増えるのはマジできついから別クラスへ行くなら歓迎する」

「だったらFクラスは？ お前これ以上このクラスに人増やすな人口密度高いんだからただでさえ。」

そんな会話に興じながら昼食を食べていると、不意に高人が「そういや機嫌よく由美さんや留美さんが来たんだがお前何かした？」と訊いてきたので「風邪でも治ったんじゃないね？」と言っておく。

実際のところは俺のメールによる心身状態の回復だろう。メンタル回復が速いのは若いからだろうか。

そんなことを思っていると「でもお兄ちゃんがいたらだれが何人来ようとも関係ない気がするけど」と薫が漏らしたので「んなバカな」と答える。

「仮に高橋先生レベルが五十人来られたら無理だったの」

「逆に言うとそのレベルじゃなきや何人来ようが問題ないってことか……相変わらず恐

それじゃあ放課後帰る前に一回だけやらせてくれ！ と高人の頼みに雄二はそういや明久の腕輪も練習していかないとなと思いついたように言ったので、放課後残って練習することになった。

終・了！

放課後。

その間明久が相変わらず血反吐吐いたり康太が堂々と盗撮したり、甲斐甲斐しく但野が介抱したり秀吉が恥ずかしがったりとまあいつも通りになりつつある日常。

俺はもう割り切ることにしたそれらを受け流して、放課後。

「さて、坂本……君？」

「別に雄二でいいぜ空天」

「だったら俺も高人でいいって雄二……でき、召喚していいんだよな!」

「どうなんだ流？」

「ちよい待ち。今校舎内の力場調整中……つと。これでこの場だけ安定させたから何とかできるはず」

「まだかよ流！」

「うるせえ！ お前のテスト反映させるのにもう少し時間かかるんだよ！メンテ中だから留学生のデータを入れる気すらなかったからな！」

「お前もう少しオブラートに包めよ……本当にいつも通りだな」

そういつて高人が呆れているが、俺には関係ないのでさっさとデータを入力する。

物の数分で完了したので「高人の分はいいぞー」と声をかける。

「師匠！ 私達の分は!?!」

「あるわけないだろ。いなくなるお前たちのデータ入れてところで容量の無駄じゃねえか」

「ふっ。流石に毒舌がさえてるね相変わらず」

「ああん？ ほら雄二。周りのことはいいから起動してくれ」

「あ、ああ…起動アウエイクン！」

腕輪をした雄二がその言葉を口にしたところ、雄二を中心にフィールドが形成された。

これが大会の副賞の一つ。使用者の点数を消費する代わりに小さいながらもフィールドを展開できる腕輪。

これを遣えば試召戦争で独自に召喚できたり、先生のフィールドを干渉して消したりと様々な面で応用が可能である。

ちなみに、この腕輪で召喚されても観察処分者のフィードバックはついていない。当たり前だな。

もう一つの腕輪の能力は分身。これは明久が持っている。単純に操作が二倍になる

だけでなく並列思考で別々に命令を送らなければならないので要練習な腕輪だ。しかも点数が半分になるのでどちらか消されたらほぼ終わりだろう。

まあ観察処分者だから使う機会が多くて練習に事欠かないだろう。うん。

「もういいのか流!？」

「……あ? あー……いいぜ」

他の連中を置いてテンションが上がっている高人に適当に返事をする、「召喚!!」と叫ぶ。

その瞬間に高人の足元から召喚獣が出現し、高人をデフォルメしたキャラだ。手にはレイピア、服はどこかの軍服。

多少ノイズがあるようだが、今のところは安定してるな……。

モニターとにらめっこしながらデータを分析していると、「おお! これが俺の召喚獣か!!」と嬉しそうに叫ぶ高人と、それを見た留学組の黄色い歓声。

「空天の召喚獣のくせに、意外とかわいいわね」

「武器とかはどういう基準なんだろうね。僕だったら何になるのか気になるな」

「空天殿うらやましいです!」

「あーデータだから触れないとは分かっていますけど……意外とかわいいのでお持ち帰りしたくなりますわね」

と、なると必然的に俺の方へ視線が向くわけで。

「し「やらんぞ」

「そ「データ入力するの面倒」

「つて、さ「これでも無理してるんだ」

「無理なものは無理」私は何も言わせないんですの!？」

時森の言葉を無視する形で俺は「もういいかー?」と高人に聞く。

向こうでは、明久達によるレクチャーが始まっていた。

「いやなんでだよ」

「だって動かしたいって言うから」

「せっかく召喚したんだから、せめて動かしたいんだよ!」

俺の質問に明久、高人の順で答える。その間高人は召喚獣を睨みつけながら頑張って

歩かせていた。

「何とか初歩はできたようじゃな」

「……実際は走ったり武器を振ったり攻撃を避けたりする」

「その分難しくなるんだよ。そこがまた楽しいんだけどさ」

「なんか嵌るの分かるわこれ。こういうのあったら勉強も自然とはかどる気がするぜ」

「約一名効果の全くない、むしろ別な方面に効果が発揮されてる奴がいるけどな」

「ねえ雄二？ それって誰のこと？」

明久の質問に視線を逸らす雄二たち。なので俺は容赦なく答えた。

「お前」

「嘘だつ！ 雄二じゃないの!？」

「お前以外に誰がいる」

「ごめんなさい吉井君。擁護できないよ」

「……自業自得」

「どう考えてもお主以外おらぬじやろ」

と、全員でとどめを刺したら明久がシクシクと泣き始めたので無視し「もうそろそろ終わるぞー」と声をかける。

「お前ら時間ないだろ。それに、そろそろ不安定になるからフィールド消さないとまず
っ」

「まじでかー……まだまだやりたかったんだがなー」

「次回はないからな、たぶん」

「うおー！ マジでやりたりねー!!」

やたら叫んでる高人のことを無視し、俺は雄二に腕輪を効果を切るように指示してからパソコンのソフトを消していつて電源を切り、「おら帰るぞお前ら」と促した。

こうして留学期間は終わった。

結果。

うん。軍配はこちらに上がりました。向こうから抗議は上がっておりません!!
……あー疲れた。

休日の話その3

会談

留学生騒動が終わった週末。

土曜日は一人夕方まで補習して帰宅し、日曜日。

俺はスーツを着て喫茶店でコーヒーを飲んでいた。

「お、お待たせ」

「待ち合わせ時間に間に合っただけで別に」

そっけなく答えながらコーヒーをすすっていると、彼女は隣の席に座り「アイスコーヒー一つ」と注文する。

それが来るまでの間に話を終わらせようと思ったが、社会人としてどうかと思ったのでまずは社交辞令として「久しぶり」と挨拶する。

「ええ、久しぶり。退学してからアメリカに渡ったという話を聞いて以降音信不通になったから……心配で」

「ああそう。変わらんね、夏木さん」

「そういう流君こそ相変わらずの不機嫌さね……でもまさか本当に遇ってくれると思わ

なかつたわ。お姉さん嬉しい♪」

「おうペド喜ぶなや」

「さらつとひどい返し!？」

「それじゃ法律上未成年男子付け狙うのやめろ」

「言い方が悪意しかない!？」

何やら大真面目にシヨックを受けている様子だったので、「まあ冗談ですけど」と一言添える。

すると彼女は「冗談に聞こえないよ……」と力なく漏らしてから頼んだアイスコーヒーを飲んで、「はあー」とため息を漏らす。

「負けちゃったね。文月学園ってあんなに個性の強い生徒ばかりなの?」

「まあ欲望に忠実なやつらが多いかな。感染速度は疫病をも凌ぐと思うぜ」

「そっか……それじゃもともと勝ち目なんてなかつたのか……」

残念そうな表情を浮かべながらコップに視線を落としてそういうので、俺は気になることを聞いた。

「なあ、諦めてなかつたのか?」

その質問に対し彼女は一瞬動きを止めたが、「……うん」と肯定した。

「マジかよ」

「重い女だと思うでしょ？　でも、それだけ本気なの」

「未成年だぜ？」

「言い方悪いけど、独占欲の暴走」

「なんだかなあ……」

コーヒーカップに口をつけて飲み干した俺は、表現しがたい感情を抱きながら天井を見上げる。

と、ここで夏木さんの方から衝撃的な発言が飛び出した。

「私言っておくけど、まだ二十歳じゃないからね？」

「あ？　……気のせいかな？　二十歳じゃないからって聞こえた気がしたんだが」

「気のせいでもないから……その様子だと、私のこと二十歳以上に見えてたんだ」

「……」

ジト目を向けてきたのが分かった俺は、視線を合わせないようにそっぽをむいてコーヒーを啜る。

いやだつて知るわけないじゃん夏木さんの年齢。年上だという推測しかしなかったし、それ以外にそう言う人がいるという認識しかする気もなかったから気になんて全くなかったし。

そう言い訳がましく漏らすと、彼女はテーブルに頭を打ち付けた。

「そ、そんな〜」

「人間そんなもんだと思うけどよ」

「薄情すぎるわよ流君」

「だって俺だし」

「それで納得できるのも何か違う気がするんだけどね……」

それから少し俺達は黙ったが、「で？ この落とし前どうつけるんだよ？」とやつと本題に入った。

「私の全面的暴走ってことでこのままじゃ下ろされるのよね。そうして新しくなった学園長が上っ面だけの謝罪して終わり……そんなところかしら」

「自業自得だから擁護できねえな」

「これで私も晴れて家から解放されるんだけど……」

ん？

確かにこんなことをして家に傷をつけたのだから家から追い出される可能性は高いだろうが、この言い方だとまるで……。

「夏木さんや。あんた、まさかこの展開を期待してたわけじゃないだろうな？」

「あ、やっぱりここまで言えば流君分かっちゃう？ 実はそうなの」

ガン。今度は俺がテーブルに頭を打ち付ける番だった。

なんで笑顔でそういうことさらつと言いやがるんだよ。決意とか以前に家に愛着ないのかよ。

というか、そんな感想よりもっと大事なことがあるなこの流れだと。

そう思考がまとまったのと、彼女がその話を振ってきたのはほぼ同時だった。

「私実家暮らしだったから住む場所無くなるのよね、きつと。しかも大学中退で学園の経営権もなくなつてあるのは私名義の貯金と通帳と印鑑と服と免許ぐらいしか残らない……それでさ、流君」

「しらねえよ。ここまで持つてこれたなら最後まで自分で決めておけよ。なんで俺なんだよ」

「流君が一番信用できるから。私の初恋、まだ続いてるんだよ？」

「っ」

あざとく瞳を潤ませながらそう頼み込んできたので正直にべもなく断りたかったが、そもそもここでそれを言う理由ってなんだ……って疑問が浮かんで状況だけで答えが予測できた俺は空になったコーヒーカップを受け皿に置いてからため息をつき、「つまり、俺がこの出会いを了承した時点で目論見自体は成功していた、と。そういう訳でいいのか、夏木さん？」と確認する。

「いやー正直この状況が完成しても二割ぐらいかなって思ってたんだけど、なんか昔よ

りだいぶ変わっていたことに気付いたから五割に上がってる」

「予測としては悪くねえ数字だな。大体あってるんじゃないか？」

「で、どうなの？ 私がそんな状況になったら助けてくれる？」

「……………」

リスクなどを頭の中の天秤ではかってみたが、その状況になって俺のメリットがない。

かといって夏木さんが他に頼る人がいるかと考えると、それは否定できそうだな。

俺は確認のために彼女に聞いた。

「家を捨てて一般人として、学歴も中途半端な富裕層になりにくいステータスで社会に出る気。そういう覚悟でいいのか？」

「うん。それぐらいの覚悟がなきゃ、こんなことしないよ」

「……………はあ。自身の政略結婚として残されるという選択肢ぐらいいは何とかしてるのか？」

「あ、それもあつたね」

「おい」

気が付いてなかったような声をあげたので睨むと、「しようがないじゃん。私今までそんな話両親からされなかつたんだから」と弁明した。

それ、可能性の排除させてこういうことになった場合に水面下で進めようって魂胆じゃね？ それはあるかも。なんて冗談めかして言ってから、二人したため息をつく。

「おいどうすんだよ。綻び出たぞ」

「一から十まで揺るがない計画なんてないでしょ。流君だつてずれたら修正するでしょ？」

「予め伴うずれは事前に考えておく。それでも起こる想定外はみんなで修正するかな」

「えーそこまで考えるの？ ……やっぱり流君は凄いな」

「はいはい。そんなことはおいといて、その可能性を排除できたと仮定してから助けるかどうかに関して答えるぞ」

「え、本当!？」

「結論から言うと、俺が表だつて助ける気はない。住む場所ぐらいは不動産を紹介するが、そこから先は自分で何とかしろ」

そういうと彼女は不満げだったが、「まあ住む場所さえ確保するのが難しいし、その手助けをしてくれるなら文句は言えないね」と納得した。

「因みにその不動産、連帯保証人要らない代わりに全部自己責任だからうっかりで億単位の弁償なんてあり得るぞ」

「怖いそれ。裏企業じゃないの?」

「普通に上場してる」

「何でそんなところと繋がりのあるの。アメリカ行つてから何があつたの?」

「別によくねそんなこと。今はそつちの話だろ……というか、もう話終わっただろ」

「終わつてない」

「?」

これ以上話す内容があるのだろうかと思ふと、夏木さんの横顔を見ると、こちらに視線を向けてきて「もし婚約の話が持ち上がつて私が嫌で流君に相談したら、助けてくれる?」と怯えた顔で可能性の高そうな質問をして来た。

俺は少し考えてから、「状況による」と答えた。

「基本的に他人の家に干渉する気なんて俺にはない。だが、それが俺のテリトリー

にまで及ぶのなら話は別だ。仕方ないから助ける」

だからといって故意にやりやがったら一族郎党破滅させるぞ。と付け足すのを忘れずに。

その答えに彼女は一転して嬉しそうな表情を浮かべ、「そつか。それなら安心したよ」と答えた。

「と、もういいな。これ以上は雑談にしかならないだろうし、本題も終わったし。俺は帰る」

「えーもう？」

「用件が終わったら帰りたいたいんだよ。基本的にあんたたちの話し合いは」

そう言つて俺はコーヒー代をテーブルにおき、制止の声も聞かずに店を出た。

「で、お兄様はなぜあの学園長とお茶をしていたのでしょうか？」

「スーツまで着て喫茶店は目立ちます流様」

「その前にお前ら。何で店を出た俺を捕まえて路地裏に連れ込む？ 警察にでも厄介になりたいたのか？」

「店を出てしばらく歩いていたら留美と由美に路地裏に連れ込まれ尋問を受けた。着実に染まつてる気がするのには気のせいだろうか。」

なんて考えながら答えが来るのを待っていると、「偶々です」と言つた。「素直に信じられると思うか？」

「お兄様のことですからから信じてくれないかと思いますが、ウインドウショッピングを二人でしていたところを偶々通りかかったのです」

「本当です流様」

留美の証言を肯定する由美。

いまいち信用出来ないが、とりあえずそういうことだと飲み込んで、路地裏に連れ込まれた理由……はなんとなく想像できたので、由美に「そういえば少し前に拳銃二挺掏って一挺だけ返したんだが、もう一挺はどうしたらいい？」と質問する。

「あ、それは郵送で返却してただければ……」

「ちよつとお兄様。なぜSPの拳銃を掏る何て状況が発生したのでしょうか？」

「俺からはなんとも」

そう言つて肩を竦めると、留美は由美の方を見たので「またな」と路地裏から出て帰ることにした。

匿う

夏木さんとの会談が終わった翌週。

俺は今日も補習を遅くまでやって帰って来たところ、郵便ポストに一通の葉書が入っていた。

「……………」

宛名は書いてなかったのでまたあいつかなと裏返すと、『助けて』という言葉と電話番号が書かれていた。

「……………どうしたものか」

この手紙の人物の予想はできたが、これが罊の可能性も捨てきれないので悩む。

ここでそのまま電話をとった場合、ここがばれる。それだけは絶対に避けなければならない。

そもそもどうやってこの葉書をここに届けられたのだろうかなんて考えながら、俺はカバンなどを自室に放り投げて携帯電話と財布とはがきを持って家を出た。

いつぞやのホテルのロビーまで来た俺はそこで電話をする。

相手は3コール目で出た。

「あ、流君」

「ん？」

割りと近くで。

電話をやめた俺はそれなりの荷物を持つている夏木さんに向き直り、「どこで知ったんです？」と訊くと「カヲルさんから」と言われ、納得する。

納得はしたが、気軽に教えるなよという気持ち芽生えたので後に怒ることにし、「それじゃ行きましようか」と促す。

「え、どこに？」

「置いてきますよ」

「ちよ、ちよつと待つてよー」

完全に説明する気ないので、俺はそのまま歩き出すことにした。

「着きましたよ。さっさと入ってください」

「え？ あ、うん」

困惑する彼女をしり目の中に入るように促した俺は、空いてる部屋つてどこだっけと思いつきながら郵便物を再度確認していると、「お、お邪魔します……」とエントランス

に彼女が足を踏み入れた。

「緊張してる？」

「え、そ、そうかな……そんなことないと思うけど」

「まあそろそろ説明しとくか」

「え？」

事情を一切言わなかったのもそれを伝えて納得してもらおうと思った俺は、この場で説明を始めた。

「ここは俺が所有してる場所だから戸籍がなくても住める。一部屋貸すので暫く暮らして慣れてください。もう少して二十歳になるんですよね？」

「え？ あ、うん。ちよ、ちよつと待って。少し整理してもいい？」

「いいけど」

そう答えると彼女はいきなりぶつぶつと呟き始めた。

「……確かにこのアパートだって言われたけど。それでも土地含めて全部だなんて……」

「夏木さん？　なんで今更驚きを隠せてないの？」

そう問いかけると「流石に想像できないよ……」と力なく答えた。

「そう？」

「そうだよ……どこでそんな大金手に入れてきたの？」

「大学卒業して転々と移り住みながら仕事して換金したから？　後は後見人の遺産は……関係ないなあつちは別で使ったし」

「それでもおかしいよ。1ドル＝100円だとしてもここを土地代含めて買うとなると三千万は下らない筈。アメリカでの生活費用と渡航費用も含めると最低四十万ドルは必要でしょ……そうなると月給が最低でも平均三万ドルって……」

「住み込みで働いていたから電気代とかはタダで、月給はまちまち。宝くじで当たった資金を運用して月給使わないで生活して日本に戻って書類とか作る費用とかに充てた。だからじゃね？　もつとも、アメリカには半年ぐらいしかいかなかったけど」

「うう……流君の行動が相変わらず斜め上過ぎるよ」

「んなこといってないで部屋に行きますよー」

「ああ待って！」

二階に上がった俺はどの部屋にしようかと思案していると、彼女が荷物をもって上がってきた。置いてきても良かったんだが、それを口に出さず「どこでもいいか」と漏らしてから階段に一番近い部屋を開ける。

部屋の構造はほぼ一緒だから特に迷わなくていいなと思いながら「入ってきたら？」と中に入りながら言う。

「ああ待って！」

慌てながら彼女はついてきた。

「ここで暫く暮らしてくれ」

「普通の独り暮らしってこんな小さい部屋なんだ」

大分感覚のずれがある感想を漏らしながら部屋の中を見渡す彼女。

「夏木さんもこの『普通』に慣れていかなくてはいけませんからね」

「あーそうだった」

「それと、あくまで成人するまでの期間ですから。書類できたら一人で暮らしてください

」

「……………はい」

念のためにもう一度いうと彼女は露骨に落ち込んだが、それに頷いたのは彼女自身なので無視。

電気代とかの徴収どうすつかなあとはぼんやりしていると、「ねえ流君」と呼びかけられたので我に返って「なんすか？」と返事をする。

「お風呂は？」

「……ち」

そう言つて風呂場に案内する。

「……小さいね」

「普通だつてそれが」

「トイレは？」

「玄関入つて扉見えたでしょ？ そこ」

「……はー普通の人の一人暮らしつて結構大変だね」

「まあ慣れだろそこら辺は」

そう言いながら水道が出ないことを確認した俺は、水道局の契約どうなつてたつけど頭の中で思い返し……全部買ったからこつちで栓を開けば出るんだつたなと思ひ出す。

そうなると光熱費は全部俺に来ることになるのか。面倒だな。なんて事実には気が付き息を吐いた俺は、まあ成人する迄の辛抱かと割り切つてから「食事とかはどうするんで？」と質問する。自炊できるかどうかの確認も含めて。

それに対し彼女は「うーん」と悩んでいた。

「というか、自炊できるの？」

「出来なくはないけど……材料買いに行つたら怪しまれない？」

「そうなんだよなあ」

指摘された内容から派生する最悪のパターンを頭の中で展開した俺は、「じゃあねえ、

俺がまとめて買ってこくるか」と言うしかなかった。

「本当！　ありがと大好き!!」

こうして匿う生活が始まった……と、言えれば良かったんだが。

夏木さんを部屋に押し込めて自分の部屋へ戻ったとき、鳴ることが珍しいインターフォンが鳴った。

「……………」

一瞬で警戒心が出てくる。住所を知ってる人間が少ないから。

緊張しながら応じず、そのまま玄関に行ってみたところ、その人はいた。

「こんばんわりユウ君」

「…………どこで知ったんですか、玲さん」

「会社の人からです。不躰ですが、時差ボケが戻る迄部屋をお貸ししてくださいませんか?」

「自宅戻ったらどうですか」

「明日には出ていきますので」

「……………分かりましたよ」

観念して俺がそう言うと、彼女――吉井玲はにっこり笑って「よろしくお願いします

ね」と言った。

期末テストの話

急に真面目になると不審がられる

次の日。

本当に何事もなく玲さんは荷物を持って出て行ってしまった。感謝されたが、正直そのまま行けばよかったのではと言いたくなくなった。

因みに。勤付してるかもしれないが、玲さんは俺が大学に飛び級で入学した時の同級生だ。あと、大学では最終学年——つまり、卒論を書く——まで飛んだ。それまでの単位とかは学校側が不要だといったから（まあ憶えてるし）。

まあそんなこんなでその時研究テーマをやるメンバーの一人が彼女ってわけ。

「分かった？」

「さらつと言われたインパクトのせいがかすんだ気がするけど……まあ分かったよ」

彼女が出ていった後にしようがないから夏木さんに説明したところ、げんなりした様子だが納得してくれた。

それからまあ、一般人として必要な知識をその日は教えた。

次の日。

いつも通りに登校してメンテナンス状況を確認して報告書をババアに提出して教室に一番乗りしたので、暇潰しに教科書を読んでテスト勉強する。

する必要があるのかって？ 気分だよ、気分。ここのところ色々あつたし、これからも色々あるだろうから息抜き。

そんな感じで適当に捲って読み返して、ふと玲さんのことを思い出す。

あの人なんで戻ってきたんだろうか、と。

十中八九明久が原因なんだろうが、それだつたらさつきと来てもおかしくはないはずなのに。あの人の性格からして。

ひよつとして会社の異動のついでか？ 可能性としてはあり得るのがなあそれくらいか。

まさか自分から会社に進言したわけじゃないだろうな……なんて嫌な想像をしていたら教科書を読み終えたので閉じて腕を伸ばす。

「しっかし、なにもテストに戻ってくることはなからうに」

「誰のことだ？」

「お、雄二」

声が出した方に体を向けてみたところ、なぜかズボンが体育の半ズボンだった。

笑いをこらえながら「どうしたんだよそれ？」と訊ねると、「あのバカから送られてきたメールのせいで翔子に持ってかれた」とイライラした声で答えが返ってきた。

それだけで明久が置かれている状況が推測できたので、「お前ら本当に仲良しだな」とからかう。

「仲が良かったら問答無用で寝込み襲うとか絶対ねえよ!!」

「俺一言も霧島のことなんて言っていないけど」

「!? は、嵌めやがったな!!」

「おはようございます……坂本代表、ズボンはどうしたんですか?」

俺の胸ぐらをつかもうと近づいてきたときにアデルが入って来たと同時に質問してきたので固まった。

「よっ」

「おはようございます。ところで、なぜ固まってしまったのでしょうか?」

「あ、羞恥心の限界だからじゃね?」

「ああ、なるほど」

納得して自分の席に座る彼女。

その後も続々と登校し、そのすべてが雄二の珍妙な格好に触れそのたびに雄二のいら立ちが募っていた。

「明久ああああああ!! テメエ朝からなんてメール送ってきやがった!!」

大体の人が頷いたと同時に雄二がついに暴発。その恰好のまま明久の胸ぐらをつかみ揺らし始めた。

そろそろ霧島の愛情表現矯正した方がいいな……マジで。

メンテの裏事情

『吉井、保健室へ行ってきなさい』

康太が抱き枕を堂々と持参したり、明久が雄二に送ったメールを読み上げたせいでホモ疑惑が加速したHRが終わり、授業が始まったのだが、先生達にそう言われるくらい明久が授業を真面目に受けていた。

いきなりの豹変だから戸惑うだろうが、普通は喜ぶんじゃないだろうか。……そういや普通じゃないな。うちの学校。

何て感想を抱きながら明久が急に真面目になった理由を考えてみた。

玲さんが原因なのは断言できる。あの人のことだ、理不尽なことでも問答無用、容赦のないことをするだろう。明久を愛するがゆえに。

と、なると。

明久にとつて真面目に受けざるを得ない状況になった理由が原因か。ひよつとして一人暮らし禁止とかか？

あいつの生活おおよそ一人暮らし出来るとは言えないし。

話聞いてても呆れるぐらいだからなあと思っていたら昼休みになった。

最近の昼食は弁当が主だ。居候が自炊するために食材を買う都合上、色々まとめて買った方がお得なのだ。

と、言うわけでいつも通りFクラスでいつも通りの奴らと食べるために弁当をもって集まると、明久も弁当をもって来た。

最近バカ専が餌付けするように弁当を持つてくるのが日常になりつつあるなかで、本人が持参してきた。

まあ本来なら普通のことなので驚くことではないんだが、明久が持つてきている事が周囲を驚かせた。

というか、普段やらないことをやるから怪しまれるんだよな……その事に気付かないのかね。いや、玲さんの理不尽でそこまで気が回らないのか。

「いただきます」

まあそんなことどうでもいいので俺は弁当を食べ始めると、明久と雄二が逃げ出した。

ここまで息ぴったりだからホモ疑惑が定着するんじゃないだろうかと思いつつながら食べ進めていると、「流は動じないのお」と秀吉が弁当を食べ始めながら言ってきた。

「慣れたからな、流石に」

「まあそうじゃの……ところで、流は驚かなかったのかの？ 明久が料理できること」

「別に？ 驚くことも無くね？」

「そうですか？ 明久様を見ているとそんなことでも驚くのですが鉄仮面」

「そんなの只の思い込みだろ頭でつかち。現実を柔軟に受け止める」

「そうでなければ瑞希も美波も驚きませんわ」

まあそうだろうけど。そう思いながら食べ進めていると、「お兄さま、そちらのトンカツをひと切れ交換しませんか？」といったの間にか隣にいる留美がそんな提案をしてきたので、「いやだよ」と即答して弁当を食べ終える。

「ごちそうさま」

「というより、留美が来ていたことに驚かないのですね」

「だって霧島と来てただろ」

「よく見ておるのお……」

「ああ、お兄さまのいけず！」

叫んでいるが、俺は当然無視した。

と、ここで俺は話題をこれからについて変えた。

「召喚獣のメンテ、ありや一筋縄じゃ行かねえな、やつぱり」

「？ 留学期間ではもうすでに始めておったのに、まだ終わらぬのか？」

「というより、そんな簡単にはらしてもよろしいの災厄？」

「お兄様は災厄ではありませんわ明美さん！」

「まあ別に。どうせ分かることだし」

「それで、原因は判明しているのですか？」

「アデルが訊いてきたので「まあシステム構造上の問題」とだけ答えてから「テスト終了までかかると思ってたけど、もっと延びるかもしれない」と付け足す。

それに秀吉と康太が反応した。

「なんじゃと!?!」

「……理不尽！」

「しょうがないだろ。あんなブラックボックス」

と言ってから俺はババアが呟いてたことを思い出した。

「そーいやその詫びで今回のテスト結果が反映されるとか言ってたな。装備とか」

「!?!」

「どういうことですかお兄様？」

「最初から在学してる奴らは蓄積データをもとに装備品が決まってるんだよ。俺達みたいな編入組と違って」

「なるほど。それをリセットすればもとより豪華になる可能性もあるわけですか」

「そういうこと」

「それはありがたいことじゃな。テストに対するモチベーションが高まるわい」
「……（コクコク）」

何やら納得してくれたようなので、俺はホツとする。

実際は雄二達の召喚獣の使い方が学校の理念と大幅にずれているのを矯正する為の延長である。遊び半分で使われている現状を鑑みた場合、学力向上のためのモチベーション維持としての役割を果たしていないのだから。

ババアがぼやいてくるから軽く「延長させれば？」と提案したら本当に延長してるからなあ、メンテ。

まあしばらく使えない代わりに今後自分の召喚獣が強化されることを考えれば我慢できる範囲だと思うけど。

問題は明久と雄二の反応だなあとthinkながら、FFF団の襲撃を容赦なく叩きのめして教室の隅に積み上げた。

西村先生はそんなクラスメイト達を一瞥したが、特に何も言わなかった。

逃げるが勝ち

放課後。

「買物しないと食材無くなるからさっさと帰らないとまずいんだが、この後の展開を考えるとそれも厳しいかもしれない。」

「そう。俺を巻き込んだの勉強会だ。」

「……いや、素直に断って行けばいいんだが、雄二が勘付く恐れがある。」

「まあそこはうまく話をそらして忘れさせれば……」

「なあ流」

「来た。」

「しかも雄二から。」

「何だよ」

「帰る準備を終えいつでも逃走出来るように警戒しながら話を聞くと、予想通りの言葉を口にされた。」

「俺達の勉強を見てくれないか？」

「神童も落ちたもんだなあ？ 自分の勉強すらまともにできないなんて」

「くっ！ 滅茶苦茶ぶん殴りてえ……!!」

凶星を言われたことで拳を構えたいらしいが彼は我慢し、「……確かにそうだ。俺はもう昔の俺じゃない」と口にする。

と、その間に明久がこっちに來たので先に声をかける。

「雄二に何か用？」

「え、あ、うん。もしよかったら流にも頼みたいんだけど」

「よっし姫路さん達に声かけだな。任せろ」

「ちよつと待って!!? なんでいきなりそういう話になるのさ!」

「お〜い秀吉!」

俺は明久の言葉を無視して秀吉に声をかけると、彼は「なんじゃ?」と荷物をもってこちらに近づいてきた。

その動作が相変わらず女っぽいなあとthinkながら「明久が勉強会開きたいんだってさ」とあつさり言う。

「ちよつと流!?!」

『な、なんだ、と…………!!』

クラス内に衝撃が走る。万年最下位で観察処分者である彼が「勉強」なんて言葉を口にしたのだから。

当然秀吉も目を丸くして「なんじゃと!？」と驚いており、その反応に明久はショックを受けているが自業自得だろう。

この騒ぎに乗じて逃げ出そうと思った俺は、雄二に聞こえないぐらいの声で明久に「雄二も勉強したがっていたし、一緒にやったらどう?」と言ってから騒ぎに乗じて教室を出た。

テストまでの間、俺は基本的にシステムの方へ行かなくてよくなった。まあ夏休みの補習一人だけ前倒ししていることに関してはため息交じりにババアに説教を受けたが。

そんな訳で普通に下校した俺なわけだったが、その普通とはどうやら、俺の思い描くようにいかないらしい。

「待っててくださいませんかお兄様!」

「待ってよお兄ちゃん!」

「お待ちください流様!」

「……待って」

そんな声が後ろからかけられた。振り返るまでもなく、あいつらである。

その声が聞こえた瞬間、俺は黙って駆けだした。

「なんで逃げるんですかあ!!?」

「敵戦力増強なんて誰がやるかバカ!!」

坂を全力で駆け下りてから俺は自宅とは逆方向へ走りあいつ等を撒く。そして息を整えながら速度を緩め、これからのことを考える。

これから——つまりテスト前までの事。

一応夏木さんが出ていくのは二日後を予定している。つまり、その間は何としても隠し通さなければならぬ。

そもそも俺の家自体かなり厳しく情報統制している。だから安易に家へ招待する気がない。

まあつまり俺の家へ招待する以外——他の奴らの家での勉強会なら参加してやってもいいのだが、俺が参加しない方が結果的にいい気がする。

まあ念のために食材多く買って強制呼び出しに対応しておこうかなと考えながらこのままスーパーへ向かうと、その途中で電話が鳴った。相手は明久。

「もしもし」

『あ、流?! ちょっと聞きたいことがあるんだけど!!』

何やら興奮気味にまくし立ててきたので、こんな慌てて俺に質問してくる内容ってあれしかないかと瞬時に思い至った俺は「確かにお前の姉と同じ学校だったけど?」と

冷静に返す。

『へ？ あ、うんそうなんだ………って、なんでわかったのさ!!?』

「聞きたいことなんてそれぐらいしか思い浮かばないから……それだけなら切るぞ」

『え、ちよ』

何やら混乱しているようだったが俺は電話を切り、明日説明しなくちゃいけないのか………と空を見て思いながらスーパーへ向かった。

あまりに遠回りしたせいか時間だけ無情に過ぎた形となったが、なんとか買い物物を済ませ帰宅した俺。

自分が普段使っている部屋にある程度の荷物を置き、残りの日持ちする材料が入った袋を持って夏木さんの部屋に向かった。

「ただいま。名前とか決まった?」

「うん。向こうに報告したら誕生日には住民票送るって………あ、ありがとね」

「あつそ。じゃ、それが送られたらいよいよ不動産探しか。これ置いとくから。暫く買いたい物いかなから、それで生活して」

「あ、うん。分かったよ………それにしても」

「ん?」

玄関先に袋を置いたらエプロン姿の夏木さんが来て袋の中身を確認しながら彼女は
呟いた。

「普通の生活って、結構大変だね。自分でやらないといけないから」

「二人暮らしはそんなものだよ。時間の管理しないとね」

「秘書って凄いがたいんだね」

「そんじゃ」

「どうでもいい会話になりそうだったし、俺もやるのが残っているので遮って戻った。」

次の現場（勉強）

次の日。

学校に来た俺はいつものメンバーに質問攻めにあつた。

「流！　なんで電話あつさり切つたのさ!!」

「用件答えたからもういいかと思つた」

「てめえなんで大学の名前言わなかつた!」

「聞かれなかつたから」

そうやって流していると、「まあ落ち着くのじゃ明久に雄二よ」と秀吉が二人を止めるように入ってきた。

そこに便乗するバカ専。

「そうですわ明久様。このとんでも頑固破壊者がまともな進学するはずありません……
ところで非情兵士。あなた学校どこを卒業してきたんです?」

「さらつと便乗するなよお前。というか、お前らぐらい集められる情報だぞ?」

「興味ありませんわ」

まあそうだろうなと思つていた俺はアデーレの方を見る。

「こちらに気づいたように首を傾げて」「どうしましたか?」と訊いてきた。

「気になるか? 俺の経歴」

「まあ。一度調べてもらったときはガードが高すぎてどこにいたぐらいしかつかめませんでしたし」

「それはそうですわアデーレさん。この人畜有害、個人情報類いのガード国レベルで固いのです。子供の頃近くにいなかったら実在するのかどうか疑わしいレベルまで高められて困りましたもの」

「……なんかそれ聞いているとき、子供の頃から流って飛び抜けてたんだって実感するんだけど」

「いや、マジで飛び抜けてたぞ。あいつと一緒に遊ぶ機会が翔子を通じてあったから遊んでいたが、自分で提案してないのに最終的にあいつが得する展開とかざらだった」

「あら代表は霧島さん繋がりでしたか。ええそうですね。学校に通っていたときも容疑者不明のいたずらが頻繁に起こっていましたの。あいつがいる間に。ですが、直接的な証拠がないんで立証不可として流されたのですわ明久様」

「……聞けば聞くほど凄いな」

「全くじゃの」

俺の過去の所業を聞いて感心する二人。そこまで一旦止めようと思った俺は口を

挟んだ。

「ま、そんな話はおいといて。今日のテスト勉強どうするんだ？ 明久大丈夫なの？」

「うっ。それが……理不尽な減点でさらに追い込まれて」

「何、アキ。今日も勉強会するの？」

「そうなんですか明久君？」

「その予定だけど」

島田さんと姫路さんが混ざってきた。昨日明久の家で何かあったのか、其々が少し変えていた。

それを指摘する気のない俺は「頑張れよー」と呑気にエールを送る。

するとこちらに視線が集まる。その目には羨ましいと素直に出していた。

一応教科書見たりノート見たりで復習してるのだが、まあ勉強と言えばそうじゃないので実質やってないか。

やっぱり大変だなあ普通の生徒は何てうちのクラスに当てはまらない事を考えていると、明久が「ねえ流、」と話しかけてきたので即答した。

「うちで勉強は却下」

「早くない!!? まだ提案してすらいらないじゃん!」

「話の流れで言われそうなのが分かるだろ」

「相変わらず話をぶったぎるのが好きですわね」

「時間は有限なんだから分かりきってることはさつきと答えて然るべきだろ」

「じゃあお前が勉強会に混ざるのには良いんだな？」

「え、どうすつかなあ」

少し考える。ここで断つたら変な勘繰りされて潔白証明とかで家に案内しなければならぬのは明白なんだが、口止めしてもどこで漏れるかわからないので無理か。

まあ昨日の時点でこの状況は想定したのだから付き合ってもいいかと結論付けて「よし、良いぞ。俺の家以外でやるなら」と答えた。

「え、本当!? やったあ! 流が居れば百人力だ!」

「マジか。昨日の反応で混ざる気ないと思ってたんだが」

「何と流が参加してくれるのか。嬉しいのう」

「ところで姫路さん達はどうするんだ？」

俺が聞いてみたところ、二人とも頷いた。

「羨ましいですわ美波に瑞希」

そうやって参加者の確認を終えたところで明美がそう呟いたので、明久が「? どうして?」と聞き返した。

「家に帰ったら習い事や家のことがあるので、そうやって皆さんと一緒に集まって何か

「するなんて難しいのです」

「あ、そっか。大変だね」

「まあ家に生まれた義務だと思っっていますわ」

そう明るく言ったつもりなのだろうが、微かに沈んでいるのが丸分かりだと感じたのはそれなりに一緒にいたからだろうか。

長浜の方を見たら露骨だったので、あいつらもそうなのかなあと他人事のように思いつつ「どんまい」と煽る。

「……ふふつ。相変わらず逆撫でするのがお好きなんですのね、戦略兵器」

「俺には関係ないしな」

「そう……ですわね。あなたみたいな極悪非道には関係ない話ですわね」

「そんなに嫌なら言い訳して抜けだしやいいのに」

「……………」

なぜか黙ったので、話題を戻すべく明久に「今日はどこの家でやるんだ？」と聞いてみる。

「昨日押し掛けられたから、今日は雄二の家でどう？」

「ん？ 俺の家か？」

話をふられた雄二は少し考えた様子。そこで彼の親を思い出した俺は、何も言わずに

黙っておく。その方が面白いし。

そう考えると雄二と明久の共通点ってあるよな。身内に天然いるし、生活スキルもその人たちのせいで磨かなければいけないなかったし。熱い奴らだし。

そんなことを考えていたら「いいぜ」と頷いたので、なら学校で勉強の時間だなと言っておいて席に戻った。

雄二の家庭事情

放課後。

俺達は雄二の家へ向かって歩いていった。

同じように留美達からの話を断つて来ているので今頃向こう荒れてるのかなと（アデーレは向こうに行った）柄にもなくそんな心配をしながら歩いていると、「どうしたのさ流」と明久に声をかけられた。

「ちよつと明久の成績が上がるか心配で」

「ちよつと待つて！ だからこうして勉強会してるんじゃない！」

「じゃがどこまで身に付くかはお主次第ではないか？」

「うっ」

秀吉が止めを刺してくれたので俺は何も言わず、代わりに「そーいや久し振りだな、雄二の家へ行くの」と話を変える。

「ん？ そうだったか？」

「小学生の頃傲慢不遜だったお前の鼻を折ろうと押し掛けた記憶が」

「……………」

昔を思い出したのかさつと顔色が悪くなる。どうやら思い至つたらしい。それに気づいた秀吉が「どうしたんじや雄二」と声をかけたが反応がない。

なので俺は口を開いた。

「神童つて呼ばれてた頃の話。その時――」

両親とも会つたな。そう言おうとしたところ、雄二が勢いよく振り返つて眼で「それ以上喋るな」と訴えてきたので「軽くおちよくつたんだよ」と真相を話す。

「豊橋つて性格悪いとか言われなかつた?」

「いや島田。こいつはそんな生易しいことばで収まるほど単純じゃないぞ。1000の手元で1000つくれとか、提示されてない条件に文句いっても『訊かなかつたから』で通すやつだからな」

「そんなものじゃね?」

「……今の雄二も似た者」

「そうだね」

「あははは……」

姫路さんの乾いた笑いを聞いていたところ、雄二の家に到着した。

「そう言えば雄二の家つて久し振りだね」

「そうなのアキ?」

「まあ基本明久の家だからな。一人暮らしだし……入って良いぞ」

『お邪魔します』

鍵を開けた雄二に促され俺達も家に入る。そしてリビングへのドアを開けたところ

「……………」（ぶちぶちぶち）」

プチプチクツションを一心不乱に潰している女性の姿が一瞬視界に映った……ら雄二が瞬時にドアを閉めた。

だがバツチリと見えた俺達は、我慢している彼に何と声をかけようかと言葉を探している。と明久が恐る恐る訊いた。

「ねえ雄二。今の人って……」

「赤の他人だ」

「さ、坂本の母親なの……？ 凄い量を潰していたけど……」

「……凄い集中力」

「そういったお仕事をされているんですか？」

「だから赤の他人だ。何せお袋は今旅行にいつてるんだから」

珍しく本気で信じられない嘘をついて誤魔化そうとしてる雄二。このままばらしても良いが、どうせすぐ明らかになると思い黙っておくことに。

と、此処で向こう側に動きがあった。

『あら、もうこんな時間？ 続きはお昼を食べてからに』
「何やってんだよお袋おお!!」

時間を忘れて八時間近くもやっていたと言う事実には夕方だと認識していない事実には耐えきれなかつたらしい雄二はドアを勢いよく開けて叫ぶ。

その姿を見て大変な家庭環境なんだなと察することは、明久でも出来たことだろう。

「皆さん初めまして。雄二の母の雪野と言います」

そういつて会釈した彼女の容姿を見て、恐らく若すぎるといふ印象を持っただろう。俺からしても変わってないような感じだしな。昔から。

とりあえず挨拶がてら訂正しておこうかと思つた俺は「お久し振りです雪野さん」と声をかける。

それに対し彼女は俺を見て首を傾げてから、「あら？ 流君？ ずいぶん大きくなりましたね」と納得したらしく気付いてくれた。

「それにしてもうちの子より頭のいい流君はどうして？」

「あ……色々あつて雄二と同じクラスなんです」

「あらそうなの。うちの子をよろしくお願ひしますね」

「あ、はい」

「もういいだろ流。俺の部屋に行こうぜ」

「おう」

急かすように言ってきたので雪野さんに頭を下げてから後をついて行った。

が、せまい。いかんせん狭い。

雪野さんがいるリビングでやるかどうか思案していると、島田さんの携帯が鳴った。どうやら両親が帰れなくて学園祭やプールの時に来た葉月ちゃんが留守番している状況らしい。

だから帰るといった彼女の説明を聞いた雄二がそこに場所を移そうと提案したことにより、そうなった。

家を出る時に親子の会話を聞いていたが……相変わらずな気がした。

移動して

で、島田さんの家に到着した。

「ただいま。葉月、いる〜?」

玄関を開けて中に呼び掛けたところ、少しして駆けてきた。

「お帰りなさいお姉ちゃん! ……つて、いっぱいです!」

彼女が後ろを見たらしく驚いたので、「ちよつと勉強するの」と事情を説明する。

それを聞いて葉月ちゃんは一転して落ち込んでしまった。

まあ、それをめざとく見つけるのが明久《バカ》なんだが。

「良かったら一緒に勉強しない?」

「大丈夫なの?」

明久が提案するとは思わなかったのか島田さんが確認してきたので「大丈夫だろ。元からいるし」と言ったら「それもそうね」と納得した。

「ちよつと待つてよ! それって僕の学力小学生並みってこと!?!」

「否定できるのかよ」

「うっ」

とりあえず黙らせたので、そのまま入ることにした。

リビングに通された俺達は、余計なことをせずに勉強しようという事となり、葉月ちゃんを交えて（明久の膝に座り）始めた。夕食は宅配ピザとか言ってるので、そこらの支払いはしておいた。

んで、払ってやったというのに雄二からは怪訝な表情を向けられた。そこまで器量が低いわけじゃないんだがなあ。おちよくるときに吹っ掛けるだけなのに。

まあ当然と言えば当然で、俺は康太と秀吉と雄二という男たちの勉強を見ていた。時折冗談を混ぜながら、基本的に分からない問題に対してヒントを与えるだけにとどめた。勉強というのは一から十まで教えるんじゃないやなくて、五ぐらいまで教えて残りは考えてやった方が身に着くと思ってるし。

というか雄二の奴、なんだかんだ神童って言われていた頃みたいに問題解くスピード上がってるんだよな。ちよくちよく間違ってるけど。

姫路さんは島田さんと明久相手に勉強中。康太が殺意の波動に目覚めた視線を時折向けているみたいだが、それぐらいご愛嬌だと思えばスルーしておく。段々染まってる気がしないでもないが俺自身も。

感染力高過ぎ……なんて思いながらも勉強を教えて時間が過ぎていった。
で、二時間が経過した。

適宜休憩をいれてやって、現在時刻は午後九時くらい。雄二の学力も少しは戻ってきた気がしなくもない。

他の奴らも地力についてはきたんじやないだろうかと思いつつ、時計を見たところ九時半頃を指していた。

「今日はお開きだな」

「何？ ……マジか。結構集中できてたな」

「続きはまた今度、じゃな」

秀吉がそういって片付け始めたのに合わせてみんな片付け始める。が一人だけ——
明久だけ叶わなかった。それは何でかというところ——。

「Z z z ……」

「……寝てる」

「そうですね」

「……葉月、起きなさい」

明久の膝の上で葉月ちゃんが寝てしまっているからだ。

島田さんはそんな彼女を注意したところ、タイミングよく寝言でこんなことを言っ

た。

「……いつもバカなお兄ちゃんと一緒にいるお姉ちゃんには分かりません」
『……………』

「ここは慕われていると考えておこう。うん。」

実際には関係ないので対して気にならないので俺は立ち上がり、「ま、明久残るのか？」と質問する。

「うん。まあね」

「え、いいの？」

「まあこれくらいなら」

本当、器でかいよなあと思いつつながら「そんじや、お暇しますか」と声をかける。

「だな。ムツツリーニは秀吉を送って……俺が姫路か？」

「お、霧島に追われる覚悟があるのかお前」

「……………」

予想できる言葉を口にしたところ、彼は無表情で沈黙する。

俺もあまり信じたくないが昔から大分変貌しているようなので。

トラウマのような怯え方しているので頭を搔いて「ま、俺と雄二と一緒にならあいつも大丈夫だろ」と助け船を出す。

「……ああ、そうだな」

「え、でも」

珍しいことに姫路さんが心配そうな表情をしている。

いやまあ、理由は分かるが。

「大丈夫だろ姫路さん。明久のバカが気付くはずがないし。ご両親も心配しているんじゃないか？」

「ちよつと流!! どういうことさ!!」

「確かにそうかもしれないけど、それでも」

こうして頑固なところはみんな同じなのかと考察しながらも、「時間も時間。島田さんの両親もそろそろ戻ってくるだろうし、明日もあるから帰ろうぜ?」と説得しつつ彼女の背を押す。

「え、ちよ、豊橋君!」

「じゃ、帰るわ俺達。また明日な」

「お、そうだな。明久、島田。またな」

「うむ。また明日なのじゃ」

「……また明日」

こうして俺達は島田さんの家から出て行った。